

金
井
古
墳
群

金井古墳群

県一埋蔵文化財発掘調査委託事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

群馬一埋蔵文化財発掘調査委託事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



二〇一四

2014

群馬県埋蔵文化財調査事業団
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県企業局

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

金井古墳群

県一埋蔵文化財発掘調査委託事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

群馬県企業局

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



石室全景（南から）



耳環 2



縁金具 8



鈿 5

遺物の縮小は概ね 3/4



耳環3



鐲7



緑金具12



耳環4



心葉形杏葉52



靱緑金具44



釘103



雲珠65



辻金具66



留金具75

遺物の縮小は103がほぼ等倍 他は概ね3/4

序

本書は、群馬県北群馬郡榛東村に所在し、県央第一水道の施設増築工事に伴い発掘調査された金井古墳群の調査報告書です。本遺跡の調査は群馬県企業局の委託を受けて公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成24年4月から8月にかけて実施したものです。

金井古墳群は榛東村広馬場地区にある既知の古墳群ですが、今回の調査ではこのうち榛東村54号墳・55号墳と名付けられていた2基の古墳が対象となりました。2基の古墳は調査例の少ない7世紀前半に築造されたもので、小規模な円墳ながら刀装具や馬具など優れた副葬品が多数出土しました。

金井古墳群のある榛名山南麓から東南麓にかけての一带は、5世紀後半から6世紀初頭にかけての保渡田古墳群や豪族居館である三ツ寺I遺跡、5世紀後半から7世紀にかけての総社古墳群、8世紀以降の上野国分寺や上野国府などが脈々と築造・造営され続けた古代群馬の中心地にあたります。金井古墳群はこの地の「奥つ城」と考えられる一带にあり、ここに埋葬されたのはこの地域で東国古墳文化の基盤を築いた豪族層の一翼を担う人々です。調査成果は古代群馬中核地域の形成史を研究する上で新たな資料を提供するものです。そして本報告書が学校教育の教材や地域研究の資料として役立てて頂けるものと確信いたしております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にいたるまで、群馬県企業局および群馬県教育委員会、榛東村教育委員会ならびに地元関係者の皆様からは多くのご指導・ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するにあたり、これら関係者の皆様に心より感謝の意を表し、序といたします。

平成26年2月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 上原訓幸

例 言

- 1 本書は県一埋蔵文化財発掘調査委託事業（県央第一水道の施設増築に伴う埋蔵文化財の事前調査）に伴い発掘調査された金井古墳群の埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 所在地 群馬県北群馬郡榛東村広馬場388-22
- 3 事業主体 群馬県企業局
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成24年4月1日～平成24年8月31日
- 6 調査面積 3,744㎡
- 7 発掘調査体制は次の通りである。
発掘担当者 上席専門員 関根慎二 専門調査役 津金沢吉茂
遺跡掘削請負工事 スナガ環境測設株式会社
地上測量および空中写真撮影 技研測量設計株式会社
- 8 整理事業の期間と体制は次の通りである。
履行期間 平成25年4月1日～平成26年2月28日
整理期間 平成25年4月1日～平成25年12月31日
整理担当 上席専門員 飯田陽一
遺物写真撮影 補佐（総括） 佐藤元彦
遺物保存処理 補佐（総括） 関 邦一
- 9 本書作成の担当者は次の通りである。
編集 上席専門員 飯田陽一
デジタル編集 主任調査研究員 齊田智彦
執筆 上席専門員 徳江秀夫（遺物観察表：古墳時代土器・金属製品） 上席専門員 谷藤保彦（遺物観察表：縄文土器） 上席専門員 岩崎泰一（遺物観察表：石器・石製品） 上席専門員 関根慎二（第三章5-5） 補佐（総括） 関 邦一（第四章-3） 前記以外 飯田陽一
- 10 石室石材および出土土製品の石材鑑定については飯島静男氏（群馬県地質研究会会員）に、人骨鑑定は橋崎修一郎氏（生物考古学研究所）にお願いした。
- 11 発掘調査諸資料および出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 12 発掘調査および報告書作成に際しては、下記の方々・機関にご協力・ご指導いただきました。記して感謝いたします。（敬称略・順不同）
群馬県企業局、県央第一水道事務所、群馬県教育委員会、榛東村教育委員会

凡例

1 本文中に使用した座標・方位はすべて国家座標「世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)」を使用している。また座標北と真北との偏差は調査区中央付近の $X=46,590$ 、 $Y=-76,655$ で東偏 $0^{\circ}30'26''88$ である。遺構挿図中に+と数値を併せて座標値を表した。数値は国家座標値 $X \cdot Y$ 値の下3桁を用いて表記している。

2 遺構番号および石室石材番号等は、混乱を避けるため調査時の番号を踏襲した。

3 遺構断面図に記した数値は標高(単位:m)を表した。

4 遺構・遺物の縮率は原則として以下の通りとし、各挿図にスケールを添えた。同一の遺物挿図内に異なる縮率の図が加わる場合は遺物番号の次に縮率を分数で記した。

遺構 古墳 現況図1:300 全体図1:200 遺跡全体図1:400 墓石下溝平面図・石室掘り方平面図1:100
墓石平面図・石室立面概念図1:80 墳丘断面図・石室立面図1:50 閉塞断面図・女室内遺物出土状態1:30
その他の主な平面図・断面図1:40

その他 南東隅窪地平面図1:100 同断面図1:50 ビット・溝断面図1:20 その他1:40

遺物 土器類 大型須恵器1:4 小型土師器・須恵器・縄文土器1:3 土玉1:1

金属製品 小刀1:3 鋌1:1 弓飾り金具・銭貨2:3 その他1:2

石器 大型砥石・石製品1:3 小型砥石1:2 石鏃1:1

遺物写真は遺物図とおおよそ同縮率となるようにしたが、撮影方向は異なるものがある。

5 本文中で用いた火山噴出物については以下のとおりである。

As-B: 浅間B軽石(1108年) Hr-F A: 榛名ニッ岳渋川テフラ(6世紀初頭)

As-C: 浅間C軽石(3世紀後半)

6 土層断面挿図内で使用したトーンは次のことを示している。



その他、個別図面で使用したトーン・記号については各挿図内に凡例を加えた。

7 遺構の主軸方向・走向を示すため、座標北を基準として東に傾いた場合は $N-\circ^{\circ}E$ 、西に傾いた場合は $N-\circ^{\circ}W$ というように表記した。

8 古墳各部の名称および表記についての凡例は本文13頁に記した。

9 遺物観察表の凡例については観察表冒頭の110頁に記した。

10 本書で掲載した地図は以下のとおりである

国土地理院地形図1:25,000「下室田」(平成14年5月1日発行)、「伊香保」(平成14年9月1日発行)

国土地理院地形図1:50,000「榛名山」(平成10年3月1日発行)、「前橋」(平成10年3月1日発行)

本文目次

口絵
序
例言
凡例
目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査の経過	2
3 整理業務の経過と方法	3
第Ⅱ章 発掘調査と遺跡の概要	4
1 遺跡の位置と地形	4
2 周辺の遺跡	6
3 調査の方法	10
4 基本土層	10
5 古墳の調査	10
第Ⅲ章 調査の内容	14
1 遺跡の概要	14
2 54号墳	16
1 調査前	16
2 墳丘と周堀	17
3 前庭	19
4 石室	21
5 解体調査	25
6 出土遺物	55
7 まとめ	60
3 55号墳	61
1 調査前	61
2 墳丘と周堀	63
3 墓道	66
4 石室	67
5 解体調査	70
6 出土遺物	85
7 まとめ	91
4 古墳時代のその他の遺構と遺物(南東隅の窪地)	92
5 その他の遺構と遺物	94
1 55号墳前の道路状の遺構	94
2 55号墳出土近世銭貨と墓坑(4号土坑)	96
3 土坑	98
4 遺構外の遺物	99
5 縄文時代の遺物	99
第Ⅳ章 分析	101
1 分析の目的	101
2 石室内出土の人骨と歯	101
3 金属製品に遺存する木質と植物痕について	103
第Ⅴ章 総括	106
遺物観察表	109
引用参考文献	127
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	道跡位置図	1
第2図	道跡周辺の地形	5
第3図	周辺の道跡	7
第4図	基本土層	10
第5図	墳丘トレンチ配置図	11
第6図	トレンチ内の土層	12
第7図	古墳調査の凡例	13
第8図	道跡全体図	15
第9図	54号墳現況図	16
第10図	表上下の54号墳と出土遺物	17
第11図	葦石	18
第12図	葦石立面	19
第13図	前庭	20
第14図	石室立面概念図	21
第15図	羨道閉塞断面	21
第16図	横石	22
第17図	玄室内遺物出土状態	22
第18図	石室床面の状況(左:上面 右:下面)	23
第19図	石室立面	24
第20図	葦石下の溝	26
第21図	墳丘断面	27
第22図	石室石材の特徴(上:種類 下:重量)	28
第23図	石室石材の特徴(積み方)	29
第24図	石室石材平面	30
第25図	石室石材(第1石)	31
第26図	石室石材(第2石)	32
第27図	石室石材(第3石)	33
第28図	石室石材(第4石)	34
第29図	石室と裏込め	35
第30図	石室と裏込め断面(1)	36
第31図	石室と裏込め断面(2)	37
第32図	石室と裏込め断面(3)	38
第33図	石室と裏込め断面(4)	39
第34図	石室石材と間詰め石	40
第35図	石室石材と合端(1)	41
第36図	石室石材と合端(2)	42
第37図	石室石材と合端(3)	43
第38図	石室石材と合端(4)	44
第39図	石室石材と合端(5)	45
第40図	石室石材と合端(6)	46
第41図	石室石材と合端(7)	47
第42図	石室石材と合端(8)	48
第43図	石室石材と合端(9)	49
第44図	石室石材と合端(10)	50

第45図	石室掘り方	54
第46図	出土土器	56
第47図	出土金属製品(1)	57
第48図	出土金属製品(2)	58
第49図	出土金属製品(3)	59
第50図	55号墳現況図	61
第51図	表上下の55号墳	62
第52図	葦石	63
第53図	葦石立面	64
第54図	墓道と出土遺物	65
第55図	石室立面概念図	66
第56図	羨道部	67
第57図	玄室内遺物出土状態	68
第58図	石室床面の状況	69
第59図	石室立面	70
第60図	葦石下の溝	71
第61図	墳丘断面	72
第62図	石室石材の特徴(上:種類 中:重量 下:積み方)	73
第63図	確認時の石室と裏込め	74
第64図	石室と裏込め	75
第65図	石室石材と裏込め断面	76
第66図	石室石材(上:第1石 下:全体)	77
第67図	石室石材と合端(1)	78
第68図	石室石材と合端(2)	79
第69図	石室石材と合端(3)	80
第70図	石室石材下(下込め石)	82
第71図	石室掘り方	83
第72図	出土土器(1)	84
第73図	出土土器(2)	85
第74図	出土土器(3)	86
第75図	出土金属製品(1)	87
第76図	出土金属製品(2)	88
第77図	出土金属製品(3)	89
第78図	出土金属製品(4)	90
第79図	南東隅窪地	92
第80図	南東隅窪地出土遺物	93
第81図	墓道状の遺構	95
第82図	4号土坑と遺物出土状態	96
第83図	4号土坑出土遺物	97
第84図	土坑	98
第85図	道構外の近世遺物	99
第86図	縄文時代の遺物	100
第87図	金井古墳群54号墳石室内人骨出土位置図(上が北)	102
第88図	55号墳石室プランの模式図	107

表 目 次

表1	周辺道跡一覧	8
表2	周辺の古墳群一覧	9
表3	総覧に記された金井古墳群内の古墳	9
表4	計測場所ごとの石室石材重量	33
表5	54号墳石室石材観察表	52・53

表6	55号墳石室石材観察表	81
表7	金井古墳群54号墳出土人骨測定計測値及び比較表	102
表8	金属製品遺存植物遺留観察表	104・105
表9	54・55号墳一覧	106

写真目次

- PL. 1 遺跡全景
 1 上空から見た遺跡（上方が南西）
 2 上空から見た遺跡（南から）
- PL. 2 調査の方法 1
 1 調査前の遺跡（南東から 手前54号墳・奥55号墳）
 2 周壁確認トレンチ（北から 55号墳北側）
 3 墳部確認トレンチ（東から 54号墳北東墳丘）
 4 石室の掘り下げ（北東から 54号墳）
 5 墳丘の掘り下げと周壁の表土剥ぎ（南東から 54号墳）
 6 墳丘の掘り下げ（北東から 55号墳）
 7 ラジコンヘリによる石室空撮作業（北東から 54号墳）
 8 墳丘の断割り（北から 55号墳）
- PL. 3 調査の方法 2
 1 石室遺り方測量（北東から 54号墳）
 2 墳丘のデジタル測量（東から 54号墳）
 3 裏込めの掘り下げ（北西から 54号墳）
 4 石室と裏込めの測量（北から 54号墳）
 5 石室石材の計測と解体（南から 54号墳）
 6 石室の解体・石材吊り上げ（北西から 54号墳）
 7 石室埋没上の除掛け（北から 55号墳埋没上）
 8 現地説明会（東から 6月17日）
- PL. 4 基本土層とトレンチ調査
 1 基本土層（北西から）
 2 54号墳墳丘4号トレンチ西側付近（南西から）
 3 54号墳墳丘4号トレンチ石室裏（北東から）
 4 55号墳2号トレンチ削平版垣辺（北から）
 5 55号墳2号トレンチ基礎垣辺（北東から）
 6 55号墳西溝埋没谷上のAs-B（南から）
 7 55号墳18号トレンチ（北西から）
- PL. 5 54号墳全景
 1 墳丘・基壇と石室上面（南から）
 2 石室と裏込め（南東から）
- PL. 6 54号墳墳丘
 1 墳丘a 断面西側（南から）
 2 墳丘a 断面東側（南から）
 3 墳丘b 断面（西から）
 4 墳丘c 断面東側（北から）
- PL. 7 54号墳葺石
 1 北東側崩落葺石（北東から）
 2 西側崩落葺石（北から）
 3 北側葺石確認状態（北西から）
 4 東側部分（南東から）
 5 北東側部分（南東から）
 6 北側部分（北から）
 7 北西側部分（北西から）
- PL. 8 54号墳葺石根石と掘り方
 1 北西側根石列（東から）
 2 西側根石列（北から）
 3 溝状の根石列掘り方（北から）
- PL. 9 54号墳前庭
 1 確認段階の前庭と羨道（南から）
 2 前庭部確認状態（南から）
 3 上面前庭（南から）
 4 前庭上面（西から）
 5 下面前庭と遺物出土状態（南から）
- PL. 10 54号墳羨道
 1 羨道閉塞確認状況（南から）
 2 玄室から見た階石（北から）
 3 奥門付近閉塞状況（南から）
- 4 仕切り石と羨道（南から）
 5 羨道側から見た欄石（南から）
 6 羨道西壁（南東から）
 7 羨道東壁（南西から）
- PL. 11 54号墳玄室
 1 最上面の玄室（南から）
 2 最上面の玄室（南西から）
 3 裏込め上面と石室（南から）
 4 裏込め上面と玄室（北から）
 5 裏込め上面と石室（東から）
 6 裏込め上面と石室（南東から）
- PL. 12 54号墳玄室扉石と遺物出土状態
 1 玄室床確認面（北から）
 2 玄室扉石面（北から）
 3 玄門側遺物（鈔№5・緑金具8）出土状態（北から）
 4 西壁際遺物（鈔№18・27・46他）出土状態（東から）
 5 北西側遺物（鈔№83他）出土状態（東から）
 6 奥壁前遺物（籬子№96他）出土状態（南から）
- PL. 13 54号墳玄室壁
 1 奥壁（南から）
 2 西壁と天井石（北東から）
 3 西壁と欄石（北東から）
 4 東壁北寄り（西から）
 5 東壁と欄石（北西から）
 6 玄門・天井石と欄石（北から）
- PL. 14 54号墳石室解体 西壁・西壁
 1 奥壁第1石1・2直下（西から）
 2 奥壁3直下（南から）
 3 裏側から見た奥壁1・2間の間詰め（北から）
 4 奥壁1・3間の間詰め（南から）
 5 奥壁第2石3・4下（東から）
 6 西壁第1石6～8直下（北から）
- PL. 15 54号墳石室解体 西壁（1）
 1 西壁11下（南から）
 2 西壁12下（東から）
 3 西壁13・14下（東から）
 4 西壁第2石12～17下（北から）
 5 西壁15・16下（東から）
 6 西壁17直下（北から）
 7 西壁19下（東から）
- PL. 16 54号墳石室解体 西壁（2）
 1 西壁6・12間の間詰め（北から）
 2 西壁21下（西から）
 3 西壁13・14間の間詰め2-1・2（南から）
 4 西壁23下（東から）
 5 西壁6・12・17間の間詰め（東から）
 6 西壁第1石10・64・67直下（西から）
 7 西壁51・52下（東から）
 8 西壁53・54下（北東から）
- PL. 17 54号墳石室解体 西壁・東壁
 1 西壁69直下（西から）
 2 西壁70下（南から）
 3 東壁26・27裏込め状態（東から）
 4 東壁第1石28直下（西から）
 5 東壁第1石26・27直下（東から）
 6 東壁31下（北から）
 7 東壁32下（東から）
- PL. 18 54号墳石室解体 東壁
 1 東壁33下（西から）

2	東壁34下(西から)	PL.30	55号墳玄室
3	東壁35下(西から)	1	石室・裏込め全景(南東から)
4	東壁37下(東から)	2	玄室全景(南西から)
5	東壁38・39下(東から)	3	奥壁と裏込め(南西から)
6	東壁40・41下(東から)	4	玄室東隣付近(西から)
7	東壁43下(東から)	5	玄室西隣付近(南から)
8	東壁第1石30・57直下(西から)	PL.31	55号墳玄室解体(1)
PL.19	54号墳石室解体 東壁・天井石	1	南東壁第1石1～3下(南西から)
1	東壁45下(北から)	2	南東壁1直下(北東から)
2	東壁46・47下(東から)	3	南東壁2直下(北西から)
3	東壁61下(西から)	4	南東壁3直下(南西から)
4	東壁62下(東から)	5	南東壁3下(北東から)
5	東壁63下(北東から)	6	奥壁第1石4・5下(北西から)
6	天井石下(南から)	PL.32	55号墳玄室解体(2)
7	西壁側天井石下(東から)	1	奥壁4直下(南西から)
8	東壁側天井石下(西から)	2	奥壁4下(北東から)
PL.20	54号墳裏込め	3	奥壁5直下(南から)
1	裏込め上面全景(北から)	4	北西壁7直下(北西から)
2	地山高付近の裏込め(南から)	5	西壁第1石7・8下(南西から)
3	裏込め東側面(東から)	6	北西壁8下(南東から)
4	裏込め側面(西から)	7	北西壁10下(東から)
PL.21	54号墳掘り方	PL.33	55号墳裏込め
1	掘り方と石室第1石(西から)	1	裏込め全景(北東から)
2	掘り方と石室第1石(北から)	2	裏込め北外側(北から)
3	掘り方と石室第1石直下(北から)	3	裏込め東外側(東から)
4	掘り方と石室第1石直下(南から)	4	玄室第1石面と裏込め(南西から)
5	掘り方下面(南から)	5	北西壁掘り方面の裏込め(北東から)
PL.22	54号墳出土土器	6	奥壁第1石面の裏込め(南東から)
PL.23	54号墳出土金属製品(1)	7	南東側石室石材下面の裏込め(南東から)
PL.24	54号墳出土金属製品(2)	8	北側石室石材下面の裏込め(北から)
PL.25	55号墳全景	PL.34	55号墳掘り方
1	墳丘と基壇・石室(上方が北東)	1	石室石材下の下込め(北東から)
2	墳丘と葺石(北東から)	2	掘り方断面(南西から)
PL.26	55号墳墳丘断面	3	下込め石階除去面(北東から)
1	墳丘B断面全景(北東から)	4	掘り方全景(南西から)
2	墳丘A断面南東側とB断面(東から)	PL.35	55号墳出土土器(1)
3	墳丘A断面裏込め際(南東から)	PL.36	55号墳出土土器(2)・出土金属製品(1)
4	墳丘東側の盛土と葺石根石(南から)	PL.37	55号墳出土金属製品(2)
5	墳丘B断面中段硬化面(北東から)	PL.38	55号墳出土金属製品(3)
6	墳丘B断面下段硬化面(北東から)	PL.39	55号墳出土金属製品(4)・南東隣接地出土遺物
PL.27	55号墳葺石・根石掘り方	PL.40	南東隣接地 土坑
1	北東側崩落葺石(北東から)	1	南東隣接地全景(南から)
2	西側葺石全景(西から)	2	南東隣接地B断面(北から)
3	北側崩落葺石(北西から)	3	南東隣接地遺物(曹No.2)出土状態(北西から)
4	南西側葺石(西から)	4	1号土坑(北東から)
5	北東側根石列(東から)	5	2号土坑(東から)
6	北西側根石列(西から)	6	3号土坑(北西から)
7	北東側根石列(北東から)	7	例木組(北から)
8	北東側根石掘り方(東から)	PL.41	4号土坑と踐踏出土状態
PL.28	55号墳墓道・羨道	1	土坑内座席状痕跡(南東から)
1	墓道から羨道付近全景(南西から)	2	石室内銭貨(2)出土状態
2	墓道前の側溝状の施設(南西から)	3	石室内銭貨(3)出土状態
3	墓道(南西から)	4	石室内銭貨(4)出土状態(南西から)
4	墓道(西から)	5	石室内銭貨(5)出土状態(南東から)
5	墓道側から見た石室(南西から)	6	石室内銭貨(10)出土状態(北から)
6	羨道付近・仕切り石と葺石(南から)	7	石室内銭貨(17)出土状態(北から)
7	羨道側から見た墓道(北東から)	8	4号土坑上面踐踏(25)出土状態(南から)
8	4号土坑断面(南東から)	9	4号土坑断面(南東から)
PL.29	55号墳竈石と遺物	PL.42	銭貨および近世以降の遺物
1	玄室内竈石(南西から)	PL.43	縄文時代の遺物
2	羨道付近遺物(曹No.7)出土状態(南から)		
3	南東壁下遺物(新No.97・107)出土状態(南から)		
4	奥壁裏込め内遺物(耳環No.2)出土状態(東から)		
5	南東壁際遺物(杏葉No.52・輪縁金具No.40)出土状態(南西から)		
6	玄室中央付近遺物(鍬貝No.88)出土状態(東から)		
7	西側裏込め相当付近遺物(杏葉No.55)出土状態(東から)		
8	玄室中央付近遺物(鍬貝No.11)出土状態(北西から)		

第 I 章 調査に至る経緯と調査の経過

1 調査に至る経緯

県央地域広域水道計画は地下水保全のため水道水の水源を地下水から表流水に換えるため、昭和53年に群馬県により策定された。併せて従来の市町村単位の水道事業を広域化することで効率化を図ることを目的としたものである。群馬県企業局が所轄する県央第一水道は群馬県内にある4カ所の広域上水道事務所の一つで、昭和58年から前橋・高崎・棟東・吉岡の4

市町村に、県内最初の広域浄水供給を開始した。利根川を水源とする群馬用水権名幹線から取水し、現在1日最大160,000m³の水道用水を供給している。

平成23年、この浄水場における第3系浄水場処理施設増設事業が企画された。工事は北側を群馬用水、東側を村道を隔てた県央第一水道事務所、南側を工場、西側を染谷川に囲まれた14,220m²が開発対象地となった。この対象地の南側には「金井古墳群」として埋蔵文化財登録された古墳群が含まれ、群馬県教育委員会文



第1図 遺跡位置図

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

文化財保護課では平成23年11月に試掘調査を行った。周辺は近年に土取りが行われ、地下に遺構の確認はなく、該当地北西部に墳丘の残る2基の古墳(棟東村54・55号墳)とその周辺3,744㎡を発掘調査対象地とした。2基の古墳は従来指定されていた金井古墳群の範囲からは外れるが、金井古墳群の範囲を拡大してこの中に含めることを棟東村教育委員会と確認し、遺跡名称を「金井古墳群」とした。

平成24年3月、県教育委員会の調整で県第一水道と財団法人(当時)群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で金井古墳群の埋蔵文化財調査委託契約を締結し、同年4月から8月までの期間で当事業団が担当して発掘調査を実施することとなった。

2 発掘調査の経過

発掘調査は平成24年4月より開始した。墳丘周辺のトレンチ調査後、墳丘は人力で、周辺は重機による掘削を行った。2基の古墳を主対象としたため、古墳石室を中心に世界測地系を用いたオフセット測量を行い、墳丘・墓壇など広範囲の測図に平板測量を加えるアナログ図面を中心とする記録化を行った。全体図等大縮尺の測図にはトータルステーション測量を行ったほか、整理事業でのデジタル化に備え、調査に併行してこれらアナログ図面類はすべてデジタルデータ化した。また出土遺物も洗浄・注記を完了させた。

54号墳では残存状態の良い石室が確認され、55号墳では馬具を中心に多量の遺物が出土し、6月17日には現地説明会を開催した。石室内の下層埋没土および床面直下の埋戻し土は、すべて土師い作業を行い微細遺物の検出に努めた。

染谷川縁の急傾斜面では一部、トレンチ調査のみの確認となった部分がある。調査範囲南東隅の窪地で馬具(轡)の出土があり、この窪地範囲を拡大して調査を行った。旧石器時代の調査については、周辺が深さ数mにおよぶ火山性堆積物面であることが分かっているため、グリッドによる試掘調査を実施していない。

調査は予定通り8月に終了したが、具体的な経過は以下(調査日誌抄)に記す。

調査日誌抄

4月

- 5日 企業局・掘削請負代理人と現地打合せ。
- 9日 現場作業開始・重機掘削高把握のため試掘坑掘り下げ。古墳現況測量。
- 10日 重機導入開始。除草および周辺表土掘削。
- 12日 54号墳トレンチ跡掘り下げ開始。
- 13日 55号墳トレンチ跡掘り下げ開始。
- 17日 54号墳墳丘表土掘削。
- 20日 54号墳石室上面精査。石室位置確認。
- 24日 54号墳石室内掘り下げ開始。

5月

- 1日 54号墳墳丘調査および周辺の掘削。
- 9日 55号墳重機による掘削と墳丘人力掘削。
- 10日 54号墳周辺墳丘上遺物取上げ。前底部崩落石除去。石室埋没土師掛け作業開始。55号墳トレンチによる前底部確認調査。
- 11日 54号墳前底部掘り下げ。墳丘崩落石除去。
- 14日 55号墳周堀調査。
- 16日 調査区南東隅付近で馬具(轡)確認。54号墳石室検出作業開始。
- 18日 55号墳西側より裾部葺石検出開始。
- 22日 54号墳前底部遺物取上げ。55号墳前庭付近葺石検出、石室内掘り下げ開始。
- 23日 54号墳石室内遺物取上げ。55号墳石室内相当部分埋没土師掛け作業開始。
- 25日 55号墳前底部掘り下げ。
- 28日 轡出土地点から東側へ窪地の拡張調査。
- 31日 空中写真撮影。54号墳上段葺石掘り下げ、精査。

6月

- 4日 西側斜面のトレンチ調査。54号墳石室内精査、遺物取上げ。墳丘盛土掘り下げ。
- 8日 55号墳石室・前庭部精査(杏葉・鞍縁金具等出土)。
- 9日 54号墳羨道部掘り下げ、石室内精査。
- 10日 55号墳石室内遺物取上げ。
- 12日 54号墳羨道部精査。
- 13日 54号墳墳頂部裏込め石検出。
- 17日 現地説明会。
- 19日 54号墳羨道閉塞石除去。55号墳墳丘掘り下げ。
- 20日 55号墳墳丘内硬化面の確認。

25日 54号墳石室内遺物取上げ。55号墳石室内遺物取上げ。

28日 54号墳墳丘下旧地表面確認、石室石組調査。

7月

3日 54号墳墳丘根石掘り方溝精査。

4日 55号墳石室床面精査。

11日 55号墳葎石根痕跡溝調査。

12日 1～3号土坑掘り下げ。55号墳石室裏込め石除去。

13日 54号墳石室最上段石調査と除去(ユニック)。

17日 54号墳石室石材抜き取り痕検出。

19日 南東側埋没谷の掘り下げ。

54号墳ユニックによる天井石・側壁石材除去。

26日 55号墳ユニックによる石室側壁取り上げ。

8月

1日 54号墳羨道間仕切り石取上げ、上段被覆石除去、石室壁石人力移動。55号墳基部裏込め石確認。

2日 54号墳玄室敷石(最下層)除去、前庭部上面舗石除去、下部舗石検出。

6日 前庭部遺物取上げ。羨道敷石(最下層)除去。

7日 古墳石室石材鑑定(飯島氏)。

8日 54号墳前庭部掘り下げ。石室平面図(最下段)および石材抜き取り痕(合端)図作成。55号墳石材抜き取り後の栗石除去作業。

10日 54号墳石室石材ユニックによる除去。

13日 54号墳前庭遺物取上げ。55号墳石室掘り方確認。

14日 54号墳石室裏込め掘削(掘り方)調査。

17日 重機による石材重量計測。

22日 風倒木等を含む遺構最終確認。

54号墳石室小型石材重量計測(追加)。

屋外での調査終了。

31日 調査地点埋戻し終了。引き渡し。

3 整理業務の経過と方法

整理作業は平成25年4月1日より公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で実施した。

土器類は洗浄注記を発掘調査時に済ませており、当事業団にて接合し実測個体を選定後、復元から写真撮影・実測・観察作業を行った。遺物図はアナログ作業で実測・トレース図面まで作成後、デジタルデータ化したものである。遺物写真はデジタルカメラで撮影した。併行して

非掲載土器の分類・カウント作業を実施している。金属製品も当事業団で修復・保存処理作業を行い写真撮影・実測・観察作業を行った。錆の影響で本来の形状が不明瞭なものはX線写真により旧状を復元した。保存処理後の作業の流れは土器と同様である。

遺構図・遺構写真は調査段階でデジタルデータ化しており、これらを編集してデジタル原稿を作成した。

平成25年12月31日で編集作業を完了し、平成26年2月17日に発掘調査報告書「金井古墳群」を刊行した。

なお、調査時に付けた遺構名称・石材の番号は原則的に踏襲したが、整理過程の中で、遺構名称の統一・改定を以下のとおり行った。

(調査時の名称)→(本報告の名称)

55号墳内土坑 → 4号土坑

馬具出土地点 → 南東窪地

第II章 発掘調査と遺跡の概要

1 遺跡の位置と地形

金井古墳群は群馬県のほぼ中央にあたる北群馬郡榛東村に所在している。県中央部には利根川を挟んで東に赤城山、西に榛名山があり、両山の裾野には丘陵性の台地が広がっている。本遺跡はこのうち榛名山東南麓に形成された相馬ヶ原扇状地と呼ばれる火山山麓に形成された裾野扇状地扇状部の標高260m付近にある。

榛名山(最高標高は掃部ヶ岳の1449m)は40万年前頃から噴火活動を開始し、当初は標高2500mクラスの主成層火山を形成したと想定されている。その後の山体崩落や主成層火山活動の再開で山頂カルデラや外輪山、カルデラ内外の溶岩円頂丘が形成され現在の山容に近づいていった。相馬ヶ原扇状地もこの山体崩落の過程で形成されていったもので、2.1～1.1万年前には陣場火砕流が相馬ヶ原扇状地へ噴出され、本遺跡付近を越えて標高180m付近まで達し、その後流出した陣場泥流が一部の火砕流丘を覆ったと考えられている。

相馬ヶ原扇状地は北側を壬午頭川、西側を榛名白川に挟まれた、扇頂標高600m付近から扇端標高110m付近の範囲と想定されている。扇状地内に谷頭を持つ八幡川、牛池川、染谷川、唐沢川など多数の小河川が南東方向へ流下し、扇状地面を下刻して谷底平野を形成している。

金井古墳群は西側の染谷川、東側の八幡川に挟まれた丘陵上の西隅、染谷川に接する位置にある。付近は扇状部中でも扇頂部寄りにあり、古墳分布の上限に近く、古墳時代集落もほとんど見られない。扇状部中でも扇端部寄りでは古墳時代の集落が展開し、特に扇端部付近には5世紀後半代を中心とする保渡田古墳群(2)や豪族居館である三ツ寺1遺跡(3)が扇端部西寄りに、6・7世紀代を中心とする総社古墳群(4)や8世紀以降の上野国分寺・上野扇府(5)が扇端部東寄りにある。古墳時代から平安時代にかけて、この地域が長く上野国の中心地であったことを示す遺跡が集中している。

金井古墳群の西側にある染谷川は利根川水系・井野川支流の一級河川3次支川である。本遺跡周辺より約3km

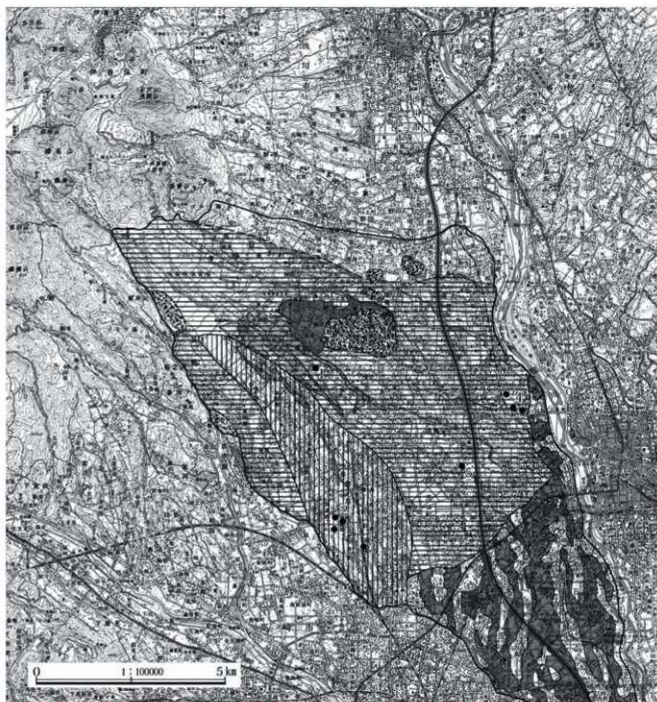
上流の榛東村広馬場地内を水源とし、途中道木橋川や牛池川を併せた後、高崎市新保で井野川に合流する延長17.4kmの長さである。遺跡周辺では幅15m前後の谷地形内にあり、崖までの高さは3m前後だが切り立った鋭い地形に見える。通常の水量はあまり多くない。

本遺跡のある北群馬郡榛東村は昭和32年の合併後に生まれた新しい村名である。それ以前、遺跡周辺にあたる近世広馬場村は代官領、安中藩領などを経て、明治22(1889)年の町村令施行に伴い柏木沢村と合併して相馬村となる。その後、昭和32年には相馬村が分割され旧広馬場村が桃井村と合併し、昭和34(1959)年に北群馬郡榛東村と改称して現在に至っている。隣接町村が高崎市や渋川市と合併するなかで、現在でも村の名を残す群馬県内平野部では唯一例となっている。

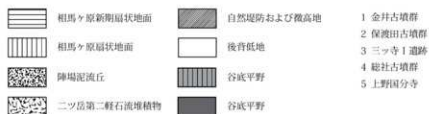
村の総面積27.94km²、平成25年10月現在の人口は14,704人である。

村域は榛名山山頂付近から南東裾野にかけての東西に細長い、西北西から南東東方向へ傾斜している。西北西隅は榛名山カルデラ内溶岩円頂丘の一つである相馬山(1411m)にかかり、南東東隅は前橋市清野町等に接する標高180m付近にある。村は南西側を高崎市(旧箕郷町と旧群馬町)、東側を前橋市、北東側を吉岡町、北西側を渋川市(旧伊香保町)と接している。桑畑の多い畑作地帯であったが現在は前橋・高崎・渋川など周辺市のベッドタウン化が進んでいる。

調査前の周辺の地目は荒地となっていた。上毛古墳群に本遺跡の2基の古墳が漏れていたことより、分布調査が行われた昭和初期も染谷川縁の荒地・雑木林であり墳丘を隠していたと想定される。



第2図 遺跡周辺の地形



(「群馬町誌資料編1」(1995) および「群馬県史資料編1」付図2 (1990) を元に作成。)

2 周辺の遺跡

①概観 本遺跡周辺は群馬県内において発掘調査があまり多い地域ではない。まだ不明瞭な部分のある一画であるが、本遺跡調査の主体となった古墳時代の遺跡を中心に時代ごとに概観する。第3図に周辺の遺跡と古墳群をプロットし、それぞれの内容を表1・2に記した。また本遺跡の南側に広がる金井古墳群の上毛古墳総覧での記載要約を表3に記した。

旧石器時代 旧石器時代遺跡の確認はない。陣場火砕流が約2.1万年前頃に形成されており、厚く堆積した火砕流下から遺跡を確認することは難しい。

縄文時代 縄文時代早期の押型土器が長谷津遺跡(13)で少量出土しており、この頃からわずかに遺物の分布が見られるようになる。中期後半以降に十二前遺跡(14)や長谷津遺跡で集落が見られるようになり、下新井遺跡(11)や第3図からは外れるが茅野遺跡など後期から晩期にかけて遺跡が点在している。

弥生時代 該期の遺跡がきわめて少ない地域である。清水貝戸遺跡(4)や全徳森遺跡(25)などでわずかに土器が採取されたのみで、水田を基盤とした農耕村落が発展を開始するこの時代に、扇状地上のこの地域では開発が遅れることが見て取れる。

古墳時代 4・5世紀代になっても弥生時代同様集落や墓域が確認できない。弥生後期の遺物をわずかに確認した生原田鳥遺跡(18)で古式土師器が確認されているが、集落や墓域の調査はまだ見られない。また6世紀以降も古墳群が多いが集落のごく少ない特異な地域である。

古墳は6世紀前半半帆立形古墳である上芝古墳(27)が特筆される。1929年に福島武雄氏らによって調査されている。榛名山二ツ岳噴火時の泥流が周囲直上に堆積し、噴火から遺跡の年代を研究する嚆矢となった学史的調査である。6世紀前半の高塚古墳(12)は全長60mの前方後円墳で、人物・形象埴輪を含む円筒埴輪列が見られる。榛名山東南麓の前方後円墳としては最も標高の高い地点に立地している古墳の一つで、地域の代表的な古墳に相応しい規模を誇っている。

6世紀後半以降の後期古墳群になると、さらに数の多さが目立つ地域である。特に金井古墳群が占地する染谷川流域には連続と古墳群が造られる。染谷川左岸の崖線

に沿っては金井古墳群を北隅として王塚古墳群(L)・庚申古墳群(M)・如来古墳群(P)など、右岸には寺屋敷古墳群(O)があり、古墳密集地帯を形成している。八幡川と染谷川間の下ノ前古墳群(C)・堂塚古墳群(E)が最も上流域まで展開しているが、いずれも標高280m以下の範囲である。どちらも牛池川など小河川の起点付近にあり、小規模な湧水地に隣接していると思われる。

遺跡周辺には古墳時代の集落は見られない。長谷津遺跡で2軒の特殊な竪穴住居を調査しているが、一般的な集落と同様に扱える住居が不明瞭である。本遺跡南側2.5kmにある海行A・B遺跡(19・20)に6世紀代から始まる古墳時代以降の集落があり、第3図の外となるがこの遺跡南側の善徳寺前遺跡や飯盛遺跡などへ繋がる大集落が展開している。

藤原宮本筋の「上毛野国車評桃井里」にある「桃井」に比定される地点が本遺跡の北側に広がるが、評制や藤原京の年代に沿う7世紀末から8世紀初頭にかけても、集落はほとんど見られない。

奈良・平安時代 平安時代に至って、大集落が見られるようになる。本遺跡より標高で50m前後低い旧箕郷町地内には中新田遺跡(22)・生原終木遺跡(23)・全徳森遺跡などで数十軒単位の集落が調査されており、該期の大集落が展開していたことが想定される。また、御堀遺跡(5)・十日市遺跡(9)など平安時代後半を主体とする大集落が本遺跡北東側に見られる。

中世以降 遺跡周辺の広馬場の地は、文明九年(1477)に上杉顕定・上杉定正の陣と、長尾景春・足利成氏の陣が対峙した「広馬場の布陣」として著名であるが、中世の遺構は近隣には見られない。西上州を代表する城跡である箕輪城(34)が本遺跡南西側にある。他に桃井城の一部にあたる大蔵遺跡(35)がある。方形館が密集する平野部や川沿いに城館が並ぶ地帯など、県内には中世居館がきわめて多いが、陣場泥流面は中世居館が比較的少ない一画と言えようである。

②金井古墳群について

上毛古墳総覧では現在の榛東村に含まれる旧相馬村に35基の古墳が記されている。そのうち金井古墳群が展開する相馬村広馬場の所在地に相馬村第10号墳から24号墳の、15基の円墳がある(表3)。本遺跡で調査した榛東村



第3図 周辺の遺跡

第三章 調査の内容

54・55号墳の調査前規模は幅50尺前後、高さ5尺前後で近似した規模の古墳が多数見られる。金井古墳群の様子が示されているが、所在する地番388にあたる古墳はな

く、両古墳が上毛古墳総覧から漏れた古墳であることが確認できる。

表1 周辺道跡一覧

No	道跡名	縄文			弥生			古墳				奈・平	その他	中・近世	道跡の概要 その他の道構・遺物	参考文献
		前	中	後	前	中	後	集落	墓	墳	生産					
1	棟東村54・55号墳		▲											▲	本報告。金井古墳群北隣の横穴式石室をもつ2基の円墳。	
2	多谷道跡											○			密集した平安時代前期の竪穴住居5棟。	1
3	別分八幡下道跡											○			平安時代の住居10棟。風字堀・八幡踏出土。	9
4	清水貝戸道跡			・	▲										平安時代の住居4棟。	11
5	御廻道跡											○			平安時代後半主体の竪穴住居34棟。	7
6	千代開南道跡											○			平安時代の竪穴住居11棟。	24
7	住道跡	▲										○		※	平安時代の竪穴住居12棟。近世の墓坑。	24
8	倉海戸道跡											○			平安時代後半の竪穴住居2棟。	4
9	十日市道跡	○										○		○	8～10世紀の竪穴住居72棟の地点的集落。中世以降も掘立柱建物・竪穴道構等多数調査。	24
10	庚中塚古墳							○							全長30mの円墳。	
11	下新井道跡			○								○			縄文後晩期住居5棟と配石基19基。	8
12	高塚古墳							○							6世紀前半、全長60mの前方後円墳。人物・形象埴輪出土直上にHr-F P。	25
13	長谷津道跡	○	▲				○			○	○				集落は縄文中期3棟・Hr-F A上の2棟・8世紀の1棟。生産はHr-F A下の品。	23
14	十二前道跡	○													縄文中期の大集落。加曾利E式期の住居18棟。	10
15	平塚古墳															
16	寺塚敷I・II道跡				○						・			▲	10基の円墳。樽形の住居1棟。生産は品。	15・16
17	生原大清水道跡	▲	▲									▲		○	中世以降の掘立柱建物。	18
18	生原田島	▲			・	・									縄文草創期を含む。	18
19	海行A道跡		▲				○			○	○				古墳は埴輪を持つ6世紀後半のセンゲン塚と7世紀後半の円墳4基。生産は品。	13
20	海行B道跡						○	○				○			円形周溝墓2基。	13
21	原敷2号墳															
22	中新田道跡														平安時代主体の住居16棟。	13
23	生原・終木道跡											○			奈良平安時代の住居10棟。	20
24	生原八反島道跡		●									○			平安時代主体の住居10棟。	18
25	全徳森道跡		・	・								○		※	平安時代住居8棟と配石墓。	19
26	茶畑場道跡															
27	上芝古墳							○							昭和4年福島武雄により調査。6世紀前半の全長15mの輓立貝形古墳。人物埴輪等。	2・25
28	天宮古墳							○							小札甲冑具等出土。	
29	行人塚古墳							○							一辺20mの7世紀前半の方墳。	2
30	橋山古墳							○							前方後円墳とされるが円墳の可能性。	2
31	横道下道跡														縄文土器、土師器の散布地。	
32	中沢道跡														縄文・弥生土器の散布地。	
33	(船木沢)大清水道跡															
34	箕輪城														戦国時代長尾氏築造と考えられる西上州を代表する城跡の一つ。	14他
	城山道跡	○													箕輪城内。縄文時代の住居3棟。	2
35	大蔵道跡							○						※	6世紀後半の全長53mの前方後円墳と中世桃井城の堀・土塁。	21
36	畑中道跡											○			平安時代の住居6棟。	22

●は竪穴住居の確認はないが、土坑等の確認や多量の遺物出土のあるもの、▲はその他若干の痕跡が見られたことを表わす。
・は敷点の遺物出土等わずかな痕跡を表す。○は大規模な道構の確認のあったことを示し、集落であれば竪穴住居では大よそ30軒以上の調査である。※は備考欄に説明を加えている。
参考文献は一括して127頁に記した。

表2 周辺の古墳群一覧

No	古墳群	備考	参考文献
A	金井古墳群	染谷川左岸の後期古墳群。総覧には14基の円墳が記載。	
B	方壘山古墳群	全長47mの前方後円墳「方壘山古墳」を含む3基の古墳。	26
C	下ノ前古墳群	総覧には17基の円墳が記載。桃井村14号墳からは直刀出土。	
D	宮室古墳群	総覧には11基の円墳が記載。	26
E	堂塚古墳群	天王山古墳を含む3基の円墳。	
F	今井古墳群	八幡川沿い最上流の古墳群。	
G	懸子古墳群	八幡川右岸の古墳群。樺東村39号墳から馬具・鉄鏃等出土。	1・4
H	柿木坂古墳群	高塚古墳の西側にある古墳群。	1
I	立廻古墳群	2基の古墳が残存。樺東村31号墳は7世紀前半の山崎せ式円墳。	5
J	北原古墳群	総覧には7基の円墳が記載。	26
K	内金古墳群		26
L	王塚古墳群	染谷川左岸の古墳群。	26
M	庚申古墳群	染谷川左岸の古墳群。B号墳は葦石切組積手法の石室。	3
N	金井沢古墳群	「ト」の字形石室のオ春名古墳とその周辺の古墳群。	3
O	寺屋敷古墳群	染谷川右岸の古墳群。10基の円墳を調査。	15・16
P	如來古墳群	7世紀後半を中心とする4基の円墳を調査。	26
Q	本田古墳群	小円墳2基残存。1号墳から馬具類出土。	3

総覧→上毛古墳総覧。

参考文献は一括して127頁に記した。

表3 総覧に記された金井古墳群内の古墳

相馬村古墳番号	墳形	現況	住所			墳丘規模(尺)			主体部
			大字	小字	地番	東西	南北	高さ	
第10号	円型	草地	広馬場	宮室	399	39	43	7	丘上小洞有
第11号	円型	雑草地及び畑	広馬場	下ノ前	398-1	53	52	9	石塚開口
第12号	円型	雑草地及び畑	広馬場	下ノ前	395	15	11	2	
第13号	円型	雑木林	広馬場	下ノ前	395	26	12	1	
第14号	円型	雑草地	広馬場	下ノ前	397	67	56	5	石塚底露出
第15号	円型	雑木林	広馬場	下ノ前	397	7	14	2	
第16号	円型	雑木林	広馬場	下ノ前	397	34	38	5	石塚露出
第17号	円型	畑	広馬場	下ノ前	396	39	44	3	
第18号	円型	雑草地及び畑	広馬場	下ノ前	396	29	37	5	石塚露出
第19号	円型	雑木林	広馬場	下ノ前	403	16	20	2	石塚露出
第20号	円型	雑木林	広馬場	下ノ前	408	30	31	3	石塚露出
第21号	円型	雑木林	広馬場	下ノ前	408	56	50	6	石塚露出
第22号	円型	雑木林	広馬場	下ノ前	409	20	37	4	石塚露出
第23号	円型	雑木林	広馬場	下ノ前	409	52	43	10	
第24号	円型	雑木林	広馬場	下ノ前	409	49	50	8	

原典から古墳番号の裏を号に、墳形の欄を円に変えている。

3 調査の方法

本遺跡では主な調査対象が2基の古墳であったため、発掘調査にあたっては国家座標に沿ったグリッドは設定しなかった。ただし整理作業のための国家座標に沿った座標数値を用いて調査地点の名称とした(凡例参照)。

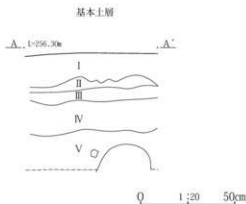
調査には前年度に実施した試掘坑を再度開き、併せて2基の墳丘周辺に新たなトレンチを設定し墳裾の位置や葺石の有無および周堀の有無を確認した(第5図)。墳丘とその周辺は人力で掘削し、周辺表土は重機で掘削した。古墳の調査にあたってはそれぞれの古墳石室軸方向に合わせた測量基準線を設定し、オフセット測量とした。墳丘測量やその他の遺構はトータルステーション測量を行い、オフセット測量の図根点を取り込んで後日のデジタル編集作業に備えた。石室内の埋没土は下層から鋪石内、および埋戻し土まで土篩いし、微細な遺物の検出にも努めた。

調査区西側は染谷川へ向かう急傾斜地であったため、トレンチ調査を行い、全面掘削は実施していない。

4 基本土層

本遺跡内は古墳墳丘を残して周辺で激しい土取りが行われ、表土から基本的な堆積状態を観察できる地点が見られなかった。54号墳にかかる4号トレンチ南壁で榛名ニッ岳渋谷テフラ(以下、Hr-F Aと略す)下の堆積が比較的良好で平坦な地点を選び(第8図)、ここで表土下の基本土層を記録した。陣場泥流層からHr-F Aまでの層厚は35～40cm前後しかない。また4世紀初頭に噴火した浅間C軽石(以下、As-Cと略す)とその混土層も20cm前後の層厚で、染谷川への崖線から20m以上離れた地点であるが、土砂が堆積しにくい地形であったことが分かる。陣場泥流層は表層から径50cmを超える大型の礫混入が見られた。

Hr-F Aより上層の堆積状態は、54号墳周溝や南西側窪地上で浅間B軽石(以下、As-Bと略す)が見られたが、平坦部分では確認できなかった。染谷川崖線付近の斜面ではAs-Bの二次的堆積状態を観察できる場所があり、第6図下でAs-Bとその前後の層序を記した。



基本土層

- I 水成二次堆積のようなHr-F A層。固く締まっている。
- II 暗黒10TR3/2 As-Cを不均等にやや多く含む層。
- III 純層に近いAs-C主体の層。
- IV 黒濁7.5YR3/1 起源不明の軽石や細礫等の混じる締まりある層。
- V 濁7.5YR4/3 不揃いの礫の混じる陣場泥流層。

第4図 基本土層

5 古墳の調査

本遺跡で調査した2基の古墳は榛東村54・55号墳として周知の古墳である(以下54・55号墳と呼称する)。いずれも墳丘盛土の残存する小円墳である。上毛古墳総覧では調査地点周辺の住所(旧相馬村広馬場)に第10号から第24号までの古墳15基が記載されている。長軸幅が平均で11.7m、最大でも20.1m(67尺)の小円墳である。これら古墳は後に金井古墳群と呼称される。群馬県内には本古墳群の南東側約4km付近の旧群馬町金古にも金井古墳群と呼称される古墳群がある。本古墳群付近の小字名称他の地名に金井はなく、どのような経緯で金井古墳群と呼称されるにいったかは不明である。

今回調査の2基の所在住所に上毛古墳総覧記載の古墳は見られず、総覧から漏れた古墳と思われる。榛東村古墳台帳作成の際に同村54・55号墳として登録されているが、1973年刊行の群馬県遺跡地図には金井古墳群の中に含まれていない。

2基の古墳は従来の金井古墳群範囲の北側に逸れた地点の古墳であるが、染谷川左岸域に広がる一連の古墳群に含まれる古墳と考え、試掘調査を実施した県教育委員会担当者や村教育委員会文化財担当との協議により、金井古墳群内に含めることとした。これによって今回の調査地点名および本報告書名も「金井古墳群」となった。

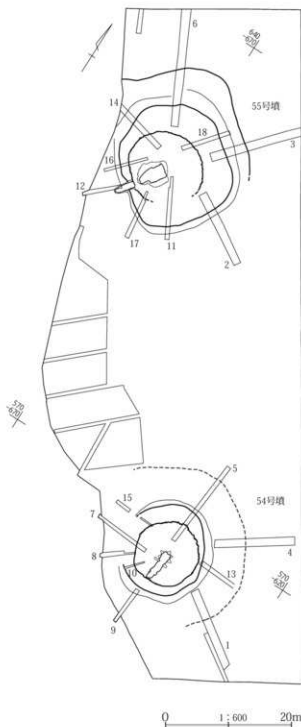
・古墳諸施設および石材の名称について

墳丘および石室諸施設の名称については文献⑧・⑨などを元に、墳丘・石室は第7図のように定めた。①の墳丘は55号墳、②の石室は54号墳をイメージして作成したものである。

墳丘盛土のうち、石室構築段階の盛土を第一次盛土、石室や第一次盛土を覆う盛土を第二次盛土と呼称したが、本遺跡例では54号墳の一部を除いて明確に区別できなかった。墳丘表面を覆う葺石のうち、墳裾付近に垂直に積上げた部分を外護列石状部分、傾斜面を覆う部分を葺石と区別した個所がある。外護列石状部分のうち最下段の石を根石、根石の繋がりを根石列、根石を据えるため溝状に掘削した部分を根石掘り方と呼称した。

墳丘周辺の平坦部分を基壇とした。本遺跡では基壇周辺を削平して基壇部分を作り出していて、基壇部分に盛土は見られない(第6図上)。55号墳では一部基壇外側にのみ周堀が確認できる。

石室内の石材のうち、石室各壁面を構築するものを石室石材と呼び、裏込め材や願石と区別した。石室石材は最下段を第1石または腰石と呼び、上側へ積上げる作業工程に従って第2石・第3石とした。54号墳では一部第4石まで確認したが、削平の顕著な55号墳では第2石の一部までしか残存していない。



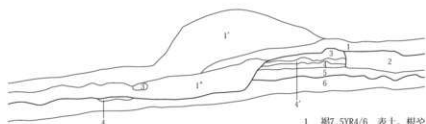
第5図 墳丘トレンチ配置図

第二章 発掘調査と遺跡の概要

54号墳削平痕(4トレンチ)

A, 1-257.50m

A'

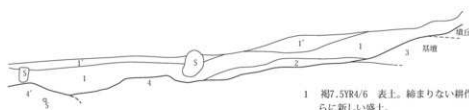


- 1 堀7.5YR4/6 表土。根や腐食途中の茎などを多量に含む。1'はさらに新しい盛土で、ボソボソしている。1'は黒色味をおび1より古い表土と思われるが、土質は変わらない。
- 2 にぶい堀7.5YR5/4 3号土坑埋没土。
- 3 明堀7.5YR7/2 Hr-F A層。
- 4 堀2.5YR6/6 純層に近いAs-C層。
- 4' 黒7.5YR2/1 黒色土の中にAs-Cを多量に含む層。
- 5 黒堀7.5YR1/3 締まりある弱粘性土。
- 6 明堀7.5YR5/6 障場泥流層。径5～30cmの礫が混じる。

55号墳削平痕(2トレンチ)

A, 1-259.00m

A'

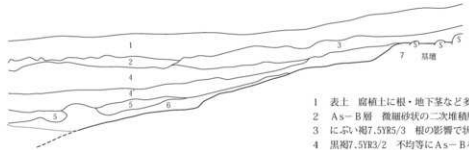


- 1 堀7.5YR4/6 表土。締まりない耕作土。1'は根や腐食途中の茎等を含むさらに新しい盛土。
- 2 堀10YR4/6 締まりある弱粘性土。As-Cを少量含むが、地山の小礫も混じる成因不明の層。
- 3 基礎内の地山。上位からHr-F A層、As-C層、黒色粘性土層などが含まれる。測量地点付近は本来の基礎より幅1m近く削平されたか。
- 4 明堀7.5YR5/6 障場泥流層。4'は樹木痕でローム土や小礫を多量に含む。

55号墳西隅(14トレンチ)

A, 1-255.50m

A'



- 1 表土 腐植土に根・地下茎など多量に含む。平坦部表土より黒色味強い。
- 2 As-B層 離層砂状の二次増積層だが混入物少ない。
- 3 にぶい堀7.5YR5/3 根の影響で状況悪いが、As-Bの混入多い旧表土か。
- 4 黒堀7.5YR3/2 不均等にAs-Bを含む弱粘性土層。4'は黒色味やや強く、As-Cの混入する可能性。
- 5 灰堀7.5YR4/2 As-Bの密度が比較的高く、同テフラ降下時に近い層と思われる。黄色味をおびる土粒等、雑多な混入物を含む。
- 6 堀7.5YR4/3 混入物少ない弱粘性土層。
- 7 明堀7.5YR5/6 障場泥流層。基礎付近で見られる。

0 1:50 1m

第6図 トレンチ内の土層

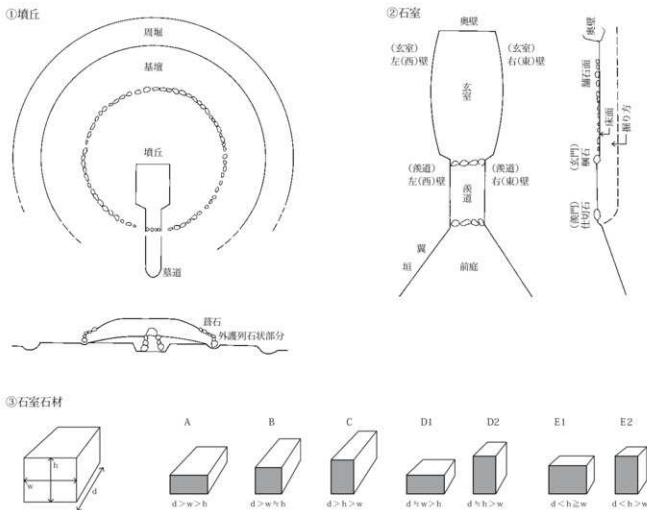
石室石材の積み方で天井部分を狭くするための積み方、「持ち送り」と呼ばれる内積の状態を「転び」と呼称し、転びの角度を鈍角で表した。また下石の平坦面に載せるように積んだものを「布積み」、V字状の2石の隙間に載せたものを「谷積み」と呼称した。石垣積み方の用語であるが、ここでは壁面全体ではなく個別石材の積み方呼称に用いた。

石室石材の積み方については、解体調査時に各石材除去後、直下の状況を観察し石材の主な支え方力点を「合端」と呼称した。主に重量を支えた合端を●印で、転びを生むための合端を▲で示した。また個別石材の計測値を表に一括して示したが、その中で積み方については第7図③のような略号を用いた。高さ・幅・奥行のうち奥行が最も長いもの(小口積み)をA～C、奥行が幅または

高さと共に最も長いものをD、奥行が高さが幅より短いもの(長手積み)をEとし、DとEの石室内配置について第23・62図に示した。なお、左右の積み石の間に刺って石を固定する間積み石を「迫廻石」、裏側に刺った石を「友廻石」と呼んだ。

石室石材の種類は飯島静男氏に調査段階で同定を依頼した。それによれば石材はすべて粗粒輝石安山岩であるが、その中に酸化した角閃石を含み、中～粗粒の斜長石を多く含んだ陣場(泥流)面の流山をつくる独特の石材があり、それを榛名山相馬岳由来安山岩として区別した。

石室石材の重量については、150kgまでは台計りで1kg単位まで計測したが、それ以上の重量のある石材についてはユニック車搭載の重量計に抱った。そのため100kg単位の概数となっている。



第7図 古墳調査の凡例

第三章 調査の内容

1 遺跡の概要

調査地周辺は近年に土取りがされており、地点によっては表土下に相馬ヶ原扇状地を形成する礫混じり層の表層が露出していた。付近は6世紀初頭ころに噴出した榛名二ツ岳流川テフラ(Hr-F A)が厚く堆積する場所であるが、この層を目安に土取りが行われたようである。また、調査された2基の古墳墳丘盛土内にブロック状のHr-F Aが多量に混入しており、古墳時代からすでに、周辺の削平が始まっていたことも窺える。

Hr-F A上の層層としては、調査地南東側の窪地や55号墳周堀表層など窪み内のみ天仁元年(1108)浅間B軽石(As-B)が純層に近い状態で確認できる。Hr-F A下にも3世紀末ころの浅間C軽石(As-C)が部分的に純層に近い状態で堆積していた。

出土遺物はほとんどが2基の古墳の墳丘上や石室内へ流れ込んだ状態の出土である。6世紀以前の遺構は古墳時代に、奈良時代以降の遺構は近年になって削平されたと思われる。

古墳時代以外では、縄文時代と近世の遺物が出土しているが、他の時代の遺物は皆無であり、遺構が密に分布する地点ではなかったことが窺える。堆積する火山灰層の状態から、高など遺物を伴わない遺構も古墳が築造される以前にはなかったものと思われる。

以下に今回調査された遺構の概要を記す。

・棟東村54・55号墳について

今回調査した2基の古墳は棟東村54・55号墳と命名されている周知の小円墳で、染谷川左岸の金井古墳群に含まれる。両古墳は基壇間を計測して約45mの間隔がある。この間は平坦ではなく、54号墳北側にわずかが谷地形が入り込んでいる。また両古墳とも地山の高まりを選んで構築しており、両古墳の間隔は地形を要因に生じたと考えられる。

54号墳は墳丘径約10m、基壇径16m前後の円墳である。両袖型横穴式石室の残存状態の良い古墳で、天井石も

一部残存していた。葺石根石を据えるための溝が廻ることが特筆される。

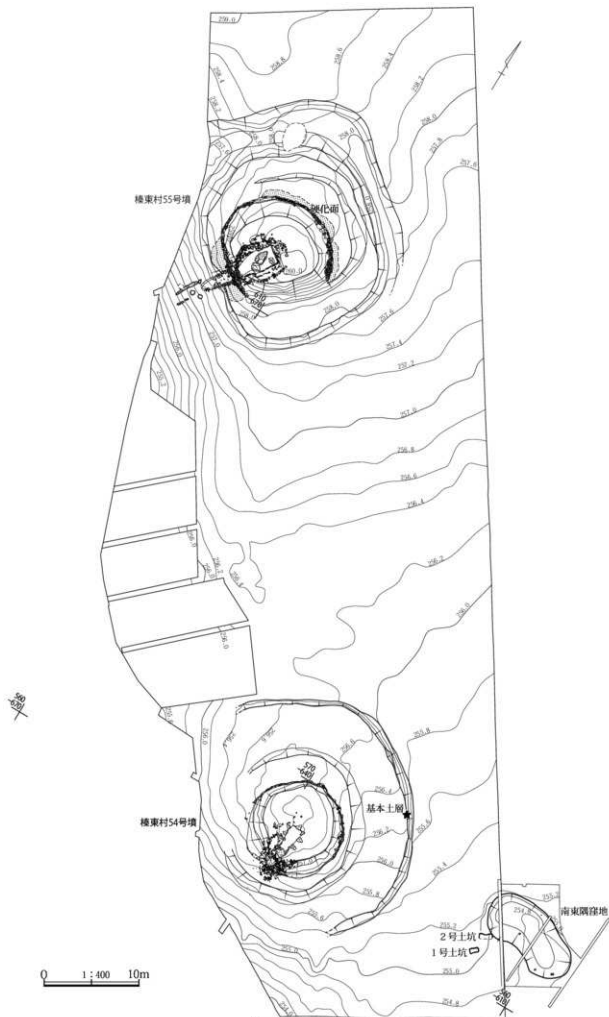
55号墳も両袖型横穴式石室であるが、石室は大きく壊され、墳丘も南東側が削られ残存状態は良くない。一部で周堀が確認できた。墳丘規模は約12mで54号墳よりやや大きく、石室も残存する範囲では54号墳より大きな石材が使われている。南北方向に約300mの範囲に広がる金井古墳群中、最も北側に位置する古墳であり、染谷川流域の古墳としても確認されている範囲では最も上流に位置している。周辺の地形を望むと古墳占地在可能な平坦地がまだ北側へ続いており、地形的な制約による北端の古墳とは考えられない。

両古墳とも盗掘の痕跡があるが、小円墳としては遺物の出土が多く、特に金属製品の出土が顕著であった。共通遺物に弓飾り金具や鉄鍔および鉄釘がある。55号墳のみに見られるのは靱鞆金具や杏葉・辻金具などの馬具である。

・窪地(埋没谷)について

当初設定の調査範囲西隅から馬具(轡)が出土したことより、調査範囲を広げて確認した人為的な窪地であるが、性格は明瞭でない。埋没土上面のAs-Bの堆積状態は55号墳周堀の堆積状態に類似し、古墳とほぼ同時代の窪地と推測できる。古墳周堀や古墳墳丘盛土採掘のための窪地などの可能性がある。古墳周堀であれば54号墳西側に隣接する古墳となるが、石室が想定される付近に54号墳に見られるような掘り方は確認できない。

他に平坦部の土坑や55号墳石室上に近世の墓壇と想定される土坑があった。いずれも近世の施設と推定できる。特に55号墳上の墓壇(4号土坑)からは近世の銭貨が多数出土したが、そのうち16枚以上確認できた寛永通寶鉄銭は出土遺物としては県内でも有数の資料である。



第8図 遺跡全体図

2 54号墳

1 調査前(第9図 PL.2-1)

本古墳は調査区南隅に位置している。調査区西隣を南へ向かって流れる染谷川左岸の崖線に接する南東側へ低く傾斜する緩やかな斜面に立地し、楕円形に近いような墳形とそれを囲む高さ40cm前後の段差が北側中心に確認されていた。墳丘上の樹木は低木が若干見られた程度だが、スキ等の枯草に覆われていた。段差上側には20cm前後の不整形の高まりが環状に巡っていたが、近年に寄せられた多量の枯草や根を含む土砂であった。

墳丘中央付近の座標値はX=46,565、Y=-76,639である。確認段階の墳丘は南東-北西方向にやや長い、長軸17m、短軸15mの規模である。頂部の標高は257.8m、

南・東側の現地表から1.9m、北側の現地表から1.5mの比高である。墳丘は南側・東側がやや急な傾斜であった。

確認段階では石室石材の存在は不明で、石室の位置・方向把握にはトレンチやボーリングステッキでの検討が必要だった。しかし玄室内へは戦後でも入ることができたという地元の方の証言があり、玄室上の天井石はその時点で持ち去られ、石室内の埋め戻しが行われたのはごく最近と思われる。

墳丘南側の前庭上に長さ1mの礫があり、持ち運んだ天井石の可能性もある。その他にも同規模の礫が染谷川へ向かう南側傾斜面に散在していた。天井石は染谷川側に廃棄したと思われる。なお、葺石と想定される径30cm前後の礫も散在するが墳丘の大半を覆うような多量の小礫群は、墳丘上や周辺のどちらにも見られなかった。



第9図 54号墳現況図

2 墳丘と周堀(第10図 PL.5-1、6)

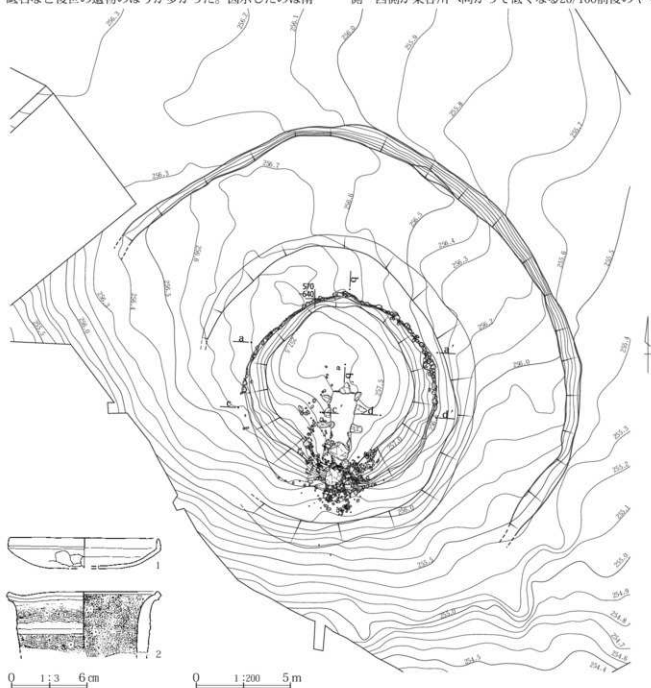
墳丘 上下二段の基壇状段差の上に直径10.3mの墳丘のある円墳である。上段基壇上からの墳丘の高さは北西側で0.7m、南東側で1.3mを測る。墳頂部の最も高い地点標高は257.65mで、付近は比較的平坦であった。石室は天井石を失い玄室部石材上段が確認できる状態であり、本来は確認状況に加えて1m近い高さの墳丘があったと想定できる。

遺物出土状態 墳丘上の古墳時代遺物は少なく、むしろ砥石など後世の遺物のほうが多かった。図示したのは南

側墳丘上の土師器杯1と北側墳丘上の須恵器壺2で、他に土師器7片、須恵器9片の出土がある。いずれも古墳時代の大型器形壺類小片であった。埴輪は微細片を含め全く見られなかった。

基壇 表土下では上下二段に築かれたような基壇状の様相となった。

下段基壇は断面の観察から最終的に後世の土取りにより生じた段差であることを確認しているが、原形がそれ以前から存在していた可能性を考慮して概要を記す。南側・西側が染谷川へ向かって低くなる20/100前後のやや



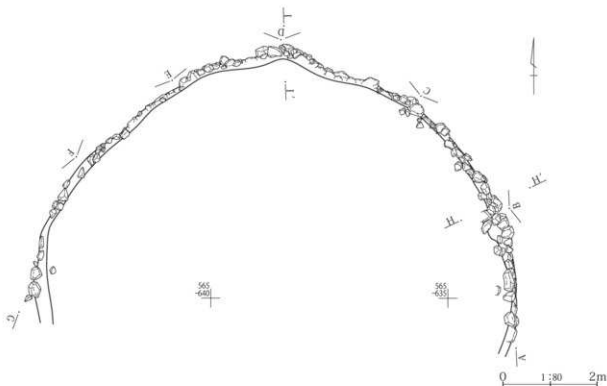
第10図 表土下の54号墳と出土遺物

急な勾配になっていて不明瞭だが、規模は北西-南東軸方向で26mの長さがある。上段基壇裾部分から下段基壇上端まで北西側で4.7m、北東側で4.4m、南東側で4.0mの幅がある。下段基壇面は地山傾斜に沿って南東側へ低く傾斜し、北西隅と南東隅とは1.6mの比高差がある。基壇の段差は最も高い北東側で約60cm、浅い北西側で20cmを測り、各箇所ともきわめて急な立ち上がりになっている。平面形は北西辺が直線的で、全体は楕円形もしくは一部で隅丸方形に近い不整形を呈している。

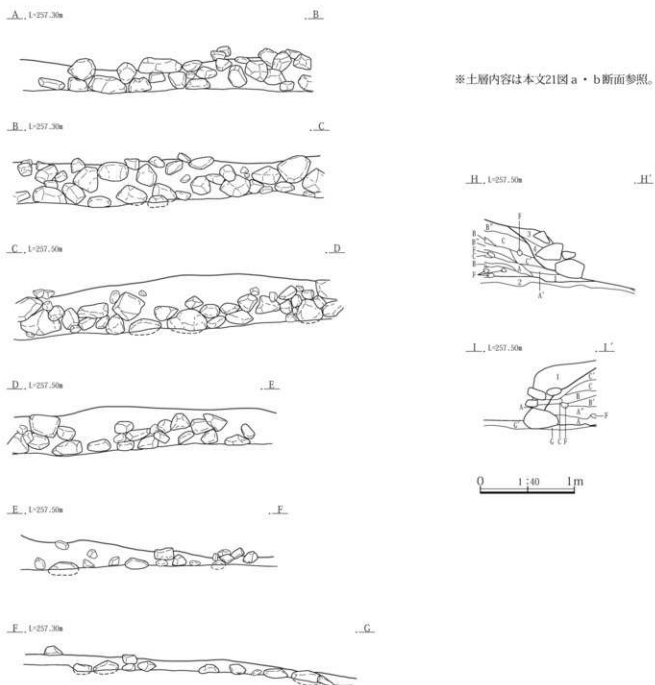
上段基壇も西側が不明瞭だが、北西-南東軸方向で16mの長さがある。墳丘裾部分から基壇上端までの幅は北西側で2.6m、東側で0.5m、南東側で1.2mと一様ではない。平面形も楕円形状に歪んでいて東側を中心に削平された可能性がある。地山傾斜に沿って南側へ低く傾斜していて基壇上面で北隅と南隅では0.7mの比高差がある。基壇の段差は南東側で30cm、北西側で10cm前後の高さがある。下段に比べ緩やかな傾斜である。

周堀 周堀は確認できないが、墳丘周辺など後世の削平が加わっていることを考慮すれば、基壇外周が周堀内側となり、周堀外側が削平された可能性もあろう。ただしその場合の周堀規模は最も深い南東側で40cm以下、浅い北側では20cm以下の深さで、深度に欠く周堀となる。

葺石 (第11・12図 PL.7・8) 墳丘北半の裾部分には石列状の1~4石程度、高さ最大40cmの垂直に近い石積みが見られる。この石積み外側には盛土は確認できず、本書では外護列石状部分あるいは垂直石積み部分と表した。平面形を見ると正円ではなく多角形に近い形状である。何らかの作業単位が反映されたものと考えられる。石積み部分は最下段の根石が第一次墳丘盛土に先行して据えられ、その上は第二次墳丘盛土後の石積みである。石積み上段から続く盛土斜面部分に所々で葺石が認められるが、周辺に崩落したと考えられる礫も墳丘全体を覆う葺石に相当するほど多量ではない。墳丘西側など一部に顕著な葺石崩落の痕跡(PL.7-2)が認められ、調査段階では墳丘上全体を葺石が覆うことを想定したが、墳丘上面は大きく削平されており、全面を覆う葺石の存在を裏付ける資料は得られていない。なお、本来は石室正面に相当する南側にも外護列石状部分や葺石は存在したことが墳丘裾部分を廻る溝(第20図)から想定できる。



第11図 葺石



※土層内容は本文21図 a・b断面参照。

第12図 墓石立面

3 前庭(第13図 PL.9)

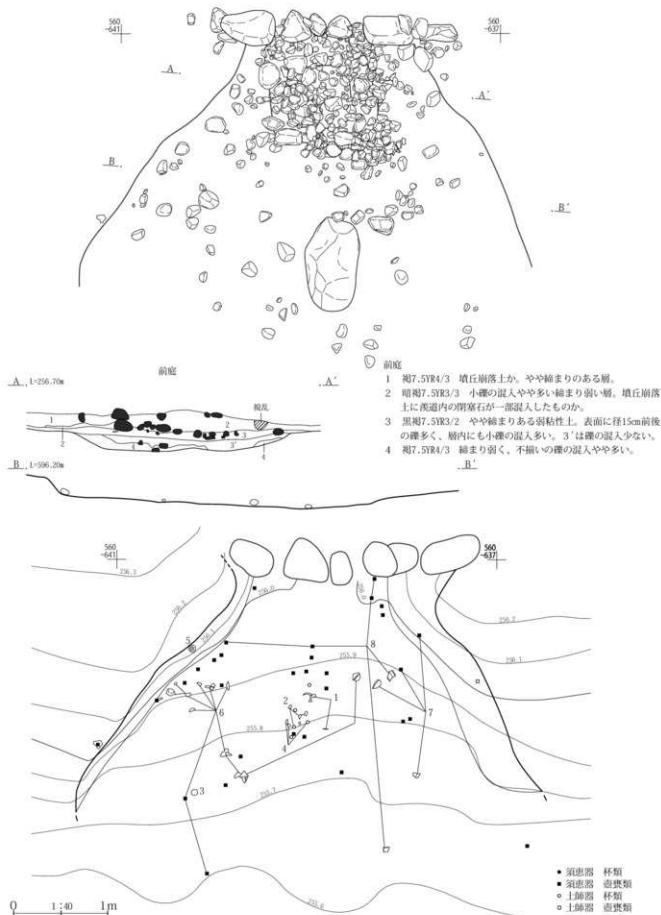
概要 上下2面の前庭の存在が窺える。

羨道前付近には表土直下から礫の出土がやや多く、前庭状施設の存在が想定された。礫は大きさが一様ではなく、敷き詰められたような状態ではない。特に羨道に接する付近では東西幅1.4m、南北幅1.2mほどの範囲に礫が集中して見られ中央が5cm前後窪んでいた(第13図上)。この面が追葬時の施設となる上面前庭(後出前庭)になると想定した。付近は高い位置から出土する礫も多

く、閉塞石の流れ込みも加わった可能性がある。

下面では前垣部分のない、南側へ開く台形状の前庭部(当初前庭)を想定した。南隅は築谷川崖線近くまで達する窮屈な印象の占地である。

当初前庭の平面規模は、台形の上底に相当する部分が2m、下底が4.8m、高さに相当する奥行が2.3mである。翼垣部分の高さは最も高い西垣中央付近で25cmほどで、石積みの痕跡の残らない緩やかな傾斜であった。東側の翼垣は蛇行気味で、南端付近は地山の傾斜と区別がつか



第13図 前庭

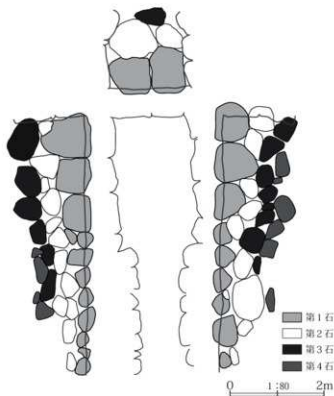
なかった。

遺物出土状況 完形まで復元できた遺物はないが、須恵器を中心とした土器が前庭部全体に広がるように出土し、8点を図示した(第46図)。本古墳出土土器の大半を占めている。離れた地点で接合する例が多く、原位置を留めている状態ではなさそうである。後出前庭に確実に伴う遺物はない。土師器杯類は4点でいずれも前庭中央付近の出土である。土師器杯1～4は中央付近にまとまって出土する傾向が見られた。須恵器甕5は西翼垣上に据えられたような状態で出土した。須恵器提瓶6は西側を主体に、甕7は東側に、甕8は広範囲に散乱していた。

図示した以外の遺物は土師器は杯類主体に10片、須恵器は大型壺甕類主体に28点で、下層からの出土が大半だった。須恵器杯類の出土はなかった。

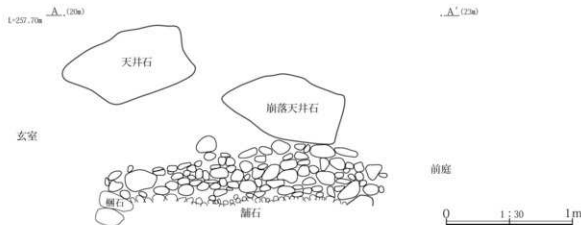
4 石室(第14～19図 PL.5-2、11～13)

概要 石室は自然石乱石積みの両袖型横穴式石室である。玄室の平面形はやや胴張り気味で、特に玄門寄りで湾曲がきつくなっている。壁面は奥壁3石(3段)、側壁は一部で4石(4段)に積まれ、2石から上で持ち送りがやや強くなる。石室内はしまりを欠く埋没土が充填していた。天井石の崩落は玄室側では認められず、壁も比較的良好に残存していた。後世に天井石を落下させないよう取り外す慎重な作業が行われたことが分かる。羨道最奥部に天井石1が残存し、羨道内には閉塞石上に落下したと思われる天井石2が見られる。床面には玄室側・羨門側ともに桐石・仕切石を据えている。



第14図 石室立面概念図

羨道部閉塞状況 こぶし大を超える大きさの礫で閉塞を行っている。羨道部の舗石より大きな礫を使用していて舗石との識別は容易であった。残存する閉塞の高さは羨道舗石上面から最大で45cmで、羨道側壁半分ほどの高さまでの閉塞である。天井石が平坦でないことから側壁上端より天井中央付近は低かったと思われるが、天井石と閉塞との間にはいくらか隙間が残っていたと思われる。閉塞は前庭部側(南側)ほど高く、玄室寄り桐石付近(北側)では20cmほどの高さで多量の閉塞石が玄室側へ崩落



第15図 羨道閉塞断面

第三章 調査の内容

していた。羨道部が盗掘進入路となった可能性がある。
石室内遺物出土状況(第17図 PL.12) 玄室埋没土中からは少量であるが近世以降の陶磁器片の混入があり、石室天井石は近世以降に取り除かれていたことが推定できる。羨道部の遺物は須恵器壺類の破片1点のみで、図示に耐える遺物はなかった。しかし閉塞石が玄室内に流れ込んでおり、羨道部の遺物が玄室へ混入した可能性はある。玄室内の土器は土師器4点、須恵器49点で、いずれも小破片で図示に耐える土器はなかった。すべて埋没土内の出土で、墳丘からの混入の可能性はある。

玄室内からは金属製品の出土が多い。金属製品には鈷・緑金具など刀装具の出土があるが刀身部の出土はなく、盗掘があったことの証左となっている。鈷5・緑金具8が玄門付近、緑金具6・7が西壁寄り大きく離れた位置の出土である。これが羨道側に盗掘進入路があったと推定する根拠の一つとなっている。

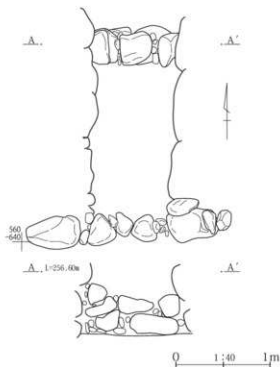
耳環は4点(1~4)出土しており、2体以上の被葬者が想定される。これも離れた状態の出土であった。なお、出土箇の分析から被葬者は2体以上であることが確認されている(本文101頁)。

玄室内西側を中心に鉄鏃の出土が目立ち40点(13~52)を図示したが、破片が大半でこれらの中に同一個体が含まれる可能性がある。可飾り金具が6点(53~58)あり、鏃と共に弓が副葬されたと考えられる。羨道寄りの55以外は埋没土や舗石間内の土砂篩いによって検出した遺物で、弓が副葬された地点の特定はできなかった。

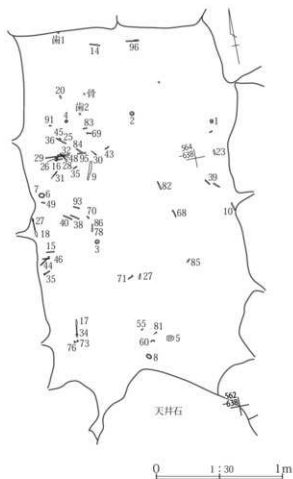
釘類の出土が目立ち37点(59~95)を図示した。木棺が埋納されたことが想定される。釘は玄室内に散乱するような状態で出土し、棺の位置を復元できる状態ではなかったが、壁際の出土は1点もなく、南北に長く広がる分布傾向から石室主軸方向に沿って木棺が埋納されたと想定できそうだ。55号墳に見られない遺物として奥壁際から鎌子96および小刀・刀子(9~12)の出土がある。

図示できなかった金属製品には、釘・鏃などの小破片が重量で約35g出土している。

石室床面の状況 羨道部床は玄室部と同レベルにあり、強い踏み固めは見られない。玄門よりやや南側に欄石が据えられている。羨門側の仕切石は葺石裾部分から繋がるように配されている。玄室部床も羨道部同様に強い踏み固めは見られない。玄室内に間仕切り石等の内部施設



第16図 欄石



第17図 玄室内遺物出土状況

はなく、抜き取りの痕跡も確認できない。

石室床面の状況 羨道部の床直上には径7cm前後の礫が敷かれているが、北側半分で残存状態は悪い。その上に層厚20cm近い舗石が積み上げられ、最終的に玄門側舗石は框石状になっていたようだ。羨道西側壁第1石も舗石によってほとんど隠れている。玄室部には径10cm前後の比較的大きさの揃った亜円礫が敷かれているが、奥壁側ではそれらが全く見られなかった。当初から石敷きがなかったか、天井石除去などの際に後世に丁寧に外されたことになる。石敷きの見られない範囲が規則的ではなく、調査担当は後世の取り外しと所見している。

平面および立面の状況

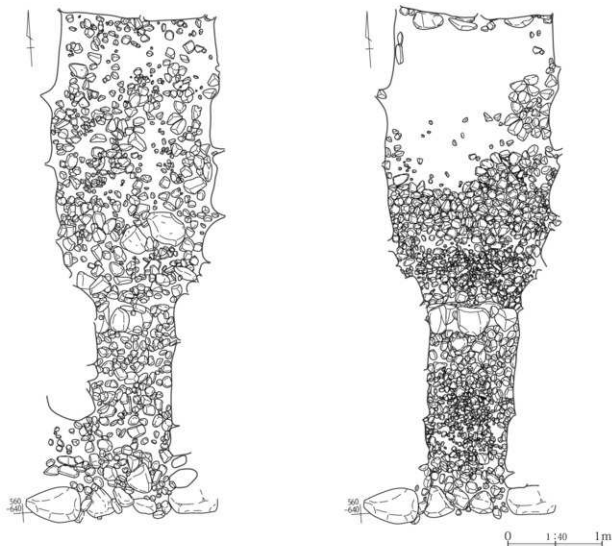
・石室主軸 N-2°Eで磁北に近い値である。地山は南東方向へ低く傾斜していて、染谷川の流下方向も現状では南東方向であり、自然地形より方角(北方)を意識し

た軸方向と考えられる。

・平面規模 床面玄室長は主軸位置で両玄門北隅を繋いだ部分まで2.78m、欄石北隅まで3.03mを測る。玄室幅は奥壁付近で1.66m、中央付近で1.81m、玄門付近で1.53m、玄室床面積4.72㎡である。同様に羨道部分は玄門付近の幅1.03m、羨道寄りの幅0.82m、羨門南隅から欄石北隅までの長さ2.43m、面積2.20㎡を測る。

石室上面では、玄室部分の奥壁付近幅1.17m、中央付近幅0.90m、羨道部分は中央付近幅0.80mを測る。

・立面規模 玄門上付近に天井石1が残存しているが、玄室部分に天井石は残存していない。壁高は残存値であるが奥壁から玄室中央付近にかけては160cm前後の残存壁高で一定しており、これら玄室最上部にある礫が天井石を支えていたと思われる。玄室高は奥壁中央で168cm、西壁奥壁寄り(20上)で162cm、西壁中央(22上)で148cm、



第18図 石室床面の状況(左:上面 右:下面)

東壁奥壁寄り(45上)で156cm、東壁中央(48上)で153cmを測る。

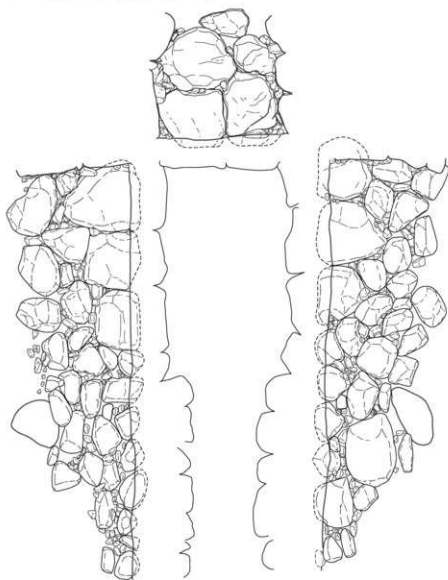
羨道中央には崩落したと思われる巨石(天井石2)が見られる。この礫は羨道閉塞石直上に落下しており、天井部分として旧状に近い様子を留めるものと思われる。壁面の高さは西壁で最大116cmあるが、天井石直下では90cmである。同様に東壁の高さは最大112cmで天井石直下は87cmであった。

・立面形状 玄室内の石積みには転びが顕著であった。奥壁は比較的転びが少なく98°前後であった。側壁断面は図示した部分で見ると中央付近が弧を描くように窪み、最上段の礫が大きくせり出す地点が多い。西壁98°~108°、東壁96°~105°の傾斜がある。玄門付近西壁に114°の最も傾斜のきつい地点がある。羨道部の転びも玄

室部と近似し西壁100°~105°、東壁95°~107°となっている。

・壁面の構成 石室石材は輝石安山岩(特徴から相馬岳由来の安山岩としたものがある)の自然石で、いずれも遺跡周辺で見られる石材である。種類・規模・積み方は本文28頁で後述する。側壁第1石では西側は奥壁側ほど大きな石材を用いた階段状の配置となるが、東側は凹凸ができています。東壁の30、西壁の10が玄門の位置にあたる。両石材とも最大値を奥行方向に置き、特に立柱石を意識していないようだ。ただし10は羨道側の幅より高さがまさり、やや立柱石状である。

羨道側では第2石で第1石より大きな石を多用するなど不規則な積み方となっている。



第19図 石室立面

5 解体調査(第20～44図 PL.6～22)

①解体の順序

解体作業は古墳構築順序を後から辿るのが基本であるが、本古墳は羨道舗石・前庭で造り直しが行われており、羨道—前庭部分の前後関係は明瞭にできなかった。そのため解体作業は作業効率を優先に考え、前庭→墳丘→石室→掘り方の順とした。本項の記述もこの作業手順に沿ったが、石室石材については積み方に沿った下側からの記載とした。

②前庭の解体

前庭は古墳基壇部分にあり、新旧2面の前庭が存在した。後出する上面部分は羨道に繋がるように見られる礫の集中地点である(第13図上)。礫の範囲は東西幅1.4m、南北長1.2m前後でおおよそ方形に近い形状となっている。礫は1段に敷かれた部分は確実な面で、2・3段に重なる部分は墳丘や羨道閉塞石の流れ込みか、前庭として旧状を留める部分か判断できなかった。礫の大きさは径7～25cmと不揃いで、12cm前後の礫が主体である。また外側・上側ほど大きな礫が多くなっている。

上面前庭の礫下5～10cmの深さに下面前庭(第13図下)が見られた。地山を削り込んだ面で敷き石や顕著な踏み固めは確認できず、上面前庭の掘り方のような状態であった。しかし前庭内遺物の大半がこの面での出土であり、前出する前庭面と捉えるべきと考えた。下面前庭南側は基壇掘り込み面縁部まで達している。そして南隅中央付近には長径90cmを超える礫が主体部軸方向に長径方向を描えるようにして出土した(第13図上)。石室方向からの転石であれば長径方向が傾斜に対し垂直になり易いと思われる。人為的に置かれた礫の可能性があるが、この位置に礫を置く意図を推測する根拠はない。

③墳丘の解体

・墳丘の断面設定 墳丘の解体にあたっては、第10図のように石室主軸方向に沿った南北方向のb断面と、これに直行するa断面および石室にかかるc・d断面を設定し、断面図を第21図に示した。また石室の解体では第29～33図のようにA～1の9カ所の断面を設定した。

・葺石と外護列石状(垂直石積み)部分 葺石下側の外護列石状部分最下段にある根石は比較的大きな石材が用いられている。この根石を除去した跡には溝状の窪みがあった。幅54～105cm、深さ6cm前後で規模は一定では

ないが区画帯のような状態を呈していた。この溝は羨門付近まで繋がり、葺石等が全く残存していなかった墳丘南側でも葺石が施されていたことが確認できた。

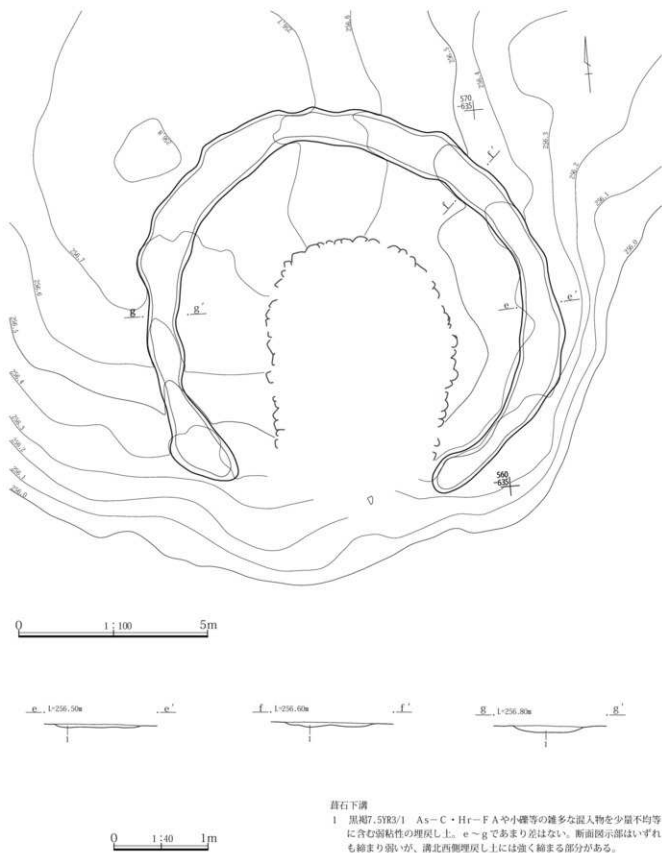
・盛土の種類と質 墳丘盛土にはAs—C混じりの黒色土A層土と、Hr—F A混じりのB～D層土を交互に積上げている。いずれも墳丘周辺で採取が容易な土である。版築状と呼べるような規則的な積上げではないが、締まりと水捌けを得られるA層を意識的に積上げている様相が窺える。また、盛土内にはブロック状のHr—F Aの混入が目立つ。周辺の地山を削り込むようにして墳丘盛土が集められたことが分かる。

・盛土の単位と順序 奥壁裏側は硬化面が比較的明瞭な部分であった。詳細な状況把握のため山中式土壌硬度計を用いた測定を行ったが、夏場の天候や断面での計測が災いしたか、連続する硬化面の存在を示す数値は得られなかった。調査担当者の周辺盛土観察では部分的に5面の硬化面を確認している。また石室石材は3段もしくは4段に積まれており、天井石を含めれば4～5段の石積み作業が行われたことになり、硬化面数と合致している。ただし硬化面は墳丘全体に均等に見られるものではなく、層厚も最大60cmを超える部分がある。盛土断面の分層線は盛土1単位の一部を表現したもので、全体の傾向しか把握できないが、規則的な盛土ではなかったことが窺える。

④石室の解体

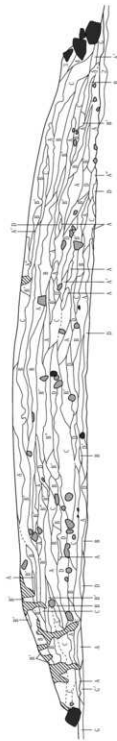
・裏込め石(第29図) 奥壁・側壁ともに裏込め石が見られる。石室掘り方が石室規模よりかなり大きく、掘り方内に多量の礫が充填されていた。掘り方壁面から石室石材第1石外端まで奥壁で50cm前後、側壁で50～110cmの距離があり、特に西壁で掘り方壁面と第1石外端との距離が広く開いている。調査段階で裏込め石の総重量を容積から試算し、26t前後という推定値を算出している。

裏込め石は断面観察(第30～33図)から工程毎の礫サイズが異なっていて、製作工程を復元することができる。最初の工程(下段・第1段)は第1石を据えた後、最大で30cm前後の長さの比較的大きな礫を掘り方上面まで繋ぐように埋めている。ただ、C・G断面などでは東壁側の裏込めが不十分で、正確に掘り方上面まで礫を充填できていない。この部分(第1段)は細礫や土の混入の少ない層で、礫の間の隙間が目立っていた。次に径3～7cm前



第20図 墓石下の溝

..d..



..b.. 1:250.00m

..c..



a・b断面

- 1 堀7.53R1/3 細く締まる粘性土、群石基部周辺。
- 2 にふい・堀7.53R5/4 やや締まる。
- 3 堀7.53R5/6 A₅-C₁段上。
- 4 堀7.53R5/6 締まり強い・粘性とも強い、3'ではやや粘性に富む。

c・d断面

- 1 堀7.53R3/3 小フロック状のHr-F Aを含む、1'では粒径大きい。
- 2 堀7.53R4/3 締まり欠く弱粘性土層で擾乱の可能性がある。
- 3 堀7.53R5/6 締まり・粘性とも強い、3'ではやや粘性に富む。
- 4 堀7.53R4/3 締まり強い・粘性土。

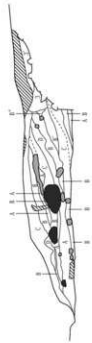
墳丘盛土

凡通土層

- A 堀7.53R3/3 やや締まりある弱粘性土、A₅-C₁・Hr-F Aフロックを少量含む。
- A' 堀7.53R4/4 締まり・粘性ともやや強くなる。
- A'' やや粘性に富む。
- B にふい・堀7.53R7/4 大粒フロック状のHr-F Aを主体に、暗褐色土を少量含む弱粘性土。
- B' 締まり強い。
- B'' 堀7.53R4/6 締まり強い、A₅-Cを少量含む。
- C 堀7.53R3/2 厚れたHr-F Aを主体とする粘性土。
- D にふい・堀7.53R5/3 純層に近いHr-F A主体の層で、紫色味を帯びている。
- D' 粘性強い、フロック状の黒色土を含む。
- E 掘削 図中では斜線で表現。
- F にふい・堀7.53R6/4 フロック状のHr-F A。図中では濃い・アミで表現する。
- G 堀7.53R3/1 強く締まる粘性土、群石(外濶河石)下の整地土、Gは粘性やや弱く褐色味を帯びる。

..c..

..d.. 1:250.00m



..d..

■ 黒
■ Hr-F A

土質同じだが、分離した部分を破線で表した。

0 1:50 1 m

第21図 墳丘断面

第三章 調査の内容

後の細かな礫を中心に充填する層(中段・第2段)がある。層厚は一定でなく、また部分的にやや大きな礫が混入している。第2段礫の範囲が西壁裏では掘り方開口部を越すことはないが、東壁裏ではC～E断面で掘り方開口部外側まで達している。また西壁裏A・C断面や東壁裏A・B断面など層厚に富む中段外端に大きな礫を据えて基を整えるような作業の痕跡が顕著である。上段は比較的大きな礫を充填しているが、全ての断面に細かな礫の薄い層が1～3条確認できる。

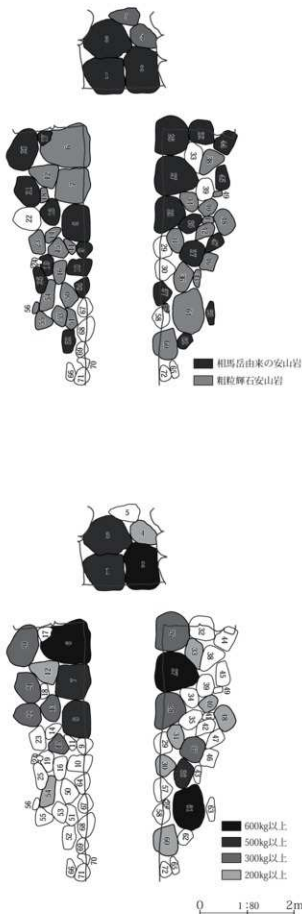
本古墳では裏込め石をサンプル的に計測した。長さ20cm以上の礫を大サイズとして50点、長さ11～18cm前後の礫を中サイズ、長さ10cm以下の礫を小サイズ礫として各100点を長さ・幅・厚み・重量の4要素を計測した。大サイズ礫は平均で長さ29.5cm、重量14.8kgの石材である。60kgを超える特大サイズが2点含まれている。これらは石室石材に使用しても違和感のない大きさで、羨道部第2石以上の位置で使用すれば大きな石材の範囲に含まれる規模である。礫の豊富さが看取できよう。長さど厚みの比が2倍を超えるものが50点中17点あり細長い礫が目立った。

中サイズ礫は平均で長さ12.9cm、重量1.02kgの石材で、長さど厚みの比が2倍以上の長細い礫が100点中22点で細長い礫は最も少なかった。

小サイズ礫は平均で長さ7.6cm、重量0.2kgの石材である。長さど2倍以上の長細い礫が32点で、細長い礫がやや多かった。裏込めとして使用されるこれら小礫の間には重量20g以下の細礫が多量に含まれており、川原や地山の礫を拾い集めたというより、小礫混じりの地山土を細礫とともに充填した状況であった。

・石材種類 石室壁面で確認できた石材は相馬岳由来の安山岩と粗粒輝石安山岩の2種のみで、第22図上に配置状況を記した。基本的に同一石材であり種類による大きさや積み方の明確な差は把握できないが、相馬岳由来安山岩は最下段に積まれ、粗粒輝石安山岩は羨道内で使われる傾向が看取される。

・石材規模 石材の重量ごとに石室内の利用の方法を第22図下に示した。600kgを超える大型石材は4点でそのうち3点が奥壁と側壁奥側1石(腰石)に使用され、61のみ羨道東壁の第2石に変則的に使用されている。61は壁材として全体で2番目の重量のある長さ1mを超える石



第22図 石室石材の特徴(上:種類 下:重量)

材で、羨道部天井石として使用可能な規模である。このことより羨道部の壁は大規模に改築された可能性があるが、裏込めなどその他の状況に改築を示唆する状況は確認されていない。調査担当は玄室に用意したが大き過ぎて使えなかった石材を羨道に転用したと所見している。その他石材にも、玄室側壁では第2・3石に西側のほうが重量の多い石材が集中し、羨道側壁では東壁に重量のある石材が多く、側壁が左右非対称となっている。

・石材形状 立方体状の整った形の石材はほとんど見られないが、玄室では平坦面が1面以上ある角礫状の石材が多く、羨道では依仗の形状をした角の明瞭でない石材が多数混じっていた。奥壁および西壁の奥壁側から3石までの腰石は、丸みを帯びた東壁の腰石に比べ、玄室内から見て隅丸長方形に近い形状の石材を選んで据えた傾向が看取できる。

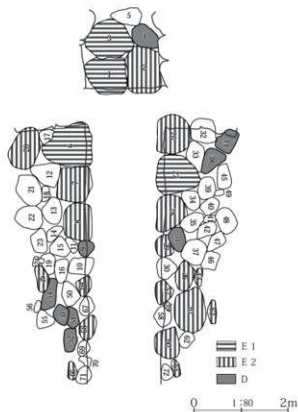
・石材加工 確実な加工痕跡が残る石材は確認できない。西壁の15や17に割れた痕跡が認められるが、自然の割れ面と思われる。

⑤ 石材諸属性と積み方の関係

石室石材の積み方を第23図に示した。石材が積まれた状態での縦・横・奥行比からA～E 2に7分類したが(第7図③)、E 2と分類した縦積み石材は3点のみで玄室奥壁および側壁奥側の使用である。いずれも重量600kg超の大型石材である。側壁では奥壁に接した部分で最も高さのある石材を据える配置が違和感のない積み方だが、東壁では奥から2番目に27を据えている。縦積み石材が隣合わせになることを避け、奥壁2と並ばないよう26と入れ替えた可能性があり、これによってE 2の縦積み石材が奥壁2を中心に一石間隔に配置されている。E 1とした横積み石材も最下段での使用が主体で、羨道東壁のみ第2石以上に多く見られる。D・Eの奥行に乏しい積み方石材の上面にはAなど小口積み石材が置かれる傾向は玄室奥壁と羨道東壁以外で顕著である。

また、東側壁では28-34-39-45の第1石から第4石までが斜め一列に直線的に並んでいる。西壁でも8-13-21の第1石から第3石が東壁と対になるように斜めに並べられた可能性がある。

調査では解体時に石室石材の積み方について、個別石材ごとに詳細な記録を残している。ここでは石材の積み方を下側から順に記載する。初めに第1石から第4石ま



第23図 石室石材の特徴(積み方)

で、1段ごとに概要を記し、次に裏込め石との係わりを断面図から記し、最後に各段の個別の石材について積み方の特徴を記した。なお、個別石材の特徴や計測データについては表5(本文52・53頁)に一括して記した。

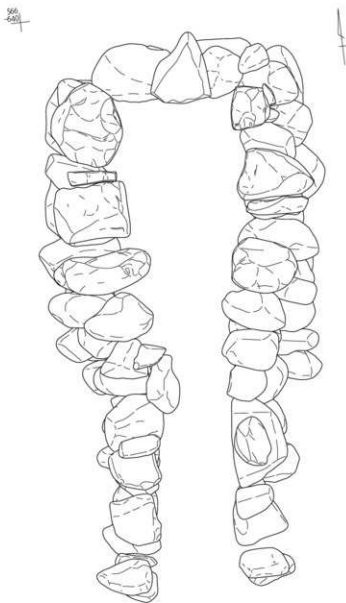
⑥石室石材積み方の概要

石室石材には1から72までの通し番号を付けたが、追廻石・間詰め石などは第34図のとおり至近の石室石材番号の次に枝番を任意に付けて表した。調査時の番号をそのまま踏襲したもので石室石材との繋がりが使用の順序を意図した番号ではない。

第1石 本石室の特徴は腰石下に転びを生むための小礫を飼う部分があるが、基本的に腰石直下には礫を飼わず、掘り方埋戻し土上に直接石材を据えている点である。玄室内は各石材の平坦な部分を玄室側へ向けて並べ、石材

の長軸方向が玄室側面に垂直もしくは平行になる配置(長手積み)となっている。玄室の平面形状は奥壁と西壁では面を揃えて直角になるような規則的な据え方となっているが、東壁は不揃いな据え方となっている。玄室構築基準面を奥壁・西壁に置いていることが分かる。なお、各石とも転びはごく少ない。

奥壁1は西側壁6に被さるように置かれていて解体時には6より先に1を外した。通常石室は奥壁腰石を最初に据えるが、本石室では1と6を合わせるようにして石室構築を始めている。



第24図 石室石材平面

0 1:40 1m

壁位置毎の石材平均重量は奥壁2石で550kg、西壁4石で495kg、東壁4石で385kgとなっている。特に西壁では重量80kgに満たない9を除いた3石は633kgで奥壁以上となっている。

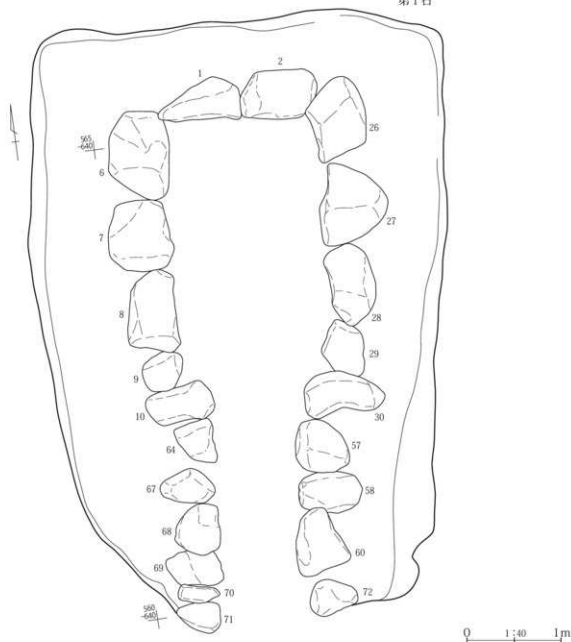
玄門石材のうち、西側の10は羨道側に約30cm、東側の30は約20cm張り出している。羨道側に面しては、10が約40cm、30が約50cmの幅で左右対称の配置となっていない。

玄門を含め羨道側では58・67のように石材の長軸方向を羨道と垂直になる据え方(小口積み)が増える。これら小口積み石材に隣接する石材はいずれも長手積みで、小

口積みと長手積みを交互に配置しているように見える。また羨道西壁の石材が小型で羨道の舗石面にほとんど隠れていたが、壁位置毎の石材平均重量は西壁7石で72kg、東壁5石で136kgとなり、西壁石材の小ささが際立っている。

第2石 第2石を積む前に玄室西壁南端の9上に10を置いて高さ調整を行っている。東壁の31-3は玄室内からは小礫に見え枝番処理した石材だが、石室石材同様の規模である。羨道東壁では規模の大きな61を積むため、細かな礫で丁寧な調整を行っている。

第1石



第25図 石室石材(第1石)

第三章 調査の内容

玄室では側壁で第1石と対称的に小口積みを主体として転びを付けている。奥壁のみ第1石同様長手積みを続けている。全体の平面形状は羨道側で狭くなっている。壁位置毎の石材平均重量は奥壁2石で350kg、西壁6石で179kg、東壁5石で151kgである。側壁には小さな礫を使い奥壁との重量差が顕著となっている。

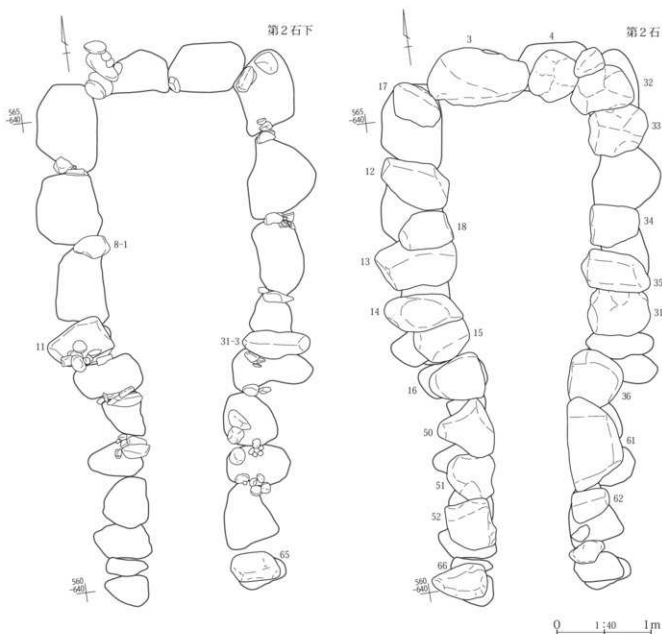
羨道側では第1石とは異なり顕著な小口積みになっていない。西壁石材では奥行の長さが比較的揃っていることが特徴的である。東壁には重量700kg台の61が際立って大きい。その北側にも重量300kg台の36が積まれ、第2石内で最も規模の大きな石材が集まる一画となっている。

いる。壁位置毎の石材平均重量は西側4石で101kg*、東側3石で420kgと第1石より重くなっている。

*奥門第2石の66は計測データを欠く

第3石 第3石を積む前に玄室側では転びを強くするための友飼石や、左右の石の間を埋める38-1のような追飼石が目立っている。

玄室内は奥壁に初めて小口積みの3が現れる。側壁では天井石を乗せるための持ち送りをさらに強くする小口積みが多く、玄門寄りで特に顕著になっている。22・40・42のような奥行が長さや幅の2倍以上になる細長い石材が目立っている。壁位置毎の石材平均重量は西壁4



第26図 石室石材(第2石)

石で285kg、東壁7石で146kgで西壁に大きな石材が多用されている。

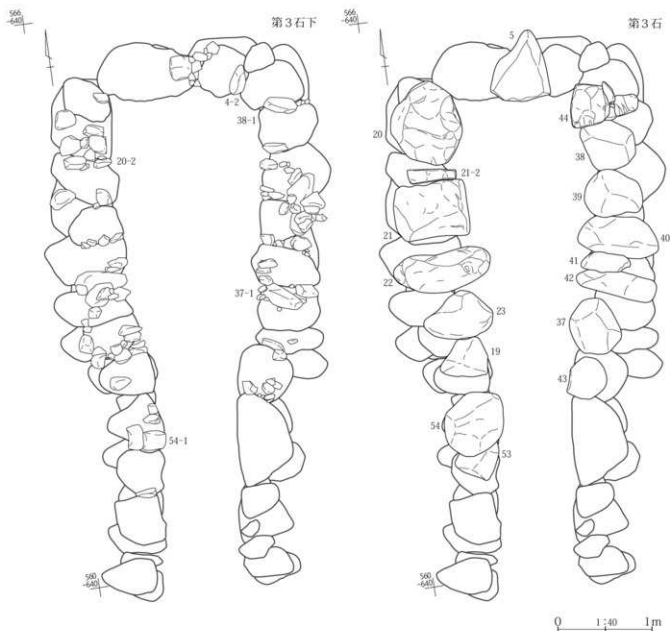
羨道側は西壁で玄室から繋がる第3石が明瞭で平均重量は134kgで羨道西壁内では最も重い石材を使用している。東壁は53の1石のみで、第3石と第4石は石材が乏しく区別が難しい。

第4石 玄室は東壁のみで特に玄門寄りの転びを強くしている。いずれも小口積みである。石材平均重量は5石で119kgであるが、重さ30kgの49を除いて計測した重量は第3石東壁とほとんど差はない。西壁は上面が平坦でなく、22の周辺に小振りの第4石が積まれていた可能性

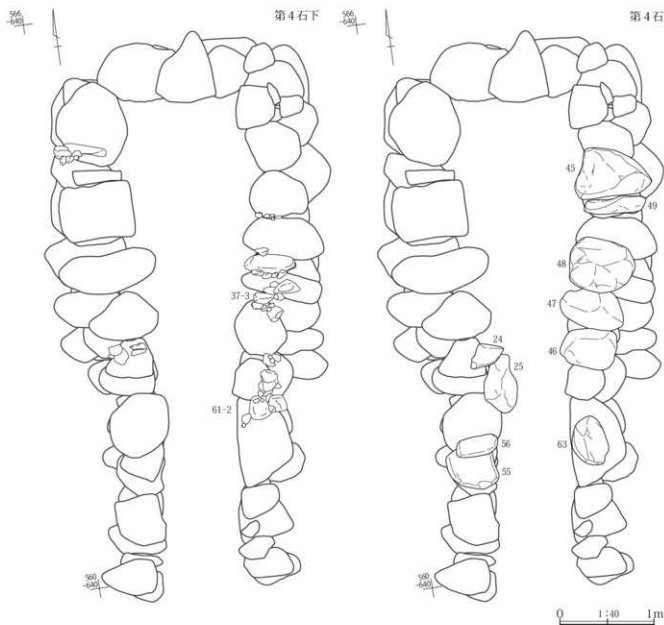
表4 計測場所ごとの石室石材重量

計測場所	点数	重量計	重量平均	単位kg
奥壁合計	5	1900	633	
左玄室合計	14	4795	320	
右玄室合計	21	3912	200	
左羨道合計	18	5142	90	*
右羨道合計	10	2082	174	*
玄室合計	40	10607	384	
羨道合計	28	7224	132	*
石室石材合計	68	17831	248	

*重量記録を欠く石材を除いた数値



第27図 石室石材(第3石)



第28図 石室石材(第4石)

がある。

羨道部は天井石を飼うための小型石材を微調整に詰めたようで、小口積みは少ない。西壁の石材平均重量は4石で53kgと軽量になっている。

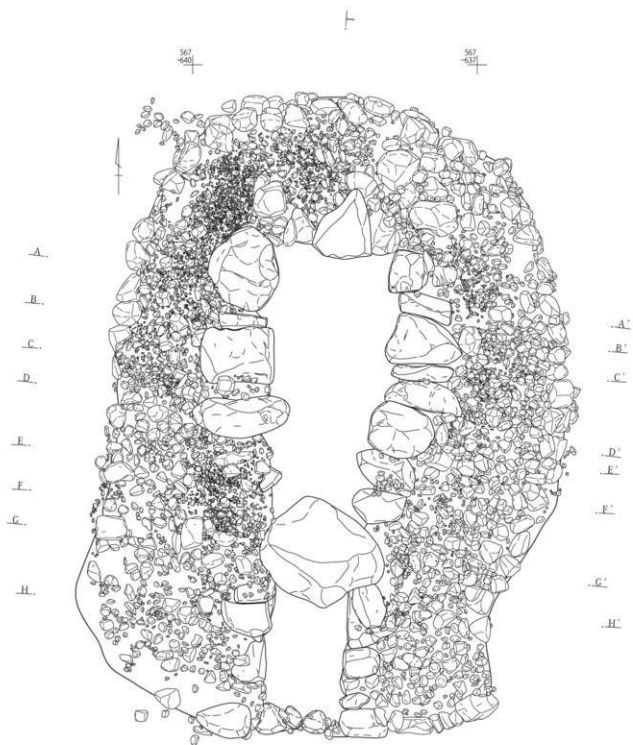
漢門付近は東西両壁とも低く、上段に数石積まれていたはずである。

⑦石室石材と裏込め石

石室石材の積み方と裏込め石との繋がりを把握するため、石室主軸方向に対し直角方向に8本、垂直方向に1本の断面を記録した。各断面は石室石材第1石や大型第2石の中央付近を通過するように設定したため、全ての石材を網羅できてはいない。個別の石材については本来

の積み方と異なるイメージが表れる部分もあり、第25～28図の平面図および第35～44図の石室石材図を対照して頂きたい。なお石室掘り方および裏込め内の土層記号はA～Hの各断面で共通しており、説明は36頁に記した。また各断面の下端は石室掘り方の下端まで達していない部分がある。

裏込めの層序については、大型礫のみを使う最下段を第1段、土混じりの細礫を主体に第1段上を覆う層を第2段、中間サイズの礫主体に不揃いの礫の混じる第3段、裏込め最上段を覆う不揃いの礫と土による第4段とし、石室石材に合わせて下側から数えた名称を使った。



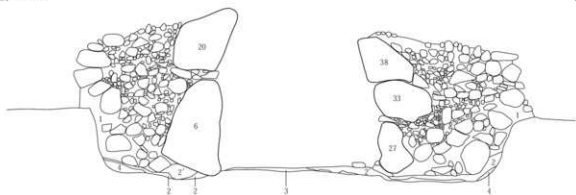
第29図 石室と裏込め

石室断面

- 1 図7.5YR4/3 裏込め下平の隙間に含まれる締りの弱い土。1'は床面などにある、やや締り強い層。
- 2 暗期7.5YR3/3 石室石材や裏込め下の締固められた土。ブロック状のHr-F Aを含む。粘性あり。2'はHr-F Aブロックは少量で特に強く締まる。
- 3 黒期7.5YR2/2 石室床面などに見られる締りの弱い土。3'にはHr-F A等種多な混入物含み、やや締り強い。
- 4 図7.5YR4/3 地山の神場泥流層土。

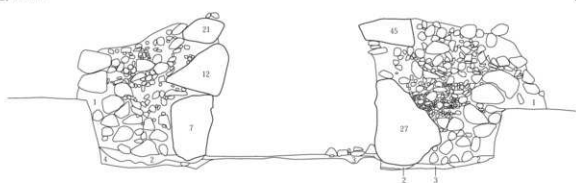
A_ I-257.8m

A'



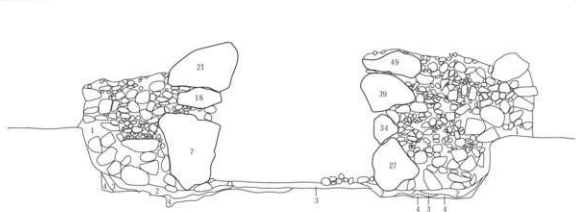
B_ I-257.70m

B'



C_ I-258.00m

C'



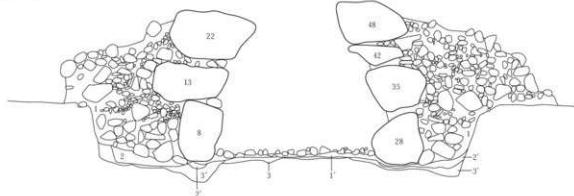
0 1:40 1m

第30図 石室と裏込め断面(1)

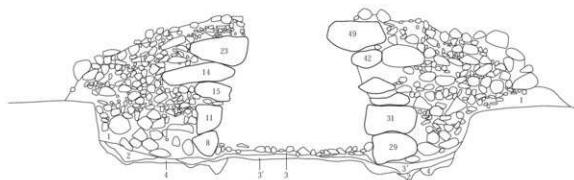
A断面(第30図上)

玄室西壁第1石最奥部の石材6を基準に設定した。西壁側は石材6の裏込めに大型礫を使う第1段(下段)裏込めが壁際掘り方上面まで達しているのに石材6の背面はほとんど充填されず、細礫主体の第2段裏込めもごく薄い。第3段裏込めは厚く、第3石の石材20を積むため整えた工程が看取できる。東壁側は掘り方上面を超えるまで第1段裏込めが充填され、第3段裏込めまできれいな層序が観察できる。東西両隅とも裏込め外側には大型礫を小口積みにして輪郭を整えている。

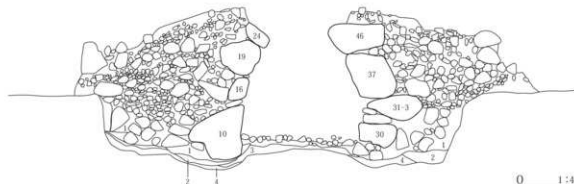
D., 1:257.70m



E., 1:257.70m



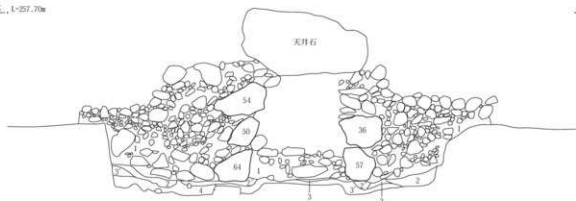
E., 1:257.70m



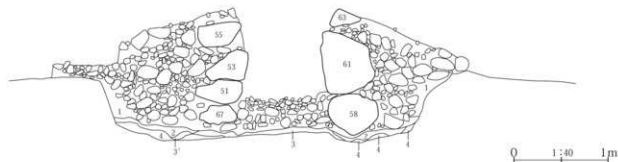
0 1:40 1m

第31図 石室と裏込め断面(2)

G, I-257.70a



H, I-257.70b



第32図 石室と裏込め断面(3)

C断面(第30図下)

玄室西壁第1石奥から2番目の石材7を基準に設定した。西壁側は石材7の半分以上が埋まるくらい厚い第1段裏込めが充填されている。反面、第2段裏込めは小範囲である。東壁際は第1段裏込めが掘り方上面まで達していない。また第3段裏込めが薄くて第2段裏込めとの境が不明瞭になっているが、第2段外端を留める小口積み礫は明瞭に確認できる。第4石の石材49は玄室側からわずかしか見えない石材だが、裏込め側へ奥行に富んだ規模があるのに持ち送りがなく、天井石を外す際に背側へ動いた可能性がある。

D断面(第31図上)

玄室第1石の奥から3番目にあたる西壁石材8と東壁石材28の両方に掛かるよう設定した。転びを生むため大型石材を第2・3石に小口積みした様子が図示できた断面である。第1石は東西の両石材とも高さが乏しいので、第1段裏込めは石材背面が半分以上埋まるくらい厚いが、東壁側は掘り方上面まで達していない。また西壁

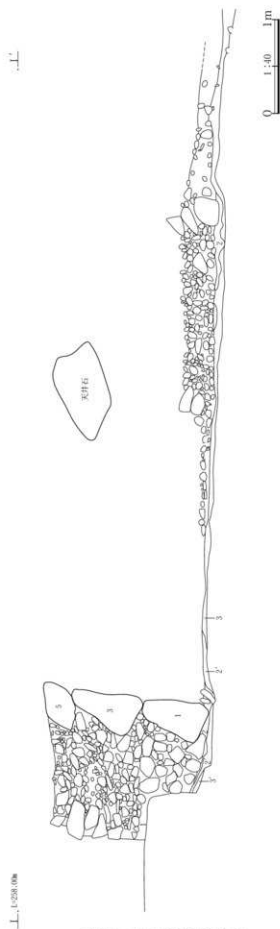
はこの付近から南側で裏込め範囲の輪郭を整える外側の石積みが不明瞭になる。

E断面(第31図中)

玄室東壁南隅の石材29・31を基準に設定した。西壁側では第1段裏込めが第2石の石材11まで達している。第3段裏込めが不明瞭だ。東壁側では石材29の上面膨らみに石材31の下面窪みを合わせるようにして、鯛い石を使わず積上げた工程が図示できた。本古墳では少ない積み方である。

F断面(第31図下)

西玄門石材10を基準に設定した。西壁側では、第4石の石材24が大きく羨道側へ偏っている。天井石を据える際の鯛い石であった可能性がある。東壁側では間詰め石として扱った31-3が石室石材と同等の規模と役割を具備していることが分かる。第2段裏込めが掘り方範囲を超えて東側へ続き、裏込め充填時に合わせて填削でも盛土を行う工程が確認できる。



第33図 石室と裏込め断面(4)

G断面(第32図上)

天井石と羨道両壁第1石の石材64・57が掛かるように設定した。西壁側では第2段裏込め上に第2石の石材50、第3段裏込め上に第3石の石材54を積んだ工程が図示できた。またF断面の東壁側で明瞭だった第2段裏込めの掘り方範囲外側への張り出しが、西壁側でも明瞭に確認できた。東壁側は裏込め各段の境が不明瞭になっているが、F断面同様に填丘側盛土作業が裏込め充填と併行していることが分かる。天井石と石室石材の繋がりが図示できず、特に東壁側はその隙間が広く、天井石の据え方を示す図は作成できなかった。

H断面(第32図下)

羨門東壁第2石の石材61を基準に設定した。西壁側はG断面同様に裏込め各段の境が明瞭に見えるが、第3石の石材53が第2段裏込め上に、第4石の石材55が大型礫を集めた第3段裏込め上にあり、近接する断面間だが様相は一樣ではない。玄室に比べ、羨道側の裏込めは明確に分けられないようだ。東壁側は裏込め第2段が不明瞭である。西壁同様大型礫が見られる部分が裏込め第3段にあたると思われる。

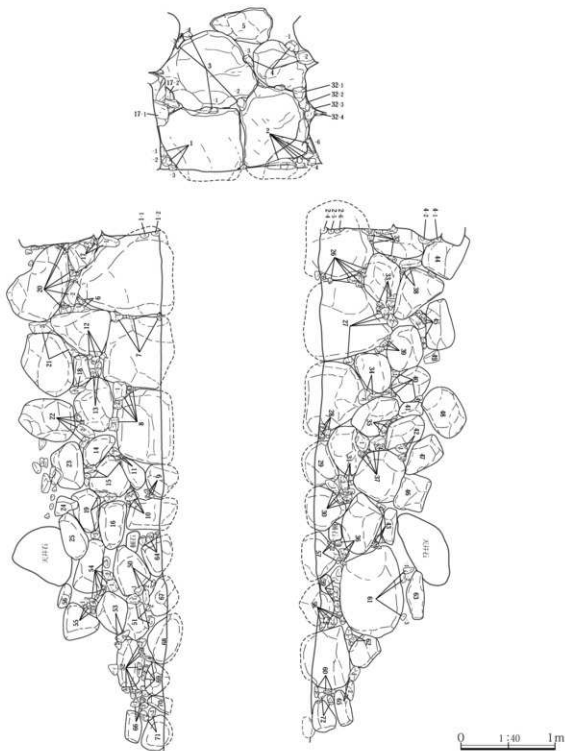
I断面(第33図)

奥壁中央付近を基準とし、第1石の石材1から第3石の石材5まで通して掛かるよう設定した。填丘硬化面の位置から石室石材は主に北側から運び込まれたと調査段階で推定しているが、北壁側裏込めは第1段以外不明瞭である。特に第2段裏込めが不明瞭で第3段裏込めも第2石の石材3の背面中程までしか充填できていない。裏込め外端部では地山面から80cm近い高さまで大型礫を小口積みにして輪郭を整えている。本墳の裏込め北側は外周付近の小口積みが明瞭な部分だが、奥壁裏側は特に高い位置まで丁寧に積上げられている。

⑥個別石材の状況

石室石材については個別の石材ごとに平面と断面、および石材を取り外した直下の状況(間層の土砂は除去)を下側(第1石)から順に示した(第35～44図)。なお石材直下の状況は、調査段階では間層土砂面で観察している。図上では取り外した個別石材の輪郭を薄線で示し、重量

を受けた主な合端を●、転びを作るために生じた合端を▲で加えた。また頁ごとに記載した石室石材の位置を石室壁面概念図にトーンを加えて示した。



第34図 石室石材と間詰め石

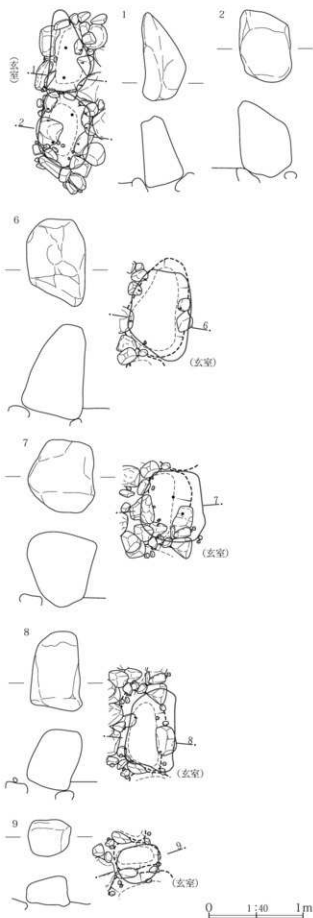
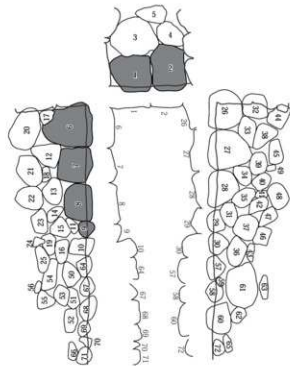
第1石：腰石

奥壁 2石(1・2)を玄室側に平坦な面を合わせ、両石の間の隙間(目地)を狭くすることを意識してほぼ垂直に並べている。そのため両石とも側壁側の下隅には広く隙間が空いている。両石材とも直下は土の層で、図中の石材下に見られる石は間層の土を除去した状態で表れたものである。石材を据える前に緩衝材として土を充てた可能性がある。

1(第35図 PL.14-1) 裏側に平坦な石を飼ってわずかに転びを生じるように縦置き状に据えられている。表側にも細長い窪2点を飼っているが、あまり効いていないようだ。重量はほぼ真下にかかっている。

2(第35図 PL.14-1) 下面の広い比較的安定した石材である。表側に径30cmの石を飼っているが裏側は小石が多い。ほとんど転びはなく、重量は真下にかかっている。

玄室西壁 4石(6~9)を用い、奥壁側へ向かって順に高くなる整った配置である。玄門脇9は玄室第1石では最小の石材で、上に載せた11と2石で第1石を構成している。奥壁第1石同様石材と飼い石間は土の間層で、緩衝材として用いられた可能性がある。左右に隣接する石



第35図 石室石材と合端(1)

材間の目地も、奥壁同様直線的で比較的整っている。

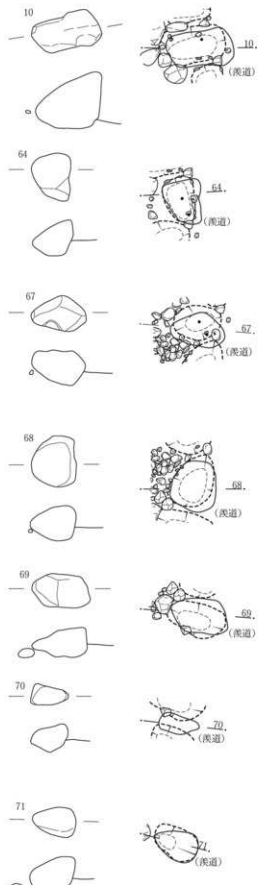
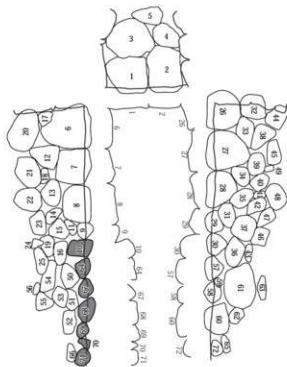
6 (第35図 PL.14-6) 表側を垂直になるよう裏側を上げて、奥壁1と似た据え方をしている。表側に倒った小礫2点は間層を挟まずに接しており、本石を据える時点で挟んだ礫である。重量は前がかり気味である。北西隅部分で1が本石材上隅に被るように据えられていて、本石材が先に据えられていることが分かる。1とは上側で大きな隙間を生じている。

7 (第35図 PL.14-6) 断面台形状の石材を倒置して玄室側に転びを強くした不安定な据え方である。比較的広く平坦な上面が得られている。表側・裏側とも長さ30cmを超える礫を倒い、重量は全体で受けている。

8 (第35図 PL.14-6) 前述7とは逆に比較的底面の広い石材を表側へ傾けて、第1石としては7と並んで強めの転びとなっている。表側に大きめの礫を倒って前がかり気味の重量を受けている。

9 (第35図) 8と玄門10の間に詰めた石材で第1石としては小型である。上面が広く安定しており、下側に明瞭な倒い石は見られず転びもない。

11 (第37図 PL.15-1) 9の上に細長い友鯛石を多数配して転びを設け、8に寄り掛かるようにして小口横みに置かれている。



0 1:40 1m

第36図 石室石材と合端(2)

玄室東壁 西壁同様4石(26～29)を用いているが、最も高さのある27を奥壁から2番目に置くなど西壁に見られた整然さはない。奥壁や西側壁同様に下石との間に土の間層があるが、特に表側に飼われた石が少ない。

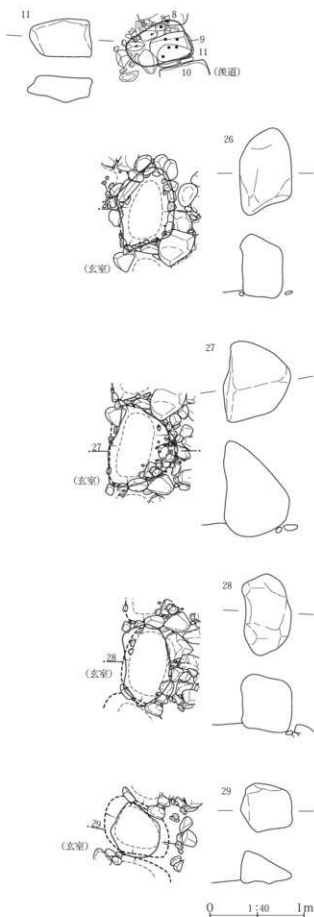
26(第37図 PL.17-3・5) 底面の広い安定した石材で、奥壁2の側面へ30cm以上張出している。このため転びを生めず、重量は後がかり気味になっている。

27(第37図 PL.17-3・5) 上方が尖り気味の石材で底面は丸みが強く不安定で、やや深めに埋められている。転びは少なく、重量は全体で受けている。

28(第37図 PL.17-4) 底面の広い安定した石材で、飼われた石はほとんどなく、埋め方も浅めである。転びを作り易い石材だが、あえて強い転びを作ろうとした痕跡がない。重量は後がかり気味になっている。

29(第37図) 28同様底面の広い安定した石材で、飼われた石はほとんどなく、埋め方も浅めである。転びはない。玄門30より後に据えられている。

羨道西壁 玄門10と羨門71の間に5石(64・67～70)を用いている。羨道内の舗石面に隠れ、調査当初は石材の存在に気付かなかった。第1石の石材では最も小さな材を使用し5石の平均重量は82kgである。深く埋められる石材が多く、下に飼われる石は少なめである。



第37図 石室石材と合端(3)

第三章 調査の内容

10 (第36図 PL.16-6) 玄関の位置にあり最も平坦な面を羨道側に向け、女室側はやや不整な面となっている。底面は広いがやや深めに埋められている。弱い転びがあるが、重量は真下にかかっている。

64 (第36図 PL.16-6) 全体のほぼ半分まで深く埋められ、下に礫はほとんど舐われていない。転びはないが、重量はやや前がかりになっている。

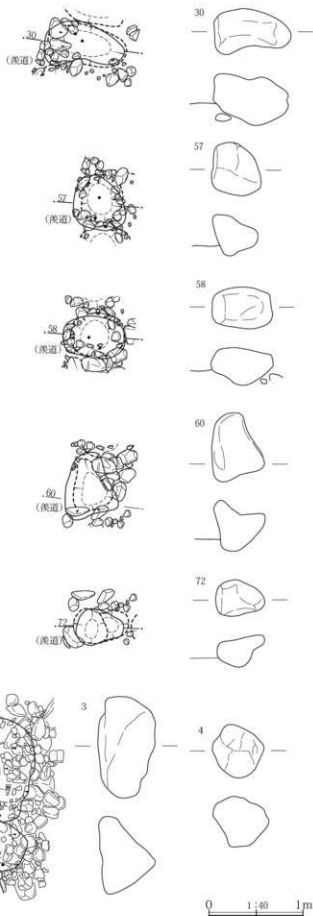
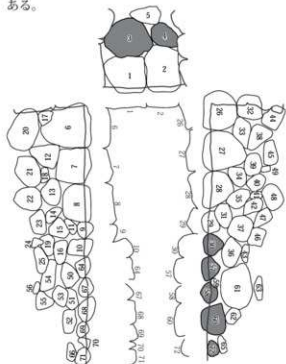
67 (第36図 PL.16-6) 西壁腰石の中で最も表側に平坦面のない石材である。転びはないが上側を平坦にするような据え方である。重量は前がかり気味である。

68 (第36図) 64同様に深く埋められ、下に礫は舐われていない。平坦面を羨道側へ向けて弱い転びがあるが、重量は真下にかかっている。

69 (第36図 PL.17-1) 平面形が平行四辺形状に歪んでいて表側が羨道からやや斜行するように据えられている。深めに埋められていて転びはあえて作っていない。

70 (第36図 PL.17-2) 69と71の隙間を迫廻石状に埋めるように、広い面を裏側に向けて据えている。上面は比較的平滑だが、羨道側へ低く傾斜している。

71 (第36図) 玄関の位置にあたり、仕切り石や葦石根石と繋がっている。平坦面を羨道側に向けているが、仕切り石に隠れ羨道側からは全く見えない。仕切り石より先に据えられているが、葦石根石との前後関係は不明である。



第38図 石室石材と合端(4)

羨道東壁 羨道西壁に比べ大きな石を用いているため玄門30と羨門72の間には3石(57・58・60)のみである。3石の平均重量は141kg以上で3石とも西壁最大の68より重い。西壁ほどではないが、下に飼われる礫は少なめである。

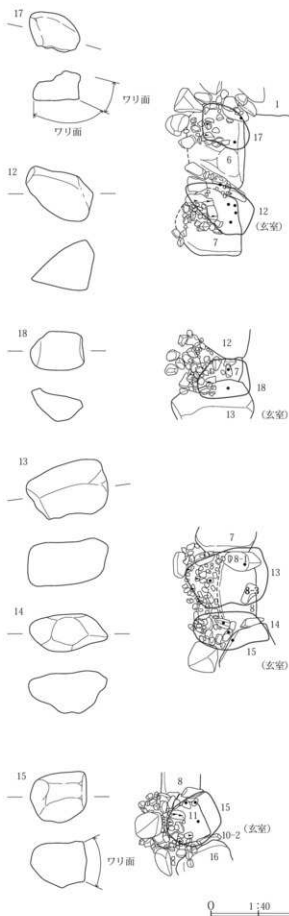
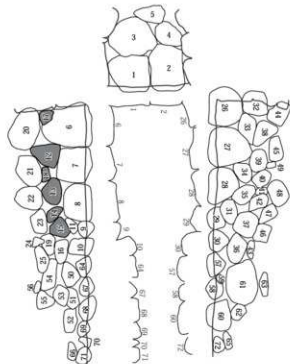
30(第38図 PL.18-8) 東壁玄門にあたり、羨道側に平坦面を、玄室側は曲面を向けている。西側玄門10が床上50cmの高さがあるのに比べ、本石材の床上高は30cmしかない。尖った面を下にして深めに埋められ、重量は後ろがかりになっている。転びはない。

57(第38図 PL.18-8) 上面・下面とも平坦部分のない不安定な据え方をしている。重量は真下にかかるが強い転びを生じている。飼い石は比較的小振りである。

58(第38図) 尖った面を下にして埋め、上面は平坦に据えられている。南隣の60より先に据えられている。

60(第38図) 重量200kg超の羨道第1石中最大の石材で、尖った面を下にして据えている。深さのあまりないやや不安定な据え方である。57同様強い転びがあるが、飼い石はあまり効かず重量は真下にかかっている。

72(第38図) 羨門の位置にあるが東側壁第1石の羨道側ラインよりやや東側(裏側)に逸れた位置に据えられている。北側に隣接する60との隙間には迫飼石を多数詰め、やや違和感のある据え方となっている。



第39図 石室石材と合端(5)

第2石

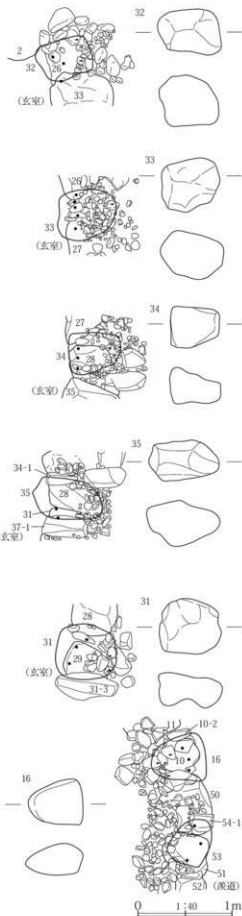
奥壁 2石(3・4)を積んでいる。腰石で生じた段差を埋め、第2石上面は比較的平坦になっている。腰石との間に土が詰まっているが、強い重量を受けた痕跡はなく、裏込め側から流れ込んだ土と思われる。

3(第38図 PL.14-2・5) 腰石2に寄り掛かるようにして、腰石1の上に布積み状に積まれている。下面裏側寄りに多量の下込め石をあてて転びをつけていて、重量はかなり前がかりである。西側壁第2石最奥部17の迫鯨石(17-2)にも重量がかかっている、17の後に積まれたことが分かる。

4(第38図 PL.14-5) 奥壁としては表面の平坦面の狭い石材である。3と32の後に両石材に寄りかかるように積まれている。奥壁の中では最も強い転びがあり、重量はかなり前がかりになっている。

玄室西壁 6石(12~15・17・18)を据えている。腰石上面が比較的平坦だったため、第2石は小口積みで、平坦面を下にして腰石上に載せる布積みのような積み方を行い、上面にできた隙間を18のような谷積み石材で埋めて凹凸の少ない第2石上面に仕上げている。

12(第39図 PL.15-2・4) 6に寄りかかるようにして7の上に布積み状に積まれている。裏側に下込め石を



第40図 石室石材と合端(6)

集めて転びを生み、重量は前がかりになっている。

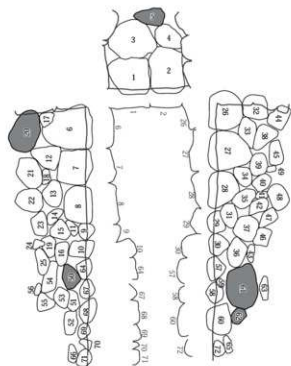
13 (第39図 PL.15-3・4) 平坦面の比較的多い六面体のような石材である。8-1・3のような比較的大きな下込め石を挟んで8上に布積み状に積まれている。裏側に意図的な下込め石を使わず、石材の傾斜を利用して転びを生んでいる。

14 (第39図 PL.15-3・4) 13と15の隙間を埋めるように平坦面を上にして積んだ石材である。重量は本石材中央付近の15側に倒った石にかかり、15が直接受ける部分もある。転びはやや強いが、表側・裏側に倒われた石はあまり効いていない。

15 (第39図 PL.15-4・5) 表面の比較的水平な石材で割れ口を表側へ向け、玄門腰石上の16より後に積まれたようだ。転びは少ないが裏側に多量の石を倒って玄門側へ大きくせり出している。そのため第2石上面では玄室南西隅の屈曲が小さくなっている。

17 (第39図 PL.15-4・6) 割れ石であるが人為的な割れ口には見えない。玄室北西隅にできた6上側の広い隙間の間詰め石のような積み方で、重量は6にかかっている。

18 (第39図) 12・13の上側隙間を間詰めするように平坦面を上に向けて谷積みされた石材である。重量は下込め石主体に受け、一部12・13にも直接かかっている。や



第41図 石室石材と合端(7)

第III章 調査の内容

や前がかりだが転びはなく、上面は玄室側に低く傾斜している。

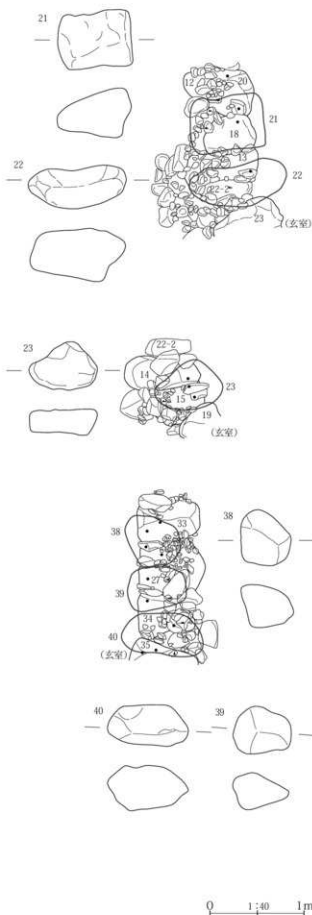
玄室東壁 5石(31~35)を据えている。西壁に比べ第1石上面に凹凸が多いため、第2石では第1石間の隙間を埋めるようにして、各石材の凸面を下にするような谷積み(33・34・31)が目立つ。

31(第40図 PL.17-6) 薄い石材で転びを持ちながら29から20cm近く表側にせり出している。28・29間の谷積みだが、重量は31-2や31-3など長さ50cmを超える細長い間詰め石を挟んで29南側の30にも分散してかかっているようだ。本石材上面の高さは北隣の腰石28より低く、第1石の補完的な石材である。

32(第40図 PL.17-7) 上下とも平坦な石材で4より先に、33の後から積まれている。32-1~3などの迫削石を2・4の間に用い、奥壁と支え合うように積まれている。玄室側へせり出して北東隅に丸みを作っている。

33(第40図 PL.18-1) 表側に丸みがあって平坦さに欠ける石材である。26・27間の上側に小振りの石の間詰めした跡に本石材を谷積みしている。裏込め側の下込め石も小振りの礎が主体である。

34(第40図 PL.18-2) 上下とも比較的平坦な石材で27・28間の谷積みだが、重量はほとんど28が受けている。



第42図 石室石材と合端(8)

せり出しの多い側壁第2石中において、唯一せり出しのない積み方である。

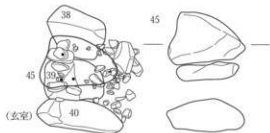
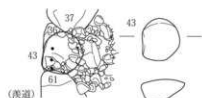
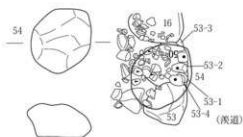
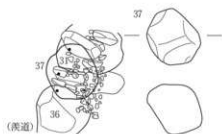
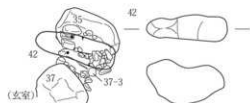
35 (第40図 PL.18-3) 28・31間の谷積みである。凹凸の多い石材を斜めに積んでいる。そのため南側の31上には広い隙間が生じている。重量は後がかり気味で、31や間詰め石37-1など南側寄りにかかっている。

羨道西壁 玄門にあたる16と羨門にあたる66の間に3石(50~52)を据えている。51・52は第1石の67~69から広めの隙間を挟んで浮いた状態で積まれていた。

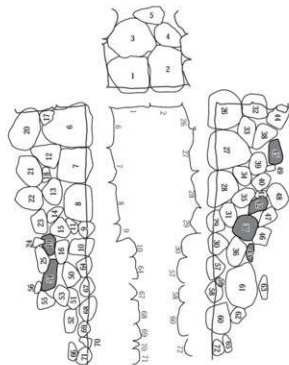
16 (第41図 PL.15-3・5) 10と64の間の広い隙間を多量の間詰め石で埋め、10から繋がる平坦面を作った後、本石材を布積みしている。本石材は上下面とも丸みがあり、下面には裏側主体に平坦な下込め石を多量に飼っているが転びは弱い。50の後にやや強いせり出しを付けて積まれている。

50 (第41図) 16・51より先に積まれた石材である。64と67の間の谷積みで、南側は67上の51-1・3などの追削石が直接重量を支えている。転びはやや強いが、せり出しはほとんどない。

51・52 (PL.16-7) 幅と奥行が同規模の近似した石材で、51の後に52が積まれている。52上面に積まれたはずの第3石の石室石材は残存していない。



0 1:40 1m



第43図 石室石材と合端(9)

第三章 調査の内容

66 西溪門にあたる71上に、やや西側(裏込め側)に逸れて積まれ、平坦面を前庭側・上側に向けている。羨道南側の上側欄石に後出している。

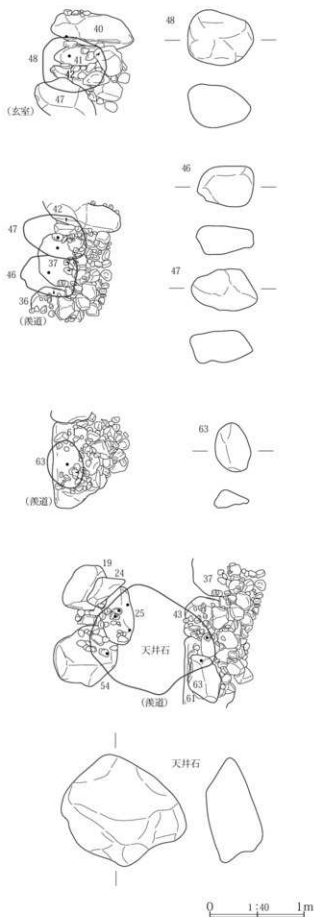
羨道東壁 玄門上の36が南側へ大きく逸れていて玄門を不明瞭な形にしている。羨道側壁としては2石(61・62)があるが、61は石室壁材中2番目に重量のある巨石で、極端に大きい石材が使用されている。

36 玄門第1石の30上にある石材で、西側玄門第2石の16と同じように第1石の南側に若干逸れるように積まれている。また南隣の大型石材61より先に積まれているようだ。

61(第41図 PL.19-3) 羨道側壁では際立って大きな石材で広い平坦面を羨道側に向けている。転びは少ないが第1石の57・58より羨道側に張出して積まれ、重量は前がかりである。幅が100cmを測り、上面で80cmの羨道幅を超えていて天井石にも使用可能な規模である。天井石の再利用も考えられるが、羨道側壁に造り直しの痕跡は確認できていない。

62(第41図 PL.19-4) 北側の大型石材61に寄り掛かるように、第1石60上に布積みされている。61より羨道側へせり出していて、重量は前がかりである。

65 漢門第1石の72上に積まれているが、72が南側欄石



第44図 石室石材と合端(10)

に隠れているため、第2次前庭の段階では本石材が羨門に見えたはずである。上面が平坦で、この上にも石材が布積みされていたと思われる。

第3石

奥壁 1石(5)のみである。側壁との間に隙間があり、本石材の両脇にも小型石材が積まれていたと思われる。5(第41図) 第2石の2つの石材3・4の中央に、両石材に重量が分けてかけるように積まれている。本石材頂部が石室壁面の中で最も高い位置となる。玄室側へややせり出すように小口積みされている。天井材を直接支えた石材と想定される。

玄室西壁 4石(20～23)を据えている。4石の平均重量は285kgあり、天井近くの高い位置にある石材としては大型石材が揃っている。

20(第41図) 下側の石との隙間の広い部分に多量の間詰め石を倒って、奥壁3に寄りかかるようにして積まれている。転びが強く、奥壁3はかなりの重量を受けられると思われる。

21(第42図 PL.16-2) 比較的平坦な面を上へ向け、せり出し・転びを付けて小口積みされている。南に隣接する22より先に積まれている。

22(第42図) 両脇の21・23の間に後から積まれている。玄室側へ大きくせり出していて、重量は前がかりで下側石材13の東隣にかかっている。

23(第42図 PL.16-4) 玄室西壁第3石の中では最も小さな石材である。下側15と同じく、表面をやや玄室中央に向けて捻じれるように積まれている。

玄室東壁 7石(37～42・44)を積んでいる。西壁に比べると各石材は小さく、平均重量は146kgでほぼ半分しかないが総重量ではあまり差はない。南側には40～42の3石が縦置き状に並び、他の部分に見られない積み方が見られる。

37(第43図 PL.18-4) 第2石の玄室31と玄門36の間に谷積みされた石材で玄室東壁第3石中最大の重量がある。玄室側へ大きくせり出している。広い平坦面を玄室中央側へ向けていて転びも大きい。北側の42より先に積まれている。

38(第42図 PL.18-5) 33上の布積みである。奥行に乏しいが玄室側へせり出し、転びも比較的強いが重量は後がかり気味に積んでいる。

39(第42図 PL.18-5) 第1石の27と第2石34間の谷積みに近い積み方で、南側の40より先に積んでいる。奥行にやや乏しいが裏側に削い石を多用して強い転びを生んでいる。

40(第42図 PL.18-6) 北側の39に寄り掛かるように積まれている。南側に広い平滑面を向けた縦置きで、玄室側は凹凸のある不整な面を向けている。

41(PL.18-6) 40・42間の迫廻石のような位置にあり、両石の後から積まれたと思われる。玄室側からは小型石材に見えるが奥行に富む石材である。

42(第43図) 第2石の35と第3石37の間に谷積みされているが、重量は北(35)側に偏ってかかっているようだ。南北両側は比較的平坦な面だが、玄室側は凹凸のある不整な面を向けている。

44 南側の38と奥壁4との間に谷積みされている。荷重による剥落が一部に見られ、天井石を直接支えていたと思われる。奥行に乏しい石材で、天井石を舐るように積んだと思われる。

羨道西壁 3石(19・53・54)を据えている。いずれも奥行に乏しい石材で、3石の平均重量は134kgである。

19(第43図 PL.15-7) 第2石の玄室15と玄門16の上に谷積みされている。せり出しはないが、重量は前がかりで受けて転びを作っている。

53(第40図 PL.16-8) 平坦部を下側へ向け、上側が平坦な51上に布積みしている。間詰め石54-1を挟んで50にも重量がかかっている。

54(第43図 PL.16-8) 重量200kgを超える羨道西壁最大の石材である。16と53の間の谷積みのような位置にあるが、50上の多量の間詰め石を挟み、重量はほとんど50にかかっている。羨道部石材の中では比較的持ち送り幅が長く積まれている。

羨道東壁 43の1石のみである。

43(第43図 PL.18-7) 第2石の36上に布積みされた石材であるが、61にもわずかにかかっている。61と高さを超えるような位置にあるが、奥行に乏しく裏側に舐

第三章 調査の内容

れた石もほとんどなく、天井石を据える際に飼われた石材と思われる。

第4石

45 玄室東壁 5石(45～49)を積んでいる。平均重量は119kgで、30kgの49以外は100kg以上で長辺と短辺の差の少ない、規模形状の類似した石材を使用している。

45(第43図 PL.19-1) 第3石の38・39間に谷積みされているが、本石材下に多量の間詰め石を飼い、2つの石材とはやや広い隙間が出来ている。

46(第44図 PL.19-2) 本石材下端は天井石下端とほぼ同じ面にあるが、天井石を支えた裏側飼い石が本石材の後から積まれているようで、本石材が天井石より先に積まれたと推測できる。ただし天井石と本石材が互いに重量を預けずに目地を揃えるようにして並んでおり、2石を合わせるようにして裏側に飼い石を添えながら固定した可能性もある。これにより天井石は玄室側から覗いて榭石のように見せることができる。

47(第44図 PL.19-2) 42と46の間に谷積みされている。前述のように46が天井石と同時に積まれたなら本石材は天井石の後に積まれたことになる。やや縦置き状に大きくせり出して積まれている。

48(第44図) 40から42および47まで並ぶように縦置きされた石材上に積まれている。重量200kgを超える第4石最大の石材である。下の石材との間に土の層が厚くたまり、旧状から若干動いたと思われる。

49 45南脇の追廻石である。本石材の南脇にもう1石積まれていると思われる。

24 西壁には4石(24・25・55・56)を積んでいる。平均重量は53kgで55以外は50kg未満の小型石材で、4石とも奥行に乏しい。東壁は63の1石のみである。

24 19と25の間の谷積みで、25の追廻石のような位置にある。旧状から若干動いた可能性があるが重量は真下にかかっているようで天井石を支えたと思われる。

25 天井石直下の石材である。19と54の間の谷積み状の積み方だが、奥行に乏しい長手積みのうえ、天井石を取り外すと自立できないほど羨道側へせり出していた。天井石を掛けた際に前側へ大きく傾いたものが天井石の重さで支えられていたと思われる。

55 羨道側壁第3石の53と、同石材の南にあった石材間に谷積みされていたと思われる石材である。やや奥行があり、裏側から支えられて南側の石材を失っても自立している。

56 天井石を積む際の飼い石と思われる。小口積みであるが、天井石の重量はあまりかかっていない。旧状から動いているようだ。

63(第44図 PL.19-5) 羨道部最大の石材61上に小口積みされた石材で、天井石南端を直接支えていた。

天井石(第44図 PL.19-6～8) 本遺跡内で唯一原位置に残存していた天井石である。東側へ低く大きく傾いてかけられている。東側壁面の43・46等の状況から北側に隣接する玄室南隅の天井石より先に積まれていると想定される。また玄室天井部より1段低い位置に掛けられており、玄室側から榭石のように見えたはずである。

表5 54号墳石室石材観察表

番号	石材	位置	計測値(kg・cm)				配置 積み方	備考
			重量	幅	高さ	奥行		
1	A	東壁第1石	500	94	76	46	E1	玄室側に広い平坦面。上面中央の窪みに飼うよう上の3を積む。
2	A	東壁第1石	600	80	80	56	E2	東壁最大の石材。
3	A	東壁第2石	500	107	82	62	E1	4より先に、17の後から積む。上半は西壁側にせり出す。
4	B	東壁第2石	200	57	54	54	D	3・32の後に積む。
5	B	東壁第3石	100	64	40	78	A	
6	B	玄室西壁第1石	900	94	102	62	E2	壁面使用石材中重量最大。1と共に最初に据えた石材。
7	B	玄室西壁第1石	500	74	80	70	E1	上面に広い平坦面。
8	A	玄室西壁第1石	500	84	64	56	E1	上面に広い平坦面。
9	A	玄室西壁第1石	79	36	34	44	D	
10	A	羨道西壁第1石	120	40	58	76	C	西側女門壁石。
11	B	玄室西壁第1石	104	40	28	65	A	9の高さ足りない部分を本材で補填。第1石の材とした。
12	B	玄室西壁第2石	200	54	64	75	C	
13	A	玄室西壁第2石	300	60	50	86	A	
14	B	玄室西壁第2石	150	42	43	82	B	
15	B	玄室西壁第2石	300	52	50	58	B	南側割り面。16の後から積む。
16	B	羨道西壁第2石	130	50	33	60	A	50の後から積む。

番号	石材	位置	計測値(kg:cm)			奥行	配置 積み方	備考
			重量	幅	高さ			
17	A	玄室西壁第2石	66	40	32	60	A	3より先に据える。下・南無別り面。
18	B	玄室西壁第2石	60	40	34	56	A	
19	A	羨道西壁第3石	111	42	40	50	B	
20	A	玄室西壁第3石	400	90	64	76	E 1	
21	A	玄室西壁第3石	300	68	54	78	B	22より先に積む。
-2			32.3	19	27	24		21・22間の道附石。
22		玄室西壁第3石	300	50	58	104	C	21・23の後から積む。
-2			25.8	47	19	27		
23	B	玄室西壁第3石	140	52	(34)	74	A	
24	C	羨道西壁第4石	35	26	32	40	C	
25	A	羨道西壁第4石	48	62	(30)	36	E	
26	A	玄室東壁第1石	400	92	68	56	E 1	2の後から据え、奥壁脇へ大きくせり出す。
27	A	玄室東壁第1石	600	85	100	72	E 2	
28	A	玄室東壁第1石	400	75	60	54	E 1	
29		玄室東壁第1石	138	55	36	48	E 1	玄関3より後に積む。
30		羨道東壁第1石	200	50	55	82	B	東側玄関礎石。
31	B	玄室東壁第2石	200	60	38	60	D 1	
-1			21.4	15	17	20		
-2			55.8	17	27	30		
32	A	玄室東壁第2石	100	60	53	64	A	4より先に、33の後から積む。
33		玄室東壁第2石	200	54	53	63	B	
34	B	玄室東壁第2石	122	44	40	52	B	
35	A	玄室東壁第2石	133	43	50	76	C	
36	B	羨道東壁第2石	500	64	(40)	59	E 1	61より先に積むか。
37	A	玄室東壁第3石	300	60	53	56	B	42より先に積む。
-1	B		21.4	18	17	19		
-3			21.4	15	14	24		35・37間の道附石。
38	B	玄室東壁第3石	150	58	(52)	53	D	
39		玄室東壁第3石	112	50	41	62	A	40より先に積む。
40	B	玄室東壁第3石	200	43	50	86	C	
41	B	玄室東壁第3石	31	22	26	53	C	40・42の後から積むか。
42	B	玄室東壁第3石	140	17	47	85	C	
43	B	羨道東壁第3石	60	47	21	40	E 1	
44	A	玄室東壁第3石	89	52	(50)	47	D	同一破片あり。本体のみ計測。
45	A	玄室東壁第4石	150	54	35	82	A	
46	B	玄室東壁第4石	105	42	(38)	60	B	
47	A	玄室東壁第4石	112	50	(40)	70	A	
48	B	玄室東壁第4石	200	60	48	70	A	
49	B	玄室東壁第4石	30	18	36	66	C	
50	B	羨道西壁第2石	105	64	56	60	C	16・51の先に積む。
51	B	羨道西壁第2石	80	50	30	48	D 1	
52	A	羨道西壁第2石	90	56	36	54	D 1	51の後に積む。
53	B	羨道西壁第3石	92	51	36	47	D 1	
54	B	羨道西壁第3石	200	70	35	65	D 1	
55	B	羨道西壁第4石	115	(50)	(48)	56	B	
56	B	羨道西壁第4石	35	22	(16)	44	A	
57	A	羨道東壁第1石	111	55	43	46	E 1	
58	A	羨道東壁第1石	113	42	45	52	B	60より先に据えられる。
59		羨道東壁第1石	12	20	14	36	A	
60	B	羨道東壁第1石	200	74	54	57	E 1	58の後に据えられる。
61	B	羨道東壁第2石	700	100	68	58	E 1	羨道石材としてはきわめて大きい。崩落天井石による再構築か。
62	A	羨道東壁第2石	61	35	34	40	B	
63	A	羨道東壁第4石	80	52	20	38	E 1	天井石を直接倒す。
64	A	羨道西壁第1石	90	50	38	40	E 1	
65		羨道東壁	52	(20)	31	E 1	東側羨門2石。重量の記録欠く。	
66		羨道西壁第2石	59	(20)	39	E 1	西側羨門2石。重量の記録欠く。	
67		羨道西壁第1石	94	39	38	58	B	
68		羨道西壁第1石	108	55	36	48	E 1	
69		羨道西壁第1石	87	35	29	63	A	68の後に据えられる。
70		羨道西壁第1石	29	21	28	42	C	
71		羨道西壁第1石	73	32	35	46	B	西側羨門礎石。
72		羨道東壁第1石	57	37	34	50	B	東側羨門礎石
①	A	天井石1	1100	122	72	115		54号墳最大の石材で玄関付近に残存。
②	B	天井石2	500	85	50	110		羨道部への崩落石。

石材A：相馬岳山東安山岩、石材B：船橋野石安山岩、無記載：未特定。
重量のうち斜体で示したものは、重機搭載計器による100kg単位で計測した値。
石の積み方：第7図③参照。

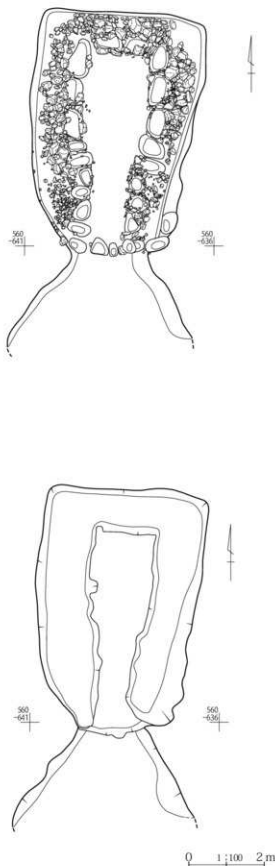
石室根石 玄室側では腰石直下には基本的に根石は用いず、石室石材の重量沈降による窪みが掘り方戻し土中に確認できた。下端が尖り気味の1や6などの石室石材には下端周辺にやや大きめの礫を飼う部分があり、羨道側では30や67など石材の高さ不足を補うように直下に小礫を飼う部分が見られた。

石室構築面(第45図上) 石室石材除去後の石室構築面には、石材を据えるための掘削痕と石材の重みで沈下加わったと思われる窪みがある。窪み内には緑部を中心に石材を据えるための礫が飼われている。これらの礫に長軸30cmを超える大きな礫はわずかで、裏込め最下段に置かれた礫より小振りである。裏込め最下段は不揃いの礫が敷き詰められたような痕跡はなく、散乱していた。特別に最下段を整地することなく裏込め石が積まれていったようだ。

石室・前庭掘り方(第45図下) 石室下には石室最下段に比べかなり大きな方形の掘り方がある。確認面での規模は奥壁寄りの幅4.34m、長さ6.35mの規模で両側壁南寄りか細い台形に歪んだ形状である。深さは玄室側で70cmを超える部分があり、羨道側でも50cm前後を測った。一部で地山の礫が露出していた。石室石材下や裏込め下は玄室・羨道部分よりわずかに低くなっていた。当初からの段差であれば石室石材の配置を記した縄張りの施設となるが、それを示す根拠はなく、石室構築時の攪拌痕跡と思われる。石室掘り方の面積は24.97㎡を測る。

前庭面は下段の逆台形状前庭部面(一次面)が地山を掘り込んだ面に作られていて、掘り方は見られなかった。

墳丘盛土下地山面 基壇面(第6図参照)や墳丘盛土下には純層に近いHr-F Aとその下にAs-Cが見られ、旧地山面上にそのまま古墳を構築しているようだ。地山表面やAs-C面に人為的な変改の痕跡はなく、古墳構築以前の周辺では長く畝の耕作等も行われていない平坦地であったと思われる。



第45図 石室掘り方

6 出土遺物(第10・46～49図 PL.22～24)

遺物は種類によって出土位置が偏り、前庭から土器、玄室内から金属製品を多数出土している。

墳丘出土の土器は2点を図示した。いずれも小破片で墳丘には後世の混入遺物が多いため本古墳に確実に伴うとは決められない遺物である。2は壺類の口縁部と思われるが器形の不明瞭な須臾器である。

前庭出土の土器は8点を図示した。ほとんどが前庭内に散乱した破片を接合したもので完形品は見られない。土師器杯は4点あり、床面よりやや遊離した状態の出土である。1・2は模倣杯で口縁下端の稜は比較的明瞭である。3・4は口径10cmに満たない小型杯である。5は前庭脇に据えられるようにして出土した須臾器で原位置にあった可能性がある。6の提振は接合しない破片を併せて復元した。7・8は同一個体と思われる破片があったが上半部しか接合できなかった。7は墳丘周辺まで散っていた破片が接合している。

玄室内を中心に多量の金属製品を出土し98点を図示した。鉄鏃と釘の多さが目立つ。

装身具には4点の完形金製耳環(1～4)がある。このうち1・2は形状が近似する一対の耳環として齟齬のない製品だが、3は中空で、4は1・2の重量1/4に満たない小型品である。3対以上の耳環があったと考えるのが妥当であろう。

刀装具には鉄製の鐔5と緑金具6～8がある。鐔は完形で表裏面に渦巻状の意匠の銀象嵌が施されている。側面にも二重の弧を互い違いに配したと思われる銀象嵌が見られた。8の完形緑金具にも側面に銀象嵌が見られる。意匠は一重の弧で鐔側面のように互い違いには配されていないが、対になる刀装具として違和感はない。緑金具6は破損のうえ錆化の影響もあり不明瞭だが8と同様の銀象嵌が一部で見られる。同一個体破片が錆で癒着している可能性がある。7は緑金具の可能性のある小片で6の欠損部分を埋めるのに不都合のない破片であるが、6の癒着片が6と同一片であれば本破片は6と別個体となり、貴金具の可能性が高くなる。

小刀・刀子が4点(9～12)出土した。完形品はないがいずれも茎部分に木質が残り、10・12には目釘が見られた。10は関部が不明瞭で刀子以外の形態も考えられる。刃部の残る9・11には弱い研ぎ減りが認められる。

鉄鏃は40点(13～52)を図示した。図示に耐えられない小破片も多数出土している。完形品は1点もなく、図示したものの中に接合資料も含まれているが、錆のため不明瞭な同一個体別破片を重複して図示した可能性もあり、実測点数をそのまま個体数にはできない。柳葉形の頭身部が15点と棘状関部が17点確認できる。

弓飾り金具は本遺跡の特徴的な遺物で、本墳から6点(53～58)出土した。58は芯部破片と思われる。弓飾り金具は筒部と芯部が離れており、取り付けられた弓を振って音を立てる装置である。出土品は筒部と芯部が錆で融着し、音を聞くことはできない。筒部には木質が残存し弓に取り付けられたまま副葬されたことが分かる。筒部が残存する5点のうち56以外は規模が近似し、同一の弓に取り付けられたとして齟齬がないが、56のみ筒部の長さ・幅が小さい。

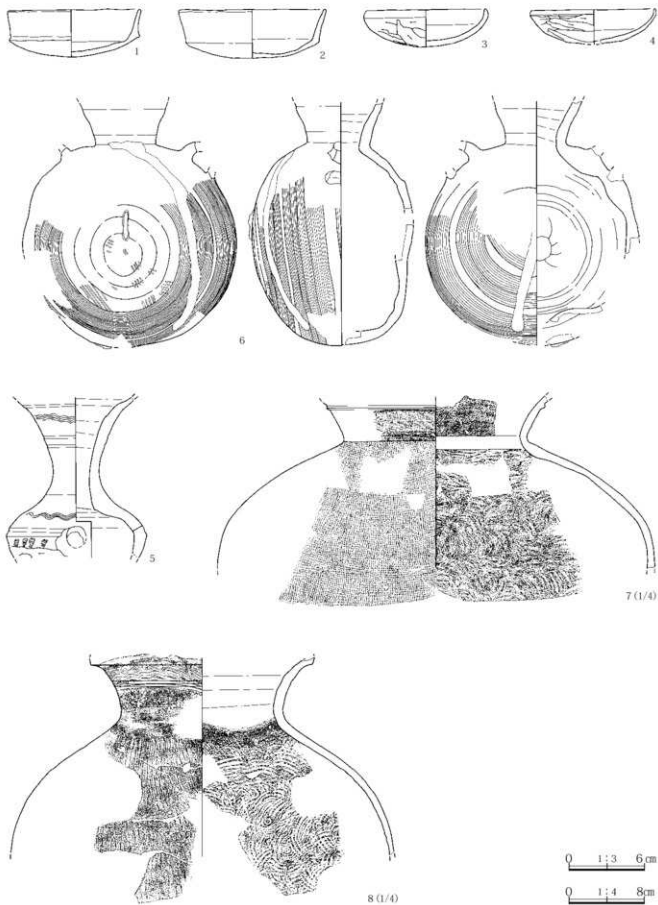
釘は鉄鏃に続いて多く、37点(59～95)を図示した。図示した以外にも釘と思われる微細破片が出土している。規模・形状が一律でなく以下のように分類できる。太さ4mm未満の67・71は頂部が薄いのが特徴である。太さ7mm以上の73～76・78・80～83・86などは木質痕が明瞭に残存している。いずれも木質自体の残存状態は悪いが、木棺に使用されていた釘と想定される。他に直角に近い屈曲のある一群が特徴的である。59～64・68がそれで、太さや長さは一律ではないが、意図的に曲げられているように見える。木質の残存は不明瞭だが、木棺の飾りを掛けるような用途が想定される。

96は鉄製籬子で奥壁際床面に置かれていた遺物だが、先端部分を欠いている。

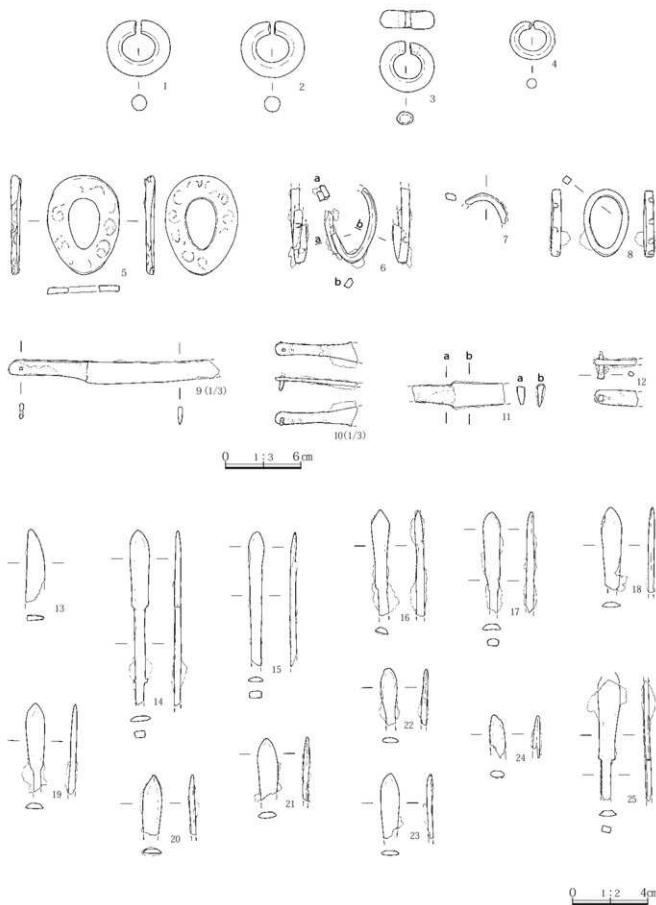
97は墳丘上の出土で錆のため不明瞭な鉄製品だが糸鋸の歯となり混入品の可能性がある。98は石室埋設土内出土の不明鉄製品で近世以降の混入品の可能性がある。

図示した以外に認められる破片13.6g、釘と思われる破片14.1gが出土している。他に種類の分からない薄板状の鉄製品破片8.5gがある。他の出土遺物から類推すると、剥離した刀子類の破片の可能性もある。

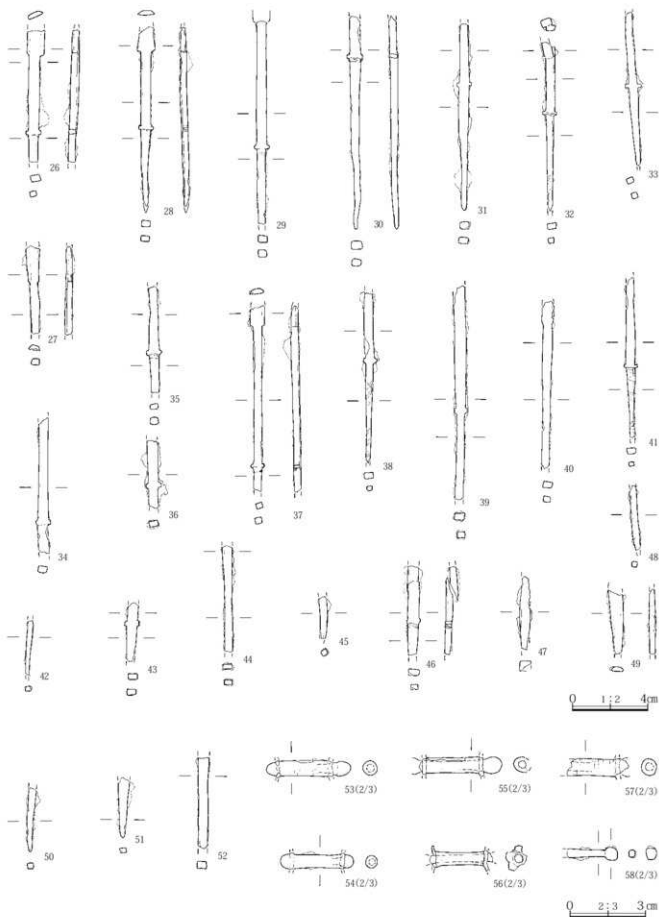
第三章 調査の内容



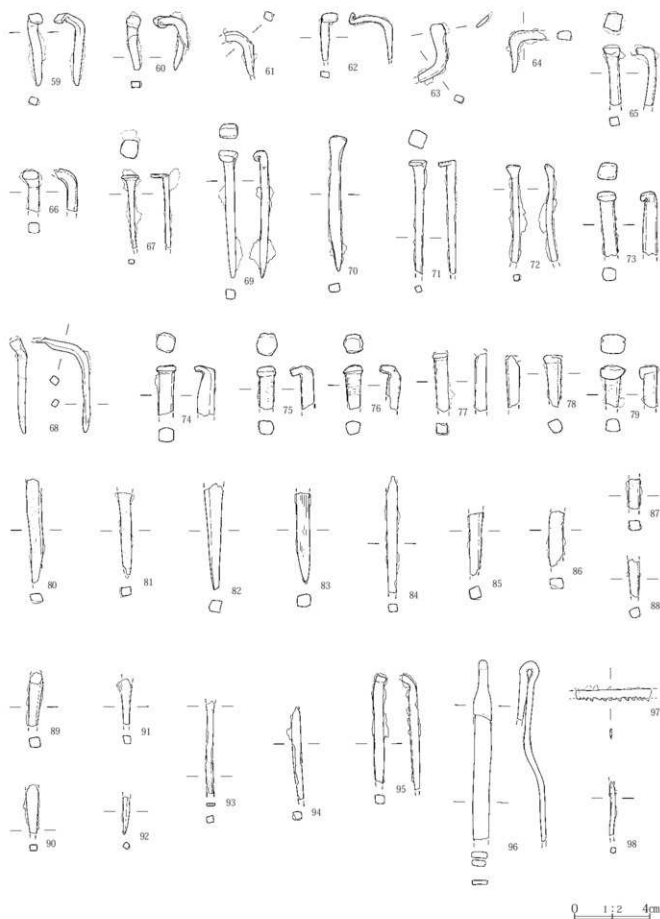
第46図 出土土器



第47图 出土金属製品(1)



第48図 出土金属製品(2)



第49図 出土金属製品(3)

第三章 調査の内容

7 まとめ

調査・整理作業で得られた54号墳に関する情報を要約すると以下のとおりである。

遺構

墳丘規模 墳丘径10.3m。

基壇 上段基壇：16m前後。

下段基壇：長軸約25mの不整隅丸長方形で後世の土取り痕の可能性が高い。

葺石 垂直に数段階上げた後、墳丘斜面下側を覆う。

葺石根石下に区画溝状の窪みが廻る。

前庭 一次に平面逆台形、二次に不明瞭で小規模な石敷き面。

主体部 輝石安山岩自然石乱石積の両袖形横穴式石室。
玄室には弱い胴張りが見られ、羨道は玄室よりやや短い。

平面規模 全長5.20m。奥壁付近幅1.66m。

立面規模 3～4石。最大高1.68cm。

床面 羨道側に舗石面。

掘り方 深さ60cm前後の深度に富む施設。

その他 羨道北側床面に梱石。羨道南側床面に仕切り石。

天井石が1石残存。羨道部天井高は玄室より50m前後低い。羨道部上の崩落石1石も天井石と思われる。周堀は確認できない。

遺物

土器 主に前庭から出土。須恵器瓶類主体。

金属製品 ほとんどが玄室内から出土。耳環、銀象嵌鐙などの刀装具、弓飾り金具、長頸鏃、釘を出土。鉄鏃と釘の量が多い。本墳のみの遺物に
鎌子・刀子類。

その他 埴輪の出土なし。

備考

①石室構築順序は、奥壁左腰石が一部西壁最奥部腰石に被さるように置かれており、一般的な奥壁を最初に据える積み方とはなっていない。石室構築基準面を西壁と奥壁に設け、北西隅から2石を並べ置き配置を開始する手順が取られたようだ。

②石室石材の積み方は、奥壁と玄室側壁は左壁で布積み、玄室右壁で谷積みが多い。

③羨道東壁第2石に際だって大きな石材が使われている。玄室腰石として用意したが使われなかった石材を羨

道部で用いたと思われるが、大規模な壁改築の可能性もある。

④羨道部には舗石面。前庭と併せて追葬の際に作り直しが行われた可能性がある。

⑤出土歯より2体の埋葬が確認されているが、耳環の種類から3体以上の遺体が埋葬された可能性もある。

⑥前庭の古段階で土器の出土が多い。埴輪を伴っていない。須恵器提瓶の出土や鉄鏃の形態から7世紀前半代の古墳と想定される。

⑦石室の設計については総括(本文106頁および第88図)に別途記した。

3 55号墳

1 調査前(第50図 PL. 2)

本墳は調査区北側にある。付近は54号墳の北西側約45mの築谷川に向かう崖線に接するような地点で、両古墳間の比較的平坦な面から西側へ向かって立ち上がる傾斜変換点先に位置していた。ここで平面が隅丸方形に近い墳丘が確認された。墳丘は長軸南西—北東方向で18m、短軸北西—南東方向で15mほどの土盛りで、南東・南西側が急傾斜であった。頂部の座標値は $X=46.616$ 、 $Y=-76.669$ である。標高260.3mで南東側墳丘下から1.9m、北西側墳丘下から1.4mの比高である。墳丘上は枯草に覆われ、表土はしまりのない寄せられた草根混じりの土

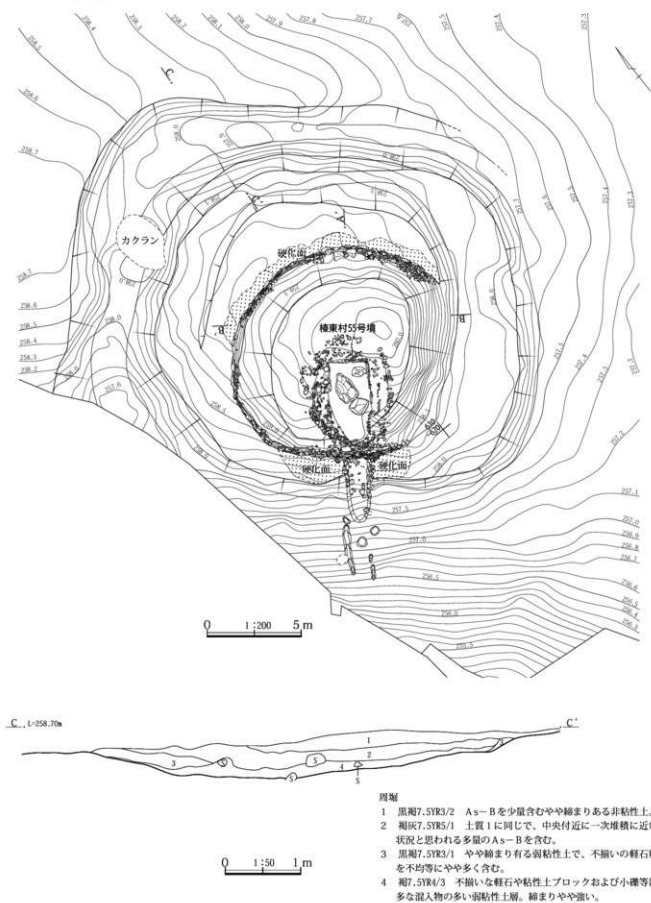
で、墓石が想定されるような礎の混入もほとんどなかった。54号墳で見られた墳丘周辺の後世の土寄せが本墳でも墳丘北側付近に見られた。この付近から周堀が確認されるが、調査前の地形から周堀を想定することはできなかった。

主体部は大きく削平され江戸時代には墓地として再利用されている。確認段階での石室石材の存在は54号墳以上に分かり難く、トレンチやボーリングステッキの検討を加えても奥壁が確認できるまで、石室の位置・方向は明瞭にできなかった。また、取り外された天井石や石室石材等の大型石材が周辺に放置された形跡は見られず、すべて持ち去られたと推測される。



第50図 55号墳現況図

第三章 調査の内容

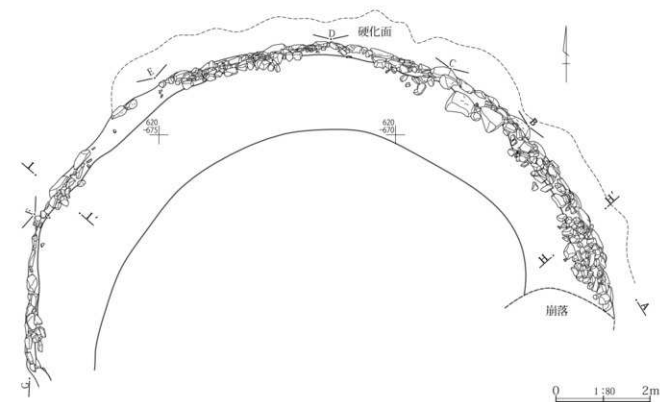


第51図 表土下の55号墳

2 墳丘と周堀(第51図 PL.25・26)

墳丘 石室が著しく壊されているのに比して、墳丘の削平はあまり激しくなかった。奥壁裏側とその周辺を主体に最大1.4mの高さで、石室西側の浅い部分でも高さ0.9

mの盛土が残存していた。反面南東側は幅9mにわたって重機で削られたような傾斜の一定した急斜面になっていた。墳丘規模は東西方向で幅12.4m、石室右壁を通る南北方向付近で11.5mを測る。



A. 1-259.80m

B.



B. 1-259.80m

C.

C. 1-259.80m

D.



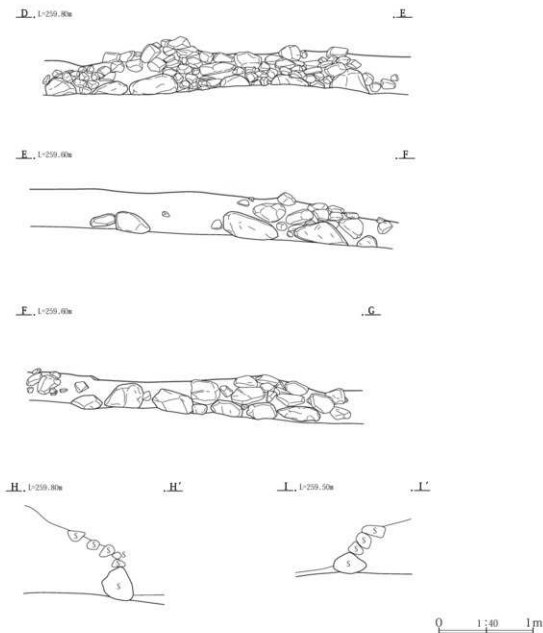
0 1:40 1m

第52図 墓石

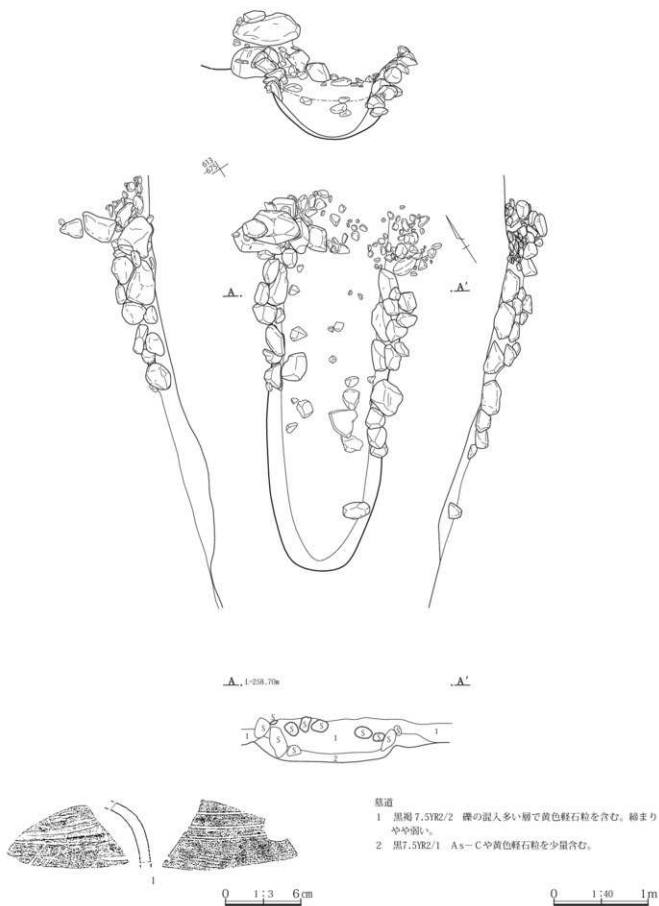
周堀 墳丘の北東・北西側に残存している。上面には厚く、As-Bが堆積していた。周堀の形状は残存範囲では隅丸長方形を呈するような平面形になっている。周堀外側では輪郭は直線的で北隅付近も直角に近い屈曲になっているが、周堀内側は丸みがあり円墳の周堀として違和感のない形になっている。底面は比較的平坦だが、壁の立ち上がりは一定していない。規模は北東側中央付近で上幅3.4m、下幅0.8m、深さは基壇縁付近から50cm、外

側の残存する地山から20cm前後である。

遺物出土状況 墳丘および周辺出土の古墳時代土器10点を第72・73図に示した。いずれも須恵器破片である。1の甕、4の提瓶のような残存状態の良い遺物が含まれていた。1は墓道両側の斜面に散乱しており、最長7m離れた地点で出土した破片が接合した。4は羨道先端の南約1mの斜面、8は墓道南隅から2.3m離れた基壇直下の出土である。その他の遺物は2・7が墳丘北側の出土



第53図 墓石立面



第54図 墓道と出土遺物

て他はすべて南側斜面付近の出土である。

図示した以外に約110点の土器の出土があるが、9割以上が甕・甕類の大型須恵器片であった。図示できた土器同様に17トレンチなど墳丘南側とその周辺から出土する土器が多かった。

基壇 墳丘北側では周堀内端と墳裾との間に段差があり、見かけ上2段の基壇が存在するような状況を示している。第6図の14トレンチ断面にはこの段差直上にAs-B混じりの土が覆っていることが記録されており、古墳時代から存在していた基壇緑部であることは確認できなかった。残存する上位基壇は54号墳同様Hr-F A層付近以下の地山面にあたる。墳裾から上位基壇上端までの幅は北東側3.3m、北西側1.6mで54号墳の基壇規模とあまり差がない。北隅付近の丸みが少なく平面は隅丸方形形状になっているが、周堀に沿うような平面形状である。上位基壇面は地山ほど傾斜がなく、平坦に作られているようだ。上位基壇下端から周堀上端までの幅は北東側0.7m、北西側1.8mで54号墳に比べかなり狭い。

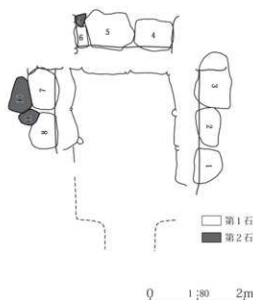
下位基壇の規模は上端で北西-南東方向で16.2m、北東-南西方向14.6mを測る。北西辺以外では丸みの少ない隅丸長方形形状を示している。上位基壇面と比べると南は古墳外側へ低く傾斜する傾向がある。

墳裾周辺では石室正面周辺と北東側(石室奥壁裏側)に踏み固め面が確認できた。

葺石(第52・53図 PL.27) 墳丘南東側は大きく崩れて残存しないが、他の墳裾部分に外護列石のような径40～70cm前後の大型の石を用いた根石列が確認できた。この根石上面には径10～30cm前後の小振りの石を盛土上に敷くように、基壇から最大で80cmの高さまで並べており、葺石が施されていたことが分かる。54号墳と比べ最下段の石(根石)が大きいのが、その上に垂直に積上げる部分がほとんどない。54号墳より周辺に散乱する礫はさらに少なく、葺石が墳丘全面を覆っていたことを想定するデータは得られていない。なお、石室裏側にあたるB・Cポイント中間付近にのみ大型石材が2石、根石より浮いた状態で据えられていて目印のような様相を示している。

3 墓道(第54図 PL.28)

概要 羨道部前には墳丘外側へ続くような幅狭な溝状の



第55図 石室立面概念図

施設があり、墓道と判断した。底面の踏み固めや炭化物等の散布など特徴的な痕跡は認められない。上面の長さは3.36m、羨道寄りで幅1.25m、深さ20cm前後の規模で、軸方向はN-33°Eを測り石室とほぼ同一である。北半部分は基壇面を削るようにして作られ底面は比較的平坦だが、南半部分は基壇外側へ広がり地山傾斜に沿って南東側へ低く傾斜し、羨道際と南東隅とでは70cmの比高差がある。なお、この墓道南側の斜面には2条の平行する溝状の窪みが確認されている(94頁)。本古墳に伴う施設とする確証が得られなかったため別遺構として扱ったが、墓道に繋がる施設となる可能性がある。

遺物出土状況 1は墓道にかかるトレンチ調査で取り上げた須恵器甕胴部破片で墓道底面より浮いた状態の出土である。墳丘より流れ込んだ遺物の可能性がある。他にも図示できなかった須恵器が周辺から出土しているが、墓道に据えられていたと想定できる遺物はなく、いずれも小片で、54号墳のように前庭部分に土器が集中するような傾向は看取できなかった。

石積み壁 左壁の羨道側半分、右壁の羨道側2/3の範囲には、壁に貼りつけるように斜めに置かれた平坦な石が多く、石積みの壁面であったことが想定できる。底面部分には礫の出土は少なく、石敷き面は存在しなかったと思われる。

4 石室(第55～59図 PL.29・30)

概要 残存状態は極めて悪く、確実な石材を残すのは玄室奥壁と両側壁奥壁寄りの下側のみである。左壁と奥壁西隅には第2石まで見られるが、他は腰石のみの残存である。玄室中程から羨道にかけては石室石材が1石も残存せず、徹底した石材除去が行われた反面、裏込め石は一部を除いてかなり残存している。後世に大型石材を主に搬出されている。羨道右壁は根石上に一列に並ぶ窪み(58図薄線部分)から最下段石材の配置が復元できる。玄門付近は不明瞭だが、右壁側の玄室・羨道配置から両袖式の石室が想定できる。玄門付近の欄石は確認できないが、羨門側には一部一列に並ぶ石材が残存し、仕切り石の痕跡と思われる。

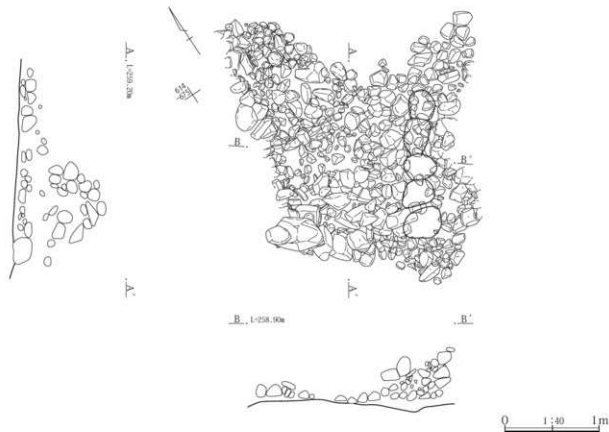
羨道部閉塞状況(第56図) 羨道が想定できる部分には墓道寄りを中心に径25cm前後のやや大きめで細長い石が隙間少なく充填されていて、閉塞石が一部残存しているものと思われる。ただし石室石材がすべて除去されているので、閉塞石もほとんどが原位置を留めるものではない。
石室内遺物出土状況(第57図 PL.29) 玄室・羨道が想

定される位置とその周辺からは金属製品を中心に多量の遺物が出土している。しかし玄室直上には近世の墓竈に伴うと思われる銭貨が多数出土し、古墳時代と近世のどちらに伴うか不明な遺物がある。また鍔や録金具が出土しているが刀身の出土はなく、持ち出された遺物も多数あったと想定される。

土器類は須恵器7点を図示した。1・2・6は床面直上の出土である。ただし完形近くまで復元できる土器がなく、1・3・6のように離れた地点の接合例があり、確実に石室内に副葬されていたと確認できる土器はなかった。図示した以外に壺蓋類を主体とする須恵器破片35点と土師器4点がある。杯類の出土はなく、器種の構成は墳丘土破片と近似した傾向が見られる。

装身具では耳環が4点(1～4)出土していて複数の遺体が埋葬されたことが想定される。出土位置は大きく動いていて、遺体を安置した場所は想定できない。特に2は奥壁裏込め内からの出土である。

鉄鏡は21点(17～37)図示したが、奥壁直下から羨道部分外まで散乱した状態である。西側に多い傾向がかる



第56図 羨道部

うじて看取できるようだ。54号墳同様に弓飾り金具は6点(38～43)の出土がある。石室床面付近の土飾い作業で検出した遺物が大半で、床面直上に散乱した状態であったと思われる。

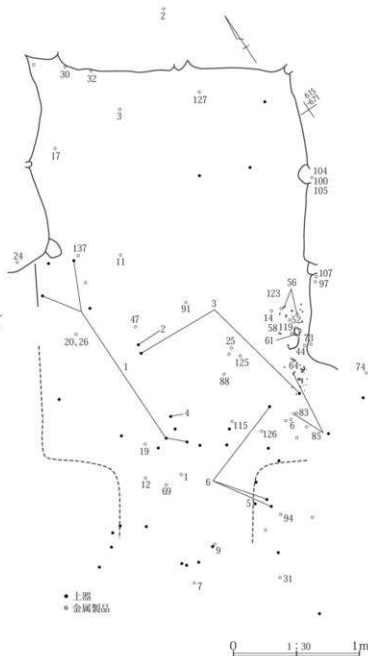
本墳は馬具類の出土が特筆されるが、そのうち鞍縁金具(44～51)と杏葉(52～64)は右壁石室石材1の際に集中し、右壁中央付近の壁際に鞍が副葬されたことが分かる。いずれも破損が激しく、細かな破片で出土するものが多かった。留金具・鈹具など他の遺物も東側から出土する例が多く、馬具類は右壁側にまとめて副葬されたようだ。銚の出土も17点(97～113)あって目立つが、右壁の石室石材の隙間に入り込むようにして出土したものがあつた。原位置を留めたものか後世に動かされたものか判断できなかったが馬具付近から集中して出土する遺物の一つである。

他に釘14点(114～127)が出土している。玄室内に散乱していて木棺の位置を想定できる状況ではないが、54号墳同様に壁真際の出土はなかった。

石室床面の状況(第58図) 石室石材は大きく壊されているが、玄室床面は概ね残存している。羨道部床は玄室部と同レベルにあり、強い踏み固めは見られない。羨門側に仕切り石の痕跡が残り、54号墳と同様に葺石裾部分から繋がるように配されていると思われる。石室に共通点の多いことから54号墳同様に玄室側にも桐石が置かれていたと想定される。

玄室部床も羨道部同様に強い踏み固めは見られない。径10cm前後の円礫が多く見られ、玉石を敷き詰めた床面であった可能性がある。玄室内に間仕切り石等の内部施設はなく、抜き取りの痕跡も確認できず54号墳と同じ傾向であると思われる。

石室鋪石状況 羨道部床直上には径10cm前後の円礫が重層的に見られ、鋪石があつたと想定される。しかし閉塞が一部残存していたのに羨道部全体をきれいに覆うような鋪石の状態ではなく、石室石材除去時に鋪石面も壊さ



第57図 玄室内遺物出土状態

れた可能性がある。

玄室部にも奥壁・側壁際や羨道寄りなどに羨道部鋪石と同規模の円礫が見られるが、中央付近には確認できない部分も多い。特に崩落天井直下でしっかりした鋪石が確認されておらず、後世に石室を壊した時点で鋪石が見られない状態だったことが分かる。54号墳奥壁側の状況に類似している。

平面および立面の状況

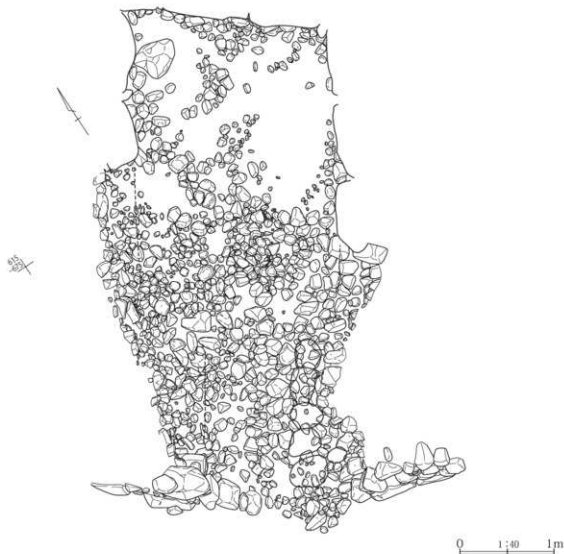
・石室主軸 両側壁の方向から計測した推定主軸はN-34°Eである。地山は南東方向へ低く傾斜して、こ

れに対し直交に近い方向(傾斜に水平方向)となっている。南西側に接している染谷川の流下方向は南東側を向いており、この流路に対しほぼ垂直な軸方向と言えよう。

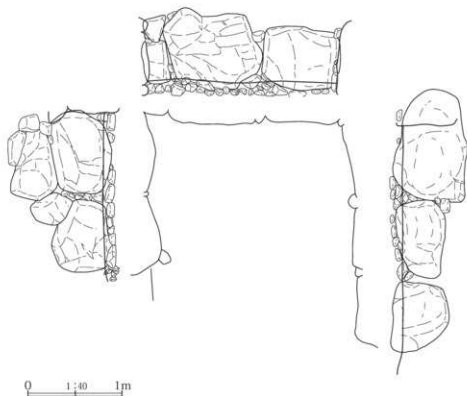
- ・平面規模 奥壁から羨道南端の仕切り石外側まで5.10m、床面での玄室規模は奥壁前で幅2.05mが計測できる。玄室残存範囲では胴張り傾向は看取できない。玄室長は推定3.1m前後となる。羨道部は長さ2m前後、幅1m前後を推定している。
- ・立面規模 残存する壁で最も高い部分は第2石まで見られる西側壁隅付近の98cmである。崩落天井石の最長部分が165cmなのに対し、玄室幅が200cmを超えていることを勘案すれば54号墳の壁高160cm以上の高さが必要と思われる。

- ・立面形状 残存部分では転びは少ないが、崩落天井石の最も長い部分が165cmで、現状の玄室幅よりかなり狭くなり、第2石以上でかなり強い転びと持ち送りが必要である。
- ・壁面の構成 石室石材は輝石安山岩(特徴から相馬岳由来の安山岩としたものがある)の自然石で、いずれも遺跡周辺で見られる石材であり、54号墳と同一である。種類・規模・積み方は本文73頁で後述する。

残存する第1石の状況は、上面が平坦で高さが比較的揃っていることが特徴的である。特に奥壁左側の6以外は全石が高さより幅の大きい横置き状に据えられている。奥壁では高さのある石材を左側に置いている。右壁では第2石以上で布積み状の積み方とならずで、左壁



第58図 石室床面の状況



第59図 石室立面

では谷積みが見られ、54号墳とは左右で逆になるような石積み方法が推測される。

5 解体調査(第60～71図 PL.26～34)

①解体の順序

残存状態の悪い本墳では、古墳構築順序を後から辿るような基本的調査方針を立てられなかった。そのため解体作業は作業効率を優先して、墓道→墳丘→石室→掘り方の順とした。本項の記述もこの作業手順に沿ったが、石室石材については積み方に沿った記載とした。

②墓道の解体

墓道(第54図)は墳丘規模確認時のトレンチで石貼り状の側壁が確認された施設である。古墳基壇部分から基壇外側にかけて広がっている。54号墳のように目立って礫の多い地点ではないが、墳丘側から崩落したと思われる礫が見られた。

石貼りは下側に径40cm前後の大振りの礫を壁に立てかけるように斜めに置き、その上側に径20cm前後の礫を配して2段の石壁状になっている部分が多い。礫はあまり丁寧に積み込まれてはいないが、45度以上の傾斜のある明瞭な壁面となっていた。土を込めて礫を留めたようで、掘

り込みは見られなかった。このため2面の床面が存在したような断面となり、石貼りに先行する墓道が存在した可能性もあるが、上下どちらの面にも踏み固めの痕跡はなく、それを示唆する痕跡は認められなかった。なお、基壇外側まで墓道が続くことで石室前面付近に周堀が存在しないことが確認できた。

③墳丘の解体

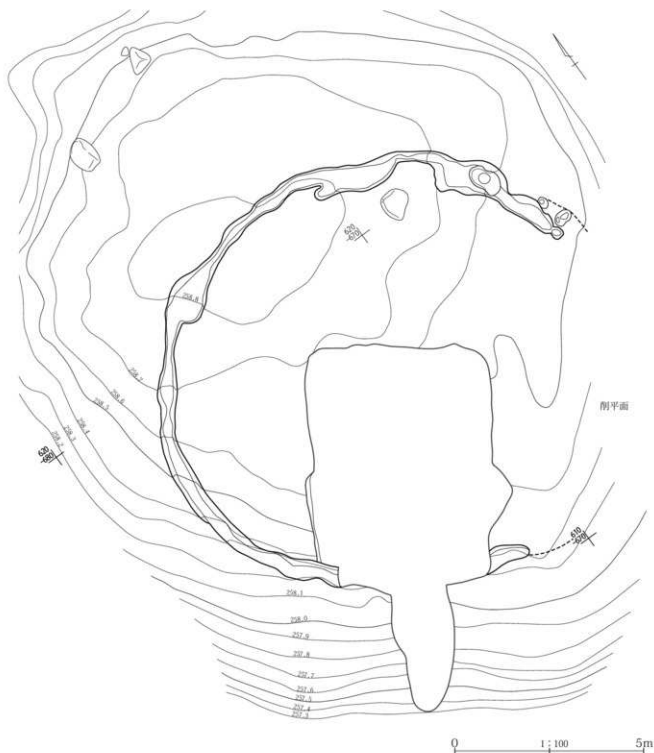
・墳丘の断面設定 石室が大きく壊されているのに比して、墳丘の残存状態はよく、奥壁裏側では最高位で1.4mほどの盛土部分が確認できた。墳丘の解体にあたっては、この残存状態の良い地点を通るように第51図のように石室主軸方向に沿った北東-南西方向のA断面と、石室裏側でA断面に直行するB断面を設定した。

・葺石と区西溝(第52・53・60図) 削平された南西側を除いた全面で墳裾から墳丘立ち上がり部分を覆うような葺石が見られた。最下段には根石と呼べるような径60cm前後の大振りの礫が置かれ、その上に径30cm前後の礫が積まれている。石積みは部分的に小口積みが見られるがあまり丁寧な積み方になっていない。墳丘最終面に根石を含む葺石が葺かれたようで、54号墳のように第二次墳

丘を盛る前に根石を据える前後関係は把握できない。

根石下には54号墳と同じ区画溝のような窪みが巡っていた。幅40～50cm、深さ3～10cm前後の不明瞭な部分が大半だが、幅1m近い歪んだ深度に富む部分も北東側に多く見られた。また石室掘り方を扶んだ両脇でも溝の

輪郭や規模に齟齬がなく、掘り方の南西隅外形もこの溝外形に合致している。石室掘り方に先行してこの溝が円形に廻らされ、石室の位置もこの溝が定めたように見える。この溝を作る円の中心は奥壁前面の中央付近にあたる。

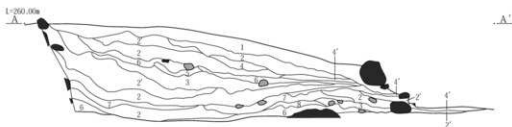


第60図 根石下の溝

第三章 調査の内容

・盛土の種類と質(第61図) As-Cの混入する1・2・7・8層、Hr-F Aの混入の多い土を主体とする3～5層、およびそれらの混土の3種に大別できる。これらはいずれも古墳周辺で採取できる土で54号墳と同質である。周堀掘削土を寄せたり、古墳周辺の土を掘削して墳丘盛土を集めたと思われる。As-C混じりの土は透水性に富み、Hr-F A主体の土は不透水層を形成する。締め固めの強い層は3・4層でHr-F A混じりの層であった。

・盛土の単位と順序 図示できた断面の範囲では、規則的な盛土の単位は把握できない。B断面ではHr-F A混じりのしまりの強い層が奥壁裏側では少なく、墳裾寄りの両側で多くなっている。また奥壁裏側は中位付近まで窪んでいて後から盛られているようで、天井材を運び込むまで裏側は通路状に窪んでいた可能性がある。特にしまりの強い2'層がA断面墳裾寄りには2枚見られる。石材搬入の基点のような場所でくり返し踏み固められたことが想定できる。

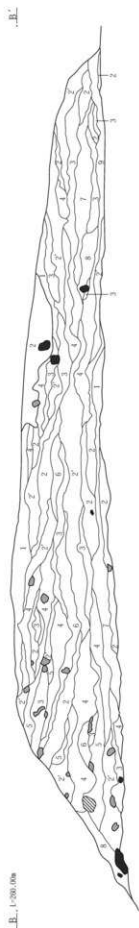


54号墳墳丘盛土(断面ポイントの平面位置は第51図に記す)

- 1 暗褐色7.5YR3/3 As-C混じりの粘性弱い層。柱1m前後のブロック状Hr-F Aを少量含む。透水層で墳丘盛土内では黒色味の強い層。
- 2 暗褐色7.5YR3/3 As-Cの混入多い、締まりやや弱い透水層。2'にはHr-F A小ブロックが若干混入する。
- 3 明褐色7.5YR5/6 硬化したHr-F Aブロックを積み上げた層。地山のHr-F Aを中心に締め固めた不透水層。
- 4 にぶい暗7.5YR5/4 3よりHr-F Aブロック小粒で褐色味強い粘性土等の混入があるが、同様に締め固めた不透水層。4'は層厚乏しいが締め固め顕著で飯糰状を呈している。
- 5 灰黄褐色10YR6/2 Hr-F A主体だが3・4のような締め固めのない、ブロック状にならない層。
- 6 灰黄褐色10YR5/2 5・7の中間的な層。
- 7 暗褐色10YR3/3 As-Cを含む粘性弱い層。締まりやや弱い。墳丘盛土内では最も黒色味の強い透水層。
- 8 暗赤褐色5YR3/4 As-Cを少量含む締まり弱い透水層。
- 9 赤褐色5YR4/6 締まり欠く柔らかな透水層。

0 1:50 1m

第61図 墳丘断面



④石室の解体と石室石材

・石材種類(第62図上) 玄室奥壁と側壁北東側の一部に11石が残存するのみで、左壁と奥壁隅以外は第1石しか残存していなかった。石室壁面で確認できた石材は相馬岳由来の安山岩と粗粒輝石安山岩の2種のみで、いずれも周辺で採取可能な石材である。

・石材規模(第62図中) 54号墳より大型石材を使用している、同古墳玄室では1石しか見られなかった800kg超の石材が右壁と左壁で1石ずつ、奥壁2石の併せて4石が使われている。平均重量は第1石の8石で637kgを測る。54号墳の玄室第1石の10石平均重量の462kgに比べ4割近く大きい。また崩落石に重量1900kg台の本遺跡最大の天井石が見られるほか、次ぐ重量の1100kg台の崩落石も長さから壁使用の石材と考えられるが54号墳最大の天井石と同規模で、石室に使用された石材の大きさが窺える。

・石材形状 比較的平坦面の広い整った形状の石材を選んで使用している。玄室側・上面に平坦面を置く余裕のある、2面以上平坦面をもった石材である。石材3の南隅を除き、奥行にも比較的富んでいる。

・石材加工 加工痕跡が残る石材は全く確認できない。また、残存範囲には割石の使用もない。

⑤石材諸属性と積み方の関係

石室石材の積み方を第62図下に示した。分類方法は54号墳と同様にA～E 2に7分類したが(第7図③)、本墳にA・Cとした小口積みの種類は見られない。残存する腰石では最も長い面を玄室床側に向ける横積み(E1)を多用している。なお、個別石材の特徴や計測データについては第6表(本文81頁)に一括して記した。

⑥石室石材積み方の概要

石室石材には右壁羨道側から順に、第1石が第2石の前になるよう通し番号をつけた。任意の番号付けで石室石材の積み方順を意図したものではない。間詰め石等については番号付けは行なわなかった。

第1石 本石室の特徴は腰石下に根石を充填していることである。石室石材は底面が広いものが多く、根石の中に飼い石はあまり多くない。根石と石室石材の間には薄い土の層があり石材の重量を受けている。土の層は後からの流れ込みではなく、緩衝材として敷かれたものと思われる。第1石にはほとんど転びがなく、平面形も胸張



第62図 石室石材の特徴(上:種類 中:重量 下:積み方)

り状にはなっていない。

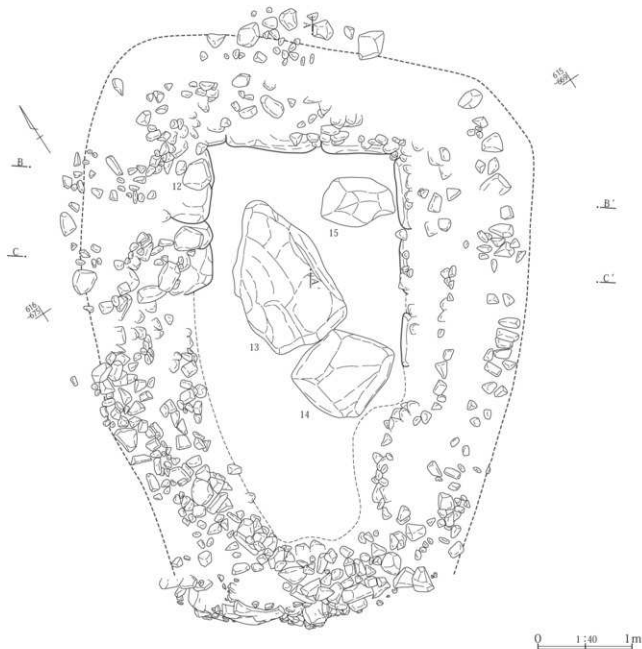
第2石 左壁と奥壁左隅に3石が残存するのみである。石材9は石材6の高さの不足分を補い、隣接する石材5に合わせるように積まれたもので、第1石の補完石材である。

⑦石室石材と裏込め石(第63・64図 PL.33)

石室石材の積み方と裏込め石との繋がりを把握するた

め、石室主軸方向に対し直角方向に2本、垂直方向に1本の断面を記録した。

石室の規模に比して裏込めは幅狭で、石室石材玄室側内端から裏込め外端まで右壁で125～148cm、奥壁で117～146cm、左壁で118～126cmを測る。54号墳と同規模で、石室石材の奥行を考えればかなり小規模な裏込めと言えよう。



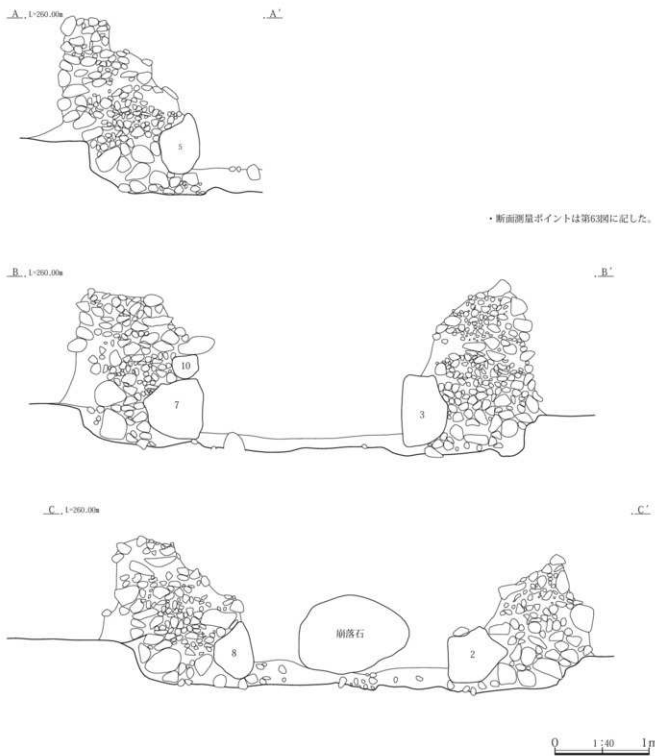
第63図 確認時の石室と裏込め

裏込めに用いた礫の大きさは54号墳と変わらないが、石室石材が大きいので54号墳より小型礫を集めたように見える。充填の傾向は54号墳と同様で第1石中程付近までは第1段として大型石材を集め、石と石の間は空洞が多くなっている。第1段は特に右壁裏側で掘り方より高く盛り上げられている。その上に比較的細かな礫を散き

詰めるように厚く充填して第2段を作っている。やや大きな石材を使う第3段以上はあまり明確ではない。裏込め石外側には奥壁裏側を中心に丁寧に礫を積み上げて輪郭を整えているが、側壁側では地山から20～50cm高い位置から積み上げ始めている。この輪郭の位置は石室掘り方とほぼ一致している。



第64図 石室と裏込め



第65図 石室石材と裏込め断面

⑥個別石材の状況

玄室石材については個別の石材ごとに断面と石材を取り外した直下の状況(間層の土砂は除去)を下側(第1石)から順に示した(第66～68図)。なお石材直下の状況は、調査段階では間層土砂面で観察している。図上では取り外した個別石材の輪郭を薄線で示し、重量を受けた主な合端を●、転びを作るために生じた合端を▲で加えた。また頁ごとに記載した石室石材の位置を石室壁面概念図にトーンを加えて示した。

第1石：腰石

右側壁 3石(1～3)がある。想定される玄室右壁の石材欠失部分は幅1mほどで、残存する3石規模の石材であればどの石材でも1石で欠失をほぼ充足できる。石材と下込め石との間に土の間層があり、後から流れ込んだとは思えない締まりが見られる。54号墳同様に石材を据える際に緩衝材として土を挟んだと思われる。

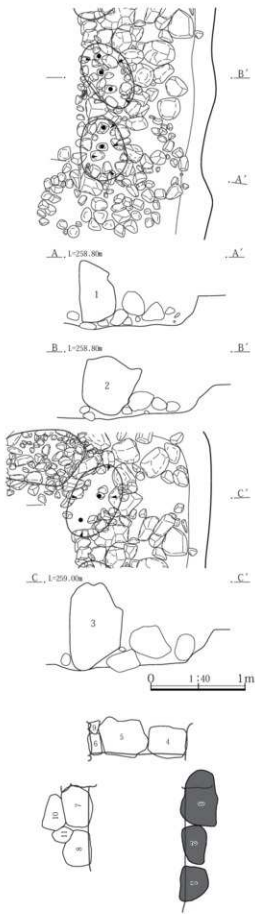
1(第67図 PL.31-1・2) 右側壁石材の中では上方の平坦さに欠けるが、平滑な面を玄室側に向けて据えられている。裏側にやや大振りの石を削って弱い転びを作っている。

2(第67図 PL.31-1・3) 玄室側に面しては1との間の隙間(目地)がやや広く据えられている。狭い面を下に向けた転びを付け易い石材なのだが、転び作りに執着しない置き方である。

3(第67図 PL.31-1・4・5) 壁材としては本墳最大重量の石材で平滑な面を玄室側へ向けて据えられている。奥壁4の後から据えたようで、奥壁裏側へ40cm以上張出している。厚みのある部分を奥壁側に置き、隣接する側壁石材2とは薄く尖った部分で接している。4とは裏側の隙間少なく寄りかかるように置かれており、この2石が本墳石室石材の最初に据えられた可能性がある。転びはほとんどない。

奥壁 3石(4～6)があり本墳で唯一全体を把握できる部分である。4・5と重量がほぼ同じ石材を並べ、左側の隙間に6を充てている。

4(第68図 PL.31-6、32-1・2) 広い平坦面のある石材で底面の広い安定した据え方をしている。隣接する5との前後関係は不明だが、石室石材の最初に据えるのに相応しい石材と思われる。裏側主体に周辺に大振り



第67図 石室石材と合端(1)

の削い石を添えているが、重量は真下にかかりほぼ自立している。

5(第68図 PL.31-6、32-3) 表面に瘤状の凹凸の多い石材である。広い面を玄室側に向けているが、奥壁腰石としてはあまり平坦ではない。

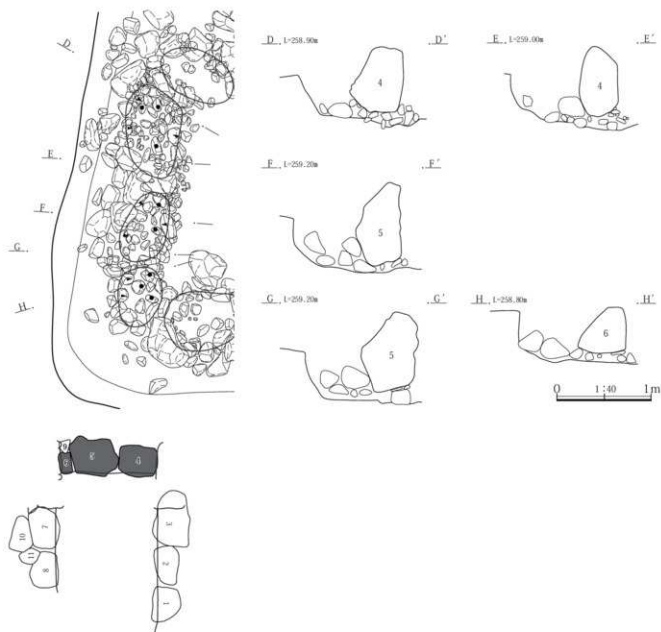
6(第68図) 腰石で唯一縦置きされた石材で奥壁中央の5の左下にもぐり込むように据えられ、玄室幅を30cm広げている。玄室側で見られる面は狭いが奥行や裏側の幅に富む。

左側壁 2石(7・8)がある。右側壁より小さな石材だが奥壁側への突出しがなく、8の南西隅の奥壁からの距

離は、右玄室奥壁で同位置にある2よりやや長くなっている。

7(第69図 PL.32-4・5) 上面は比較的広く平坦だが、下側に狭い面を向けやや不安定な据え方となっている。特に玄室側から覗くと下側が大きく窪んでいる。周辺に大振りの礫を据えているが削い石として効いているのは本石材直下の小振りの礫である。

8(第69図 PL.32-5・6) 多量の礫を削い、狭い側を下に向けて据えられている。玄室側には比較的広く平坦な面を向けている。転びはほとんどない。



第68図 石室石材と合端(2)

第2石

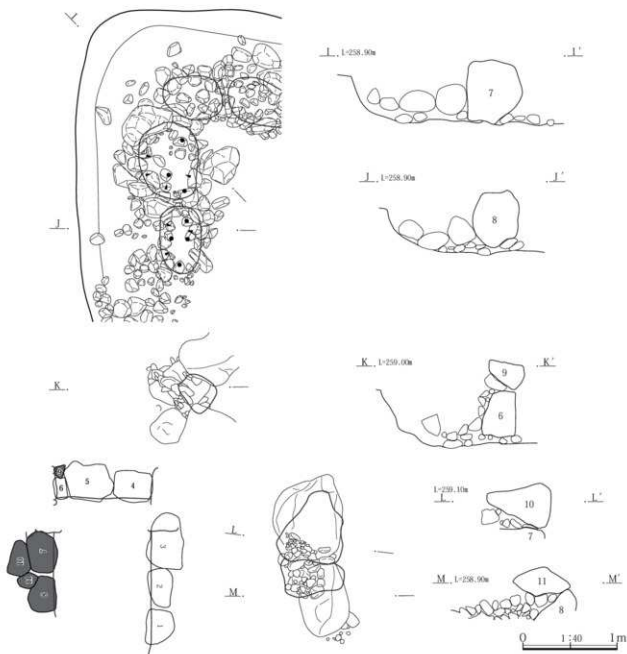
奥壁上に1石(9)、左側壁上に2石(10・11)が残存している。10以外は比較的小振りの石材である。

9(第69図) 腰石6の上に、右側隣接の5と高さを揃えるように積まれていて、第1石の補完石材とも捉えられている。5・7間の谷積み状だが、重量はほとんど6にかかっている。裏側に多量の礫を飼い、転びとせり出しがやや大きい。

10(第69図 PL.32-7) 7上に布積みされた石材で間

詰め石を介して11にも重量がかかっている。裏側・下側に多量の石を飼い、弱い転びを作っている。不安定な石材だが奥行を活かして安定させ、1面しかない平坦面を玄室側へ向けている。せり出しは少ないがやや強い転びがある。

11(第69図) 7・8の間に谷積みされている。小口積みで尖った面を玄室側に向けているが、せり出しはほとんどなく、本石上に大型石材を積むために飼われた石材と思われる。



第69図 石室石材と合端(3)

表6 55号墳石室石材観察表

番号	石材	位置	計測値(㎜: cm)			奥行	配置	備考
			重量	幅	高さ			
1		右壁第1石	500	(80)	(65)	45	E 1	
2	A	右壁第1石	600	(76)	(64)	62	E 1	
3	B	右壁第1石	900	125	(93)	64	E 1	壁石材中最大の重量。4に合わせるようにして後から据える。
4	A	奥壁第1石	800	100	(74)	63	E 1	最初に据えた石材か。
5	A	奥壁第1石	800	105	(90)	60	E 1	
6	B	奥壁第1石	300	(36)	(49)	49	D 2	
7	A	左壁第1石	800	91	(68)	73	E 2	
8	A	左壁第1石	400	84	(65)	55	E 2	
9	B	奥壁第2石	60	34	(31)	(43)	B	第1石の高さ不足を補う。
10	A	左壁第2石	500	77	(50)	71	D 1	口の後から積む。
11	B	左壁第2石	300	(42)	(45)	70	B	
12	A	奥壁第2石	150	75	35	52		
13	B	天井石	1900	100	85	165		崩落天井石。
14	B	壁材1	1100	95	(70)	87		右壁玄門付近の壁材か。天井石とするには長さに乏しく両側壁間に置すのは難しい。
15	B	壁材2		88				奥壁または右壁奥壁側の壁材。

石材A：相馬岳由来安山岩、石材B：箱崎輝石安山岩、無印：未同定

重量のうち斜体で示したものは重機積載機材で計測した値で100kg単位となっている。

石の積み方：第7図凡例参照。

石材12～15は第63図参照。

石室根石 54号墳と異なり、石室腰石直下にはほぼ全面に径15cm前後の根石が敷かれていた。石材背面にあたる裏込め側最下段の礫は根石より大きく径25cm以上の礫が主体であった。この最下段礫上側には第一段裏込め礫として腰石中程まで礫が充填されている。最下段礫は裏込め第一段礫より小振りだが、底面付近に敷き詰めたような痕跡はなく最下段の礫の一部のようだ。石室石材下のみ小振りの礫で面を整え、背面側には掘り方上面を無調整のまま裏込め材を充填したと思われる。

石室石材残存部以外にも石材が置かれたと想定される範囲には、小振りの石材が敷かれた痕跡がほぼ全面に確認できる(第58図)。

石室構築面(第70図 PL.34-1・2) 玄室部石室石材除去後の石室根石面には、石材の重みで沈下に加わったと思われる窪みがあり薄線で示した。なお奥道部右壁石

室石材の痕跡と思われる窪みも確認されており、第58図には薄線で記してある。他の石材が想定される地点ではこの窪みは確認できず、後世の石材除去の際に根石表面が若干削られたものと思われる。

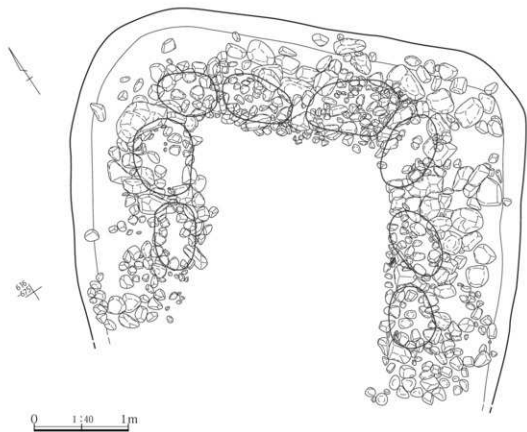
石室・墓道掘り方(第71図 PL.34-3・4) 石室下には底面で計測して幅4.5m、奥行6.1mの長方形の掘り方がある。一部に地山礫を取り除いた痕跡のような窪みがあるが比較的整ったプランである。床面面積は24.13㎡で石室規模に比べてやや狭い。深さは4～20cmで54号墳に比べ著しく浅い。底面は不規則な凹凸が多く平坦さに欠けている。部分的にビット状の窪みがあるが、丸みのある底面で地山礫を掘り出した痕跡のようである。埋没土は人為的に動かされた不整な面の連続で、石室構築時の掘削面をそのまま埋められたものと思われる。締まりの強い層だが石室・裏込めの重量によるもので、埋め

戻し土を選んだり、意図的に締め固めて整地された面とは思われない。

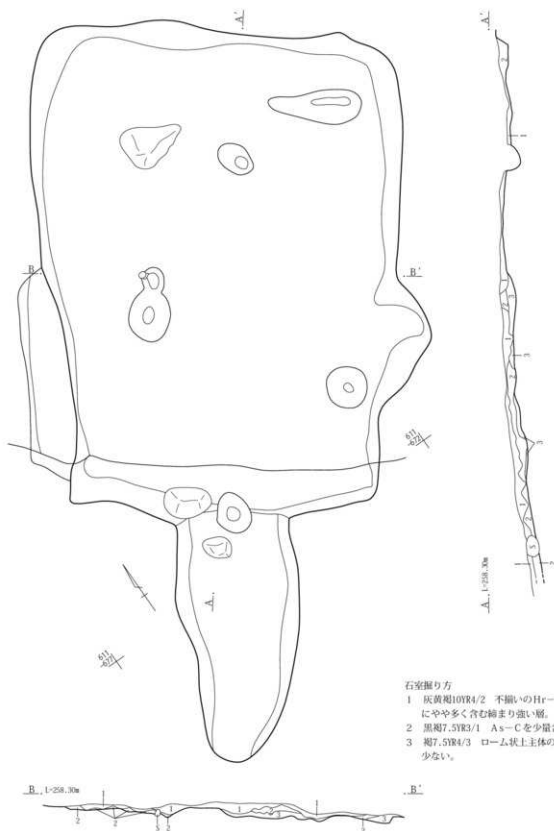
墓道部では側壁石貼り設置のために盛った土を除去した面を掘り方とした。石室側掘り方との間に小さな段があり、石室側の方が若干深掘り込まれていた。石室と同時に掘削された面ではないと思われるが、埋没土に両施設の境界は見られなかった。

墳丘盛土下地山面 基壇面には純層に近いHr-F Aとその下にAs-Cが見られ、旧地山面上にそのまま古墳を構築しているようだ。54号墳同様に地山面やAs-C面に人為的な改変の痕跡はなく、古墳構築以前の周辺で

は古墳時代を通じて畚の耕作等も行われていない平坦地であったと思われる。墳丘盛土下(第60図)では本墳築造地の選定根拠となった地形を探ることができる。地山の微高地付近を本墳の築造地に選んでいるが、地山高まり頂部付近よりやや南側に寄った位置に墳丘中心を据えている。これは石室正面部分が傾斜変換地点にあたるようにしたため、地山の高まりより石室正面付近の地形を優先して選んだことが想定される。地山の高まりは基壇面の高さと同程度の深さを強調することに有用だったはずである。反面、墓道付近はかなり窮屈な印象である。

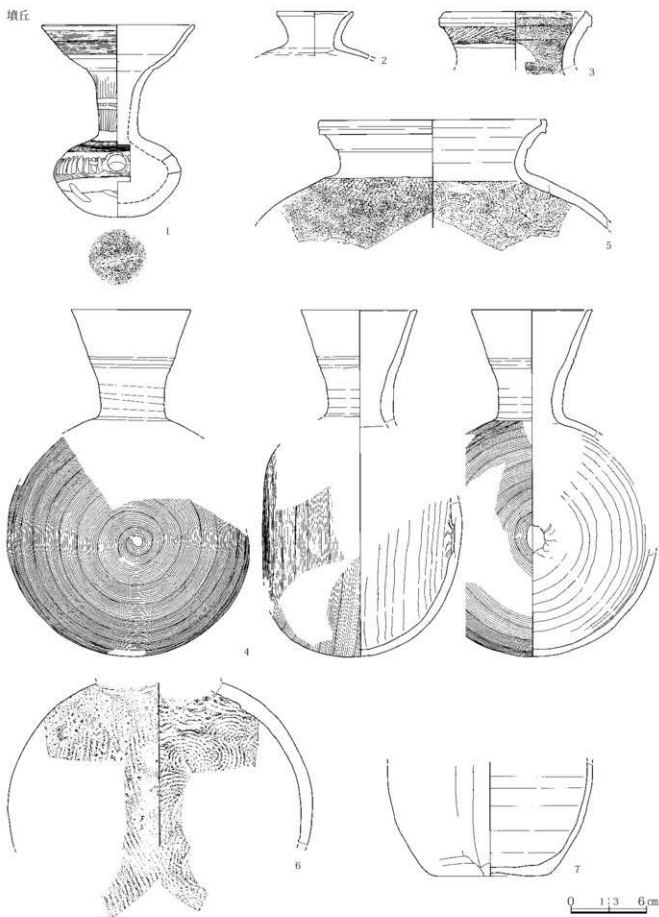


第70図 石室石材下(下込め石)



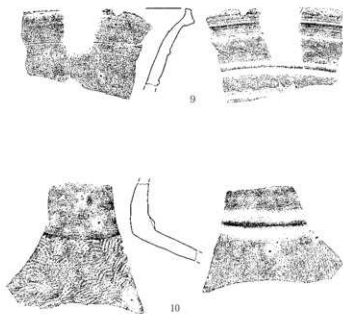
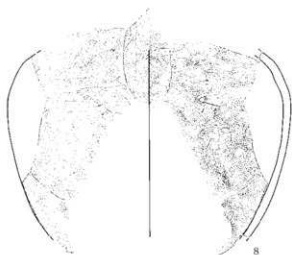
第71図 石室掘り方

墳丘



第72図 出土土器(1)

墳丘



0 1:4 8cm

第73図 出土土器(2)

6 出土遺物

土器・金属製品とも点数は豊富で土器18点と金属製品137点を図示した。土器は墳丘南斜面側の出土が多く、次いで石室内から出土し、金属製品はほとんどが石室内の出土であった。石室は盗掘を受けていて、江戸時代に墓域に転用されている。そのため遺物は石室内にあっても後世に位置を動かされたり石室外の遺物が混入した可能性がある。

図示した土器類はすべて須恵器で、墓道直上の1点(第54図)、墳丘とその周辺出土の10点と石室内出土の7点を図示した。

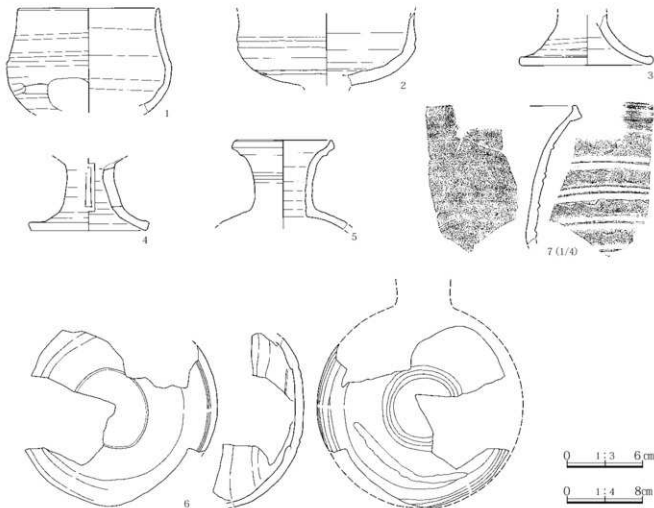
土器(第54・72～74図 PL.35・36)

図示できた墳丘出土土器に杯類は含まれていない。甕1は本遺跡で唯一完形近くまで復元できた。出土位置は墳丘南側の斜面から道を挟んで接合したもので石室正面付近に据えられた土器の可能性が高い。提振4も比較的復元できた土器で、1の破片に近い墓道東側の出土で

ある。墳丘北側付近からの出土遺物は少なく、図示できたのは甕と思われる5のみである。他はすべて墳丘南側から南西側の出土で破片から復元した図となっている。8は同一個体と思われる破片が多数あった。頸部に補強帯のある甕10が目立つ。

石室出土遺物には高杯4点が含まれる。身部分の1・2は深さのある鉢形に近似した器形である。脚部は低脚で裾径10cm前後の小型品である。3は透かしなし、4は1段透かしの器形である。石室は後世に大きな攪乱を受け、出土遺物は確実に石室に伴う遺物と決定できないが、墳丘に見られない須恵器杯類が出土していることが注目される。

石室



第74図 出土土器(3)

金属製品(第75～78図 PL.36～39)

出土したのは鉄製品と銅製品で137点を図示した。

装身具は耳環4点で大きさや形状が近似したものである。2人分の装身具と考えて齟齬はない。

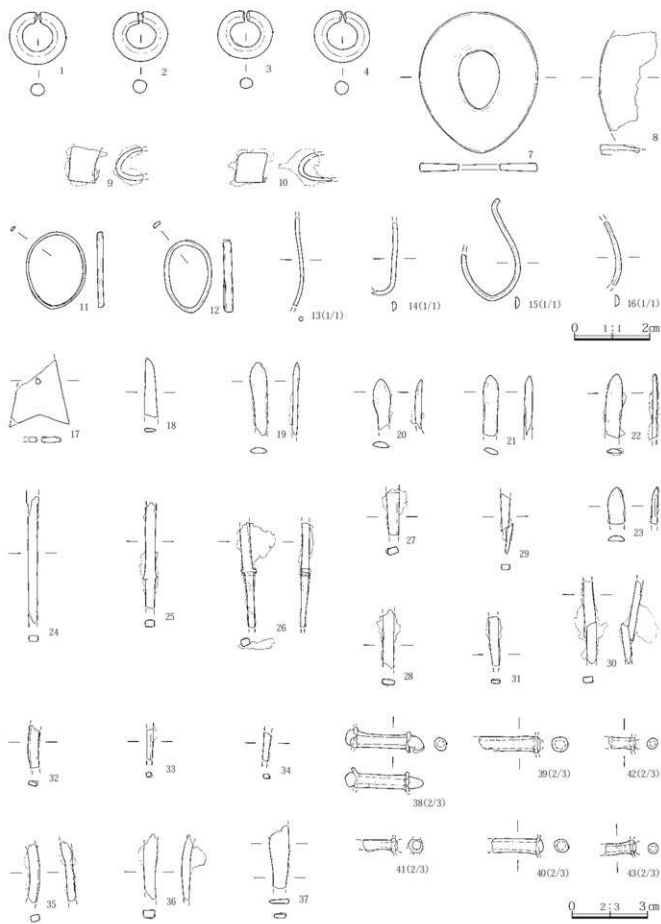
刀装具は鐔7、鍔と思われる9・10、緑金具11・12がある。13～16は貴金具の可能性があり、刀装具に含めた。7は表裏面と側面に金鍍装が状態良く残存していた。盗掘から免れたのは全面に緑青状の錆が覆っていたからであろうか。8は鐔を想定した鉄製品だが不明瞭な破片である。鍔2点は同一個体の可能性があるが、別個体であれば鐔2点の出土も齟齬はない。緑金具12は金装で7と対になると思われる。

鉄鏃は21点(17～37)を図示した。17は無茎鏃で本遺跡唯一例である。18は片刃鏃と想定した。他は鏃身が残存するものは柳葉型長頸鏃である。頭部は18を含め23ま

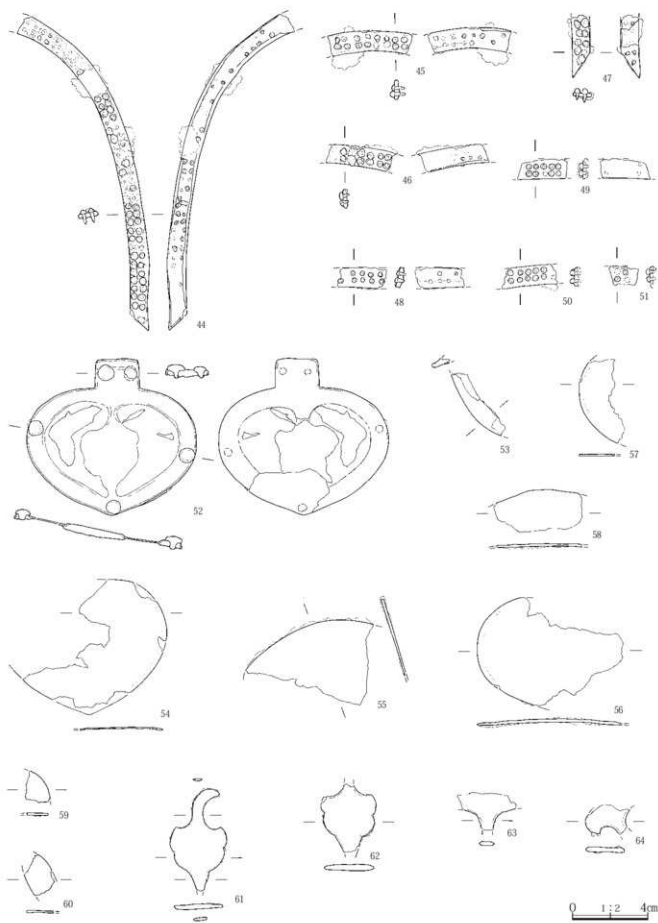
での6点で、37も頭部となる可能性のある破片である。頸部・茎部の破片は小破片が主体で、接合できなかった同一個体が含まれる可能性があり、出土点数をそのまま個体数とするには問題がある。33・34は断面が正方形に近く釘の可能性のある破片である。棘状間が確認できるのは26の1点のみである。

弓飾り金具は6点出土し54号墳同様弓の副葬が想定できる。42・43は残存1/2以下の破片であるが接合せず、総点数を6点とすることに問題ない。54号墳と同じように筒部の厚みの乏しい個体(41・42)が含まれている。本墳の特徴的な遺物に馬具類がある。鞍緑金具・杏葉・雲珠・辻金具・鉸具・留金具など豊富な資料であるが、鎖まで含めて完形に復元できたものはなかった。

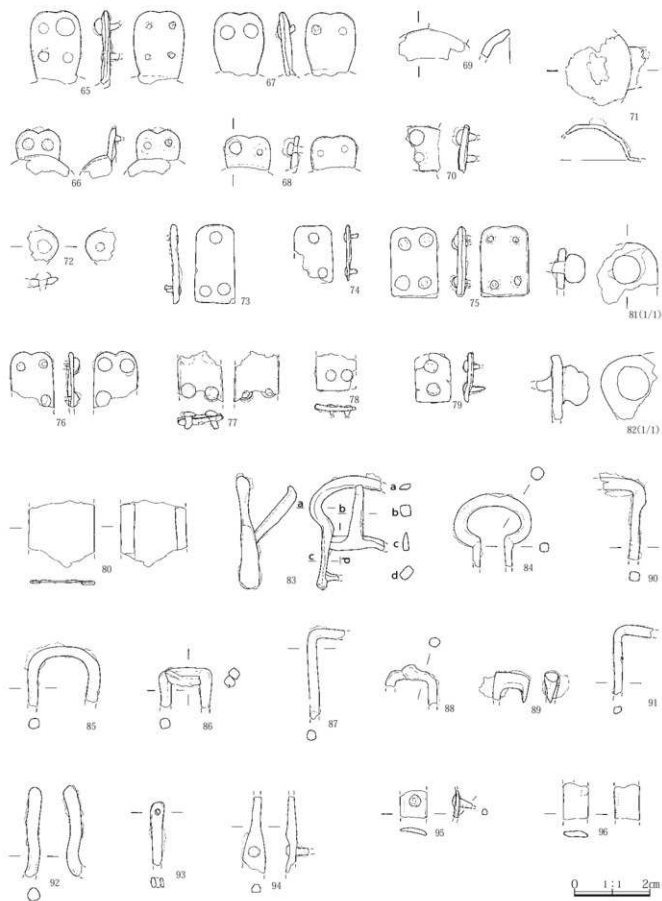
鞍緑金具(44～51)は比較的大きな破片2点が接合した44以外はいずれも小破片であった。図示できない微細



第75図 出土金属製品(1)

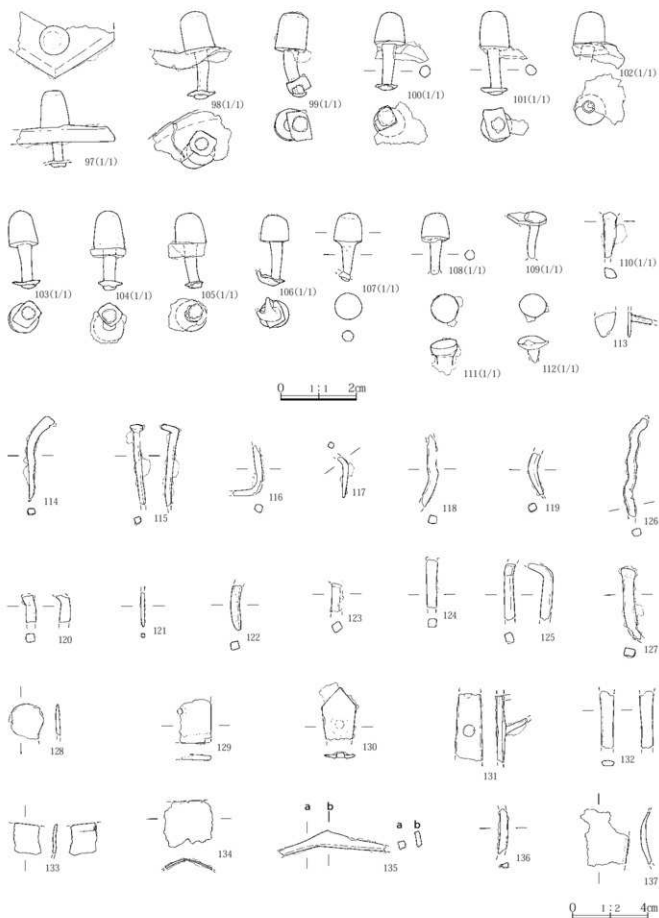


第76図 出土金属製品(2)



第77図 出土金属製品(3)

第三章 調査の内容



第78図 出土金属製品(4)

破片も多数あったが、これら全てを含めても靴の前後1カ所の靴縁部分に満たない。鉄芯上に銅薄板をわたし小釘を2段に並べて裝飾的に留めたもので表面に鍍銀が見られる。下側端部が44・47の2カ所あるが、連続していた靴縁金具として齟齬のない部分である。

心葉形杏葉(52～64)も粉碎状態の出土であった。52は大型破片で出土したものである。これに接合しない縁部片53があり2個体以上の出土が分かる。

雲珠と辻金具 7点(65～72)を図示した。脚部の長い65・67が雲珠、脚部の短い66・68・70が辻金具と思われる。

留金具(73～79)にはほぼ完形の73・75・79が含まれる。種類は豊富で板部分先端が窪む75・76、平坦もしくは弧状の73・74・79、釘の数が2ケの79、3ケの73・74、4ケの75～77と一様でなく、これに板部分の大きさの違いが加わる。釘周辺の微細片も多く81・82を図示した。同様の微細片には図示できなかった別個体も多いがこれらは辻金具か留金具か区別できなかったものがほとんどである。

鉸具(83～94)も種類が豊富で、同一と思われる規模形態の鉸具はなかった。帯の幅は83・85に繋がる3.5～4cmの太い帯と、84・86・88に繋がる1.5cm前後の2種以上が想定できる。

特殊な遺物としてやや大型の釘12点(97～108)がある。頭部側には鉄板片が残存するものが多く、裾付近に革または板を挟んで留めた裝飾的な留金具の釘である。頭部は錫装と考えられる。

釘は14点(114～127)を図示した。54号墳に見られた直角に近い屈曲のある破片は116・125がある。

図示した以外に金属製品では杏葉になると思われる平坦な薄板状の鉄片が44.8g、同じく杏葉の銅張り部分と思われる破片(微細片がほとんど)が4.6g出土している。釘類は7点・重量で17.3g、鍍らしい破片は重量で15.0g出土している。鉄製の釘頭部のような破片も多いが、剥落した錆部分も混じっている。重量で15.5gある。金銅張り釘の頭部片が4.2gあるが、錆着した鉄破片も含まれている。その他に分類できない不明鉄製品破片が250.6gあるが、この中には近世以降の遺物も混在している可能性がある。

7 まとめ

調査・整理作業で得られた55号墳に関する情報を要約すると以下のとおりである。

遺構

墳丘規模 墳丘径12.4m。

基壇 上段基壇：14m前後か。

下段基壇：16～20m前後。

周堀 下段基壇北側のみに残存。

葺石 根石を一段目に据えた上に、墳丘斜面下側を覆う。

墓道 側壁に石を貼る。

主体部 輝石安山岩自然石乱石積の両袖形横式石室。

平面規模 推定全長5.10m。奥壁付近幅2.05m。

立面規模 残存2石まで。

床面 甌石面があったと思われるが不明瞭。

その他 羨道墓道側に仕切石。

天井石が1石崩落。

遺物

土器 主に墳丘南側の傾斜面から出土。須恵器瓶類主体。

石室内には杯類を含む。

金属製品 ほとんどが玄室内から出土。耳環、金剛装鈔などの刀装具、弓飾り金具、馬具類を出土。馬具には心葉形杏葉・靴縁金具・雲珠・辻金具・留金具・鉸具・鍍吊り金具など。

その他 埴輪の出土なし。

備考

①石室石材据え方は根石で整える。

②石室構築順序は奥壁石隅を最初に置き、右壁最奥部で支えるような据え方から始める。

③石室石材は布積みが多いと予想される。

④出土耳環より2体の遺体が埋葬されたと思われる。

⑤出土土器は須恵器で確実に遺構に伴うと決定できる土器を欠く。埴輪を伴っていない。

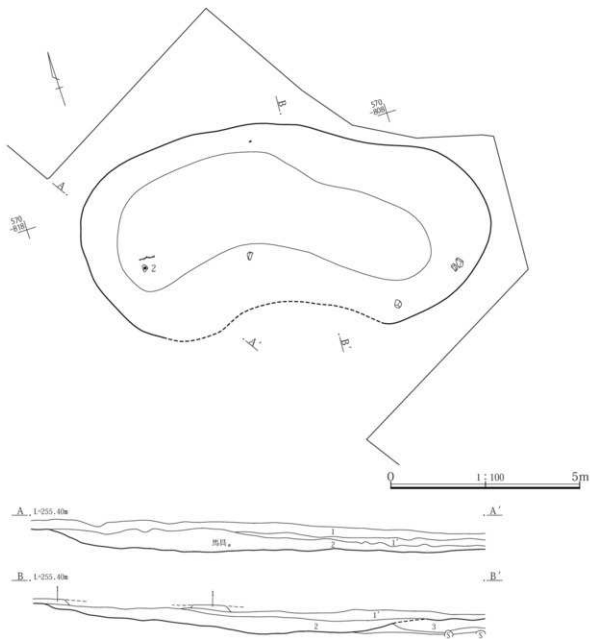
⑥須恵器や鉄器・馬具の形態から7世紀前半代で54号墳とほぼ同時期の古墳と想定される。石室前が墓道状なので、前庭の54号墳より古い可能性がある。

⑦墳丘規模に比して大型の石室であり、大型石室構築の習慣を取り込んだ石室である。

4 古墳時代のその他の遺構と遺物(南東隅の窪地)(第79・80図 PL.39・40-1~3)

調査予定地南東隅付近の568-815グリッドで馬具(轡)が出土し、周辺を拡張して調査し、他の遺物確認に努めた。その結果、馬具の可能性のある金具と土玉、他にごく少量の須恵器微細片が出土した。またこの付近は浅く

不明瞭だが弧状に窪むことを確認した。窪みは下端で長さ8m以上、幅最大2.5m、深さ最大28cmの規模である。壁の立ち上がりは極めて緩やかであった。そのため、南側の上端は明瞭にできなかった。底面は比較的平坦だったが踏み固めや礫敷きなどの施設は、わずかな痕跡を含め認められなかった。埋没土表層に比較的高いAs-Bが見られることから古代(天仁元年:1108年以前)



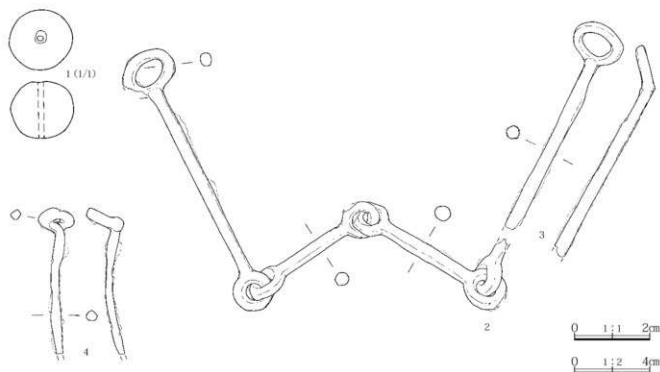
窪地

- 1 堀7.5YR4/3 As-B混土。1'はAs-Bの密度高い。
- 2 堀7.5YR5/6(上部)から堀7.5YR6/1(下部)へと漸移的に変化する粘性土層。Hr-F Aが混じるか。
- 3 堀7.5YR3/3 やや締まりある粘性土層。As-Cを少量含む。B断面ではHr-F Aが多量に確認でき、締まり強い。

地山 堀7.5YR4/3 やや締まりある粘性土層。As-Cを含む。

0 1:50 1m

第79図 南東隅窪地



第80図 南東隅窪地出土遺物

の窪みであることが確認できた。埋没土の状況や出土遺物から54・55号墳築造時と大きな時間差のない窪みと想定し、古墳時代の遺構として扱った。55号墳に見られるような古墳北側の周堀となる可能性を想定すると、墳丘径11m前後の円墳となる。この古墳の主体部が想定される位置は調査区南東隅にあたるが、付近に石室掘り方など痕跡は全く残っていない。また、窪地内に少量礫が混入していたが、墳丘崩石が流れ込んだような状態ではなく、古墳を想定するのは難しいと思われる。他には古墳盛土の土取り痕などが想定されるが、それを裏付ける根拠は得られていない。

遺物は土玉と金属製品を図示した。土玉1は細い孔が貫通する表面を研磨した酸化焰焼成の飾り玉で、表層の出土で確実にこの遺構に伴うものか判断できない。彎2は西隅底部直上で出土したもので、引手部分3が接合できなかったが同一個体と思われる。左側銜先の環に鏡板装着の痕跡がわずかに観察できるようで、板状の鏡板装着が想定されるが不明瞭である。4は彎引手を小さくしたような不明鉄製品で埋没土内の出土である。As-B層との上下位置は明らかではない。2・3と異なり環部分は曲げて作り出したもので、端部は繋がっていない。図示した以外の出土遺物はない。

5 その他の遺構と遺物

1 55号墳前の道路状の遺構(第81図 PL.28-2)

55号墳南西側の傾斜面には墓道から南西側へ繋がるように、側溝状の施設に挟まれた区画があり、両側溝を作う道路状の外観を呈している。この道路状部分は地山の傾斜に沿って、等高線にほぼ垂直に南西方向へ低く傾斜している。全体は2もしくは3条の溝と3基のピット状の窪みからなっている。両側溝状施設に挟まれた道路本体が想定される地点は路面幅80cm、側溝芯々間距離で105cmを測るが、硬化面は確認できず確実な道路とできる施設ではない。また両側溝の内側と外側で地山の高さ・傾斜に変化はない。

各施設が55号墳に直接伴うものか区別できないが、墓道埋没土と本施設の溝埋没土は類似している。反面、溝の軸方向が墓道部から若干逸れていることや、側溝南端が羨門付近から1.8m、墓道部南端からでも約1m低い位置に達していること、および埋没土に礫の混入がなく締まりが全くないことから後出する可能性の高い施設と考えたが、明確な根拠は得られていない。出土遺物は微細な破片を含めても確認されなかった。

本遺構に伴う各施設は以下のとおりである。

溝状施設

溝1 北西側にある本道路状遺構の中で最も大きく、特徴的な施設である。西側に膨らむように小さく湾曲している。平面的長さ270cm、幅35cm前後で深さは4～12cmを測る。軸方向はN-29°Eで55号墳前庭より4°西側に振れている。埋没土に流水の痕跡や掘り直し・踏み固め等の痕跡は確認できない。底面は弱く波打つような凹凸があり、底面レベルは地山傾斜に沿って南西側へ低くなっている。

溝2 1号溝南東側に平行して走向するほぼ直線的な溝であり、同溝同様地山傾斜に沿って谷側へ向かって傾斜している。本溝の南西側は1号溝より15cm低い標高まで達している。平面的な長さ91cm・幅20cm前後で小規模だが最大深さ14cm前後あり深度には富む。軸方向は55号墳前庭と同じN-33°Eで、1号溝より東側に振れ、55号墳墓道に近似している。

溝3 2号溝の北西側18cmに近接している。2号溝に繋

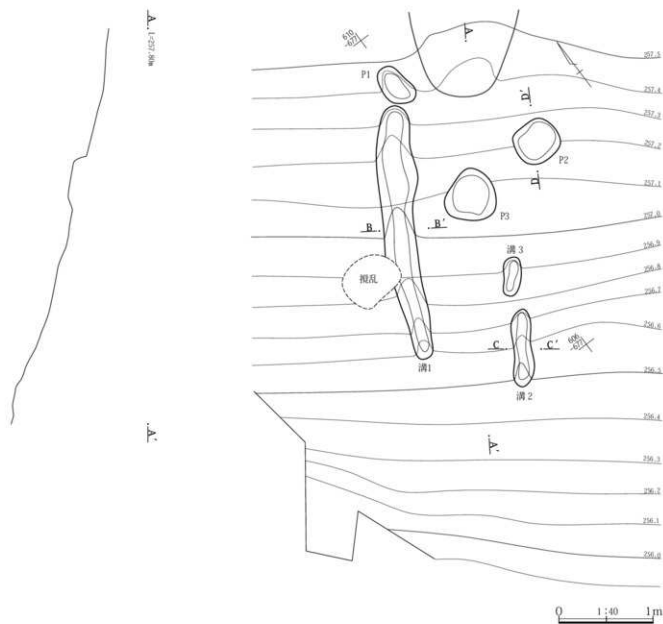
がる施設と考えたが長さ42cm、幅15cm、深さ5cmの規模でピットとなる可能性もある。残存範囲の軸方向はN-44°Eで東へ大きく振れている。

ピット状施設

P1 溝1の北東側に接する位置にあり、同溝の延長部分の可能性もある。長軸47cm、短軸28cmの不整楕円形を呈している。地山傾斜の上側にあたる北西側からの深さは10cm前後あり、1号溝と同規模である。

P2 55号墳前庭先端の南側50cmの位置にあり、溝3の軸方向の延長部分にわずかにかかっている。溝1から105cmの距離があり、同溝から最も離れた施設となる。東西軸長47cm、南北軸長42cmの不整隅丸方形を呈している。地山傾斜上側からの深さは20cmを測る。埋没土は溝1と同じで締まりに欠ける。底面は平坦で地山傾斜に沿わず、ほぼ水平である。

P3 路面が想定される部分の中央付近にあり、他の施設と同様に扱えるか不明な施設である。東西軸56cm、南北軸53cmの不整形を呈している。地山傾斜上側からの深さは16cmを測るが南側の壁高はわずかで不明瞭である。底面の凹凸は少ないが、地山傾斜に沿って南西側へ低く若干傾斜している。



溝1

.B., l=257.10m .B'



P 2

.D., l=257.40m .D'



溝2

.C., l=256.80m .C'



溝1・ピット2

1 黒褐色7.5YR2/2 粘源不明の黄色軽石粒を含む壤土。締まり欠く。

0 1:20 50cm

第81図 墓道状の遺構

2 55号墳出土近世銭貨と墓坑(4号土坑)
(第82・83図 PL.41・42)

55号墳からは石室内を中心に銅銭と鉄銭を出土した。銅銭は18点ですべてを図示した。内訳は寛永通寶16点、文久永寶1点、永樂通寶と思われる破片1点で、近世に集中している。完形品15点、ほぼ完形品1点で残存状態は良かった。

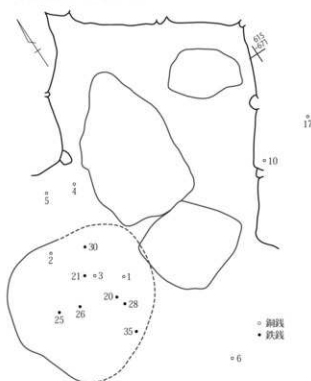
鉄銭は16点を図示したが、その他に小破片13片(重量で8.8g)がある。錆化や破損のため銭名全体を判読できたものはないが、部分的な判読から寛永通寶であることが確認できる。完形および完形に近い個体は11点で銅銭とは残存状況が異なっている。他に雁首銭と考えられる潰れた銅製煙管19が埋設土内で出土している。

石室内外の銭貨出土位置をみると、南東壁石室石材上出土例があり、石室内へ崩落した天井石下からは出土していない。天井石等の崩落後に銭貨が混入しており、古墳石室内を賭場として使用した痕跡ではないことが分かる。反面、石室内銭貨の出土位置は石室床面に近いものもあり、銭貨混入が天井石崩落後あまり時期を置かない段階であることも分かる。銭貨は近世墓に副葬された六道銭と考えられ、複数の埋納があったはずである。石室の破壊が墓域整備を目的として行われた可能性も考えられる。

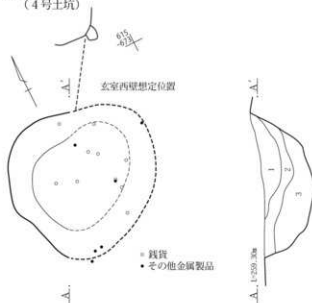
4号土坑(第82図 PL.41)

調査段階で崩落天井石の西側に不整形形を呈した施設を想定し、整理段階で4号土坑とした。礫の混入が少なく炭化物の多い部分として把握したが、玄室内に相当する部分は不明瞭だった。この位置からは寛永通寶(銅銭と鉄銭が混在)がまとまって出土しており、その範囲から想定した遺構範囲を破線で示した。径1.5m前後の規模となる。出土位置が記録された銭貨15枚のうち銅銭3枚と鉄銭7枚の合計10枚がこの範囲内の出土であり、特に鉄銭は全点がこの範囲内の遺物である。範囲の西側部分には灰や炭化物粒混じりの層が広がる面(PL.41-1)があり、一部座棺の底面付近と想定した。しかし土坑内の銭貨出土高は石室内側(南東側)に向かって30cm以上深くなり、土坑底面が水平でなかったか別の墓坑があったと想定される。単独の土坑であれば座棺のような埋葬施設とは考えにくく、銭貨の点数を併せると複数の墓坑の重複であった可能性は高いと考える。

55号墳石室内の銭貨出土位置



55号墳内土坑
(4号土坑)

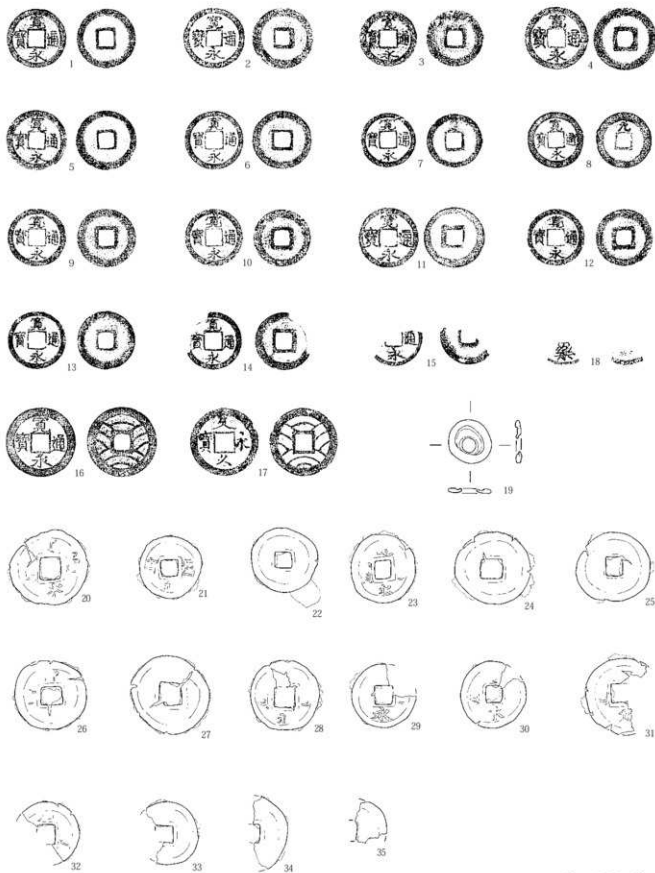


4号土坑

- 1 附7.5YR4/6 根による擾乱多い。不細い礫混じる。幅まり欠く。
- 2 黒曜7.5YR3/1 炭化物や灰が混じる。銭貨はこの層内から出土。
- 3 明曜7.5YR3/4 炭化物を少量含むやや幅まりある層。

0 1:40 1m

第82図 4号土坑と遺物出土状態



第83図 4号土坑出土遺物

第三章 調査の内容

3 土坑

調査で土坑として扱ったのは調査区東隅で確認した3基、55号墳墳丘上の1基の併せて4基である。このうち墳丘上の墓坑(4号土坑)は前節で別に記した。1～3号土坑はいずれも埋没土にAs-Bが多量に含まれる中世以降の遺構である。

1号土坑(第84図 PL.40-4)

位置 563-615・616G 耕作や土取りの影響で地山の凹凸の激しい一画にある。

規模(cm) 長軸94×短軸48×深さ12 上面は埋没土ごと掘削されていて本来はさらに深度のある土坑である。

軸方向 N-48°E

その他 南西隅が不明瞭だが、比較的整った長方形を呈している。底面はやや不整で東側が低く、西隅と5cmの比高差がある。出土遺物はない。

2号土坑(第84図 PL.40-5)

位置 564・565-614～616G 1号土坑の北側1mで、南東隅窪地(本文92頁)に接している。1号土坑同様上面の掘削の激しい一画にあり上面も削られている。

規模(cm) 長軸140×短軸(55)×深さ24

軸方向 N-62°E

その他 南側を失っている。北辺は内湾して糸巻状の平面形状が想定される。底面は比較的平坦で中央付近はやや低くなる傾向がある。出土遺物はない。

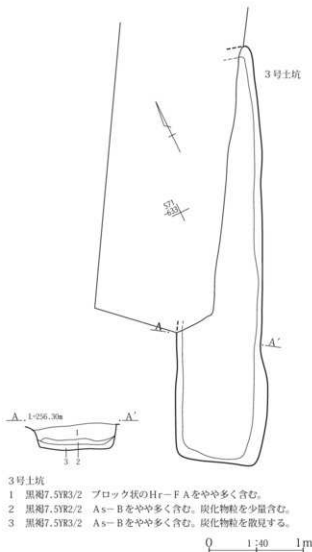
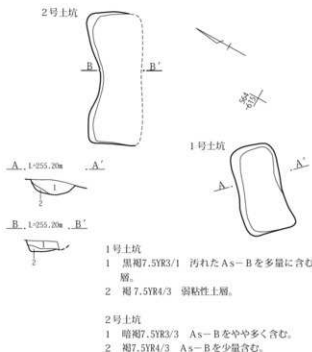
3号土坑(第84図 PL.40-6)

位置 568～572-631～634G 54号墳基壇の北東側縁部に接する位置にある。基壇を意識した位置に掘り込まれている。

規模(cm) 長軸442×短軸89×深さ29

軸方向 N-27°E

その他 試掘トレンチで北側を失っているが、細長い種イモ貯蔵穴と思われる遺構である。底面は比較的平坦で地山傾斜に沿って北東側が低く、南西隅と12cmの比高差がある。混入品と思われる須恵器壺甕類小破片を1点出土している。



第84図 土坑

4 遺構外の遺物(第85図 PL.42)

遺構に伴わない古代以降の遺物をここで一括して扱った。石製品5点と金属製品3点を図示した。図示した以外にも金属製品は近世以降と思われる微細な鉄破片は多かった。陶磁器片もわずかに出土したがいずれも微細破片で図示できなかった。石製品は全てを図示した。

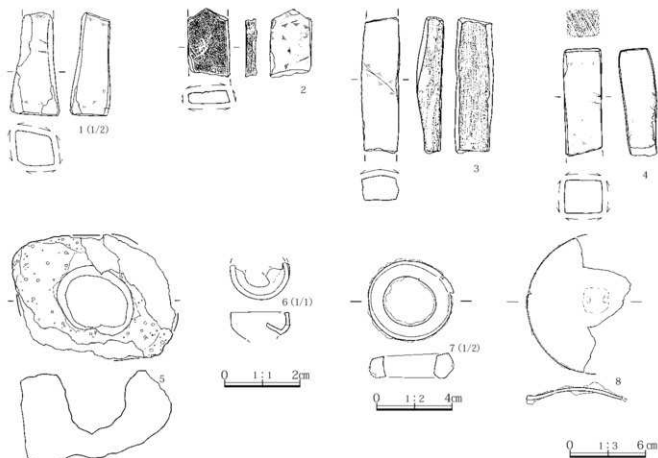
石製品は砥石が4点(1~4)出土した。いずれも手持ち砥石で2以外は厚みのある中世以降の製品と思われる。5は二ツ岳軽石の1辺を深く抉った容器状の遺物で、中近世に骨臓器として使用されることがある。歪みが大きく近世遺物と思われるが、五輪塔の地輪であった可能性もある。

金属製品は3点を図示した。いずれも55号墳石室内の出土である。雁首6は近世墓の副葬品の可能性がある。不明鉄環状品7は洋鉄製のようで、不明落し蓋状品8は铸铁製品である。どちらも古墳に伴う遺物ではない。

5 縄文時代の遺物(第86図 PL.43)

金井古墳群の墳丘周辺部から、少量ではあるが縄文時代の遺物が出土している。調査地の地形は南方向に強く傾斜しており、地山から上の堆積層は後世の土取りの影響もあって薄いものであった。現地表面から20cm程度で地山になるため、遺物の包含層はごく薄く、出土した遺物は墳丘盛土に含まれるものが大半で、層位的に確認することは出来なかった。地山も榛名山からの泥流に伴う大型礫が多く含まれることから、縄文時代においては安定した土地ではなかったようで、遺構についても確認できなかった。

検出された遺物は、縄文早期後半の条痕文土器、前期終末の諸磯c式以降の土器、中期後半の加曾利E式土器、石鏃、剥片類である。これらの検出された遺物のうち状態の良いものを図示した。検出された土器は、いずれも小破片で時間的にも間隔の開いているものである。調査



第85図 遺構外の近世遺物

区内から遺構が確認されておらず、時間的にも間隔の開いていることから周辺に遺構の存在が予想されるが、傾斜地であることから周辺より流れ込んだものと考えられる。

1から6は、55号墳周辺で採取された条痕文土器である。1から3は、沈線による格子目が施文されている。交点に刺突を持つものもあることから、鶴ヶ島台式土器に近い様相を示す。小片であるため、口縁部文様帯の屈曲など不明な部分もあるが、施文状況などから鶴ヶ島台式から茅山式の範疇に入る土器と思われる。

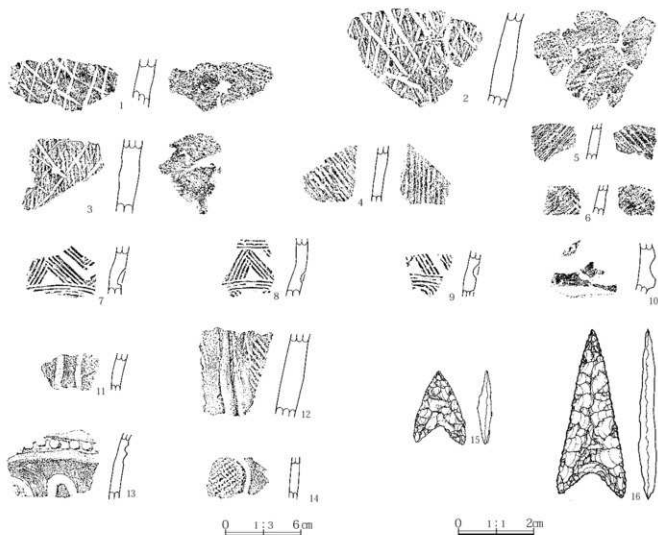
7から9は54号墳墳丘下からまとまって出土したもので同一個体と思われる。集合沈線により鋸歯状に施文し、文様の間に印刻を持つことから、諸磯c式新段階以降の特徴を持つ土器である。

10から14は、55号墳盛土内出土の加曾利E式土器である。11・12は、直線的な懸垂文、13・14は逆Uの字状の

文様を持つ等の特徴から、加曾利E式後半段階の土器と思われる。

図示した以外に15片の破片を出土している。表面が磨滅して文様が不明な破片や微細な破片以外は、すべて図示した土器と同時期の破片である。

2点の石鏃は、時期を確定できないがおそらく、検出された前期以降、中期の土器に関係するものと思われる。図示した以外に黒色頁岩製の加工痕のある剥片2点が出土している。



第86図 縄文時代の遺物

第四章 分析

1 分析の目的

金井古墳群整理過程の中で、2種類の分析作業を実施した。

その1は54号墳石室内出土の人骨および歯を鑑定することで、生物考古学研究所の横崎修一郎氏に分析を依頼した。床面直上から出土した骨は小破片であったが、人骨であることの確認を目的とした。歯は奥壁際および周辺の床面直上土を篩って検出した。エナメルキャップ部分のみの残存で、出土点数も7点のみであるが、複数の埋葬個体が確認できるか探ることを最大の目的とし、年齢・性別などその他の情報を得ることを付帯的な目的とした。

結果的に54号墳出土歯には1カ所のみだが部位に重複が確認できた。54号墳の羨道部分の舗石面は追葬に伴って改装された痕跡となる可能性をより強くすることができた。骨は人骨(四肢骨)であることが確認できたが、それ以上の知見は得られなかった。

その2は石室内出土金属製品に遺存する木質の顕微鏡下の観察で、当事業団保存処理室の関邦一が担当し、74点の遺物を対象とした。釘の他、鉄鎌や刀子類の茎部分および弓飾り金具の4種類の遺物に見られた木質痕で、木材の種類その他、釘ではその使われ方等、多様な視点での分析を試みた。木質や植物痕は鉄錆で固まったものがほとんどで、繊維そのものが残存するものではないが、釘が打たれた木棺と思われる材が広葉樹であることや、その位置の木材の木取りなどで多くの知見を得た。

2 石室内出土の人骨と歯

はじめに

金井古墳群は、群馬県北群馬郡榛東村広馬場に所在する。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(当時)による発掘調査が、平成24(2012)年4月から同年8月まで実施された。本遺跡では、54号古墳と55号古墳の2基の古墳が検出されている。時代は、出土遺物から7世紀前半に比定されている。本古墳の石室より人骨が出土したので、以下に報告する。

出土人骨は、水洗後、乾燥させてから観察・計測・写真撮影を行った。なお、出土歯の計測方法は、藤田の方法に従った(藤田 1949)。また、出土歯の歯冠計測値の比較は、松村を用いた(Matsumura 1995)。

1.54号古墳

54号古墳は、直径約16mの墓壇上に直径約10mの墳丘を持つ円墳である。時代は、出土遺物から7世紀前半に比定されている。石室は、長さ(南北)約2.6m、幅(東西)約1.3mの規模である。なお、本古墳は盗掘を受けているが、金環4点が出土している。

(1)人骨の出土部位

人骨の出土部位は、ほとんどが遊離歯の歯冠部であり、四肢骨が2点である。しかしながら、四肢骨は破片であるため、部位同定はできなかった。

(2)被葬者の頭位

出土位置の記録のある歯2本が石室の北側から出土しているため、被葬者の頭位は北であると推定される。

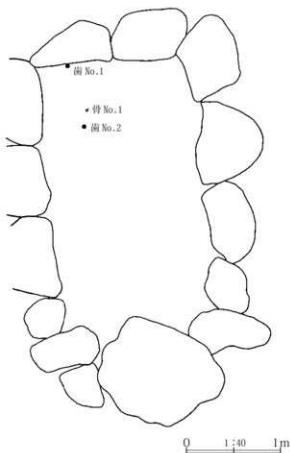
(3)被葬者の個体数

出土遊離歯の内、下顎右第3大臼歯(M3)に重複部位が認められたため、被葬者の個体数は、少なくとも2個体であると推定される。このことは、金環が4点出土していることから支持される。

(4)被葬者の性別

歯冠計測値を東日本古墳時代人及び西日本古墳時代人と比較すると、少なくとも、男性1個体・女性1個体であると推定される。なお、松村博文による研究では、歯冠計測値は全体的に西日本古墳時代人の方が東日本古

墳時代人骨よりも大きい傾向がある。これを性別で見ると、男性では西日本と東日本では統計学的に有意な差はないが、女性では東日本が西日本よりも有意に小さい(Matsumura 1990・1995)。このことは、男性においては西日本及び東日本において大きな歯を持つ渡来系の形質を保ち続けているのに対し、女性、特に東日本においては、小さな歯を持つ東日本の形質の影響を受けていることを示している。



第87図 金井古墳群54号墳石室内人骨出土位置図(上が北)

(5)被葬者の死亡年齢

出土遊離歯の咬耗度を観察すると、咬耗があまり無いマルティンの0度の状態と咬耗がエナメル質のみで象牙質が露出してないマルティンの1度の状態である。したがって、被葬者の死亡年齢は、約10歳代後半から20歳代であると推定される。

これは本報告者の経験則であるが、群馬県出土古墳時代人骨の歯の咬耗度は全体的に低い事例が多く、象牙質が点状に露出するマルティンの2度や象牙質が全面に露出するマルティンの3度の状態のものはほとんど無い。

これは、実際に若くして亡くなっているのか、あるいは、古墳被葬者が軟らかい食物を摂取していたために咬耗があまり進まなかったのかのどちらかであると推定される。この点は、将来的に食性分析を行うことである程度解決される問題であると推定されるが、いずれにしても、将来の分析を待ちたい。

(6)被葬者の古病理

出土遊離歯には、俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は認められなかった。

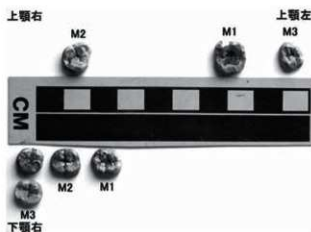


写真1.金井古墳群54号墳出土遊離歯咬合面観

表7 金井古墳群54号墳出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	金井54号古墳		東日本古墳※		西日本古墳※			
				Matsumura, 1995		Matsumura, 1995			
		右	左	♂	♀	♂	♀		
上	M1	WD	—	11.5	10.60	10.09	10.85	10.42	
		BL	—	破損	12.10	11.44	12.31	11.76	
	M2	WD	—	10.0	—	9.92	9.51	9.81	9.68
		BL	—	11.9	—	11.77	11.30	12.10	11.67
	M3	WD	—	8.8	—	—	—	—	—
		BL	—	10.6	—	—	—	—	—
下	M1	WD	—	11.4	—	11.67	11.20	11.91	11.43
		BL	—	10.5	—	11.28	10.81	11.40	10.81
	M2	WD	—	11.1	—	11.21	10.71	11.39	11.03
		BL	—	10.4	—	10.79	10.28	10.96	10.32
	M3	WD	9.9	10.2	—	—	—	—	—
		BL	9.7	9.8	—	—	—	—	—

註1.計測値の単位は、すべて、「mm」である。

註2.歯種は、M1(第1大臼歯)・M2(第2大臼歯)・M3(第3大臼歯)を意味する。

註3.計測項目は、WD(歯冠近遠径)・BL(歯冠唇舌径)を意味する。

註4.「破損」とは、歯冠が破損しており計測不能であることを示す。

註5.「※」は、MATSUMURA(1995)より引用。なお、MATSUMURA(1995)には、第3大臼歯のデータは無い。

2. 55号古墳

55号古墳は、直径約19.5mの墓壇上に直径約12mの墳丘を持つ円墳である。時代は、出土遺物から7世紀前半に比定されている。石室の南半分は削られて近世に墓地としたことが推定されるという。なお、出土遺物は、鏝・真金具・鞍縁金具・杏葉・辻金具等の馬具、弓飾り金具、金環4点が出土している。

(1) 人骨の出土部位

人骨は、上腕骨・大腿骨・脛骨等の四肢骨片が出土しており、歯は1点も出土していない。

(2) 被葬者の頭位

四肢骨片が、石室の北東部から出土しているが、盗掘あるいは追葬の際に移動された可能性が高い。歯は1点も出土していないので、被葬者の頭位は不明である。

(3) 被葬者の個体数

出土四肢骨は、すべて破片であるため、被葬者の個体数は不明である。しかしながら、2セットと推定される金環が4点出土しているため、被葬者の個体数は2個体である可能性が高い。

(4) 被葬者の性別と死亡年齢

出土四肢骨は、すべて破片であるため、被葬者の性別は不明である。死亡年齢も同様に不明であるが、恐らく成人であると推定される。

まとめ

群馬県北群馬郡極東村広馬場に所在する、金井古墳群の54号墳と55号墳の石室から人骨が出土した。時代は、出土遺物から7世紀前半に比定されている。54号墳からは、約10歳代後半から20歳代の男女1体ずつが出土した。55号墳からは、恐らく成人と推定される性別不明の人骨が出土した。遺物である金環が2セット検出されていることから2個体である可能性が高いが、人骨からは推定できなかった。

引用文献

- 藤田恒太郎 1949 「歯の計測基準について」『人類学雑誌』、61:1-6。
 MATSUMURA, Hirofumi 1990 Geographical variation of dental characteristics in the Japanese of the Protohistoric Kofun period, Journal of Anthropological Society of Nippon, 98: 439-449.
 MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum Monographs No. 9, National Science Museum.

3 金属製品に遺存する木質と植物痕について

54号墳および55号墳から出土した金属製品には、錆化に伴いその跡に取り込まれる形で痕跡をとどめる木質と植物が検出されたため実体顕微鏡にて観察を行った。出土した鉄釘の内23点に木質が見られたが、ほとんどは破損し頭付近・先部分等の破片となり全体を観察できる資料は2点のみである。

頭部分が遺存する釘はすべて板目材側面に打ち込まれ尚且つ頭は木材の軸方向に対し直角方向に曲がる形で打ち込まれている。釘先端部では木質は木口に打ち込まれた形で痕跡を留める。完形の釘2点で頭部分は板目材側面に先端部は木口に打ち込まれる形で木質が遺存するが、その境では木質が遺存しない部分があり木材の厚さは特定できなかった。

鉄鏝では棘と茎の境界に鉢巻状に紐状植物痕が廻る状況が1点に見られる。また、茎の中ほどから先端にかけては紐状植物が幾重にも巻かれ、一部にはX状クロスして巻かれている状況がしばしば観察される(写真②)。これは先端に向け細くなる茎と矢柄を密着させるための工夫と考えられる。このほか棘近くの茎側面および茎の側面にまばらに矢柄の痕跡と見られる植物痕が見られる(写真③)。

刀子3点の茎にも直交する形で紐状植物が巻かれている、その一部では植物痕の上にわずかに木質がみられる(写真④)。また54-11では紐状植物の巻かれた茎の両側面に狭台形の木材の痕跡が見られ、その輪郭部分は立ち上がりが見られることから狭台形の木材を当てていると考えられる。

弓飾り金具10点では、中央の軸部側面に木質が遺存する。一部材質は不明瞭だが広葉樹材が多く環孔材も見られ、55-40では軸部側面で木材繊維が折れ曲がること、一部微細な虫食いが見られる等、製作技法および使用環境等を示唆する情報が得られた。

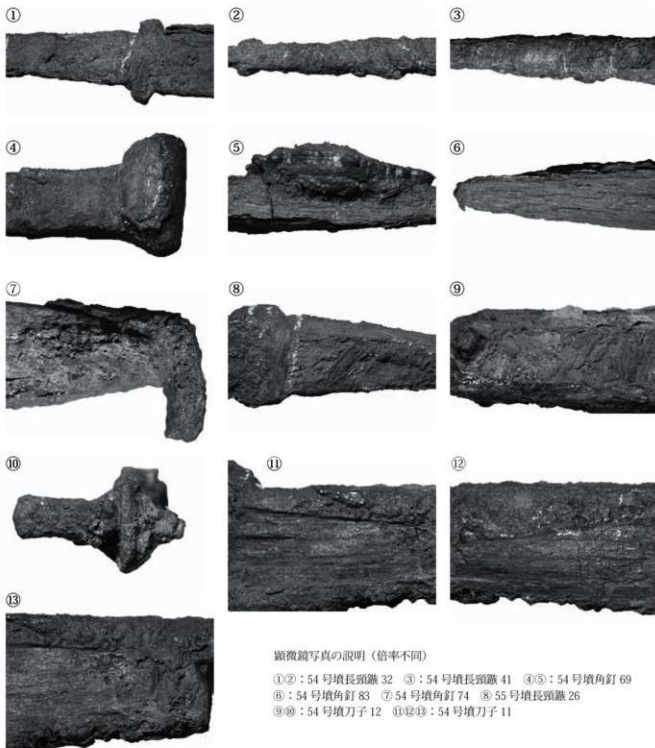
第四章 分析

表 8 金属製品遺存植物観察表

器種	古墳・遺物No.	部位・形状	木質痕跡	材質	備考
角釘	54-80	先端破片	板目に近い板目	広葉樹	木口面に打ち込む。
角釘	54-81	先端破片	板目	広葉樹	木口面に打ち込む。
角釘	54-82	先端破片	板目	広葉樹	木口面に打ち込む。
角釘	54-83	先端破片	板目	広葉樹	木口面に打ち込む。
角釘	54-84	両端欠破片	不明瞭		
角釘	54-85	両端欠破片	不明瞭		
角釘	54-86	両端欠破片	板目	広葉樹	板目側面に打ち込む。
角釘	54-87	両端欠破片	板目	広葉樹	板目側面に打ち込む。
角釘	54-88	両端欠破片	板目	広葉樹 穿孔材	板目側面に打ち込む。
角釘	54-89	両端欠破片	板目	広葉樹 穿孔材	板目側面に打ち込む。
角釘	54-90	両端欠破片	板目	広葉樹 穿孔材	板目側面に打ち込む。
角釘	54-91	両端欠破片	不明瞭		
角釘	54-92	先部分	不明瞭		
角釘	54-95	頭近く破片	不明瞭		
角釘	54-99	完形	不明瞭		
角釘	54-60	両端欠破片	不明瞭		
角釘	54-62	ほぼ完形	不明瞭		
角釘	54-63	ほぼ完形	不明瞭		
角釘	54-64	頭部欠く	不明瞭		
角釘	54-65	頭近く破片	板目	広葉樹	頭板目方向に曲がる。
角釘	54-66	頭近く破片	板目	広葉樹	頭板目方向に曲がる。
角釘	54-67	頭近く破片			
角釘	54-68	ほぼ完形			
角釘	54-69	完形	板目	広葉樹	頭部分は板目側面に打ち込み、頭は板目方向に曲がる、先部分は木口部分に打ち込む。
角釘	54-70	完形	板目	広葉樹	板目側面に打ち込む。
角釘	54-71	先部分を欠く	不明瞭		
角釘	54-72	先部分を欠く	不明瞭		
角釘	54-73	頭近く破片	板目	広葉樹	側面に打ち込む。頭板目方向に曲がる。
角釘	54-74	頭近く破片	板目	広葉樹	側面に打ち込む。頭板目方向に曲がる。
角釘	54-75	頭近く破片	板目	広葉樹	側面に打ち込む。頭板目方向に曲がる。
角釘	54-76	頭近く破片	板目	広葉樹	側面に打ち込む。頭板目方向に曲がる。
角釘	54-77	両端欠破片	板目	広葉樹	側面に打ち込む。
角釘	54-78	両端欠破片	板目	広葉樹	側面に打ち込む。
角釘	54-79	頭近く破片	板目	広葉樹	側面に打ち込む。頭板目方向に曲がる。
角釘	55-115	頭近く破片			
角釘	55-123	両端欠破片	板目	広葉樹	側面に打ち込む。
角釘	55-124	両端欠破片	板目	広葉樹	側面に打ち込む。
角釘	55-125	頭近く破片	板目	広葉樹	側面に打ち込む。
刀子	54-9	先端を欠く			
刀子	54-10	葉付近破片		広葉樹	葉に沿って全体に縦方向に紐状の植物が密に巻かれる。葉の縁側では紐状の植物の上部に木材痕跡。
刀子	54-11	葉付近破片			葉に沿って全体に縦方向に紐状の植物が密に巻かれる。側付近側面では紐状の植物の上部に木材痕跡、目釘には広葉樹材が腐化し残存。
刀子	54-12	葉付近破片		針葉樹	葉側面に紐状に紐状の植物。目釘には針葉樹材が腐化し残存。
鏝	54-93	鏝			斜めに巻かれている。
鏝	55-26	葉付近破片			鏝下部に鉢巻状に紐状の植物。鏝途中には斜めに紐状の植物。
鏝	54-15	先端付近破片			のかつぎ部側面にななめに付着痕跡。
鏝	54-26	両端欠破片			鏝下部に鉢巻状に紐状の植物。
鏝	54-28	先端欠破片			鏝下部に鉢巻状に紐状の植物。
鏝	54-29	先端欠破片			鏝から 1 cm程に鉢巻状に紐状の植物。側面にはその上に矢柄とみられる紐状の植物が残存。
鏝	54-31	先端欠破片			鏝下部に鉢巻状に紐状の植物。
鏝	54-32	先端欠破片			鏝下部に鉢巻状に紐状の植物。鏝下部ではX状に斜めにクロスする形で紐状の植物が見られる。
鏝	54-33	両端欠破片			鏝中ほどに斜めにわずかに紐状の植物あり。
鏝	54-35	両端欠破片			鏝下部に鉢巻状に紐状の植物。
鏝	54-24	先端破片			先端付近表面に平織布の痕跡。
鏝	54-37	両端欠破片			鏝下部に鉢巻状に紐状の植物。
鏝	54-38	両端欠破片			鏝全体に上下がり斜めに連続して紐状の植物あり。
鏝	54-39	両端欠破片			鏝下部に鉢巻状に紐状植物と矢柄とみられる紐状の植物が一部残存。
鏝	54-41	両端欠破片			鏝に横方向の紐状植物と矢柄とみられる紐状の植物が一部残存。
鏝	54-42	両端欠破片			X字状にクロスする紐状の植物。
鏝	54-43	両端欠破片			鏝下部に鉢巻状に紐状の植物。
鏝	54-46	両端欠破片			鏝下部に鉢巻状に紐状植物と側面に矢柄とみられる紐状の植物。
鏝	54-47	両端欠破片			左下がり斜めに紐状の植物。
鏝	54-50	葉付近破片			葉端部付近に横に紐状の植物。
鏝	54-51	葉付近破片			葉端部付近に横や斜めに紐状の植物。
勺飾り金具	54-53	ほぼ完形			側面に腐化した木材が残存。

3 金属製品に遺存する木質と植物痕について

器種	古墳-遺物No	部位・形状	木質痕跡	材質	備考
弓飾り金具	54-55	一部欠く			側面に錆化した木材が残存。
弓飾り金具	54-54	ほぼ完形			側面に錆化した木材が残存。
弓飾り金具	54-56	両端欠く		広葉樹	側面に錆化した広葉樹材が残存。
弓飾り金具	54-57	両端欠く		広葉樹	側面に錆化した広葉樹材が残存。
弓飾り金具	55-38	ほぼ完形		広葉樹	側面に錆化した広葉樹材が残存。
弓飾り金具	55-39	1/2		広葉樹	側面に錆化した木材が残存。
弓飾り金具	55-42	破片			側面に錆化した木材が残存。
弓飾り金具	55-40	1/2		広葉樹	側面に錆化した広葉樹材が残存。木材には微小な虫食い穴あり、木材組織が鉄製品側面でも曲がり木材繊維を押し広げるように押し込まれている(打ち込まれる)。
弓飾り金具	55-43	1/2		広葉樹	側面に錆化した広葉樹材が残存。



顕微鏡写真の説明 (倍率不同)

- ①②: 54号墳長頸鎌 32 ③: 54号墳長頸鎌 41 ④⑤: 54号墳角釘 69
 ⑥: 54号墳角釘 83 ⑦⑧: 54号墳角釘 74 ⑨: 55号墳長頸鎌 26
 ⑩⑪: 54号墳刀子 12 ⑫⑬: 54号墳刀子 11

第V章 総括

今回、金井古墳群の北隅に位置する榛東村54号墳と榛東村55号墳の2基の小円墳(以下は54号墳・55号墳とする)を調査した。この調査と整理作業の過程で明らかになった内容と、課題として今後の検討に委ねたい点を以下に要約する。

54・55号墳の共通点と相違点

道構

2基の古墳はともに周辺を窪めて地山を基壇状に掘り残した上に円形の溝を掘って墳丘裾部分の根石の位置を決めている。葺石を用いた円墳であるが、葺石の範囲は明瞭ではない。両者とも自然石乱石積みの両袖型横穴式石室で、石室内出土遺物には長頭鏃・弓飾り金具・釘など共通点が多い。

墳裾外縁下に廻る溝は区画溝のような形状で、その上から葺石根石が積み始められる点は共通している。54号墳では垂直に積上げる部分があり、外護列石状という表現を用いた。55号墳は根石部分に大きな礫を使い、その上側に置く葺石と明らかに大きさが異なっている。また奥壁裏側にあたる根石規模の2石が30cmほど浮いた状態になっており、一度据えたかあるいは用意したまま据えなかった根石を後から置き直したようにも見える。幅

1.3mの範囲で作業路としては狭いが、石室石材は奥壁側から搬入しているため、他の根石の後から据えられたと考えられないだろうか。

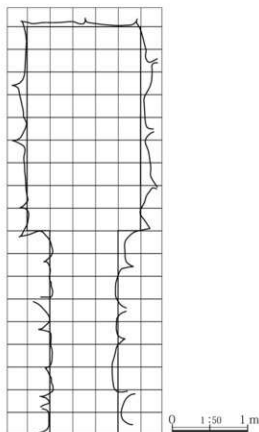
墳丘規模にあまり差のない両古墳であるが、いくつかの相違点をあげてみる。最も顕著なのは石室前面の施設で54号墳では前庭状、55号墳では墓道状である。54号墳の前庭も前垣部分のない「ハ」の字状に開く過渡期的な施設である。

石室は両墳とも両袖型横穴式石室で近似したものと予想されるが、細かな相違点が多い。石室構築方法では54号墳が石室石材を直接石室掘り方面に据えているのに対し、規模が若干上回る55号墳は根石(下込め石)を敷いた上に石室石材を積んでいる。また54号墳は左側の奥壁・側壁を最初に据えているのに対し、55号墳では右側の奥壁・側壁から構築を始めているようである。

なお、54号墳石室を30cm方眼上に据えると、石室設計の企画性が看取できる(第88図)。仮に30cm 1尺とすると奥壁幅5尺、羨道幅は3尺で東西両玄室壁より1尺ずつ内側、玄室および羨道の長さが9尺となる。また西壁の石室石材は玄室のみでなく羨道部分も企画線上に丁寧に配置したことが確認できる。

表9 54・55号墳一覧

項目		54号墳	55号墳	備考	
道構	墳丘規模	墳丘規模	10.3m	12.4m	
		基壇規模	上段16m前後、下段25m前後	上段14m前後、下段16～20m前後	54号墳下段は後伊弉丹の可能性。
	石室	周堀	確認できない	一部(北西側)	
		形態	両袖型横穴式石室	両袖型横穴式石室か	
		軸方向	N-2°E	N-34°E	
		全長	5.20m	5.10m	奥壁から羨道先まで
		奥壁長	1.66m	2.05m	
		壁材最大重量	900kg	1100kg	
		掘り方	6.3×403×0.6前後	6.1×4.5×0.1前後	長さ×幅×深さ(単位m)
		石室前	前庭	墓道	
その他	羨道側から盜掘か	近世に石室を破壊			
金属製品	刀装具	鏝	2点	金脚張り	54号墳に中空・小型が各1点混じる。
		鍔	2点	金脚張り	共に刀身・柄頭等を欠く。
	弓飾り金具	鍔	2点	2点	
		実測点数	40点	21点	
	鉄鏃	無頭鏃	なし	1点	
		長頭鏃頭身	14点以上	6点	
	釘	実測点数	37点	14点	
		直向折れ	7点	3点	
	非共通遺物	小刀・刀子4点、籬子	鞍縁金具・杏葉2点・箭・雲珠 他	55号墳その他の馬具に鞍具・留金具・辻金具・釧など	
	土器	前庭・墓道出土	土師器杯、須恵器提瓶	須恵器甕	
石室出土		小破片のみ	須恵器高杯・瓶・甕		



第88図 55号墳石室プランの模式図

遺物

両古墳は副葬品にも類似点が多い。

弓飾り金具は6点ずつ出土しており、鉄鏃は両古墳とも多数出土している。弓と矢がセットで副葬されていたことが分かる。弓飾り金具の出土古墳はあまり多くなく、榛名山麓・高崎地域では綿貫観音山古墳の10点が顕著な例であるが、他には奥原古墳群の13号墳の2点、榛東村39号墳1点例など点在する状況である。隣接する小円墳でともに複数の弓飾り金具を出土するのは稀な例であろう。

刀身の出土はないが両古墳ともに鏝など刀装具の出土がある。54号墳は銀象旅、55号墳は金鍍金と形態は異なるが、弓・矢とともに武器類を揃えた副葬品である。

群馬県内の鏝に銀象旅を施す事例は1998年の段階で27例が確認され(文獻⑥)、その後、川場村西川原古墳群B区1号墳等からの出土が知られている。この中で、無窓で渦巻の意匠が施された事例は少なく、桐生市『上毛古墳綜覧』(以下『綜覧』と略す)桐生市2号墳例、川場村西川原古墳群B区1号墳例がある。象旅の施された鏝について、文様の系列の整理と編年作業を行った橋本博文氏の研究成果(文獻③)によれば、54号墳資料は、氏の分類した渦文系列に含まれるもので、無窓で文様配置の崩れ

た桐生市『綜覧』桐生市2号墳例を編年の第五段階(7世紀初頭)にあてている。

55号墳の金銅製の無窓の鏝については、類例が『綜覧』高崎市233号出土の頭椎大刀や伝高崎市乗附町出土主頭大刀の刀装具に認められる。このことから本資料も頭椎大刀、主頭大刀などの金属装の柄頭に伴うものであった可能性が考えられる。

鉄鏃は55号墳から1点無茎鏃を出土しているが、他は両古墳とも長頭鏃で棘状鬚を伴うものがあり、共通している。

釘はほぼ直角に折れ曲がったものが両古墳に共通して見られる。揃って同じように屈曲していることから意図的に折り曲げたものと思われる。玄室側壁に吊り手金具を据えた例は綿貫観音山古墳で報告されているが、本古墳例ははるかに短いもので、木棺に装飾を掛ける際の金具として使われたものと思われる。曲がりのない釘は遺存する木質から厚い木材に打ち込まれたものが多く、木棺木材製作に使われたものと想定できる。

55号墳には馬具の出土が顕著である。

馬具副葬の古墳は群馬県内では多数見られるが、特に高崎市周辺はその中でも出土例の多い一画である。1996年の集成段階(文獻⑤)ですでに高崎市で71基、旧群馬町14基、吉岡町2基、榛東村4基の馬具出土古墳が報告されている。

鞍縁金具は2列の鉤が廻る管見では群馬県内には類例のない製品である。残存状態から前輪・後輪の両方に充当することは確認できていない。他地域での出土例としては福岡県山の前1号墳、熊本県打越稲荷山古墳、福島県大仏15号墳からの出土が紹介されている(文獻④)。

55号墳出土例と同形の心葉形杏葉は、1996年の集成段階(文獻⑤)で12例の出土が知られている。出土古墳名を列記すると太田市四ツ塚甲古墳(2例)・二ツ山1号墳、伊勢崎市田向2号墳、高崎市綿貫観音山古墳・前山古墳、『綜覧』佐野村58号墳・乗附出土例・奥原古墳群49号墳・天宮古墳、前橋市総社町付近出土例・旧清里村青梨子出土例であり、その後、高崎市漆山古墳出土例が加えられている。

綿貫観音山古墳出土の3点は、別作りした金銅製の地板・文様板・縁金を鋳留したもので、6世紀後半の所産である。四ツ塚甲古墳から出土したうちの1例は、立間を鋳留に作るもので、地板と縁金の間に銀の文様板が挟

まれているとされている。前山古墳、『総覧』佐野村58号墳、漆山古墳例は、鉄地金銅張製で、モチーフは異なるものの小型で立間に銚留する点などが55号墳出土例と共通しており、同時期の所産と考えられるものである。

雲珠・辻金具には完形品の出土がなく、鉢と脚の繋がりが分かる例もわずかである。それらはすべて脚の両脇が胴張り状に膨らみ、先端に切り込みの入る桜花状を呈している。その中で脚の長さが3.5cm前後の65・67は雲珠、同じく長さ1.5cm前後の66・68～70を辻金具と考えた。雲珠は2銚・4銚と分かれるが、辻金具は無銚の69を除き2銚である。

留金具は先端の丸いA類(73・79)、平らなB類(74)、辻金具のように切り込みの入るC類(75・76)があり一様ではないが、両脇は平行で辻金具類とは区別可能である。残存範囲ではA・B類は先端側が1銚で幅2.0cm前後、C類は辻金具類と同様に2銚で幅2.3cm前後と差が見られる。

大型銚(97～108)も管見では類例のない資料で、97から六角形もしくは菱形の鉄製台座に据えられたことが分かる。ただし、他の銚ではあまり台座が残存していないことに違和感がある。盗掘の際、銚のみを抜き取ろうとしたのだろうか。製作には頭部と脚部を熟着したと思われるが、頭部や脚部は大きさ・形状にわずかず差異があり、鋳型で作られたとは思えない。また、銚頭の銀色を帯びる部分については、材質の科学的分析を行っていないことから目視段階の観察であるが、光沢が強く、鋳製の可能性も考えられるという(註1)。

その他にも鉸具は豊富である。残存状態の比較的良好い83・84から想定される帯部の幅は留金具に見られた幅とは合致していない。墳丘出土であるが鍍金金具片が確認され、木製鍍の存在が想定されている。

古墳の年代について

墳形でみると54号墳には前庭が造られ、石室天井は玄室と羨道で高さが異なっている。明確な門柱石は見られないが、7世紀代の終末期古墳(文献⑦)の中でも古式的特徴を示している。

遺物では通常7世紀後半には著しく減少する大刀・馬具等装飾性の豊かな副葬品を両古墳とも持っている。7世紀初頭までには消失すると考えられている埴輪が樹立

されていない。須臾器では壺と提瓶および壺類が両古墳から出土している。このうち提瓶は陶邑編年(文献①)では第Ⅲ期初頭にあたるTK-209(7世紀前半前葉)の段階まで確実に提瓶は残存し、続くTK-217(7世紀前半後葉)の段階ではほとんど消失する傾向が知られている。54号墳では古段階の前庭で出土していることを勘案しても7世紀後半までは下らないであろう。

遺構形状・副葬品の両者とも、2基の古墳が7世紀前半代築造と推定するのに齟齬がない。

金井古墳群について

染谷川沿いに十数基存在していると考えられているが、今回の調査実績以外には調査例がなく、内容はわかっていない。根根中央から河川側へ向かって古墳群が形成される傾向は旧箕郷町の和田山天神前遺跡などで指摘されており、金井古墳群内の上流側隅の河川縁に立地する54・55号墳は、古墳群内でも新しい時期の古墳となる可能性がある。

榛名山東南麓では古墳群が集落や水田耕作地から離れ、『奥つ城』のように山頂側に作られる傾向が顕著であるが、金井古墳群はその一例である。山頂方向の北側へ向かって古墳群が広がるなら、北側にある55号墳が54号墳に後出すると考えたいが、前庭・墓道の違いから55号墳のほうが後出する要素を備えている。

榛東村54・55号墳は7世紀前半代の古墳と想定されるに至った。この時期は群馬県内の前方後円墳が消滅し、それまで各地にあった有力墓は総社古墳群の一边56mの方墳愛宕山古墳しか見られない。総社古墳群に被葬された豪族が上野地域の頂点を占めたことを意味している(文献⑩)。7世紀前半は地域再編の大きな流れの時期とも言える。愛宕山古墳の西方約5kmにある金井古墳群の被葬者は、小地域の有力者層の一つであり、総社古墳群に被葬された豪族層が、上野地域の中心に位置づけられる時期の地域の様相を探る資料を提供したものである。

註1 (公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター・山敏行氏の指示による。

* 本稿の作成にあたっては、石室の設計について木津博明、出土遺物については徳江秀夫の本事業団職員との検討内容を踏まえている。

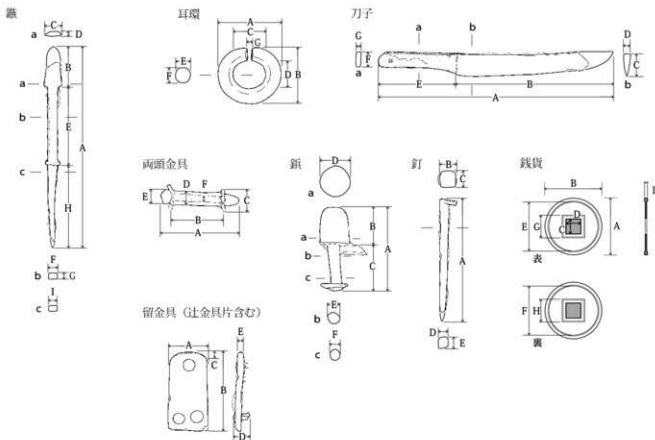
* 引用文献は、127頁に記した。

遺物観察表

54号墳	111
55号墳	116
南東隅窪地	123
銭貨（近世）	123
その他（近世）	125
縄文時代	126

遺物観察表 凡例

- ・金属製品のメタルチェックは、市販の器具（金属センサー：高周波磁気発生装置タイプ）により行い、反応の有無のみを示した。
- ・金属製品の磁着チェックは細紐で吊るした磁石に遺物を近づけ、磁石が反応を示すまでの距離を測定したもので、距離2cm以上で反応を示すものを磁着強とした。
- ・計測値のうち、残存部分のみの値には()を付けて表した。また数値欄にーで示したものは欠損や錆のため計測できなかったことを示す。
- ・金属製品の計測はノギスでの計測値で、実測図と一致していないものがある。
- ・釘計測値の『復元長』は屈曲した釘などを真直ぐに復元した時の推定全長である。
- ・金属の計測値のうち、鐵など残存全長が計測項目の部分残存全長と同一の場合は省略した。
- ・出土点数の多い金属製品には、下図のように計測部位をアルファベットで示した。



54号墳土器

54号墳埴丘

埴丘 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考	
				口	高	2.4				
第10図 Pl.22	1	土師器 杯	南側埴丘上 +2cm 口縁部~底部片	口	11.7	高	2.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。間にナデの部分を残す、内面は撫で。	口縁は小さくなる可能性あり。
第10図 Pl.22	2	須恵器 盃	埴丘北 +1cm 口縁部片	口	11.8	高	(4.8)	粗砂粒・細砂粒 /還元焰・不良/灰	右回転ロクロ整形。口縁部は強く外反後、短く直立する。端部直下に段縁が廻る。口縁部は中位に沈線が廻り、その上下に波高の低い波状文を1段ずつ配する。	

54号墳前庭

埴丘 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考	
				口	高	3.7				
第46図 Pl.22	1	土師器 杯	前庭中央 +5~11cm 2/3	口	10.5	高	3.7	精選・赤色粘土粒 /良好/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削りと考えられる。	内外面とも磨減。
第46図 Pl.22	2	土師器 杯	前庭中央 +1~9cm 1/3	口	11.6	高	3.8	精選/良好/浅黄橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	底部一部に炭素吸着。
第46図 Pl.22	3	土師器 杯	前庭西壁寄り +4cm 破片	口	9.4	高	2.9	細砂粒・黒色鉱物粒 /良好/にぶい/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	
第46図 Pl.19	4	土師器 杯	前庭中央 +5~22cm 破片	口	9.8	高	2.7	細砂粒・黒色鉱物粒 /良好/にぶい/橙	口縁部は横撫で。底部は手持ちヘラ削り。内面は撫で。	一部に炭素吸着。
第46図 Pl.22	5	須恵器 盃	前庭西壁際 -11cm 口縁部中位~ 胴部上半1/3	頸 割	3.6 11.0	高	(12.6)	黒色鉱物粒少 /還元焰・軟質 /灰白	右回転ロクロ整形。口縁部は上半に弱い沈線を超して区画し区画中に波状文を1段配す。波状文は肩部に1段廻る。注口は透孔。周側の始末が粗雑で、ヘラを当て強く調整している。孔の並びに沈線を超らし、その下位に少少状工具による削突文が連続して配され、その下にはヘラ削りが施される。	
第46図 Pl.22	6	須恵器 提籃	前庭中央~ 西壁際 +1~12cm 口縁部上半平欠損	頸 幅	5.0 16.8	高 幅	(19.6) 12.6 16.8	粗砂粒・黒色鉱物 粒少/還元焰・不良 /灰	右回転ロクロ整形。口縁部は外反して立ち上がるが、上半部は欠損する。肩部に2カ所環状把手を付ける。胴部は袋状に成形。開口部を粘土板で覆蓋した後に側面を切削して口縁部を接合している。粘土板で覆蓋した側の側面に平行叩き具による調整が行われる他は、器面の大半にカキ目が見られる。	上半部に厚く自然釉掛かる。焼成不良で赤みと器内膨張著しい。
第46図 Pl.22	7	須恵器 盃	前庭東+埴丘上 +4~14cm 口縁部下半~ 胴部位置片	頸 割	19.2 46.0	高	(18.0)	白色鉱物粒 /還元焰/灰	ロクロ整形。口縁部は中位に突線を超して区画、下位に波状文を2段廻らしている。突線の上位にも波状文がみられる。胴部は緩つくり整形。外面は平行叩き目粗にカキ目を見せる。内面は同心円状の当て具痕の一部痕で充ねる。	内外面の一部に自然釉掛かる。
第46図 Pl.22	8	須恵器 盃	前庭東壁際 +6~18cm 口縁部~胴部	頸 割	16.9	高	(20.9)	黒色鉱物粒少 /還元焰・軟質 /灰白	口縁部は右回転ロクロ整形。口縁部は中位に比類2条を廻らして区画。その上位に波状文を1段配す。胴部は緩つくり。外面は平行叩き具痕。内面に同心円状の当て具痕を残す。	

54号墳金属

埴丘 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			計測値追加/メ タール・磁着/重量g	製作・使用・残存状況の特徴	備考
				A	B	C			
第47図 Pl.23	1	金銅製品 耳環	女室東壁寄り +12cm 完形	A 3.35 B 2.49 C 1.72 D 1.45	E 0.81 F 0.78 G 0.25	-/磁着なし /30.6g	錆化の影響少ないが、鍍装・金装すべて剥落し不明瞭。黒色味を帯びる部分あり一部鍍装痕跡残存。		
第47図 Pl.23 口輪1	2	金銅製品 耳環	女室中央 +15cm 完形	A 3.34 B 2.97 C 1.73 D 1.45	E 0.80 F 0.77 G 0.25	-/磁着なし /30.2g	1と同じ。		
第47図 Pl.23	3	金銅製品 耳環	女室西寄り +25cm 完形	A 2.85 B 2.70 C 1.50 D 1.40	E 0.90 F 0.70 G 0.25	-/磁着なし /7.3g	本遺跡出土耳環中唯一の中空耳環。小口面張りした痕跡が目視できる。錆化の影響少ないが、鍍装・金装は全て剥落したようで痕跡不明瞭。		
第47図 Pl.23	4	金銅製品 耳環	女室西壁寄り +11cm 完形	A 2.35 B 2.06 C 1.50 D 1.19	E 0.48 F 0.48 G 0.23	-/磁着なし /6.5g	本遺跡出土耳環中唯一の小型の耳環。金銅装と思われるが残存部分では黒色しか残らない。		
第47図 Pl.23 口輪1	5	鉄製品 刀装具 鐔	女室南寄り +9cm 完形	長 5.25	幅 3.80	-/磁着強 /26.4g	小型の鐔で鉄地に表・側・裏の全面に銀鍍装を施す。意匠は錆で不明瞭な部分があるが、表裏面が滑く、裏面では二重の弧を描く。溝巻の方向は一律ではない。		
第47図 Pl.23	6	鉄製品 刀装具 鎌金具	女室西壁際 +6cm 上端欠2/3	長 (4.00)	幅 (2.70)	-/磁着あり /4.6g	8と対になりやや幅狭い。2片が隣接しているのが向かって半円状の銀鍍装あり同一個体が破断後削り直したもの。	右側欠損新しい。	

遺物観察表

採回 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)		計測値追加/メタル・磁石/重量 g	製作・使用・残存状況の特徴	備考	
第47回 Pl.23	7	鉄製品 刀装具 鍔金具	玄室内壁際 +6cm 上端付	長	(1.60)	幅 (2.60)	-/メタルなし。 磁石あり/1.7g	6と同地点の出土で同個体欠失部分にあたる破片だが、象嵌不明で欠失部分より長い。別個体の可能性あり。	右側欠損新しい。
第47回 Pl.23 口輪1	8	鉄製品 刀装具 鍔金具	玄室内寄り +1cm 完形	長	3.55	幅 2.35	-/磁石強/7.6g	磨りと割になる鍔金具。半円状の象嵌嵌が不規則に並び8カ所確認でき、図示部以外に上端に1カ所見える。	
第47回 Pl.23	9	鉄製品 小刀	玄室内壁寄り +51cm 切先欠く	A (16.60) B (10.50) C 1.78 D (6.50)	E 6.10 F 1.20 G 0.47		-/磁石強 /44.3g	基部寄り目釘孔。棟無断。刃部峰が外反気味なのは否みか。	欠損やや新しい。
第47回 Pl.23	10	鉄製品 小刀か	玄室内壁際 +10cm 基部付近	A (6.50) B (0.80) C (1.60) D (0.45)	E 5.70 F 0.98 G 0.32		-/磁石強 /10.2g	残存部分に刃部みられない。基に樹皮状の錆を巻きつけた後、柄装着か。目釘は長さ1.4cm以上で木質裏残る。刃身側の錆に折衝釘頂部のような別鉄製品破片が混入か。	欠損は旧時。
第47回 Pl.23	11	鉄製品 刀子	石室埋没土 間付近	A (4.85) B (2.75) C (1.30) D (0.45)	E (2.10) F 1.00 G 0.45		-/磁石強/7.0g	段差の少ない間が棟・刃両側にある。基両面に木質痕跡に残存。研ぎ減り少ない。	欠損新しい。
第47回 Pl.23	12	鉄製品 刀子か	石室埋没土 基部付近	A - B - C - D -	E (2.35) F 0.80 G 0.45		-/メタルなし。 磁石あり。 /1.8g	目釘は基部端まじかにあり、小型の刀子となろう。	欠損新しい。
第47回 Pl.23	13	鉄製品 片刃鑑か	玄室内舗石直土 鑑身片か	A (3.85) B 1.01 C 0.35 D -	E - F - G - H -		I : -/磁石あり /2.8g	厚み少なく片刃鑑とした。刀子切先の可能性あり。	欠損は旧時。
第47回 Pl.23	14	鉄製品 長頭鑑	玄室内壁際 +10cm 鑑身-基部	A (9.30) B 4.08 C 1.06 D 0.33	E 4.04 F 0.55 G 0.36 H (1.15)		I : 0.48/磁石強 /9.1g	基部の大半を欠く。鑑身は片丸造の角間。頸部と基部の境は踏のため不明瞭だが、縁状間と思われる。	
第47回 Pl.23	15	鉄製品 長頭鑑	玄室内壁際 +6cm 鑑身-頸部	A (7.10) B 1.39 C 0.90 D 0.27	E (5.70) F 0.65 G 0.33 H -		I : -/磁石あり /4.6g	鑑身は小さく角間に近い。片丸造で裏面やや薄いが踏のため不明瞭。裏面に別個体鑑の頸部らしい凹痕が残る。	
第47回 Pl.23	16	鉄製品 長頭鑑	玄室内壁寄り +16cm 鑑身-頸部上端	A (5.65) B (4.20) C 0.96 D 0.39	E (1.45) F 0.54 G 0.46 H -		I : -/磁石強 /5.9g	鑑身は種の比較的明瞭な片丸造で、角間と思われるが踏のため不明瞭。	
第47回 Pl.23	17	鉄製品 長頭鑑	玄室内壁寄り玄 門側 +9cm 鑑身-頸部上端	A (5.35) B (4.15) C 0.95 D 0.31	E (1.20) F (0.65) G (0.40) H -		I : -/磁石あり /5.5g	鑑身は種の不明瞭な片丸造で、ナデ間と思われるが踏のため不明瞭。	欠損新しい。
第47回 Pl.23	18	鉄製品 長頭鑑	玄室内壁際 +10cm 鑑身破片	A (4.50) B (4.25) C 1.12 D 0.32	E (0.25) F - G - H -		I : -/磁石強 /3.9g	細身の鑑身で踏のため不明瞭な鑑身間付近で破断。片丸造のナデ間a類(文獻未)	
第47回 Pl.23	19	鉄製品 長頭鑑	石室埋没土 鑑身周辺	A (4.70) B (3.60) C 1.04 D 0.31	E (1.10) F - G 0.40 H -		I : -/磁石強 /4.4g	片丸造の鑑身で間部分はX線写真よりナデ間を読み取る。	欠損は旧時。
第47回 Pl.23	20	鉄製品 鉄鑑	玄室内壁寄り 奥壁側 +22cm 鑑身片	A - B (3.15) C (1.20) D 0.53	E - F - G - H -		I : -/磁石あり /2.5g	踏のため磨らむが鑑身は種の比較的明瞭な片丸造で、間まで達していない。	欠損新しい。
第47回 Pl.23	21	鉄製品 鉄鑑	玄室内壁寄り +16cm 鑑身片	A - B (3.35) C 1.05 D 0.40	E - F - G - H -		I : -/磁石強 /2.3g	鑑身は種の比較的明瞭な片丸造で、間まで達していない。	欠損新しい。
第47回 Pl.23	22	鉄製品 鉄鑑	石室埋没土 鑑身周辺	A (3.05) B 0.91 C 0.28 D -	E - F - G - H -		I : -/磁石あり /2.1g	片丸造の鑑身だが種は不明瞭。ナデ間周辺も踏のため不明瞭。	欠損は旧時。
第47回 Pl.23	23	鉄製品 鉄鑑か	玄室内壁際 +15cm 鑑身片	A - B (3.50) C 1.09 D 0.38	E - F - G - H -		I : - /メタルなし、 磁石あり /2.6g	鑑身は種のやや不明瞭な片丸造で、間まで達していない。錆化によりやや曇らむ。	欠損は旧時。
第47回 Pl.23	24	鉄製品 鉄鑑	石室埋没土 鑑身片	A (2.35) B (0.84) C (0.35) D -	E - F - G - H -		I : - /メタルなし、 磁石弱 /1.2g	踏跡が顕著。	欠損は旧時。
第47回 Pl.23	25	鉄製品 長頭鑑	玄室内壁寄り +21cm 鑑身-頸部	A (6.40) B (4.20) C (1.10) D 0.32	E (2.20) F 0.57 G 0.35 H -		I : -/磁石強 /7.1g	角間の片丸造。錆化のため不明瞭だが本遺跡では最も鑑身幅広く種が認められる可能性あり。	頭部欠損新しい。

挿図 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			計測値追加/メタル・磁石/重量 g	製作・使用・残存状況の特徴	備考
第48図 Pl. 23	26	鉄製品 長頭鎌	玄室西壁寄り +10cm 頸部周辺破片	A (7.00) B (1.35) C 0.96 D 0.38	E 4.28 F 0.64 G 0.45 H (1.35)	1 : 0.56/磁着強 /6.7g	鎌身と基部内端を欠く。鎌身は片丸造で鎌身側は角開。棘状開。開直下に樹皮状の組織むすかに残存。	欠損新しい。	
第48図 Pl. 23	27	鉄製品 長頭鎌	玄室中央南寄り +11cm 鎌身→頸部	A (4.60) B (1.90) C 0.76 D 0.30	E (2.70) F 0.53 G 0.40 H —	1 : —/磁着強 /3.6g	内端欠く。鎌身は極めて角開の片割造に近い。裏面やや平薄くなるようだが錆のため不明瞭。	欠損は旧時。	
第48図 Pl. 23	28	鉄製品 長頭鎌	玄室西壁寄り +29cm 内端欠くが完形 頸部周辺破片	A (9.50) B (1.30) C (0.95) D (0.25)	E 4.20 F 0.54 G 0.36 H (4.00)	1 : 0.55/磁着強 /6.8g	鎌身は片丸造で鎌身側は角開。棘状開で基部にわずかに木質痕残存。	欠損は旧時。	
第48図 Pl. 23	29	鉄製品 長頭鎌	玄室西壁寄り +16cm 頸部周辺破片	A (10.80) B — C — D —	E (6.75) F 0.60 G 0.43 H (4.05)	1 : 0.52/磁着強 /10.5g	鎌身は開示部直前で欠落か。基部は端部欠く。棘状開で基部に木質痕不明瞭だが錆の様子で頸部と異なり。柄装着状態だったと思われる。	下側欠損新しい。	
第48図 Pl. 23	30	鉄製品 長頭鎌	玄室西壁寄り +15cm 頸部→完存基部	A (11.30) B — C — D —	E (2.30) F 0.59 G 0.45 H 9.0	1 : 0.55/磁着強 /6.9g	棘状開。基部は長さ際立ち、下半でやや捻じれる。上端に木質痕と樹皮状の組織あり。	石室破片と接合。	
第48図 Pl. 23	31	鉄製品 長頭鎌	玄室西壁寄り +15cm 鎌身欠く	A (9.95) B — C — D —	E (3.30) F 0.60 G 0.40 H (6.65)	1 : 0.60/磁着強 /2.7g	棘状開の片割造化のため不明瞭。頸部も剥落のためやや平薄か。	欠損は旧時。	
第48図 Pl. 23	32	鉄製品 長頭鎌	玄室西壁寄り +21cm 内端欠く	A (8.95) B — C — D —	E (3.85) F 0.55 G 0.35 H (5.10)	1 : 0.43/磁着強 /4.8g	頸部は破断後に再度錆によりずれた位置で固まる。開付近に紐。基付近に木質痕残存。	欠損は旧時。	
第48図 Pl. 23	33	鉄製品 長頭鎌	石室埋没土 関部周辺	A (8.15) B — C — D —	E (4.15) F 0.46 G 0.37 H (4.00)	1 : 0.44/磁着強 /5.5g	基部先端わずかに欠く。棘状開付近は錆割れのため不明瞭。木質痕わずかに残存。	上側欠損新しい。	
第48図 Pl. 23	34	鉄製品 長頭鎌	玄室西壁寄り 玄門側 +9 cm 関部周辺破片	A (7.25) B — C — D —	E (5.50) F 0.58 G 0.34 H (1.75)	1 : —/磁着あり /4.6g	内端欠く。棘状開で直下は捻じれるように歪む。	頸部欠損新しい。	
第48図 Pl. 23	35	鉄製品 長頭鎌	玄室西壁脇 +21cm 関部周辺破片	A (5.60) B — C — D —	E (3.70) F 0.60 G 0.33 H (1.90)	1 : 0.49/磁着強 /3.6g	内端欠く。鎌身を関部で欠失したもののか。棘状開で直下に樹皮状の組織痕むすかに残存か。		
第48図 Pl. 23	36	鉄製品 長頭鎌	玄室西壁寄り +21cm 関部周辺破片	A (3.60) B — C — D —	E (2.55) F 0.62 G 0.38 H (1.05)	1 : 0.51/磁着強 /3.4g	内端欠く。錆のため不明瞭でX線写真より棘開部分を読み取る。	頸部欠損新しい。	
第48図 Pl. 23	37	鉄製品 鉄鍔	玄室西壁脇 +10cm 頸部周辺破片	A (9.95) B (1.00) C 0.91 D 0.30	E 7.66 F 0.46 G 0.39 H (1.30)	1 : 0.45/磁着強 /8.0g	鎌身は細く端部と基部の大半を欠く。鎌身は片丸造の角開。頸部の長さ際立つ。棘状開で基部にはわずかに木質痕残存。	頸部欠損新しい。	
第48図 Pl. 23	38	鉄製品 鉄鍔	玄室西壁寄り +8 cm 鎌身欠く	A (9.10) B — C — D —	E (3.80) F 0.57 G 0.36 H (5.30)	1 : 0.39/磁着強 /4.1g	上端・開付近は錆のため不明瞭。鎌身のかかる可能性。頸部は組織むすきのような斜め木質痕。	欠損は旧時。	
第48図 Pl. 23	39	鉄製品 鉄鍔	玄室東壁脇 +10cm 内端欠く	A (11.30) B — C — D —	E (6.75) F 0.62 G 0.50 H (4.55)	1 : 0.53 /磁着あり /10.5g	錆化すすみ棘状開はX線で確認。鎌身部分まで達しておらず頸部の長さ顕著。	石室内破片と接合。	
第48図 Pl. 23	40	鉄製品 鉄鍔	玄室西壁寄り +11cm 内端欠く	A (8.95) B (1.30) C — D —	E (7.65) F 0.56 G 0.52 H —	1 : —/磁着強 /7.3g	無開の鎌身にかかるよう上で端細い。基部開は錆ひのため不明瞭だが無開の可能性。	欠損は旧時。	
第48図 Pl. 23	41	鉄製品 鉄鍔	石室埋没土 鎌身周辺	A (8.50) B — C — D —	E (4.75) F 0.49 G 0.36 H (3.75)	1 : 0.48 /メタルなし、 磁着あり /4.5g	比較的細身。棘状開で茎には木質痕比較的明瞭に残存。	上側欠損新しい。	
第48図 Pl. 23	42	鉄製品 鉄鍔	石室埋没土 基部	A — B — C — D —	E — F — G — H (2.90)	1 : 0.37 /メタルなし、 磁着あり /0.8g	ごく細身。下側は端部直前まで残存。	欠損新しい。	
第48図 Pl. 23	43	鉄製品 鉄鍔	玄室中央北寄り +27cm 関部周辺破片	A (3.20) B — C — D —	E (1.25) F 0.65 G 0.40 H (1.95)	1 : 0.60 /メタルなし、 磁着強 /2.2g	基部一部でわずかに木質痕残存。		
第48図 Pl. 24	44	鉄製品 長頭鎌か	玄室西壁脇 +6 cm 頸部破片か	A (5.60) B — C — D —	E (5.60) F 0.60 G 0.44 H —	1 : —/磁着強 /2.8g	内端欠く。上端がやや扁平気味で、ナデ開の柳葉鎌身直下部分の可能性。	欠損新しい。	

遺物観察表

採回 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)				計測値追加/メタル・磁石/重量 g	製作・使用・残存状況の特徴	備考
				A	B	C	D			
第48回 Pl.24	45	鉄製品 長頸瓶か	玄室西壁寄り +21cm 基部片	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(4.70)	— — — — — — — —	1 : 0.46/磁着強 1.0g	細い先端部分で壊とした。屈曲するようにわずかに 歪む。	下側欠損新しい。
第48回 Pl.24	46	鉄製品 鉄鏝か	玄室西壁脇 +7cm 側部周辺破片	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(3.10)	— — — — — — — —	1 : 0.52 /磁着あり/4.1g	頭部は破断後跡により段差を生じて固まる。棟状固 はあまり明瞭ではなく、側面直下に樹皮状のヒモ痕跡 残存。	欠損欠損新しい。
第48回 Pl.24	47	鉄製品 鉄鏝	石室埋没土 頭部破片か	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(3.90)	— — — — — — — —	1 : —/磁着強 2.7g	小破片で不明瞭だが上下両端で幅の差が少なく、 基部片と想定する。捻じりよう力が加わり破断か。	欠損は旧時。
第48回 Pl.24	48	鉄製品 鉄鏝か	玄室西壁寄り +16cm 基部片か	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(3.40)	— — — — — — — —	1 : 0.39/磁着強 1.4g	鏝か釘か判別むずかしいが細身で壊と想定する。端 部をわずかに欠く。上平跡により膨らむ。	下側欠損新しい。
第48回 Pl.24	49	鉄製品 鉄鏝か	玄室西壁脇 +6cm 側身周辺か	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(3.45)	— — — — — — — —	1 : —/磁着強 2.5g	裏面一部剥落し不明瞭だが、鏝身ナデ間周辺と思わ れる。	下側欠損新しい。
第48回 Pl.24	50	鉄製品 鉄鏝か	石室埋没土 基部	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(3.50)	— — — — — — — —	1 : 0.44 /磁着あり/1.3g	ごく細身。屈曲するようにわずかに歪む。	石室内破片と 接合。
第48回 Pl.24	51	鉄製品 鉄鏝か	裏込内 頭部破片か	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(3.20)	— — — — — — — —	1 : — (0.65) /メタルなし。 (0.45) 磁着あり 1.5g	鏝か釘か区別できない。錆化すすむ。	欠損は旧時。
第48回 Pl.24	52	鉄製品 鉄鏝	石室埋没土 両端欠く	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(3.90)	— — — — — — — —	1 : 0.50/磁着強 4.1g	残存する両側で厚みに差がなく長頸瓶基部か。鉄質 良好で錆化少ない。木質痕残存しない。	土側破損は旧 時。下側は新 しい。
第48回 Pl.24	53	鉄製品 はばき形 弓飾り金具	石室埋没土 はばき形	A — B — C — D —	E — F — G — H —	3.34 (2.25)	D 0. E 600.58 F (0.32)	—/メタルなし。 磁着あり/3.0g	筒部端部を除いて残存。芯部は識別できない。	
第48回 Pl.24	54	鉄製品 はばき形 弓飾り金具	石室埋没土 はばき形	A — B — C — D —	E — F — G — H —	2.95 (2.20)	D 0.55 E 0.60 F (0.25)	—/磁着あり 2.8g	筒部端部を除いて残存。芯部は識別できない。	
第48回 Pl.24	55	鉄製品 弓飾り金具	玄室中央+4cm 片側頭部と筒部 の一部欠く	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(3.40)	— — — — — — — —	—/メタルなし。 磁着あり/2.3g	筒部が一部折がれ、芯部が露出している。木質痕一 部で残存。	欠損は旧時か。
第48回 Pl.24	56	鉄製品 弓飾り金具	石室埋没土 頭部内側欠く	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(2.50)	— — — — — — — —	—/メタルなし。 磁着あり/1.9g	頭部欠落するが筒部端が四角状に固く部分が一部に 残存する。側面から芯部も明瞭に確認できる。	右側欠損新 しい。
第48回 Pl.24	57	鉄製品 弓飾り金具	石室埋没土 頭部内側欠く	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(2.40)	— — — — — — — —	—/メタルなし。 磁着弱/1.9g	断面から筒部と芯部の境界は識別しにくい。錆によ りクラック状のヒビ入る。木質痕比較的良く残存。	欠損は旧時 か。
第48回 Pl.24	58	鉄製品 弓飾り金具	石室埋没土 芯部破片	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(2.05)	— — — — — — — —	—/メタルなし。 磁着あり/0.9g	筒部欠く。断面四角ではなく研磨して丸く仕上げた と思われる。	欠損は旧時 か。
第49回 Pl.24	59	鉄製品 釘	石室埋没土 完形	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(3.80)	— — — — — — — —	復4.40/磁着あり 4.0g	頭部はやや広く、釘部は上方で屈曲している。木質 痕わずかに残存。	
第49回 Pl.24	60	鉄製品 釘	玄室南寄り +5cm 完形	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(2.90)	— — — — — — — —	復4.10 /磁着あり/3.1g	折頭釘だが頭部外端は下方へ丸める。破断後跡によ り段差を生じて固まる。	
第49回 Pl.24	61	鉄製品 釘	石室埋没土 頭部欠く	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(2.90)	— — — — — — — —	復3.10 /メタルなし。 磁着あり。 2.5g	土側は錆部分で折れたように欠損。旧状の想定むず かしいが頭部直下で破断したものか。短い釘となる か。	上側欠損新 しい。
第49回 Pl.24	62	鉄製品 釘	石室埋没土 はばき形	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(2.55)	— — — — — — — —	復3.90 /磁着あり/2.8g	頭部広く、端部は下方へ丸める。釘部は太さ波打つ ように不定。木質痕わずかに残存。	欠損は旧時 か。
第49回 Pl.24	63	鉄製品 釘	石室埋没土 はばき形	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(3.10)	— — — — — — — —	復4.50 /メタルなし。 磁着あり/2.7g	頭部細く平坦だが折り曲げなし。釘部は捻じれるよ うな曲がる。メタルなし。磁着あり。	欠損新しい。
第49回 Pl.24	64	鉄製品 釘	石室埋没土 頭部欠く	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(2.20)	— — — — — — — —	復3.50 /メタルなし。 磁着あり/2.5g	軽量で、錆化により中空の可能性。頭部は折りが 曲がっていない。	
第49回 Pl.24	65	鉄製品 釘	石室埋没土 基部付近破片	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(3.20)	— — — — — — — —	—/メタルなし。 磁着強/4.0g	基部錆化のため不明瞭だが、屈曲が緩やかで折頭部 的ではない。木質痕が良好に残存。	欠損は旧時。
第49回 Pl.24	66	鉄製品 釘	石室埋没土 基部付近破片	A — B — C — D —	E — F — G — H —	(2.25)	— — — — — — — —	—/メタルなし。 磁着あり/2.7g	折頭部が太く屈曲も緩やかで鉄具の可能性あるが、 木質痕があることより釘とした。	欠損は旧時。

採回 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			計測値追加/メタル・磁着/重量 g	製作・使用・残存状況の特徴	備考
				A	B	D			
第49回 Pl. 24	67	鉄製品 釘	石室埋没土 ほぼ完成	(3.90) 0.88 0.91	— — —	D E	0.31 0.35	-/メタルなし、 磁着強/2.3g	細い頸部に比して頂部広い。頂部に甲打痕。 欠損は旧時か。
第49回 Pl. 24	68	鉄製品 釘	石室中央 +10cm ほぼ完成	(5.10) — —	— — —	D E	0.47 0.40	復6.70/磁着強 /4.6g	頂部やや広く平坦で甲打による折れない。部分的に 木質痕残存。
第49回 Pl. 24	69	鉄製品 釘	玄室中央北寄り +16cm 完成	A 6.76 B 1.22 C 0.75	— — —	D E	0.54 0.45	-/磁着強/7.0g	折頭の頂部を内側に丸める。木質痕は上側にわずかに に残存するようだが不明瞭。
第49回 Pl. 24	70	鉄製品 釘	玄室中央西寄り +10cm 完成	(7.20) — —	— — —	D E	0.56 0.44	-/磁着あり /6.6g	平たい頂部は折れていないが釘部は緩く屈曲し木質 痕残る。先端近くまで幅は差が小さい。
第49回 Pl. 24	71	鉄製品 釘	玄室中央南寄り +11cm 先端部欠く	(6.10) A 0.97 B 0.91	— — —	D E	0.59 0.46	-/磁着強/4.7g	折頭は鋭角で頂部は薄く平坦。木質痕残存しない。
第49回 Pl. 24	72	鉄製品 釘	石室埋没土 基部側1/2	(5.30) — —	— — —	D E	0.30 0.30	-/磁着強/4.3g	縦長い釘でやや質弱。弱く屈曲するように投げ入れ ているが、頂部に顕著な甲打痕は見られない。木質痕 は残存しない。
第49回 Pl. 24	73	鉄製品 釘	玄室西壁寄り玄 門側 +2cm 基部付近破片	(3.40) 0.95 0.85	— — —	D E	0.70 0.65	-/メタルなし、 磁着あり/5.1g	折頭端部は下側に曲げる。頂部に甲打痕。縦方向 のクラックのため下半は膨らむ。木質痕残存。
第49回 Pl. 24	74	鉄製品 釘	玄室内石敷直上 基部付近破片	(2.70) A 1.05 B 0.85	— — —	D E	0.70 0.75	-/メタルなし、 磁着あり/4.0g	直角に近い折頭で頂部に甲打痕。釘部は縦位クラッ クでやや膨らむ。木質痕残存。
第49回 Pl. 24	75	鉄製品 釘	玄室内石敷直上 基部付近破片	(2.30) A 0.95 B 1.10	— — —	D E	0.80 0.65	-/メタルなし、 磁着あり/3.7g	折頭部は鋭角で端部やや下方に曲がる。頂部に甲打 痕。木質痕残存。
第49回 Pl. 24	76	鉄製品 釘	玄室西壁寄り玄 門側 +2cm 基部付近破片	(2.40) A 0.80 B 0.85	— — —	D E	0.70 0.65	-/メタルなし、 磁着あり/2.7g	直角に近い折頭で頂部に甲打痕。木質痕残存。
第49回 Pl. 24	77	鉄製品 釘	石室埋没土 基部付近破片	(3.05) — —	— — —	D E	0.55 0.50	-/メタルなし、 磁着あり/3.4g	頂部欠損。木質痕残存。
第49回 Pl. 24	78	鉄製品 釘	玄室中央西寄り +1cm 先端部付近破片	(2.80) — —	— — —	D E	0.67 0.78	-/メタルなし、 磁着強/2.8g	上端は折頭箇所で破損。残存部分に木質痕明瞭に残 存。クラックやや多い。
第49回 Pl. 24	79	鉄製品 釘	石室埋没土 頂部付近破片	(2.30) A 1.25 B 0.95	— — —	D E	0.70 0.65	-/メタルなし、 磁着あり/3.8g	折頭部先端は釘部に食い込むように直角に下方へ折 れる。木質痕残存。
第49回 Pl. 24	80	鉄製品 釘	石室埋没土 両端欠く	(5.50) — —	— — —	D E	0.75 0.65	-/メタルなし、 磁着あり/3.8g	縦に割れるように破断。甲打時の捻じれるような 歪みあり。残存部分全面に木質痕観察できる。
第49回 Pl. 24	81	鉄製品 釘	石室中央 +7cm 頂部欠く	(4.30) — —	— — —	D E	0.65 0.59	-/メタルなし、 磁着あり /3.3g	頂部付近が平坦で全体に広がり気味で折頭部を想定 できない。錆の欠落でできた平坦部の可能性。木質 痕明瞭。
第49回 Pl. 24	82	鉄製品 釘	玄室中央 +10cm 上半欠く	(5.70) — —	— — —	D E	0.80 0.70	-/メタルなし、 磁着あり/6.2g	縦位クラックあり残存状態やや悪い。木質痕残存。
第49回 Pl. 24	83	鉄製品 釘	玄室西壁寄り +16cm 頂部欠く	(4.75) — —	— — —	D E	0.75 0.70	-/メタルなし、 磁着強/5.2g	残存状態比較的良好く、全面に木質痕残る。
第49回 Pl. 24	84	鉄製品 釘	玄室西壁寄り +15cm 両端欠く	(6.20) — —	— — —	D E	0.55 0.50	-/磁着強/5.1g	幅と厚みの差が少なく、頸部端ではなく釘である。 木質痕は残存しない。
第49回 Pl. 24	85	鉄製品 釘	玄室中央東寄り +15cm 両端欠く	(3.40) — —	— — —	D E	0.60 0.55	-/メタルなし、 磁着あり/2.8g	縦位クラック多く残存状態悪い。頂部に甲打時の弱 い湾曲あり。
第49回 Pl. 24	86	鉄製品 釘	玄室中央西寄り +1cm 基部付近破片か	(2.90) — —	— — —	D E	0.70 0.55	-/メタルなし、 磁着強/2.7g	縦に割れるような欠損あり。頂部に甲打時の弱い 湾曲あり。残存部分全面に木質痕観察できる。
第49回 Pl. 24	87	鉄製品 釘	石室埋没土 中央付近破片	(1.70) — —	— — —	D E	0.50 0.45	-/メタルなし、 磁着弱/1.6g	小破片で不明瞭だが上下で幅の差が少なく、基部部 的。木質良好に残存し、板材に打ち込んだ様相。
第49回 Pl. 24	88	鉄製品 釘	石室埋没土 先端部片	(2.00) — —	— — —	D E	0.50 0.45	-/メタルなし、 磁着あり/1.2g	木質痕明瞭に残存。
第49回 Pl. 24	89	鉄製品 釘	石室埋没土 基部付近破片か	(2.80) — —	— — —	D E	0.74 0.69	-/メタルなし、 磁着あり/2.6g	頂部屈曲部で欠損したものと思われる。木質痕残存。
第49回 Pl. 24	90	鉄製品 釘	石室埋没土 先端部付近破片	(2.60) — —	— — —	D E	0.55 0.45	-/メタルなし、 磁着あり/1.9g	上下で幅の差が大きい。ささくれるような縦位クラッ クで大きく膨らむ。木質痕残存。

遺物観察表

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			計測値追加/メタル・磁石/重量 g	製作・使用・残存状況の特徴	備考
				A	B	D			
第49回 PL.24	91	鉄製 釘	玄室中央西寄り +23cm 先端部付近破片	(2.40) — —	D — —	0.50 0.45	—/メタルなし。 磁石あり/1.8g	基部磨さされるようなクラック多い。鉄質良好で 基部部分の可能性あるが、板に打ち込んだような木質 痕あり釘と判断した。	欠損は新しい。
第49回 PL.24	92	鉄製 釘	石室埋没土 先端部片	(2.05) — —	D — —	0.35 0.25	—/メタルなし。 磁石あり/0.5g	小破片で基部部分釘先端が識別できない。	欠損新しい。
第49回 PL.24	93	鉄製 釘	玄室西壁寄り +7cm 頂部付近か	(4.90) — —	D — —	0.39 0.38	—/磁石強/1.5g	先端部が潰れるように平坦になり折潰状。著しく細 い木質痕見られ釘とした。	先端部欠損新 しい。
第49回 PL.24	94	鉄製 釘	裏込め表層 内端欠く	(4.95) — —	D — —	0.50 0.45	—/磁石強/1.9g	細長い形状から基部部分の可能性あるが、鉄質やや不 良で縦方向クラックに沿って表面剥離する。近世 以釘の可能性もある。	欠損は旧時。
第49回 PL.24	95	鉄製 釘	玄室西壁寄り +18cm ほぼ完形	(6.20) — —	D — —	0.55 0.45	—/磁石強/5.8g	折潰部の屈曲は少ない。錆化のため叩打痕は不明。 木質痕わずかに残存するようだが不明瞭。	欠損新しい。
第49回 PL.24	96	鉄製 器	玄室西壁際 +15cm 先端欠く	長(9.50) 幅 0.90	厚 0.30		復12.50/ 磁石強/11.5g	左右対称となるよう折り曲げた工具と思われる製品。 基部部分では厚手細く、先端部では薄手幅広となる。	欠損新しい。
第49回 PL.24	97	鉄製 器	填土 内端欠く	長(4.00)	幅(0.60)		—/磁石あり /1.1g	糸鋸状のごく細い鋸で時期不明。目こぼれ多く不明 瞭だがアサリはないようだ。	欠損は旧時 か。
第49回 PL.24	98	鉄製 器	石室埋没土 内端欠く	(2.90) — —	D — —	0.35 0.35	—/磁石強/0.6g	幅は細く一律で木質痕は見られない。	欠損は旧時。

55号墳土器

55号墳埴土

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
				口 頸	高	底			
第72回 PL.35	1	須恵器 甕	南西斜面 +3cm 口縁部上半 2/3欠	口 頸	11.8 10.0	高 15.2	粗砂粒・細砂粒・白 色泥物粒少 /還元焰/灰	右回転ロクロ整形。口縁部はラッパ状に大きく外反す る。上半部は2条の沈線を通らし、上位にカキ目を施す。 下半部も中に2条の沈線を通らし、その上下段に縦位の のクシ目を施す。胴部は胎土のカキ目を施し、透孔 の並びにはカキ目の上と同じ工具による押圧文を並べ ている。	
第72回 PL.35	2	須恵器 瓶	填土北東 口縁～頸部1/3	口 頸	6.1 4.1	高(3.7)	粗砂粒少/還元焰/ 軟質/灰白	ロクロ整形。回転方向は不明。胴部内面は撫で。	被熱。
第72回 PL.35	3	須恵器 瓶	填土南 口縁部片	口 頸	11.0 9.2	高(4.6)	細砂粒/還元焰/灰	口縁部は外方が肥厚。沈線の内縁を平う。口縁部は 中位に沈線を配し、その上段区画内に斜横位のヘラ指 線が並ぶロクロ整形。回転右回り。	
第72回 PL.35	4	須恵器 提瓶	南斜面 +2・3cm 2/3	口 頸	9.4 5.1	高厚 幅 27.4 15.5 18.9	粗砂粒・黒色泥物 粒少/還元焰/灰	右回転ロクロ整形。口縁部と胴部を別々に整形し、接 合している。口縁部はコップ状を呈し強く外反して立 ち上がる。中に2条沈線が廻る。胴部は袋状に成形。 開口部に粘土板を貼り閉塞している。器面にはクシ状 工具によるカキ目を施している。	接合関係のない2破片から 図上復元。
第72回 PL.35	5	須恵器 甕	填土南西 +3cm 口縁部～ 胴部上部	口 頸	17.8 14.5	高(8.6)	白色泥物粒少 /還元焰 /灰オリーブ	口縁部は右回転ロクロ整形。口縁部は内面が屈曲して 立ち上がり、端部に平坦面を有する。口縁部中位と口 縁部中位に沈線が廻る。胴部は縞づくり整形。外面は 斜め格子目状の押し具痕。内面は斜心円文状の当て具 痕。内面胴部には横位の撫で。	
第72回 PL.35	6	須恵器 壺	填土南 頸部～ 胴部中位片	胴	(23.9)	高(13.0)	細砂粒/還元焰/灰	叩き整形。外面は平行叩き痕。内面は同心円文状の外 面に貝殻が見られる。	外面に自然輪 掛かる。
第72回 PL.35	7	須恵器 甕	填土北東 胴部下半～ 底部1/4	底	9.4	高(9.0)	粗砂粒少 /還元焰/軟質 /灰白	右回転ロクロ整形か。胴部外面には最下3位横位の、 それより上位は縦位のヘラ撫で。底部外面は丁寧な撫 で。	
第73回	8	須恵器 甕	南斜面 +3cm 胴部中位片	胴	29.8	高(19.8)	白色泥物粒少 /還元焰 /灰オリーブ	縞づくり整形。外面は平行叩き具痕を横位に撫で消す。 内面は同心円文状当て具痕が見られる。	
第72回 PL.35	9	須恵器 甕	填土南 口縁部片			高(8.2)	粗砂粒・細砂粒・黒 色泥物粒/還元焰 /灰	口縁部は上方に向けて立ち上がり、断面形は尖る。口 縁部には2条1単位の沈線による区画が3段見られ、 区画内に2本1単位の波状文が配される。内面は撫で 整形。	
第72回 PL.35	10	須恵器 甕	填土南 頸部片			高(10.1)	粗砂粒・黒色泥物 粒発露/還元焰 /灰黄	頸部外面に補強帯が廻る。縞づくり、叩き整形。口 縁部は横撫で。胴部は平行叩き痕。胴部内面は同心円文 状当て具痕。	

55号墳埴道

採回 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
				高	底	厚			
第54回	1	須恵器 甕	填土南西 胴部片			高(4.8)	精選・夾雑物少 /還元焰/黄灰	胴部に細かい沈線が3条廻る。体部外面は平行叩き目 痕に撫でを重ねている。内面は撫で。	

55号墳石室内

挿図 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考	
第74図 Pl. 35	1	須恵器 高杯	女室内西壁際～ 南寄り +1～3cm 口縁部～ 杯部上2/3	口 頸	11.0 13.0	高 (8.2)	白色磁物粒 /還元焼 /灰オリーブ	右回転ロクロ整形。口縁部は内傾気味に長く立ち上がる。胴部との境に沈線が廻り、強い稜を伴う。胴部には割りや襷でによる器面調整がなされる。また、長円形の尚難とその周囲の撫で調整の痕が見られる。	鉢の可能性。
第74図 Pl. 35	2	須恵器 高杯	女室中央 +19cm 杯部片	頸 口	4.0 14.0	高 (5.7)	細砂粒・黒色磁物粒 /還元焼/灰	口縁部と体部の境に沈線が1条廻る。ロクロ整形。回転右まわり。体部上部に回転を伴うヘラ削り。	外面に自然軸掛かる。
第74図 Pl. 35	3	須恵器 高杯	女室中央～ 東壁際 +6cm 膝部下半	底	6.1	高 (5.0)	白色磁物粒少 /還元焼/灰	右回転ロクロ整形。底部はハの字様に外反。底部は丸みを帯びる。外面にヘラ状工具が当たった痕跡がある。	
第74図 Pl. 35	4	須恵器 高杯	女室中央 +19cm 膝部2/3	頸 底	3.6 9.0	高 (5.7)	白色磁物粒少 /還元焼/灰白	右回転ロクロ整形。長方形の1段透孔が2カ所、対向する位置に配されている。	外面に自然軸掛かる。
第74図 Pl. 36	5	須恵器 瓶	羨道東壁際 +54cm 口縁～頸1/3	口 頸	7.4 4.4	高 (7.0)	白色磁物粒 /還元焼/灰	右回転ロクロ整形。口縁部は短く上方に突出、内面に強く屈曲する。口縁部には口唇部直下に突縁1条と沈線2条が廻る。	内外面に自然軸掛かる。
第74図 Pl. 36	6	須恵器 瓶	羨道東壁際 +2cm 口縁～頸1/3			高幅 (16.2)	粗砂粒/還元焼/灰	右回転ロクロ整形。球形の胴部は袋状に整形。開口部に2条、胴部中に1条沈線が廻る。	外面の広範囲に自然軸掛かる。
第74図 Pl. 36	7	須恵器 甕	石室埋没土 口縁部片			高 (14.7)	粗砂粒・黒色磁物粒 /還元焼/灰黄	口縁部は上方に向けて立ち上がり、断面は尖る。口縁部には2条1単位位の沈線が4条廻り、これによる区画内に12本1単位位の波状文が配される。内面は撫で整形。	外面に自然軸掛かる。6と同一個体か。

55号墳金具

挿図 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)		計測値追加/メタ ル・磁石/重量 g	製作・使用・残存状況の特徴	備考	
第75図 Pl. 36	1	金銅製品 耳環	女室内東隅 床直上 完形	A B C	2.97 2.79 1.58	E F G	0.70 0.69 0.20	/磁着なし /19.5g	銅地金銅張りだが金色は褪せ、銀色味がかる。表裏面とも磨着した設置部分が割かれたような金銅装部分の剥落部あり。
第75図 Pl. 36	2	金銅製品 耳環	女室東壁側 裏込下層 完形	A B C	2.86 2.59 1.51	E F G	0.66 0.68 0.20	/磁着なし /16.1g	金銅張りと思われるが割着すみ、内側に銀色発色薄板部分が一部観察できるのみ。端部隙間に付着物あり。
第75図 Pl. 36 口輪2	3	金銅製品 耳環	女室内東隅 床直上 完形	A B C	2.88 2.44 1.57	E F G	0.62 0.65 0.18	/磁着なし /15.6g	内側中心の薄板状の残存部分は銀色である。
第75図 Pl. 36 口輪2	4	金銅製品 耳環	女室内下層 埋没土 完形	A B C	2.96 2.74 1.58	E F G	0.68 0.71 0.21	/磁着なし /20.5g	金銅張りと考えられるが発色は銀色味の強い色。
	5	ガラス 水玉	床付近					色:濃青色	下層埋没土層作業で検出したが圧潰。
	6	石製品 水玉	床付近					色:乳濁色	下層埋没土層作業で検出したが圧潰。
第75図 Pl. 36 口輪2	7	金銅製品 刀装具鐔	羨道中央付近 +50cm 完形	長	7.46	幅 厚	6.25 0.46	/磁着なし /104.1g	銅地金銀と考えると表・裏面すべて残存状態がきわめて良く、金色発色。表面に緑青が覆っていたため表面を保護し、盗掘からも免れたか。鐔部の刀装具の圧痕が両面に残る。
第75図 Pl. 36	8	鉄製品 刀装具鐔か	石室上層土 完形	長 (5.00)	幅 厚	(3.20) 0.33	/磁着あり /11.9g	厚みがあり割かれた跡を想定したが、奇麗な板の可能性あり。	欠損は一部で新しい。
第75図 Pl. 36	9	鉄製品 刀装具鐔か	推定羨道北寄り +19cm 1/2	長 (2.00)	幅 厚	(1.70) 0.24	/磁着強/9.0g	錆化のため不詳。やや厚手で幅広の楕円形を呈する可能性があり錐を想定した。	欠損は非時。
第75図 Pl. 36	10	鉄製品 刀装具鐔か	石室掘土内 1/3	長 (1.50)	幅 厚	1.80 0.20	/磁着強/9.5g	錆化のため不詳。やや厚手で幅広の楕円形を呈する可能性があり錐を想定した。幅は9と近似し同一個体の可能性あり。	欠損は非時。写真撮影方向が図と異なる。
第75図 Pl. 36	11	金銅製品 刀装具 緑金具	女室中央 +15cm 完形	長 (4.00)	幅 厚	3.10 /2.2g	/磁着なし	断面形は内側平坦、外側は漏斗形。外側一部には製作時の圧痕と思われる微細な窪みが見え、金・金装の痕跡は見えない。	
第75図 Pl. 36 口輪2	12	金銅製品 刀装具 緑金具	推定羨道北隅 +21cm 完形	長 (3.80)	幅 厚	2.50 /4.6g	/磁着なし	銅地金銀製の緑金具で7と対になる製品。外側に製作時の微細な圧痕が一部系列に残存。内側にも金銅装を施し残存状態良好。	
第75図 Pl. 36	13	金銅製品 刀装具 緑金具か	石室上表層 破片	長 (2.30)	幅 厚	(0.50) 0.12	/メタル・ 磁着なし /0.1g	14等より細い針状の素材。	欠損新しい。
第75図 Pl. 36	14	金銅製品 刀装具 真金具	女室東壁寄り 床直上 破片	長 (1.90)	幅 厚	(1.40) 0.22	/メタル・ 磁着なし /0.3g	断面形は内側平坦で、外側は漏斗形で11に類似し刀装具と思われる。劣化すむ。	欠損は非時。

遺物観察表

神宮 PL. No.	No.	種類 種別	出土位置 残存率	計測値 (cm)			計測値追加/メタル ・磁着/重量g	製作・使用・残存状況の特徴	備考		
第7558 PL.36	15	金銅製品 刀装具 真金具か	石室埋没土 破片	長	(2.70)	幅厚 0.26	—/磁着なし /0.7g	断面諸許形の副線状素材で14・16と類似。丸みのある一端を外側に曲げたもの。	欠損は旧時。		
第7558 PL.36	16	銅製品 刀装具 真金具か	石室埋没土 破片	長	(1.70)	幅 (1.00)	—/メタル・ 磁着なし/0.3g	15と近似した素材。同一個体の可能性あり。	欠損新しい。		
第7558 PL.36	17	鉄製品 無茎鎌	女室西壁際 +6cm 先端欠く	A B C D	(3.40) 3.00 (3.15) 0.21	E F G H	— — — —	孔：0.25 /磁着あり/3.9g	小透孔あり。基部に挟みによる窪みむずかしく見られる。欠損はクラックに沿うよう他に錆跡あり。	欠損は新しい。計測は長頭鎌に準拠。	
第7558 PL.36	18	鉄製品 片刃鎌か	石室埋没土 基部破片か	A B C D	(3.15) 0.72 0.28	E F G H	— — — —	—/メタルなし、 磁着あり/0.8g	鎌身で検測か背側を用いるも薄く/刃では不自然。	欠損は旧時。	
第7558 PL.36	19	鉄製品 長頭鎌	女室中央西寄り (掘乱部) +4cm 鎌身片	A B C D	(3.85) 1.77 0.88 0.31	E F G H	(2.05) (0.70)	—/磁着強/2.7g	鎌身は片丸造り、幅状で無間に近いナデ間a類。斜めに破断する。頸部に達しているはずが厚み乏しい。	欠損は旧時。	
第7558 PL.36	20	鉄製品 長頭鎌	女室西側 (掘乱部直下) 鎌身片	A B C D	(2.70) 1.80 0.96 0.28	E F G H	(0.90) (0.60)	—/メタルなし、 磁着あり/1.4g	錆化すむ。折れるように破断。鎌身は極不明瞭で片丸造りと思われる。鎌身間はナデ間a類。	欠損新しい。	
第7558 PL.36	21	鉄製品 長頭鎌	石室埋没土 鎌身一頭部片	A B C D	(3.20) 0.84 0.37	E F G H	— — — —	—/メタルなし、 磁着あり/2.1g	全体に歪む。鎌身は無間に近い片丸造。	欠損は旧時。	
第7558 PL.36	22	鉄製品 鉄鎌	女室東壁寄り 埋没土 鎌身一頭部片	A B C D	(3.40) 0.82 0.26	E F G H	— — — —	—/メタルなし、 磁着あり/2.2g	鎌身は薄いえ錆化の影響で不明瞭だが片丸造りか、無間の可能性あり。	欠損新しい。	
第7558 PL.36	23	鉄製品 鉄鎌	女室東壁寄り 埋没土 鎌身片	A B C D	(1.90) 0.90 0.31	E F G H	— — — —	—/メタルなし、 磁着あり/1.2g	鎌身は片丸造りではやや不明瞭。幅状で無間に近いナデ間a類か、垂直に破断する。	欠損は旧時。	
第7558 PL.36	24	鉄製品 長頭鎌	西側裏込め (掘乱部) +7cm 頭部片	A B C D	(—) — — —	E F G H	(6.70) 0.51 0.36	—/磁着あり /4.4g	鎌身間部にわずかにかかると思われるが不明瞭。両端とも斜めに破断する。	下側欠損新しい。	
第7558 PL.36	25	鉄製品 長頭鎌	女室中央南寄り +7cm 間部周辺破片か	A B C D	(5.60) — — —	E F G H	(4.00) 0.65 0.40 (1.60)	1：0.40 /メタルなし、 磁着強 /4.3g	破断した両端で厚みが異なる。途中に間部を含む。錆化で不明瞭だが矢筈で間の位置を確認。縁状間と思われる。	下側欠損新しい。	
第7558 PL.36	26	鉄製品 長頭鎌	女室西側 (掘乱部直下) 床直上 間部周辺破片	A B C D	(5.50) — — —	E F G H	(2.80) 0.51 0.37 (2.70)	1：0.53 /メタルなし、 磁着あり /3.7g	間部周辺破片で鎌身と茎先端を欠く。茎部短い。縁状間で基部に木質痕残存。鎌身状の鉄片錯着するが錆化著しいため不明瞭。全体は強く捻じれる。	欠損新しい。	
第7558 PL.36	27	鉄製品 鉄鎌	石室埋没土 頭部片	A B C D	(—) — — —	E F G H	(2.25) 0.70 0.40	—/メタルなし、 磁着あり/1.8g	両端欠く。間部の気配のない棒状品。鎌身状の鉄片錯着するが、錆化著しいため不明瞭。	下側欠損新しい。	
第7558 PL.36	28	鉄製品 鉄鎌	石室埋没土 頭部片	A B C D	(—) — — —	E F G H	(3.15) 0.66 0.34	—/メタルなし、 磁着あり/2.1g	錆コブ周辺で破断する。断面長方形で鎌頭部とした。両端とも間の気配ない。	欠損は旧時か。	
第7558 PL.36	29	鉄製品 鉄鎌	石室埋没土 基部片	A B C D	(—) — — —	E F G H	(—) — — (3.25)	1：0.46/メタル なし、磁着あり /1.5g	端部付近片。旧時に斜めに破断したものが錯着したもの。	欠損新しい。	
第7558 PL.36	30	鉄製品 鉄鎌	女室東壁際 床直上 頭部片	A B C D	(—) — — —	E F G H	(4.45) 0.60 0.30	—/メタルなし、 磁着あり/4.1g	頸部は破断後錆により段差を生じて固まる。鎌身や間部部分は見えず、長い頭部である。	上側欠損新しい。	
第7558 PL.36	31	鉄製品 鉄鎌か	奥道東壁付近 (掘乱部) +4cm 基部片か	A B C D	(—) — — —	E F G H	(—) — — (2.60)	— — — —	1：0.52 /メタルなし、 磁着弱 /0.9g	両端欠く。先端が尖るようで鎌基部を想定したが厚み乏しく不確実。	欠損は旧時。
第7558 PL.36	32	鉄製品 鉄鎌か	女室東壁際 床直上 基部片か	A B C D	(—) — — —	E F G H	(—) — — (2.30)	— — — —	1：0.49 /メタルなし、 磁着あり /1.0g	両端欠く。断面が長方形を呈し鎌基部を想定したが、捻じれあり厚み乏しく不確実。	欠損新しい。
第7558 PL.36	33	鉄製品 鉄鎌か	女室東壁寄り 埋没土 基部片か	A B C D	(—) — — —	E F G H	(—) — — (1.80)	— — — —	1：0.45 /メタルなし、 磁着弱/0.6g	鎌身で鎌基部としたが釘の可能性あり。	下側欠損新しい。

遺物観察表

神区 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			計測値追加/メタル 磁石/重量 g	製作・使用・残存状況の特徴	備考	
第76神 Pl. 37	60	鉄製品 香篋文様 板か	玄室東壁寄り 埋没土 破片	長	(2.20)	幅 厚	(1.60) 0.07	-/メタルなし、 磁着あり/0.7g	外縁は斜めに切り落とす処理なし。	欠損新しい。
第76神 Pl. 37	61	鉄製品 香篋文様 板か	玄室東壁寄り +5cm 破片	長	(5.45)	幅	(3.10)	-/メタルなし、 磁着強/6.3g	剥落と跡跡れがあり、確実な旧状は不明瞭。表裏も明確ではない。	欠損新しい。
第76神 Pl. 37	62	銅製品 香篋文様 板か	裏込め内 破片	長	(3.60)	幅	(3.00)	-/メタルなし、 磁着あり/5.6g	61と対なる。湾曲部縁部の削ぎ落としによる断面形状は61より多い。表裏不明。	欠損は旧時か。
第76神 Pl. 37	63	鉄製品 香篋文様 板か	玄室東壁寄り 埋没土 破片	長	(2.00)	幅	(3.20)	-/メタルなし、 磁着あり/2.4g	剥落と跡跡れがあり、確実な旧状は不明瞭。湾曲部は削ぎ落とししたように断面形状になる。	欠損は旧時か。
第76神 Pl. 37	64	鉄製品 香篋文様 板か	玄室東壁寄り 床直上 破片	長	(1.80)	幅	(2.40)	-/メタルなし、 磁着あり/1.8g	剥落と跡跡れがあり、確実な旧状は不明瞭。湾曲部縁部は断面斜めに処理されている。	跡検出破片。
第77神 Pl. 38 I区2	65	金銅製品 雲珠か	石室埋没土 脚部片 鉢部わずかに 残存	A B C	2.70 3.91 —	D E	1.35 0.38	-/磁着あり /11.5g	鉄地金銅装りで残存良好。本道跡出土金具と異なり側面斜張り状に膨らみ、鉄製新4カ所で雲珠脚部と想定する。銅頂部が残存するのは1カ所で金装は確認できない。	欠損やや新しい。
第77神 Pl. 38 I区2	66	金銅製品 辻金具	石室埋没土 脚部片 鉢部若干残存	A B C	1.66 2.32 (1.75)	D E	(0.65) 0.37	鉢部高(1.45) /メタルなし、 磁着あり/5.0g	金銅装または金銅張り四脚のうちの一脚で先端中央に切れ込み。鉄製の新2カ所で留める。銅頂部欠失し釘頭も残り悪い。鉢部の一部が残存する。	欠損は旧時か。
第77神 Pl. 38	67	金銅製品 雲珠か	裏込め内 脚部片	A B C	2.65 3.31 —	D E	0.98 0.38	-/メタルなし、 磁着あり/8.3g	鉄地で金銅装。2脚の脚部としては側面が割断状になる唯一例。銅頂部にも金装わずかに残存。下脚割れ口が本来と逆の方向へ延びており、引ききりょうな方があったか。	欠損は旧時か。
第77神 Pl. 38	68	金銅製品 辻金具	裏込め内 脚部片	A B C	1.78 2.42 —	D E	(0.80) 0.27	-/磁着強/4.3g	鉄地で金銅装の残存良好。鉄製2新で1は銅頂部残存するが跡跡れのため不明瞭。	欠損やや新しい。
第77神 Pl. 38	69	金銅製品 辻金具	玄室南寄り +36cm 鉢部片	高	(1.53)	径厚	(1.58) 0.38	-/メタルなし、 磁着あり/6.5g	71と同規模の鉄地金銅装辻金具で脚部欠く。金銅装の残存良好。跡跡れで厚み不明瞭。	上側欠損やや新しい。
第77神 Pl. 38	70	金銅製品 辻金具	石室埋没土 脚部片	A B C	(1.75) 2.40 —	D E	(1.25) 0.42	-/メタルなし、 磁着あり/4.3g	辻金具の脚部片。釘は鉄製で丸い脚部が付く。表面は釘頭部を含め金装。66と近似した規模。	欠損は旧時か。
第77神 Pl. 38	71	鉄製品か 辻金具	石室上層 +40cm 鉢部および 局部小片	A B C	(0.80) 2.20 (2.45)	D E	— 0.15	-/磁着あり /9.2g	跡跡れのため不明瞭な部分がある。金銅装は残存しない。脚部が1カ所残存し鉢も1カ所確認できる。半球形の鉢部に続く。	欠損一部で新しい。
第77神 Pl. 38	72	金銅製品 辻金具か	石室埋没土 脚部片か	A B C	(1.70) 1.60 —	D E	(0.50) 0.26	-/メタルなし、 磁着あり/1.9g	鉄地金銅装で歪み大きい。釘は鉄製で比較的大型と想定される頂部欠く。雲珠の可能性あり。	欠損は旧時か。
第77神 Pl. 38	73	金銅製品 馬具 (留金具)	玄室東壁寄り 床直上 ほぼ完形	A B C	2.16 4.15 0.30	D E	0.83 0.43	-/磁着なし /6.3g	銅は割製で頭部は鍍被りの痕跡が一部で残る。下側2カ所で先端残存し両方とも平坦に潰れている。	欠損は旧時か。
第77神 Pl. 38	74	金銅製品 馬具 (留金具)	墳丘 +43cm 3/4	A B C	2.07 3.10 0.40	D E	0.79 0.23	-/磁着あり /3.2g	銅は割製で頭部は一部に鍍被りの可能性。2カ所残存するが配置より3新。銅は完存し先端は潰れている。	欠損は旧時か。
第77神 Pl. 38 I区2	75	金銅製品 馬具 (留金具)	石室埋没土 完形	A B C	2.28 3.68 0.40	D E	0.97 0.46	-/磁着あり /10.4g	鉄地で金銅装の残存良好。鉄製4新上面の金装は確認できない。下側が不明瞭だが側面が直線的の留金具とした。	欠損は旧時か。
第77神 Pl. 38	76	金銅製品 馬具 (留金具)	石室埋没土 2/3	A B C	2.56 3.08 0.30	D E	(0.70) 0.34	-/メタルなし、 磁着あり/4.4g	鉄地金装。鉄製新4カ所で頭部の大きな3カ所残存。側面が直線的の留金具とした。	欠損は旧時か。
第77神 Pl. 38	77	金銅製品 馬具 (留金具)	玄室東壁寄り 床直上 尚欠く	A B C	2.35 (2.70) —	D E	1.00 —	-/メタルなし、 磁着あり/4.2g	鉄地銅装りで金装の残存箇所はわずか。鉄製2ヶ所残存し、上脚部の跡跡れからもう2新あり雲珠の可能性あり。銅頂部にも銅張り一部残存。	欠損やや新しい。
第77神 Pl. 38	78	金銅製品 馬具 (留金具)	石室埋没土 1/3	A B C	(2.20) 2.00 —	D E	0.62 0.27	-/磁着あり /2.6g	銅は割製で頭部鍍被りの有無不明。2カ所残存するが配置より3新か。先端欠く。	欠損は旧時か。
第77神 Pl. 38	79	金銅製品 馬具 (留金具)	玄室東壁寄り 埋没土 ほぼ完形	A B C	1.96 2.67 (0.45)	D E	1.17 0.29	-/メタルなし、 磁着強/3.5g	2ヶ所の銅は鉄製で小型の板に比して頭部大きい。板部は外側へ反るように歪む。クラック多い。	欠損は旧時か。
第77神 Pl. 38	80	金銅製品 馬具 (留金具)	墳丘南裾 破片	A B C	(3.60) 3.50 —	D E	— (1.68)	-/磁着あり /3.6g	尚欠く。薄く鉄板で両端を折り返す。両側部上端は裏側に折れ、そこから破片。	欠損は新しい。混入品か。
第77神 Pl. 38	81	金銅製品 馬具 (留金具)	石室埋没土 破片	A B C	(1.65) (1.60) —	D	(0.95)	-/メタルなし、 磁着あり/2.1g	鉄地金装で頭部残存する鉄製新1カ所。頭部は球形で大きく他の留金具と異なる。辻金具の可能性あり。	欠損は旧時か。
第77神 Pl. 38	82	金銅製品 馬具 (留金具)	玄室東壁寄り 床直上 破片	A B C	(1.50) (1.70) —	D E	— 0.35	-/メタルなし、 磁着あり/2.2g	留金具と思われるが金装不明。鉄製1カ所残存するが跡跡れのため旧状不明瞭。頭部は81と同様の大型球形か。	欠損は旧時か。
第77神 Pl. 38	83	鉄製品 馬具 (錠具)	玄室東壁寄り +5cm 2/3	長	(6.00)			-/磁着強/19.8g	T字状の鉄制金存。欠けた一端も欠損はわずかか。側面は部位ごとに変形形状大きく異なる。	下位横材のみ欠損新しい。

神岡 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)		計測値追加/メタ ル・磁石/重量 g	製作・使用・残存状況の特徴	備考	
第778回 PL.38	84	鉄製品 馬具 (鉄具か)	石室埋没土 1/2	長	(3.90)	—/磁着強/12.8g	上側楕円部分が下側直線部分より断面は厚め。鞍に付属の鉄具か。	欠損は旧時。	
第778回 PL.38	85	鉄製品 馬具 (鉄具)	玄室東壁寄り +5cm 先側1/2	長	(3.20)	—/磁着強/8.5g	残存部全体を通じて断面形状円形に近く規模も近似。蹄縁出破片と接合。右側欠損新しい。	蹄縁出破片と接合。右側欠損新しい。	
第778回 PL.38	86	鉄製品 馬具 (鉄具)	玄室東壁寄り 埋没土 1/2	長	(2.10)	—/メタルなし、 磁着強/7.6g	上側は2本の棒状物が重なる。旧時のままか下側が後から貼りつけたものか不明。下側には一部銅薄板が欠ける。	欠損やや新しい。	
第778回 PL.38	87	鉄製品 馬具 (鉄具か)	石室内 破片	長	(4.90)	—/磁着あり /5.2g	長さに対し断面は太さ一様でやや丸みあり、木質痕も見えず釘ではないとした。鉄具の縁部と思われる。	下側欠損新しい。	
第778回 PL.38	88	鉄製品 馬具 (鉄具か)	玄室中央 —8cm 破片	長	(2.10)	幅 (2.80)	—/磁着あり /3.0g	上端の突起は筋ではなく、屈曲させた棒状材の端部。	下側欠損新しい。
第778回 PL.38	89	鉄製品 馬具 (鉄具か)	石室埋没土 破片	長	(1.60)	幅 2.00	—/メタルなし、 磁着強/4.9g	上側は厚く、鉄刺金を受けるような傾斜があるが、横側は細く先端尖って蹄状である。組合せ製品の部品と思われるが旧状不明。	欠損は旧時。
第778回 PL.38	90	鉄製品 馬具 (鉄具か)	玄室東壁寄り 埋没土 1/3	長	(4.10)	—/メタルなし、 磁着強/6.1g	筋の影響あり上側不明瞭。1枚の材が割れたものか複数の材が重なったものか判別できない。	下側欠損新しい。	
第778回 PL.38	91	鉄製品 馬具 (鉄具か)	玄室東壁寄り 床直上 破片	長	(3.80)	—/磁着強/3.5g	断面は太さ一様でやや丸みあり、木質痕も見えず釘ではないとした。鉄具の縁部と思われる。折り曲げ時の挟んだ圧痕がわずかに確認できる。	下側欠損新しい。	
第778回 PL.38	92	鉄製品 馬具 (鉄具か)	玄室東壁寄り 埋没土 破片	長	(4.80)	—/磁着あり /5.3g	一端は破損がないようで、屈曲具合より大型鉄具鉄刺部分と思われる。部位クラック入り残存状態やや悪い。	欠損新しい。	
第778回 PL.38	93	鉄製品 馬具 (鉄具か)	玄室東壁寄り 床直上 破片	長	(3.40)	幅 0.70	—/メタルなし、 磁着あり/2.1g	不明鉄製品。鉄具の脇部分で鉄刺金受け横棒の軸が欠けたものを想定。	欠損新しい。
第778回 PL.38	94	鉄製品 馬具 (鉄具か)	溝道東壁際 +46cm 破片	長	(4.05)	—/磁着強/3.9g	形状より鉄具脇部分が想定される。ただし裏側や釘には木質痕みられ、疑問残存。	欠損新しい。	
第778回 PL.38	95	鉄製品 馬具か	玄室東壁寄り 埋没土 小片	長	(1.40)	幅 1.40	—/磁着あり /1.9g	幅は96に近似し同一個体の可能性。表面筋が少ない部分あり。銅被せが剥がれた部分の可能性。板状部はやや湾曲。鉄刺小釘や裏面には木質痕残存。	欠損は旧時。
第778回 PL.38	96	金銅製品 馬具 部状金具	石室埋没土 破片	長	(1.90)	幅 13.0	—/メタルなし、 磁着あり/1.9g	細長い板状の材に銅を被せたもの。銅は図示部右縁のみ残存するが旧状は不明。	下側欠損新しい。
第788回 PL.38	97	銅製品+ 鉄製品 銅	玄室東壁際 埋没土 完形板地片	A B C D	2.07 0.98 1.04 0.76	E — F 0.23	—/磁着あり /5.8g	弁金と考えられる。鉄板地は平面六角形か菱形か。縁部面取り状に尖る。クラック状のヒビ多し。内側は縁部面やや凹型するため他では窪む。銅筋は高さのある形形で頂部強引、叩打痕か、鉄地との間に屈曲なく、熱着か先端側も頂部わずかに肥厚し、直下にごく薄い銅被せを挟む。	欠損は旧時か。
第788回 PL.38	98	銅製品+ 鉄製品 銅	石室埋没土 完形板地片	A B C D	2.35 1.05 1.25 0.75	E — F 0.25	—/磁着なし /5.8g	薄鉄板が銅着したもので、先端を潰し、ワッシャー状の正方形薄鉄板で留める。鉄板と銅板の間隔は8mmあり、厚い木板または皮材を挟んだもの。	
第788回 PL.38	99	銅製品 銅	石室埋没土 完形	A B C D	2.25 1.00 1.25 0.83	E — F 0.27	—/磁着なし /4.4g	98と同く。長方形薄鉄板残存。頂部側面は比較的銅被せの残存状態良い。	
第788回 PL.38	100	銅製品 銅	玄室東壁際 +5cm 完形	A B C D	2.05 0.99 1.18 0.83	E — F 0.24	—/メタルなし、 磁着強/4.3g	比較的大きな鉄板銅着。膝下部の銅薄板は正方形で一部欠損。頂部側面は部分的に銅被せ残存。	
第788回 PL.38	101	銅製品 銅	石室埋没土 完形	A B C D	2.20 1.10 1.20 0.75	E — F 0.28	—/磁着なし /4.5g	98と同く。柱部太い。長方形薄鉄板残存。頂部側面は銅被せの残存状態良い。	
第788回 PL.38	102	銅製品 銅	石室掘り方 頭部片	A B C D	(1.02) 1.00 — 0.80	E — F —	—/磁着弱/3.7g	頭の高さに乏しいやや小型の銅。頭部直下はほぼ全面に鉄板銅着し、銅部の丸い断面が確認できる。銅被せほとんど残存しない。	欠損は旧時。
第788回 PL.38 口絵2	103	銅製品 銅	石室埋没土 完形	A B C D	2.05 0.93 1.18 0.79	E F 0.28	—/磁着なし /3.2g	98と同く。頂部側面は銅の可能性ある。銅被せの残存状態良い。長方形薄鉄板残存。	
第788回 PL.38	104	銅製品 銅	玄室東壁際 +6cm 完形	A B C D	2.10 0.90 1.20 0.78	E — F 0.27	—/磁着あり /4.0g	頭部直下はほぼ全面に鉄板が銅着し不明瞭な部分あり。頭部下側に2条の強い凹線が部分的に走る。頭部側面は銅被せの残存状態比較的良好。	

採掘 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			計測値追加/メ タル・磁着/重量 g	製作・使用・残存状況の特徴	備考
第78回 PL-39	126	鉄製品 釘か	玄室南寄り 床直上 内端欠く	長 B C	(5.30) — —	D 0.50 0.40	復元長6.00 /メタルなし、 磁着あり/3.1g	クラック多く目状不明。上端が貫れ折損を想定したが、意図的に捻じられた柔らかい鉄のようだ。	欠損新しい。
第78回 PL-39	127	鉄製品 釘か	玄室東壁際 +31cm 端部欠くか	長 B C	(3.90) (0.65) 0.87	D 0.57 E 0.53	復元長4.20 /メタルなし、 磁着あり/2.9g	折損部は一部残存するようだが不明瞭。	欠損は旧時。
第78回 PL-39	128	鉄製品 不明 破片	石室埋没土 破片	長	(1.90)	幅 (17.8)	-/メタルなし、 磁着あり/1.5g	香葉透かし文地紋を想定したが不明瞭。裏面には深い凹凸がある。	欠損は旧時。
第78回 PL-39	129	鉄製品 不明 破片	石室埋没土 破片	長	(2.40)	幅 1.64	-/メタルなし、 磁着あり/2.1g	鋸歯のある板状品だが、割れ口が1カ所釘の痕跡となる可能性があり、提議した。他の留金より大きな製品となる可能性あり。	欠損やや新しい。
第78回 PL-39	130	鉄製品 不明 破片	玄室東壁寄り 埋没土 破片	長	(2.80)	幅 2.80	-/メタルなし、 磁着あり/3.4g	平坦な薄板に1鉄筋を打ったもの。留金具と思われるが平面五角形で本道跡出土遺物に類例ない。	欠損は旧時。
第78回 PL-39	131	鉄製品 遺品 貝片	墳丘 +9cm 破片	長	(3.50)	幅 (1.60)	-/メタルなし、 磁着あり/5.0g	吊り金具の下端部。内端欠く。頂部の小さな鉄製新または釘が残存部中央にあり、上端にも痕跡が残る。釘部には木質痕跡の可能性がある。	欠損新しい。
第78回 PL-39	132	鉄製品 不明 破片	石室埋没土 頭部片か	長	(3.00)	幅 7.60	-/メタルなし、 磁着あり/1.4g	内端欠く。鑑別目的であるが、一面の割れ口が横棒状の抜け口のように、鋭角破片の可能性もあり不明とした。ただし鋸コブ刺の可能性がある。	欠損やや新しい。
第78回 PL-39	133	鉄製品 不明 破片	墳丘 +9cm 破片	長	(1.60)	幅厚 (1.50) 0.15	-/メタルなし、 磁着弱/1.2g	薄片。縁部は折返しの可能性。小さく屈曲するような跡あり。鞘口金具の一部か。	欠損新しい。
第78回 PL-39	134	鉄製品 不明 破片	玄室東壁寄り 埋没土 破片	長	(2.40)	幅厚 (2.60) 0.12	-/メタルなし、 磁着あり/3.1g	刺刺するようない欠損あり。縁部はわずかに内側へ屈曲する。鞘口金具の一部か。137と同一個体の可能性。	近世か。欠損新しい。
第78回 PL-39	135	鉄製品 不明 破片	玄室東壁寄り 埋没土 内端欠く	長	(5.60)	幅 (0.90)	-/メタルなし、 磁着あり/3.5g	錆化とクラックにより目状不明瞭。鉄質悪い。中央付近近距離長方形で周辺の正方形と異なる。捻じられるような跡あり。	欠損は旧時。
第78回 PL-39	136	鉄製品 不明 破片	玄室東壁寄り 床直上 破片	長	(2.40)	幅 (0.50)	-/メタルなし、 磁着あり/0.8g	内端欠く。残存部断面が三角形で不明瞭だが、屈曲により縁から剥落した破片や、形状から継部が旧時に類似破片となる可能性がある。	欠損は旧時か。
第78回 PL-39	137	鉄製品 不明 破片	玄室西壁寄り +2cm 破片	長	(3.05)	幅 (2.60)	-/メタルなし、 磁着あり/3.4g	緩やかな屈曲のある薄板状不明品。鞘口金具の一部か。銅片が伸びたり香葉透かし地紋が打ったものなども想定できようか。	欠損新しい。

南東隅竈地

採掘 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			胎土/焼成/色調	製作・使用・残存状況の特徴	備考
第80回 PL-39	1	土製品 土玉	埋没谷表採 完形	長 幅	1.5 1.7	厚 孔 1.6 0.15	精選/酸化焙/良好/橙	器面は丁寧に仕上げられている。焼成中にクシ状の工具で穿孔されている。重さ4.0g。	
採掘 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			計測値追加/メ タル・磁着/重量 g	製作・使用・残存状況の特徴	備考
第80回 PL-39	2	鉄製品 簪	窪地西隅 端板欠く	長	(31.80)	幅 0.68	-/磁着強 /100.9g	二連の銜の銜先の環に引手元環を結合したものの、断面丸い部分が多く、一部穂の強い部分あり。大きも一様ではない。左側の銜先の環に鍍板装着と考えられる痕跡が見られる。板状の鍍板が装着されていたか。	欠損は旧時か。
第80回 PL-39	3	鉄製品 簪	窪地西隅 破片	長	(11.90)	幅 0.80	-/磁着強/28.7g	2と同一個体と思われる。大きも一様でない。断面は輪郭部分で丸く、環部分でやや稜が強い。	欠損は旧時か。
第80回 PL-39	4	鉄製品 簪か	窪地埋没土 破片	長	(7.75)	幅 0.50	-/磁着あり /8.7g	2より小型。手製装着環は棒状品から折り曲げて輪を作る。引手としてはやや華奢か。鋸コブクラックや多い。	欠損は旧時。

銭貨(近世)

採掘 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			計測値G/H/I	成形・形状の特徴・その他	備考
第83回 PL-42	1	銅銭 寛永通寶	石室中央 +11cm 完形	A C E	2.37 0.60 1.91	B D F 2.38 0.59 1.77	0.75/0.74/0.10	重量2.6g。	
第83回 PL-42	2	銅銭 寛永通寶	玄室西壁端 +48cm 完形	A C E	2.47 0.57 1.99	B D F 2.47 0.56 1.78	0.70/0.88/0.11	重量2.8g。	
第83回 PL-42	3	銅銭 寛永通寶	玄室西壁寄り +29cm 完形	A C E	2.28 0.61 1.75	B D F 2.28 0.61 1.52	0.81/0.87/0.11	強い磁着のある本道跡出土銭貨中、唯一の銅銭。磁着は鉄跡と無縁。重量2.3g。	表面に鉄跡の付着あり。
第83回 PL-42	4	銅銭 寛永通寶	玄室西壁端 +2cm 完形	A C E	2.53 0.62 1.99	B D F 2.53 0.62 1.84	0.81/0.98/0.11	重量2.8g。	

遺物観察表

挿図 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			計測値 G/H/I	成形・形状の特徴・その他	備考	
第83図 Pl. 42	5	銅銭 寛永通寶	玄室西壁際 -9cm 完形	A C E	2.41 0.62 1.87	B D F	2.40 0.60 1.78	0.70/0.79/0.10	重量2.4g。	
第83図 Pl. 42	6	銅銭 寛永通寶	奥室東壁際 +18cm 完形	A C E	2.36 0.62 1.71	B D F	2.35 0.63 1.78	0.71/0.82/0.10	重量1.9g。	
第83図 Pl. 42	7	銅銭 寛永通寶	石室埋没土 完形	A C E	2.17 0.62 1.78	B D F	2.20 0.63 1.70	0.73/0.86/0.08	背面はやや平坦。文字あり「足」か。重量1.7g。	足尾残か。
第83図 Pl. 42	8	銅銭 寛永通寶	石室埋没土 完形	A C E	2.25 0.56 1.69	B D F	2.27 0.55 1.59	0.70/0.74/0.11	背に「元」の文字あり。磁着あり。重量2.2g。	
第83図 Pl. 42	9	銅銭 寛永通寶	石室埋没土 完形	A C E	2.35 0.62 1.85	B D F	2.36 0.63 1.73	0.72/0.90/0.09	背面は平坦でほとんど凹凸残らない。重量2.3g。	
第83図 Pl. 42	10	銅銭 寛永通寶	玄室東壁際 +35cm 完形	A C E	2.30 0.61 1.86	B D F	2.30 0.62 1.69	0.70/0.96/0.08	背面は平坦でほとんど凹凸残らない。重量1.7g。	
第83図 Pl. 42	11	銅銭 寛永通寶	不明 完形	A C E	2.44 0.63 1.98	B D F	2.45 0.63 1.86	0.77/0.94/0.12	重量3.1g。	
第83図 Pl. 42	12	銅銭 寛永通寶	石室埋没土 完形	A C E	2.31 0.60 1.87	B D F	2.30 0.63 1.70	0.70/0.93/0.10	重量2.3g。	
第83図 Pl. 42	13	銅銭 寛永通寶	石室埋没土 完形	A C E	2.36 0.63 1.93	B D F	2.35 0.63 0.93	0.74/0.93/0.11	重量2.3g。	
第83図 Pl. 42	14	銅銭 寛永通寶	石室埋没土 一部欠く	A C E	2.33 0.65 1.86	B D F	— 0.66 1.69	0.82/0.97/0.09	重量1.7g。	
第83図 Pl. 42	15	銅銭 寛永通寶	石室埋没土 1/2	A C E	— — —	B D F	— — —	-/-/0.12	重量1.1g。長(1.40)、中(2.05) cm。	
第83図 Pl. 42	16	銅銭 寛永通寶	石室埋没土 完形	A C E	2.80 0.62 2.12	B D F	2.81 0.64 2.16	0.80/0.93/0.12	波銭(十一波)。重量4.3g。	
第83図 Pl. 42	17	銅銭 文久永寶	墳丘 +72cm 完形	A C E	2.73 0.67 2.15	B D F	2.71 0.68 2.10	0.90/0.91/0.11	波銭(十一波)。重量3.6g。	
第83図 Pl. 42	18	銅銭 永樂通寶	不明 破片	A C E	— 0.53 —	B D F	— — —	-/-/0.10	重量0.4g。長(0.90)、中(1.30) cm。	
第83図 Pl. 42	19	銅製品 雁首銭か	石室埋没土 完形	A B C D	1.70 1.75 0.50 0.60	B D E F G H	— — — —	-/-/-	縁部は磨滅し、圧潰直後の製品でないことがわかる。厚み2.0mm。重量2.4g。	
第83図 Pl. 42	20	鉄銭 寛永通寶	玄室南寄り +11cm 完形	A C E	2.98 0.82 2.35	B D F	3.11 0.77 —	1.28/-/0.20	クラックすすみ込み加わり状態悪い。各文字は部分的に確認できる。背面縁やや不明瞭。重量3.3g。メタルなし。	
第83図 Pl. 42	21	鉄銭 寛永通寶	奥室西壁際 +32cm 完形	A C E	2.53 0.63 —	B D F	2.44 0.63 —	0.99/-/0.19	銅緑れやや顕著。「實」明瞭。背面は平坦。重量2.2g。メタルなし。	
第83図 Pl. 42	22	鉄銭 不明	石室埋没土 完形	A C E	2.58 0.60 1.86	B D F	2.67 0.66 —	0.92/-/0.15	錆化強くないが釈文できた文字なし。背面平坦。薄板状の鉄箔着しているが鉄片の可能性。重量2.5g。メタルなし。	
第83図 Pl. 42	23	鉄銭 寛永通寶	石室埋没土 完形	A C E	2.78 0.69 2.16	B D F	2.49 0.58 —	1.05/-/0.19	銅緑れすすむ。各文字は部分的に確認できる。背面は縁やや不明瞭。重量2.9g。	
第83図 Pl. 42	24	鉄銭 不明	石室埋没土 完形	A C E	2.93 0.73 2.10	B D F	3.08 0.85 —	1.11/-/0.20	銅緑れ・クラックで状態悪い。釈文できた文字なく天地不明。縁のより明瞭な方を表としたが表裏も確定ではない。重量3.0g。メタルなし。	
第83図 Pl. 42	25	鉄銭 不明	奥室西壁際 +62cm 完形	A C E	2.89 0.68 2.09	B D F	2.99 0.61 2.24	1.08/-/0.19	クラックすすみ込み状態悪い。釈文できた文字なく天地不明。縁のより明瞭な方を表としたが表裏も確定ではない。重量3.6g。メタルなし。	
第83図 Pl. 42	26	鉄銭 寛永通寶	玄室南寄り +48cm 完形	A C E	2.78 0.70 2.16	B D F	2.86 0.78 —	0.98/-/0.25	クラックすすみ込み状態悪い。「實」「寶」の上端より箇所があり上下表裏を想定できる。背面の縁は比較的明瞭。重量3.6g。メタルなし。	
第83図 Pl. 42	27	鉄銭 不明	玄室西壁際 -35cm 完形	A C E	3.10 0.89 2.38	B D F	3.12 0.86 —	1.34/-/0.23	銅緑れ・クラック・錆みで状態悪い。釈文できた文字なく天地不明。背面は縁不明瞭。重量3.8g。メタルなし。	2片接合。
第83図 Pl. 42	28	鉄銭 寛永通寶	玄室南寄り +33cm ほぼ完形	A C E	2.79 0.76 2.28	B D F	2.76 0.78 —	1.17/-/0.18	「永」「通」「寶」の一部が推定できる。背面はやや平坦で縁不明瞭。重量2.1g。メタルなし。	

挿図 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			計測値 G/H/I	成形・整形の特徴・その他	備考	
第83図 Pl. 42	29	鉄銭 寛永通寶	石室埋没土 3/4	A C E	2.63 0.62 2.45	B D F	2.57 0.65 —	1.02/—/0.18	「永」が本遺跡出土鉄銭中、最も明確に読み取れる。背面の縁部は不明瞭。重量1.4g。メタルなし。	欠損は小さい。
第83図 Pl. 42	30	鉄銭 寛永通寶	虎造西壁寄り +11cm 完形	A C E	2.71 0.67 2.16	B D F	2.65 0.64 —	0.91/—/0.22	「永」が明確に読み取れ「寛」「寶」の一部も推定できる。背面も縁部等比較的明瞭。重量2.4g。メタルなし。	
第83図 Pl. 42	31	鉄銭 寛永通寶	石室埋没土 3/4	A C E	2.96 0.68 2.44	B D F	— — —	1.12/—/0.19	錆跡・クラックすすみ状態悪い。「永」「寶」の一部がわずかに確認できる。重量2.0g。メタルなし。	欠損は旧時か。
第83図 Pl. 42	32	鉄銭 寛永通寶	虎造西壁際 1/2	A C E	2.57 — —	B D F	— 0.72 —	1.10/—/0.22	「寶」「通」の一部と推測できる文字あり上面を想定。背面は縁やや不明瞭。重量1.2g。メタルなし。	欠損は旧時か。
第83図 Pl. 42	33	鉄銭 不明	石室埋没土 3/5	A C E	2.51 0.60 1.89	B D F	— — —	1.05/—/0.17	釈文できた文字なく天地不明。背面は平坦。重量1.3g。メタルなし。	欠損は旧時か。
第83図 Pl. 42	34	鉄銭 不明	石室埋没土 1/3	A C E	2.51 0.68 1.89	B D F	— — —	1.06/—/0.17	錆跡れ顕著。天地不明。縁のより明瞭な方を表としたが表裏も確実ではない。重量2.4g。メタルなし。	欠損やや新しい。
第83図 Pl. 42	35	鉄製品 鉄銭か	虎造東壁際 —30cm 破片	A C E	0.73 — —	B D F	— — —	—/—/0.25	錆化すすみ不明瞭だが円形の縁部分やや厚く、鉄銭を想定した。背面やや平坦。重量0.6g。メタルなし。	欠損は旧時。

その他(近世)

挿図 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			素材	製作・使用・残存状況の特徴	備考	
第85図 Pl. 42	1	石製品 砥石	54号墳墳丘上 1/2	長 幅	(5.5) 2.5	厚 重	2.12 4.5	流紋岩	四面使用。各面ともよく使い込まれ、著しく研ぎ減る。	切り砥石
第85図 Pl. 42	2	石製品 砥石	55号墳 16トレンチ 1/2 (一端を欠く)	長 幅	(5.4) 3.3	厚 重	1.0 30.6	砥沢石	四面使用。背面側に横位の粗い線条痕があるほか、やや深い爪状の掻き傷がある。同様な掻き傷は右側面にもある。裏面側は研ぎ減り、多方向に掻き傷が見られる。	切り砥石
第85図 Pl. 42	3	石製品 砥石	55号墳石室内 ほぼ完形	長 幅	(10.8) 3.0	厚 重	2.1 84.8	砥沢石	背面側のみ使用。両側面・裏面側にノミ状の工具痕が残る。	切り砥石
第85図 Pl. 42	4	石製品 砥石	55号墳墳丘上 1/2	長 幅	(8.5) 3.0	厚 重	3.01 23.4	流紋岩	四面使用。左側面を除く各面が研ぎ減り、弱く変形する。上面に斜行する切断痕が残る。	切り砥石
第85図 Pl. 42	5	石製品 不明	55号墳石室内 体部を部分欠損	長 幅	(9.8) 12.8	厚 重	7.23 52.9	二ッ岳軽石	楕円盤を二分してその上面に長軸6cm・短軸5cm・深さ4.5cmの孔を穿つ。孔は平ノミ状の工具で穿たれたままで、内面整形は施されていない。	
挿図 Pl. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			計測値追加/メタル・磁着/重量g	製作・使用・残存状況の特徴	備考	
第85図 Pl. 42	6	銅製品 鑿首	55号墳石室中央 +6cm 破片	径	1.6	厚 高	0.1 (0.7)	—/磁着なし /1.6g	鑿首としてはやや厚手。火面部分。下端には一文字状に裏し板。	
第85図 Pl. 42	7	鉄製品 鉄環	55号墳石室 埋没上 完形	長	(4.2)	幅 厚	(4.45) 1.4	—/磁着強/37.3g	環状の不明品。浮鉄の可能性あり。クラック多い。	
第85図 Pl. 42	8	鉄製品 蓋か	55号墳石室 埋没上 1/3	径	(10.5)	高	1.2	—/磁着強/98.7g	鉄鉢。外側凸部は錆びか瘤み状の突起か不明。突起には細孔らしい窪みがあるが中央を逸れている。	混入品か。

遺物観察表

縄文時代

検出 PL. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第86回 PL.43	1	縄文土器 深鉢	55号墳石下 胴部片	口 底	— —	高 (3.8)	織織、粗砂、小礫 /普通/明赤褐色	1～3は同一個体か。表面は縦位の条痕を地文とし、 沈線で斜格子状の文様を描く。また、斜格子の交点に 刺突を配する。裏面には斜位の条痕を施す。	条痕文系
第86回 PL.43	2	縄文土器 深鉢	55号墳石下 胴部片	口 底	— —	高 (7.5)	織織、粗砂、小礫 /普通/明赤褐色	1に同じ。	条痕文系
第86回 PL.43	3	縄文土器 深鉢	55号墳表採 胴部片	口 底	— —	高 (6.0)	織織、粗砂、小礫 /普通/明赤褐色	1に同じ。	条痕文系
第86回 PL.43	4	縄文土器 深鉢	表採 胴部片	口 底	— —	高 (4.5)	織織、粗砂/普通 /明赤褐色	表面に斜位の条痕を施し、裏面は縦位の条痕を施す。	条痕文系
第86回 PL.43	5	縄文土器 深鉢	55号墳石室下 胴部片	口 底	— —	高 (3.0)	織織、細砂/普通 /にぶい褐色	表裏面に斜位の条痕を施す。	条痕文系
第86回 PL.43	6	縄文土器 深鉢	54号墳墳丘下 胴部片	口 底	— —	高 (2.4)	織織、粗砂/普通 /明赤褐色	表裏面に斜位の条痕を施す。	条痕文系
第86回 PL.43	7	縄文土器 深鉢	54号墳墳丘下 胴部片	口 底	— —	高 (3.9)	細砂/普通 /にぶい黄褐色	7～9は同一個体。胴部に集合沈線で横位に文様帯を 区画し、区画内に集合沈線を縦位矢羽根状に施し、その 交差部に三角印刻を加え、さらに縦溝状の印刻を加 える。	諸磯c式
第86回 PL.43	8	縄文土器 深鉢	54号墳墳丘下 胴部片	口 底	— —	高 (4.5)	細砂/普通 /にぶい黄褐色	7に同じ。	諸磯c式
第86回 PL.43	9	縄文土器 深鉢	54号墳墳丘下 胴部片	口 底	— —	高 (3.6)	細砂/普通 /にぶい黄褐色	7に同じ。	諸磯c式
第86回 PL.43	10	縄文土器 深鉢	55号墳As-C下 胴部片	口 底	— —	高 (4.1)	砂粒/普通/明赤褐色	内反する口縁部に、隆帯と沈線で渦巻き等の文様を描 く。	加曽利E式
第86回 PL.43	11	縄文土器 深鉢	55号墳石下 胴部片	口 底	— —	高 (3.0)	砂粒/良好/明赤褐色	胴部に沈線で直線的な懸垂文を描き、皿の縄文を縦位 に施す。	加曽利E式
第86回 PL.43	12	縄文土器 深鉢	55号墳墳丘下 胴部片	口 底	— —	高 (6.6)	砂粒/普通/明赤褐色	胴部に沈線で直線的な懸垂文を描き、Lの縄文を縦位 に施す。黒附あり。	加曽利E式
第86回 PL.43	13	縄文土器 深鉢	55号墳As-C下 胴部片	口 底	— —	高 (5.1)	砂粒/良好/赤褐色	頸部に沈線を巡らせ、その間に内形刺突を施して文 様帯を区画する。胴部には沈線で逆U字状および端部 が刺突となる懸垂文を描く。	加曽利E式
第86回 PL.43	14	縄文土器 深鉢	表採 胴部片	口 底	— —	高 (3.5)	砂粒/普通 /にぶい黄褐色	胴部下半に沈線で逆U字状の文様を描き、文様内に皿 の縄文を縦位に施す。	加曽利E式
検出 PL. No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm・g)			材質	製作手法・器形の特徴	備考
第86回 PL.43	15	剥片石器 石鏃	55号墳As-C下 完形	長 幅	2.0 1.4	厚 重 0.4 0.6	黒曜石	完成状態。加工は丁寧で、剥離が全面を覆う。基部は 深く抉り込まれている。	円基無茎鏃
第86回 PL.43	16	剥片石器 石鏃	55号墳As-C下 完形	長 幅	4.5 1.8	厚 重 0.5 2.3	珉質頁岩	完成状態。加工は丁寧で、押圧剥離が全面を覆う。基 部は深く抉り込まれている。器身で長身。	円基無茎鏃

参考文献

- 1 『樺東村誌』1988 樺東村
- 2 『箕郷町誌』1983 箕郷町
- 3 『群馬町史 資料編1』1998 群馬町
- 4 『倉海戸道跡』1984 樺東村教育委員会
- 5 『樺東村31号墳(世熊道跡)発掘調査報告書』1985 樺東村教育委員会
- 6 『樺東村39号墳(雛子道跡)発掘調査報告書』1985 樺東村教育委員会
- 7 『御旗道跡』1985 樺東村教育委員会
- 8 『新井第Ⅱ地区道跡群』1985 樺東村教育委員会
- 9 『別分八幡下道跡 中府神田道跡』1987 樺東村教育委員会
- 10 『十二前道跡』1999 樺東村教育委員会
- 11 『清水貝戸道跡』2000 樺東村教育委員会
- 12 『生原 田島・大清水道跡』1982 箕郷町教育委員会
- 13 『海行A・B道跡』1988 箕郷町教育委員会
- 14 『史跡 箕郷城跡1』2000 他 箕郷町教育委員会
- 15 『寺屋敷Ⅱ道跡』1991 群馬町教育委員会
- 16 『寺屋敷Ⅰ・蓋・鶴巻道跡』1992 群馬町教育委員会
- 17 『金古如來古墳群』2006 高崎市教育委員会
- 18 『生原八反倉道跡』2007 高崎市教育委員会
- 19 『金徳森道跡』2009 高崎市教育委員会
- 20 『生原終木道跡』2009 高崎市教育委員会
- 21 『大敷道跡』2012 吉岡町教育委員会
- 22 『塚中道跡』2000 吉岡町教育委員会
- 23 『長谷津道跡』2012 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 24 『十日市道跡・住道跡・千代間南道跡・千代間北道跡・舞台道跡』2013 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 25 『群馬県史 資料編3』1981 群馬県
- 26 『群馬県道跡地図』1973 群馬県

引用文献

- ① 田辺昭三『須恵器大成』1981
- ② 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏡について」『橿原考古学研究所論集第8』1988
- ③ 橋本博文「亀甲繫風凰文象嵌大刀再考」『踏古論叢』1993
- ④ 宮代栄一「古墳時代の金銅装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心に—」『日本考古学第3号』1996
- ⑤ 『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』1996 群馬県古墳時代研究会
- ⑥ 村岡善子・関邦一・植江秀夫「邑楽町松本23号古墳出土の象嵌装大刀」『研究紀要15』群馬県埋蔵文化財調査事業団1998
- ⑦ 深沢敦仁「上野における群馬墳構造の推移」『関東における後期・終末期古墳群の諸相・予稿集』2005 明治大学
- ⑧ 「古墳の位置と名称について」『多田山古墳群—古墳時代編一』2004 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ⑨ 「用語の解説」『東国に伝う横穴式石室』2008 静岡県考古学会
- ⑩ 右島和夫「後期後半から終末期の上毛野」『季刊考古別冊17』2011

写真図版



1 上空から見た道跡(上方が南西)



2 上空から見た道跡(南から)



1 調査前の遺跡(南東から 手前54号墳・奥55号墳)



2 周堀確認トレンチ(北から 55号墳北側)



3 墳裾確認トレンチ(東から 54号墳北東墳丘)



4 石室の掘り下げ(北東から 54号墳)



5 墳丘の掘り下げと周辺の表土剥ぎ(南東から 54号墳)



6 墳丘の掘り下げ(北東から 55号墳)



7 ラジコンヘリによる石室空操作業(北東から 54号墳)



8 墳丘の断割り(北から 55号墳)



1 石室遺り方測量(北東から 54号墳)



2 墳丘のデジタル測量(東から 54号墳)



3 裏込めの掘り下げ(北西から 54号墳)



4 石室と裏込めの測量(北から 54号墳)



5 石室石材の計測と解体(南から 54号墳)



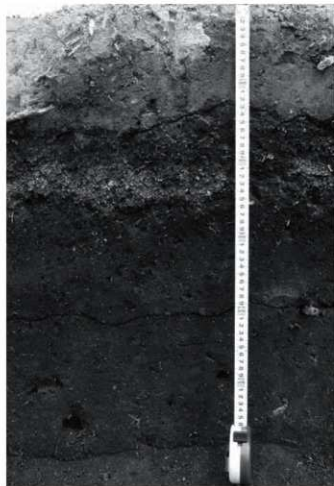
6 石室の解体・石材吊り上げ(北西から 54号墳)



7 石室埋没土の脚掛け(北から 55号墳埋没土)



8 現地説明会(東から 6月17日)



1 基本土層(北西から)



2 54号墳墳丘4号トレンチ西裾付近(南西から)



3 54号墳墳丘4号トレンチ石室裏(北東から)



4 55号墳2号トレンチ削平痕周辺(北から)



5 55号墳2号トレンチ基壇周辺(北東から)



6 55号墳西隅埋没谷上のAs-B(南から)



7 55号墳18号トレンチ(北西から)



1 墳丘・基壇と石室上面(南から)



2 石室と裏込め(南東から)



1 墳丘A断面西側(南から)



2 墳丘A断面東側(南から)



3 墳丘B断面(西から)



4 墳丘C断面東側(北から)

54号墳墓石



1 北東側崩落墓石(北東から)



2 西側崩落墓石(北から)



3 北側墓石確認状態(北西から)



4 東側部分(南東から)



5 北東側部分(南東から)



6 北側部分(北から)



7 北西側部分(北西から)



1 北西側根石列(東から)



2 西側根石列(北から)



3 溝状の根石列掘り方(北から)



1 確認段階の前庭と義道(南から)



2 前庭部確認状態(南から)



3 上面前庭(南から)



4 前庭上面(西から)



5 下面前庭と遺物出土状態(南から)



1 羨道閉塞確認状況(南から)



2 玄室から見た閉塞石(北から)



3 羨門付近閉塞状況(南から)



4 仕切り石と羨道(南から)



5 羨道側から見た欄石(南から)



6 羨道西壁(南東から)



7 羨道東壁(南西から)



1 最上面の玄室(南から)



2 最上面の玄室(南西から)



3 裏込め上面と石室(南から)



4 裏込め上面と玄室(北から)



5 裏込め上面と石室(東から)



6 裏込め上面と石室(南東から)



1 玄室床確認面(北から)



2 玄室鋪石面(北から)



3 玄室側遺物(鈎№5・緑金具8)出土状態(北から)



4 西壁際遺物(鎌№18・27・46他)出土状態(東から)



5 北西側遺物(釘№83他)出土状態(東から)



6 奥壁前遺物(罎子№96他)出土状態(南から)



1 奥壁(南から)



2 西壁と天井石(北東から)



3 西壁と欄石(北東から)



4 東壁北寄り(西から)



5 東壁と欄石(北西から)



6 玄門・天井石と欄石(北から)



1 奥壁第1石1・2直下(西から)



2 奥壁3直下(南から)



3 裏側から見た奥壁1・2間の間詰め(北から)



4 奥壁1・3間の間詰め(南から)



5 奥壁第2石3・4下(東から)



6 西壁第1石6~8直下(北から)



1 西壁11下(南から)



2 西壁12下(東から)



3 西壁13・14下(東から)



4 西壁第2石12～17下(北から)



5 西壁15・16下(東から)



6 西壁17直下(北から)



7 西壁19下(東から)



1 西壁6・12間の間詰め(北から)



2 西壁21下(西から)



3 西壁13・14間の間詰め22-1・2(南から)



4 西壁23下(東から)



5 西壁6・12・17間の間詰め(東から)



6 西壁第1石10・64・67直下(西から)



7 西壁51・52下(東から)



8 西壁53・54下(北東から)



1 西壁69直下(西から)



2 西壁70下(南から)



3 東壁26・27裏込め状態(東から)



4 東壁第1石28直下(西から)



5 東壁第1石26・27直下(東から)



6 東壁31下(北から)



7 東壁32下(東から)



1 東壁33下(西から)



2 東壁34下(西から)



3 東壁35下(西から)



4 東壁37下(東から)



5 東壁38・39下(東から)



6 東壁40・41下(東から)



7 東壁43下(東から)



8 東壁第1石30・57直下(西から)



1 東壁45下(北から)



2 東壁46・47下(東から)



3 東壁61下(西から)



4 東壁62下(東から)



5 東壁63下(北東から)



6 天井石下(南から)



7 西壁側天井石下(東から)



8 東壁側天井石下(西から)



1 裏込め上面全景(北から)



2 地山高付近の裏込め(南から)



3 裏込め東側面(東から)



4 裏込め側面(西から)



1 掘り方と石室第1石(西から)



2 掘り方と石室第1石(北から)



3 掘り方と石室第1石直下(北から)



4 掘り方と石室第1石直下(南から)



5 掘り方下面(南から)

填丘

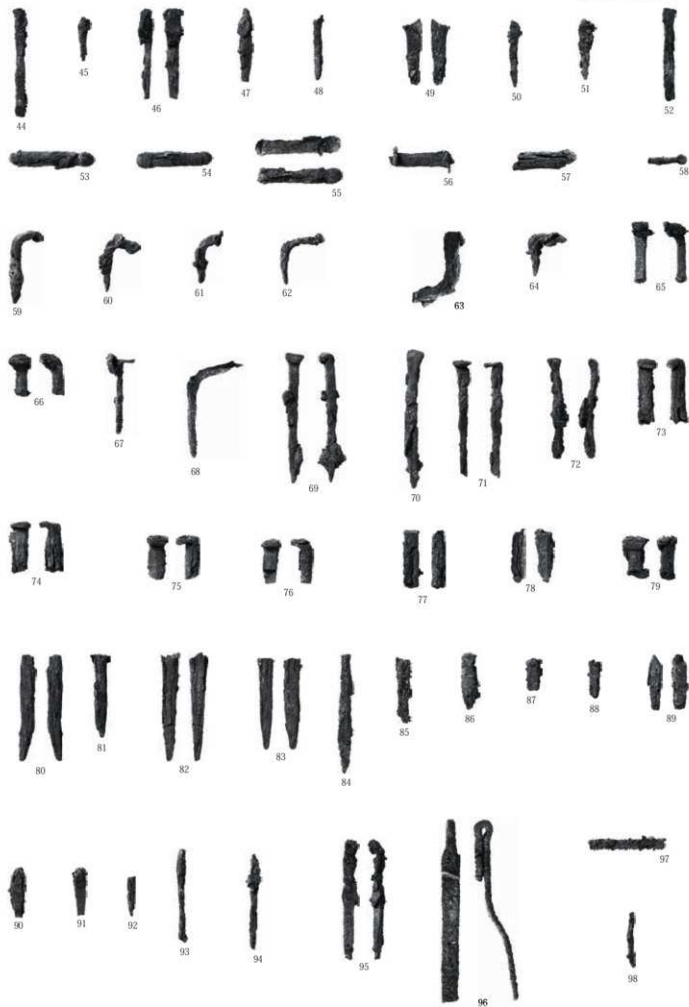


前庭



金属製品







1 墳丘と基壇・石室(上方が北東)



2 墳丘と葺石(北東から)



1 墳丘B断面全景(北東から)



2 墳丘A断面南東側とB断面(東から)



3 墳丘A断面裏込め際(南東から)



4 墳丘東側の盛土と葺石根石(南から)



5 墳丘B断面中段硬化面(北東から)



6 墳丘B断面下段硬化面(北東から)



1 北東側崩落墓石(北東から)



2 西側墓石全景(西から)



3 北側崩落墓石(北西から)



4 南西側墓石(西から)



5 北東側根石列(東から)



6 北西側根石列(西から)



7 北東側根石列(北東から)



8 北東側根石掘り方(東から)



1 墓道から羨道付近全景(南西から)



2 墓道前の側溝状の施設(南西から)



3 墓道(南西から)



4 墓道(西から)



5 墓道側から見た石室(南西から)



6 羨道付近・仕切り石と舖石(南から)



7 羨道側から見た墓道(北東から)



1 玄室内鋪石(南西から)



2 羨道付近遺物(鈴No.7)出土状態(南から)



3 南東壁下遺物(銅No.97・107)出土状態(南から)



4 奥壁裏込め内遺物(耳環No.2)出土状態(東から)



5 南東壁際遺物(杏葉No.52・鞍縁金具No.44)出土状態(南西から)



6 玄室中央付近遺物(鉸貝No.88)出土状態(東から)



7 西側裏込め相当付近遺物(杏葉片No.55)出土状態(東から)



8 玄室中央付近遺物(緑金具No.11)出土状態(北西から)



1 石室・裏込め全景(南東から)



2 玄室全景(南西から)



3 奥壁と裏込め(南西から)



4 玄室東隅付近(西から)



5 玄室西隅付近(南から)



1 南東壁第1石1～3下(南西から)



2 南東壁1直下(北東から)



3 南東壁2直下(北西から)



4 南東壁3直下(南西から)



5 南東壁3下(北東から)



6 奥壁第1石4・5下(北西から)



1 奥壁4直下(南西から)



2 奥壁4下(北東から)



3 奥壁5直下(南から)



4 北西壁7直下(北西から)



5 西壁第1石7・8下(南西から)



6 北西壁8下(南東から)



7 北西壁10下(東から)



1 裏込め全景(北東から)



2 裏込め北外側(北から)



3 裏込め東外側(東から)



4 玄室第1石面と裏込め(南西から)



5 北西側掘り方面の裏込め(北東から)



6 奥壁第1石面の裏込め(南東から)



7 南東側石室石材下面の裏込め(南東から)



8 北側石室石材下面の裏込め(北から)



1 石室石材下の下だめ(北東から)



2 掘り方断面(南西から)



3 下だめ石類除去面(北東から)



4 掘り方全景(南西から)

55号墳出土土器(1)

墳丘



1



2

3

5



6



7



4



9



10

石室内



1



2



3



4



5



6



7

金属製品



1



2



3



4



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35

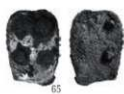


36



37





65



66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



78



79



80



81

82



83



84



85



86



88

87



89



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



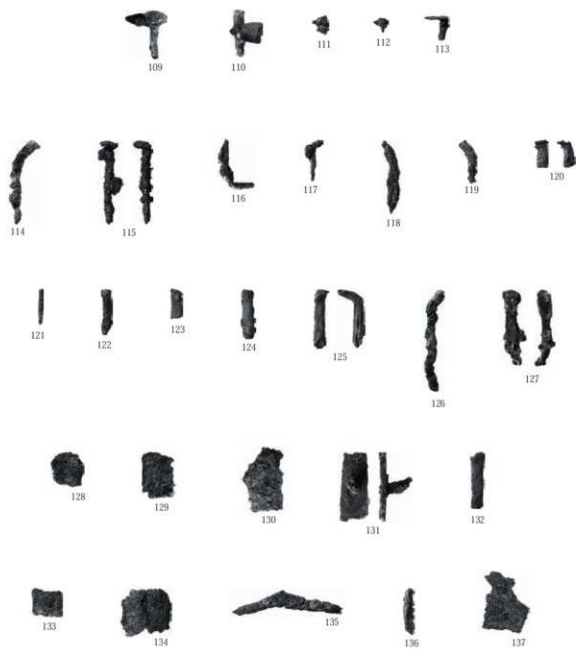
106



107



108



南東隅窪地





1 南東隅窪地全景(南から)



2 南東隅窪地B断面(北から)



3 南東隅窪地遺物(樽No.2)出土状態(北西から)



4 1号土坑(北東から)



5 2号土坑(東から)



6 3号土坑(北西から)



7 倒木痕(北から)



1 土坑内座席底状痕跡(南東から)



2 石室内銭貨(2)出土状態



3 石室内銭貨(3)出土状態



4 石室内銭貨(4)出土状態(南西から)



5 石室内銭貨(5)出土状態(南東から)



6 石室内銭貨(10)出土状態(北から)



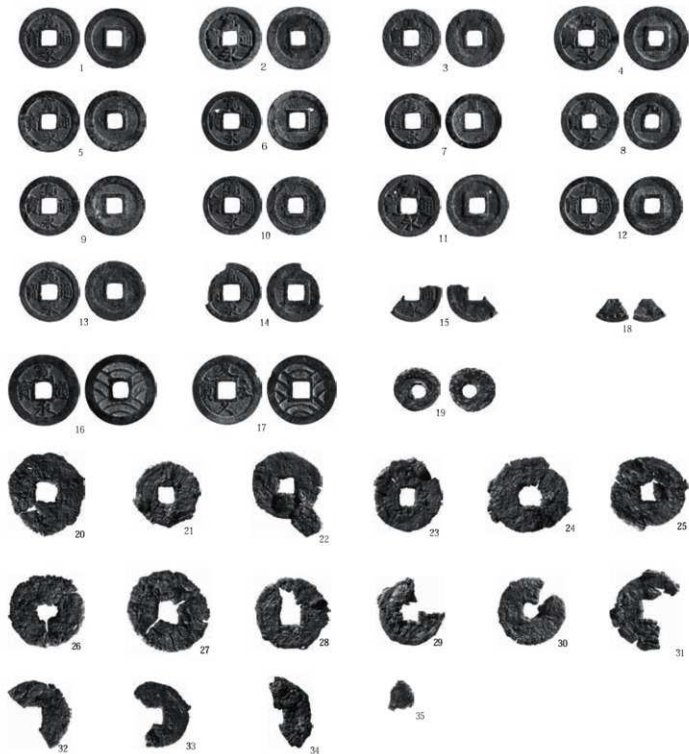
7 石室内銭貨(17)出土状態(北から)



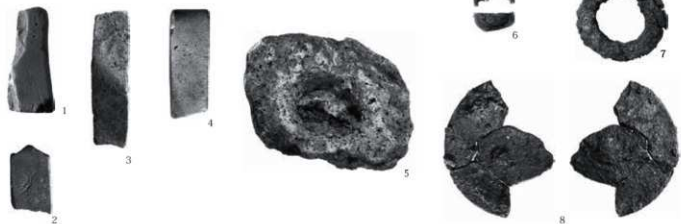
8 4号土坑上面銭貨(25)出土状態(南から)



9 4号土坑断面(南東から)



近世以降





報告書抄録

書名ふりがな	かないこふんぐん
書名	金井古墳群
副書名	県一埋蔵文化財発掘調査委託事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	581
編著者名	飯田陽一 関邦一 関根愼二
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20140217
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	かないこふんぐん
遺跡名	金井古墳群
所在地ふりがな	ぐんまけんきたぐんまぐんしんとうむらひろばば
遺跡所在地	群馬県北群馬郡榛東村広馬場
市町村コード	10344
遺跡番号	0020 (榛東村)
北緯 (世界測地系)	362501
東経 (世界測地系)	1404117
調査期間	20120401-20120831
調査面積	3744㎡
調査原因	浄水場増築
種別	墳墓
主な時代	古墳/江戸
遺跡概要	墳墓-古墳時代-古墳2基+土師器・須恵器+金属製品/江戸時代-墓壇+銭貨
特記事項	榛東村54号墳・55号墳として周知の、7世紀代前半の円墳2基の調査。両古墳とも両袖型横穴式石室内から豊富な金属製品を出土。
要約	54号墳は墳丘・石室の残存状態がよく、一部天井石も残存。石室内から銀象嵌の鐙や弓飾り金具・釘などを出土。55号墳石室は奥壁周辺と墓道周辺のみ残存。香葉・雲珠や鞍縁金具などの馬具の他、金装の鐙、弓飾り金具・釘などを出土。江戸時代には石室を壊して新たな墓域としたようで寛永通寶銅銭・鉄銭を出土。

公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第581集

金井古墳群

県一埋蔵文化財発掘調査委託事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年(平成26年)2月10日印刷

2014年(平成26年)2月17日発行

発行/編集 公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784-2

電話 0279-52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/杉浦印刷株式会社
